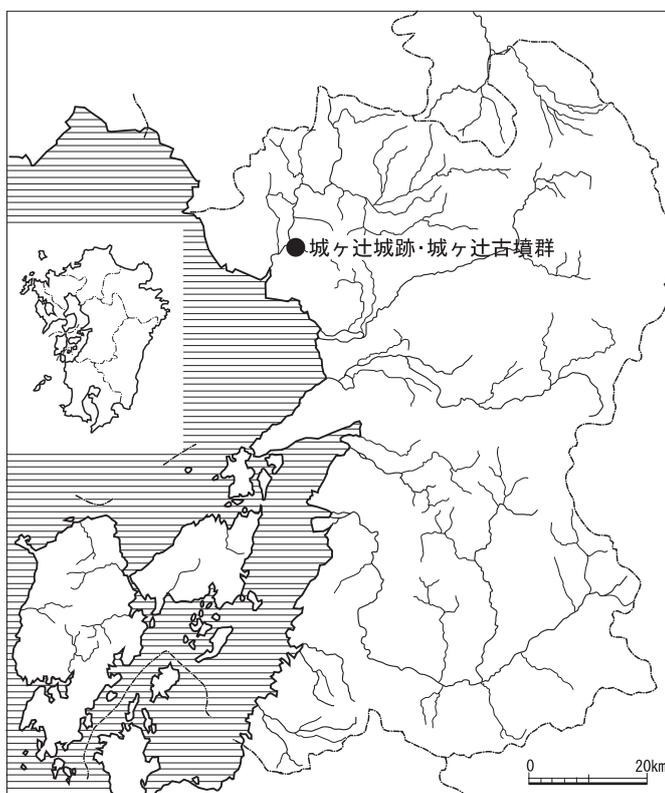


熊本県文化財調査報告 第300集

## 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群2

—一般国道208号改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—



熊本県教育委員会

2014



## 序 文

熊本県教育委員会は、国道 208 号（玉名バイパス）の建設工事に伴い、縄文時代後期から晩期までの集落や墓地、また、弥生時代後期から古墳時代の集落、古墳群、古代の集落や倉庫群、中世の建物群や塚等の区画、近世の水路等各時代の様々な性格を持つ遺跡の調査を実施して参りました。

その中でも特出されるのは、「城ヶ辻古墳群」でありましょう。現在この古墳は国土交通省九州地方整備局の協力のもと、国道 208 号の暫定 2 車線の開通の折、保存協議により、2 号墳周溝の一部と 6・7 号墳を現地で盛土保存がなされています。

今回は、その保存の経緯及び熊本県文化財調査報告第 270 集『城ヶ辻古墳群』で掲載できなかった分析資料等を掲載しております。

そして、古墳群周辺は周知の埋蔵文化財包蔵地「城ヶ辻城跡」です。トレンチ調査のため十分地形の変換点や遺構等が検出されず、十分な調査が出来ませんでした。古墳時代の須恵器や古代から中世後期にかけての遺物が発見され、城ヶ辻城跡の一端を垣間見たとも言えます。

城ヶ辻 2・6・7 号墳以外は、記録保存という形ではありますが、本報告及び「城ヶ辻 2・6・7 号墳」及び周辺の城ヶ辻古墳群が地域の発展とともに、未来に地域にとって貴重な歴史の実資料として引き継がれ、活かされていくことを望んでおります。

なお、本調査を実施するにあたり、御理解とご協力をいただいた地元の皆様並びに関係機関に深く感謝を申し上げます。

平成 26 年 3 月 31 日

熊本県教育長 田崎 龍一

## 例 言

- 1 本書は、熊本県玉名市城ヶ辻に所在する城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群の報告書である。
- 2 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所の依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。調査費及び整理報告費については、同事業部局が負担した。
- 3 遺物の整理は、熊本県文化財資料室で実施した。
- 4 遺跡の発掘調査は平成 14 年度から平成 15 年度まで実施し、整理報告作業を平成 24 から 25 年度まで実施した。
- 5 本書で用いる地形図は、玉名市都市計画課から提供された図幅、並びに国土地理院発行の 2 万 5 千分の 1 地形図、玉名市遺跡地図掲載図面等をもとに作成した。

また今回、地元地権者の方々に御協力を頂き、遺跡の測量の基準点測量及び水準測量は有明測量開発者及び有限会社古家測量設計に委託して実施した。

- 6 現地での写真撮影は出田久斉、亀田 学、米村 大、水上（洲崎）明子が撮影した。遺構実測は前記 3 人の他、原田英佳、田畑良勝、飯塚千恵美、高津千尋、西嶋ヨシエ、福田ツヨ子、権藤 功、吉田ムツ子、吉川ゆかり、道口真由美、堀田祐子、田上俊子、淵上久史、梅村 稔、尾浦公治、梅林将旨が実施した。現地での掘削作業は、先

程挙げた方々の他、多数の作業員の協力を得た。遺物の実測は、亀田、伊藤友美子、園田恭子、川井田久子が行い、製図は川井田久子が実施した。遺物洗浄・接合・復元は、松本直枝、瀬口絹代、上野栄子、高松孝子、富田知子、吉見さつき、吉武知佐子、三井佳子、生 美恵、松原泰子、井上秀子、西野佳子、高田清香、古庄美伊子等が行った。

遺物の写真撮影は、主に藤島友美、亀田、福田拓也が行い、村田百合子、松本智子、蓮池千絵、松本（直）、西野が補助した。

鉄器の保存処理は、谷川亜紀子、今田里枝が行い、大塚敏子、平川早苗、小野美香、花田美佳がこれを補助した。

- 7 鉄器の自然科学分析(金属分析)は株式会社バリノサーヴェイに、石材同定及び赤色顔料等の分析を応用地質株式会社に委託した。
- 8 本書の執筆は、自然科学分析は、株式会社バリノサーヴェイ・応用地質株式会社が、調査成果の一部を米村の協力のもと亀田が執筆した。
- 9 整理後の保管は熊本県文化財資料室で保管されている。
- 10 本書の編集は、熊本県教育庁文化課が行い、亀田の指示のもと川井田、藤島、福田が担当した。

## 凡 例

- 1 方位／座標 国土座標第II系（日本測地系）を基準とし、方位もそれに準じた。
- 2 遺跡地区名 遺跡全体の地区（第4図）の通りである。
- 3 遺構名略号 次の通りである。ST; 古墳、SD; 溝、SF; 道、SX; その他
- 4 遺構図版 標高は東京湾平均海面（Tokyo Peil [T.P.]）に基づく。
- 5 遺構図版 縮尺 遺構図版は、ブロックごとに掲載し、縮尺はキャプション及びスケールで図示した。
- 6 遺構図版 線種 遺構平面図は原則として確定ラインは実線で掲載し、遺構上・下端の推定線は破線で示した。また攪乱および調査区範囲については一点破線で示した。
- 7 遺構図版 鉄器の断面については斜線で示している。
- 8 遺構図版 断面ポイント 各遺構の平面及び断面図では一ラインの内側をポイントとしている。
- 9 遺物図版 縮尺 遺物実測は原則として土器は1/3、鉄器は2/3、ガラス玉・耳環については1/1で掲載した。
- 10 遺物図版 線種 外形線、中心線及び区画線は実線、稜線は実線・一点破線・二点破線、推定線は破線で示した。また、須恵器については、断面を塗りつぶし、回転ヘラ削りを実線で示したのち、以下底部まで砂粒の動きを示している。
- 11 遺物図版 土器の小破片については、断面図の左を内面、右を外面の立面図にしている。接合痕跡は、断面の内側に細線を入れている。
- 12 遺物観察表 すべての実測個体について、遺物観察表を掲載した。その凡例は、各観察の下に別項にて注記している。

平成14年度 城ヶ辻城跡全体図

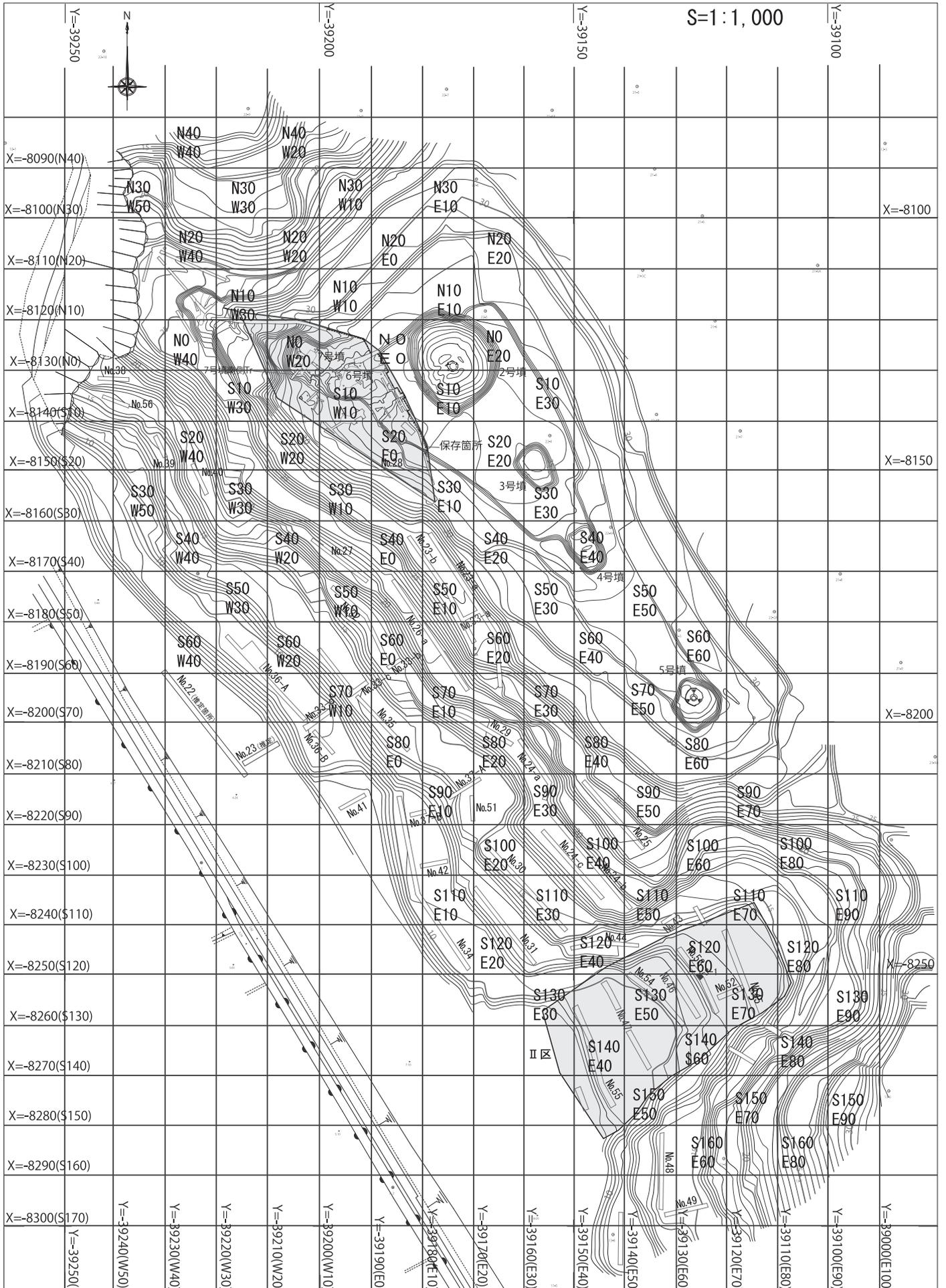


図1 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群調査区グリット図

# 本文目次

第I章 調査の経過	1	第V章 今後の展望	29
第1節 調査に至る経緯と経過	1	第1節 城ヶ辻古墳群のさらなる解明	29
第2節 調査の組織	2	第1項 城ヶ辻6・7号墳の築造時期及び 前後関係の解明	29
第II章 遺跡の環境	3	第2項 城ヶ辻古墳群の範囲・確認	29
第III章 調査の成果	6	第3項 今後の城ヶ辻古墳群の保存と活用 について	29
第1節 調査区の位置	6	第VI章 まとめ	30
第2節 調査概要	6	1. 城ヶ辻城跡	30
第3節 基本土層	7	2. 城ヶ辻古墳群	30
第4節 トレンチ調査の概要	8	(参考引用文献)	14・15
第1項 丘陵上部から斜面にかけての試掘 トレンチ調査の成果	8		
第2項 谷部の調査	8		
第5節 城ヶ辻古墳群周辺の古代以降の遺構と 遺物	10		
第6節 城ヶ辻古墳群補遺	10		
第1項 7号墳南西側出土遺物	10		
第2項 7号墳墓道(25-SF)出土遺物	10		
第3項 6号墳出土遺物	11		
第IV章 城ヶ辻古墳群の保存に至る経緯と 現状	13		
第1節 城ヶ辻古墳群の概要と重要性	13		
第2節 古墳群の保存の要望	20		
第1項 学会の現地保存の要望	20		
第2項 地元の現地保存の要望	20		
第3項 熊本県教育委員会から事業主体者 への要望	20		
第3節 保存協議	23		
第4節 仮保存の方法と施工方法	26		
第1項 国土交通省熊本河川国道事務所・ 県文化課による保護	26		
第2項 城ヶ辻古墳群の暫定保存措置の 実施	27		

## 表・図面・写真図版 目次

### 表

表1	出土耳環・ガラス玉観察表	31
表2	出土鉄製品観察表	31
表3	出土土器観察表	32

### 図 面

Pl.1	第1図 周辺遺跡分布図 (1/12,000)	
Pl.2	〃 玉名市遺跡地図より引用、一部改変	
Pl.3	第1図付表 遺跡名一覧表	
Pl.4	〃 玉名市遺跡地図より引用	
Pl.5	第2図 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群周辺古地図 『玉名市史 資料篇1 絵図・地図』 玉名市史編集委員会 玉名市より引用 (1/10,000)	
Pl.6	第2図の説明文『玉名市史 資料篇1 絵図・地図』 玉名市史編集委員会 玉名市より抜粋	
Pl.7	第3図 玉名バイパス計画路線内遺跡位置図 (菊池川左岸)	
Pl.8	第4図 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群 (トレンチ位置)全体図	
Pl.9	第5図 トレンチNo.22・No.56・No.40・No.38・No.39・ No.32 断面図	
Pl.10	第6図 トレンチNo.28・No.27・No.36・No.35 断面図	
Pl.11	第7図 トレンチNo.23-a・No.23・No.23-b・No.33-b・c・ No.33-D 断面図	

Pl.12	第8図 トレンチNo.41・No.42・No.37-A・No.37-B・ No.51・No.31 断面図	
Pl.13	第9図 トレンチNo.30・No.24-b・No.24-c・No.25・ No.44 断面図	
Pl.14	第10図 トレンチNo.48・No.49・No.52・No.53・No.54 断面図	
Pl.15	第11図 トレンチNo.26-a・No.29・No.34・No.45・ No.55 断面図	
Pl.16	第12図 6号墳(ST-02)北側周辺検出Pit群 平面・断面図	
	第13図 6号墳(ST-02)南側トレンチ断面図	
Pl.17	第14図 II区谷部より出土した集石 平面・断面図	
	第15図 II区 検出暗渠(S-1)(S-2)断面図	
Pl.18	第16図 調査区遺構配置図及び断面ポイント位置図	
Pl.19	第17図 2号墳周溝(09SD)・6号墳周溝(03SD)・ 7号墳周溝(08SD)断面図	
Pl.20	第18図 調査区南斜面土層断面図	
Pl.21	第19図 2号墳・3号墳現況及び周溝検出平面図	
Pl.22	第20図 昭和54年度確認調査トレンチ平面・断面図	
Pl.23	第21図 城ヶ辻古墳群所在丘陵断面図	
Pl.24	第22図 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群 出土遺物実測図1	
Pl.25	第23図 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群 出土遺物実測図2	

## 写真図版

- Ph.1 1. 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群遠景(北西より)  
2. 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群全景(南東より)
- Ph.2 1. 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群調査区遠景(南東より)  
2. 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群調査区遠景(南より)  
3. 城ヶ辻城跡谷部(Ⅱ区)遠景(南西より)
- Ph.3 1. 城ヶ辻古墳群調査区全景(南より)  
2. 城ヶ辻古墳群調査区全景(南西より)
- Ph.4 1. 6号墳・7号墳全景(北より)  
2. 6号墳・7号墳全景(北西より)
- Ph.5 1. ST-01(7号墳)石室全景(南西より)  
2. ST-01(7号墳)石室閉塞状況(北東より)  
3. ST-01(7号墳)石室閉塞状況(南西より)  
4. ST-01(7号墳)石室閉塞状況(南西より)
- Ph.6 1. ST-01(7号墳)石室内遺物出土状況(南西より)  
2. ST-01(7号墳)石室内遺物出土状況(南西より)  
3. ST-01(7号墳)石室閉塞状況(玄室北東より)  
4. ST-01(7号墳)石室遺物出土状況(玄室南西より)
- Ph.7 1. ST-02(6号墳)石室全景(南から)  
2. ST-02(6号墳)石室全景(南から)  
3. 04-SK(6号墳)石材出土状況(南西より)  
4. ST-02(6号墳)人骨出土状況(西より)
- Ph.8 1. S-11(前方)(南西より)  
2. S-11ガラス玉出土状況(北から)  
3. S-11ガラス玉出土状況(北西から)  
4. S-29(前方)(北西より)
- Ph.9 1. 31-SX 遺物出土状況(西より)  
2. 31-SX 遺物出土状況(西より)  
3. 31-SX 遺物出土状況(西より)
- Ph.10 1. 31-SX 遺物出土状況(西より)  
2. 31-SX 検出状況(西より)  
3. 31-SX 検出状況(南東より)
- Ph.11 1. Ⅱ区 S-3 検出状況(東から)  
2. Ⅱ区 S-2・S-3 検出状況(東から)  
3. Ⅱ区 S-2 暗渠出土状況(東から)  
4. Ⅱ区 S-3 暗渠出土状況(東から)
- Ph.12 1. Ⅱ区 崖石積状況(南から)  
2. Ⅱ区 谷部集石出土状況(北から)
- Ph.13 1. 試掘トレンチNo.22(西から)  
2. 試掘トレンチNo.23 ①(西から)  
3. 試掘トレンチNo.23 ②(西から)  
4. 試掘トレンチNo.23 ③(西から)  
5. 試掘トレンチNo.23 ④(西から)  
6. 試掘トレンチNo.23-b ①(東から)  
7. 試掘トレンチNo.23-b ②(東から)
- Ph.14 1. 試掘トレンチNo.24-a(西から)  
2. 試掘トレンチNo.24-b(北から)  
3. 試掘トレンチNo.24-c(西から)  
4. 試掘トレンチNo.25(北から)  
5. 試掘トレンチNo.26 ①(西から)  
6. 試掘トレンチNo.26 ②(北西から)
- Ph.15 1. 試掘トレンチNo.27(西から)  
2. 試掘トレンチNo.28(東から)  
3. 試掘トレンチNo.29(北から)  
4. 試掘トレンチNo.31(北から)  
5. 試掘トレンチNo.33-b(北から)  
6. 試掘トレンチNo.33-c(北から)
- Ph.16 城ヶ辻古墳群 土盛養生作業風景
- Ph.17 城ヶ辻古墳群 土盛養生作業風景
- Ph.18 1. 城ヶ辻古墳群現状写真(西から)  
2. 城ヶ辻7号墳から玉名平野を望む(南東から)  
3. 城ヶ辻古墳群現状写真(南から)

- Ph.19 1. 中2段 7号墳南西盛土～表土(第23-1図)  
 2. ST-01(7号墳)南西側一括(第23-5図)  
 3. ST-01(7号墳)南西側一括(第23-3図)  
 4. ST-01(7号墳)南西側一括  
 5. ST-01(7号墳)南西側一括  
 6. ST-01(7号墳)南西側一括(第23-2図)  
 7. ST-01(7号墳)南西側一括(第23-11図)  
 8. 25-SF(7号墳関連遺構)一括(第23-15図)  
 9. 試掘トレンチNo.42内(第22-7図)  
 10. ST-01(7号墳)南西側一括(第23-13図)
- Ph.20 1. ST-01(7号墳)南西側出土須恵器  
 2. ST-01(7号墳)出土土師器
- Ph.21 1. ST-01(7号墳)南西側一括、S-3一括、S-9、  
 トレンチNo.6、No.1 出土土器
- Ph.22 1. ST-01(7号墳)南西側一括、周辺、  
 関連遺構25-SF出土土器  
 2. ST-01(7号墳)南西側一括出土土器
- Ph.23 1. 調査区内出土須恵器
- Ph.24 1. I - b区 北西崖下一括出土須恵器
- Ph.25 1. 調査区内出土遺物1  
 2. 調査区内出土遺物2
- Ph.26 1. ST-01(7号墳)・I - b区出土遺物  
 2. ST-01(7号墳)南西斜面及び周辺出土土師器
- Ph.27 1. 2号墳周溝(09SD)出土土師器  
 2. ST-01(7号墳)南西側一括出土須恵器  
 3. ST-01(7号墳)南西側一括出土土師器
- Ph.28 1. ST-01(7号墳)南西側一括、南西中段盛土～  
 表土出土土器  
 2. 調査区内出土遺物
- Ph.29 1. ST-01(7号墳)関連遺構出土土器  
 2. 試掘トレンチ・谷部耕作土出土土器
- Ph.30 1. 耕作土、表土一括  
 2. ST-01(7号墳)南西側斜面・25-SF(第23-12図)  
 3. 谷部耕作土一括  
 4. 耕作土一括  
 5. 調査区内出土遺物
- Ph.31 1. 試掘トレンチ出土遺物1  
 2. 試掘トレンチ出土遺物2
- Ph.32 1. 試掘トレンチ出土遺物3  
 2. II区出土遺物
- Ph.33 1. 谷部耕作土出土遺物1  
 2. 谷部耕作土出土遺物2
- Ph.34 1. 谷部耕作土出土遺物3  
 2. 谷部耕作土出土遺物4
- Ph.35 1. 谷部耕作土出土遺物5  
 2. 谷部耕作土出土遺物6
- Ph.36 1. 谷部耕作土出土遺物7  
 2. S-11 出土ガラス玉  
 3. II区谷部・試掘トレンチ出土鉄製品  
 4. 試掘トレンチ及び谷部耕作土他出土遺物
- Ph.37 1. 谷部耕作土出土鉄製品  
 2. 試掘トレンチ出土鉄製品
- Ph.38 1. ST-02(6号墳)出土轡  
 2. S-11(6号墳関連遺構)出土鉄製品  
 3. ST-01(7号墳)石室内出土耳環  
 4. S-11(6号墳関連遺構)出土耳環

## 第 I 章 調査の経過

### 第 1 節 調査に至る経緯と経過

今回報告する調査地は当該地区周辺に建設省九州建設局熊本工事事務所で国道 208 号線の交通緩和等を目的にバイパス工事が計画された。昭和 54 年 3 月 29 日に路線内の踏査を行い、14 カ所の遺跡を確認した。その中の 2 カ所の遺跡であり、城ヶ辻古墳群では 5 基の古墳の墳丘を確認していた。

特に当時の路線計画で、「城ヶ辻古墳群」は 2 号墳の墳丘西半分が削平される可能性が強かったため、古墳を避けるよう、県文化課で、昭和 54 年 7 月～10 月まで路線変更を行うための予備資料として試掘調査を実施したことから始まる。

方法は 8 本のトレンチ調査及び 5 号墳の盗掘坑の精査により調査が実施された。

1 号トレンチ、7 号トレンチ、6-2 号トレンチ、5 号トレンチで古墳の周溝を確認し、当初は 2 号墳の周溝として認識していた。

しかし、これは平成 14～15 年度の調査で、2 号墳の周溝ではなく、6 号墳の周溝であることが判明した。1 号トレンチの 4 層から出土した古墳時代後期の須恵器は 6 号墳に関連するものと考えられる。

周溝の検出状況を精査、検討を十分に行えば、6 号墳と想定できたかもしれないが、2 号墳の周溝という思い込みが 6 号墳の存在を予見できなかったと考えられる。また、トレンチ調査であったため、事実誤認は致し方ないと考えられる。

また、5 号トレンチで出土したベンガラ入りの甕は、土壙墓の蓋の上に供献された可能性が高い。土器型式等から 6 号墳関連でなく、2 号墳関連の周辺埋葬と考えられることから、2 号墳は古墳時代前期にさかのぼる可能性がある。しかし、断定するには資料として不十分のため、古墳群の年代は今後の課題である。

また、3 号墳は、西側に設定された長さ 6.5m の 8 号トレンチから古墳の周溝は確認されておらず、規模は不明である。今後、そのトレンチを西側に延長して周溝の有無を確認する必要がある。

さて、平成に入り、そうした確認調査の結果を踏まえて路線が決定された。そして、平成 11 年 1 月 11 日から 14 日までの第 2 次確認調査を経て、一部本調査範囲を確定した。調査結果は平成 11 年 1 月 21 日教文第 1619 号で通知し、協議を経て平成 14 年 7 月から城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群として本調査を実施している。

発掘通知（文化財保護法第 57 条の 3 項）は平成 14 年 5 月 9 日国九整熊工第 14 号で通知され、平成 14 年 5 月 21 日玉市教社第 135 の 1 号で進達された後、平成 14 年 5 月 23 日付け教文第 466 号で「発掘調査」の指示を出し、「調査の結果、重要な遺構等が発見された場合はその保存等について別途協議しますので、御協力下さい。」の旨を添えている。

広範囲にわたる「城ヶ辻城跡」については試掘トレンチ調査により、遺跡を把握し、適宜トレンチを拡大する方向で、谷部のトレンチを拡張し、II 区として調査を実施した。「城ヶ辻古墳群」の立地する丘陵部分については、段々畑の地形が確認されたに留まり、旧地形や遺構が確認できず、試掘トレンチ調査で完了されたという形である。

発掘調査の通知（文化財保護法第 58 条の 2 項）は、平成 14 年度について平成 14 年 7 月 5 日付け教文第 881 号で通知している。後の保存協議の項で詳細するように、重要遺構が発出されるにあたって国土交通省熊本河川国道事務所との協議で、本調査範囲拡大すること、詳細な記録を取るための掘削や図面作成等の作業を平成 15 年度に実施することで合意し、発掘調査の通知（文化財保護法第 58 条の 2 項）を平成 15 年 5 月 26 日付け教文第 509 号で提出している。

その後、城ヶ辻古墳群の遺跡範囲に関する保存協議が継続して実施され、現在、城ヶ辻 2・6・7 号墳の範囲に対し盛土保存を行っている。

## 第2節 調査の組織

### 【平成14年度】現地調査

調査主体者 田中 力男 (熊本県教育長)

調査責任者 成瀬 烈大 (文化課長)

調査総括 島津 義昭 (文化課課長補佐兼教育審議員)

高木 正文 (課長補佐 (文化財調査第1係担当))

調査事務 小田 信也 (教育審議員券課長補佐)、中村 幸宏  
(主幹兼総務係長)、天野 寿久 (主任主事)、杉  
村 輝彦 (主事)

調査担当者 出田 久斉 (文化財保護主事)、水上 (洲崎) 明子・  
米村 大 (嘱託)

### 【平成15年度】現地調査

調査主体者 田中 力男 (熊本県教育長)

調査責任者 成瀬 烈大 (文化課長)

調査総括 島津 義昭 (文化課課長補佐兼教育審議員)

高木 正文 (課長補佐 (文化財調査第1係担当))

調査事務 吉田 恵 (課長補佐)、高宮 優美 (主幹兼総務  
係長)、天野 寿久 (主任主事)、杉村 輝彦 (主事)

調査担当者 亀田 学 (主任学芸員)、水上 (洲崎) 明子・米  
村 大 (嘱託)

### 【平成17年度】整理・報告書作成

整理主体者 柿塚 純男 (熊本県教育長)

整理責任者 梶野 英二 (熊本県文化課長)

整理総括 高木 正文 (課長補佐 (文化財調査第1係担当))

整理事務 四元 正明 (主幹兼総務係長)、塚原 健一 (参事)、  
小谷 仁志 (主任主事)

整理担当者 亀田 学 (主任学芸員)、伊藤 友美子 (嘱託)、  
水上 悌 (嘱託)、園田 恭子 (嘱託)

### 【平成18年度】整理・報告書作成

整理主体者 柿塚 純男 (熊本県教育長)

整理責任者 梶野 英二 (熊本県文化課長)

整理総括 高木 正文 (課長補佐 (文化財調査第1係担当))

整理事務 高宮 優美 (主幹兼総務係長)、塚原 健一 (参事)、  
小谷 仁志 (主任主事)

### 【平成23年度】整理・報告書作成

整理主体者 山本 隆生 (熊本県教育長)

整理責任者 小田 信也 (熊本県文化課長)

整理総括 村崎 孝宏 (文化財調査第一係長)

坂田 和弘 (参事兼文化財資料室長)

整理事務 川上 勝美 (課長補佐)、水元 敬浩 (高校教育  
課主幹兼総務係長)、山田 京子 (高校教育課参事)

整理担当者 亀田 学 (主任学芸員)、坂井 由葉 (嘱託)

### 【平成24年度】整理・報告書作成

整理主体者 田崎 龍一 (熊本県教育長)

整理責任者 小田 信也 (熊本県文化課長)

整理総括 村崎 孝宏 (文化財調査第1係長)

後藤 克博 (参事兼文化財資料室長)

整理事務 川上 勝美 (課長補佐)、水元 敬浩 (主幹兼総  
務係長)、天草 英子 (施設課参事)

整理担当者 亀田 学 (参事)、西野 (坂井) 由葉 (嘱託)  
(5月まで)、藤島 友美 (嘱託) (6月から)

### 【平成25年度】整理・報告書作成

整理主体者 田崎 龍一 (熊本県教育長)

整理責任者 小田 信也 (熊本県文化課長)

整理総括 村崎 孝宏 (文化財調査第1係長)

後藤 克博 (参事兼文化財資料室長)

整理事務 馬場 一也 (課長補佐)、水元 敬浩 (主幹兼総  
務係長)、天草 英子 (主任主事)

整理担当者 亀田 学 (参事)、藤島 友美・福田 拓也 (嘱託)

## 第II章 遺跡の環境

城ヶ辻古墳群は、熊本県玉名市寺田字城ヶ辻に所在する古墳時代前期から後期にかけての古墳群である。植木台地を東西に越え、田原坂を左手に見ながら国道208号線を通ると、玉名中心部に行き着くまでに現在の株式会社浦島海苔や、同トッパン・ホームズ等が所在する八嘉台地（通称寺田台地）に到達する。その台地からは八つ手状に伸びる尾根群が存在する。その尾根のうち木葉川にむけて伸びるひとつの尾根線上の突端に城ヶ辻古墳群は位置する。

地質学的には菊池川下流域左岸の凝灰角礫岩（註1）による帯状の丘陵地末端部に位置することになるが、八嘉台地中央部から南側にかけては、金峰山から伸びる安山岩層が基盤になっており、ちょうど城ヶ辻6・7号墳一帯は、そこから北側に向かって基盤層が安山岩層から凝灰角礫岩層へ変化する地点でもある。

城ヶ辻古墳群の位置する標高34mの丘陵頂部からは、菊池川と広大な氾濫源を眺めることができ、また玉名平野中心部に位置する繁根木の伝左山古墳や、玉名平野を代表する前期古墳の稲荷山古墳を見渡すことができる。現在は木が生い茂って北東側の眺望は望めないが、古墳群築造当時は元玉名横穴群や大坊古墳、永安寺東・西古墳も見渡すことができたであろう。

また古地図（第2図参照）によると、かつてはこの尾根上に古墳状の隆起が7つ知られていたが、平成14年度の調査開始時には一部削平を受けており、4基の墳丘しか確認できなかった。

城ヶ辻古墳群が所在する尾根は、古墳時代以降も開発を受けており、「城ヶ辻」という字名や堀切と思われる箇所（谷地形）等の周辺地形から、尾根上に中世山城が存在したと推定されている（註2）。しかしながら既往の確認調査や平成14・15年度の調査では、中世山城に伴う遺構を確認していない。ただ、古墳が位置する南斜面から中世の土師器等が出土している。

現在までの調査結果から推測すると、中世の時期に関しては古墳群の位置する部分の周辺は削平されているものの、古墳群の墳丘が残存することから頂部には郭等はなく、その立地から、

見張り台程度の遺構が存在した可能性は高いと推定できる。

古墳時代に関しては、これまでの確認調査（註3）や玉名高等学校の調査等から、菊池川に向かう丘陵末端部の尾根の頂部に5基の墳丘を持つ古墳を確認していた。

現状において古墳群で最大の規模を誇るのが2号墳で、現況の墳丘は直径約18mである。北側には石棺を主体部とする1号墳があったが、昭和45年の九州電力の鉄塔工事に伴い、玉名高等学校が調査をした後削平されており現存しない。

また丘陵一帯には戦中の開墾によって段々畑が造られており、古墳が立地する頂上付近も削平されている。現在、尾根頂部に位置する2号墳から5号墳までは、約100mにわたり尾根上に沿って1列に並んでいるのが確認できる。3・4・5号墳は墳丘裾部にかけて削平を受けているが、現況の墳丘は3号墳が直径約7m、4号墳が直径約11m、5号墳が直径約10mを測る。

平成14年度の調査では新たに2基の古墳（6・7号墳）と、2号墳の周溝と考えられる09SD、そして古墳の周囲より土壌墓3基、石棺墓2基を検出した。その結果、墳丘を持つ古墳群の総数は7基以上となった。先に述べた古地図においても7基の古墳状隆起が確認されていたが、若干位置的にずれていることや、現1号墳と考えられる墳丘の北西側に1基確認できること、更に階段状に削平された2号墳より西側の地形の一部に墳丘状の地形や石材が見受けられることなどから、さらに多くの古墳が存在した可能性が高い。

台地上には、他にも八つ手状に伸びる尾根群が存在する。八嘉台地には、西側の桃田運動公園に位置する桃田古墳の他、城ヶ辻の丘陵の東側に伸びる樋元の丘陵の突端に、寺田古墳群が4基位置する。1号墳は円墳と考えられ、径約5m、高さ1.2mで周囲の封土は削り取られている。約50m南側には墳丘径約5mの2号墳が残存しているが、半月形に削平されている。かつては約20mの円墳だったと考えられており、南東部に舟形石棺（凝灰岩製）が露出しているとされている。さらに南側100m付近の納骨堂南側には径約16mの円墳があり、ほぼ中央に赤彩された組み合わせの箱式石棺とみられる板材が露出している。この石材は安山岩製と考えられ、厚さ約3cmを測る。

さらに南側 150m には、南北 25m、東西 16m、高さ 1.2m の墳丘が存在する。また、寺田古墳群の東側に伸びる上津留の台地には、高さ 5m、東西 27m、南北 13m の封土が遺存する上津留古墳がある。北側はかなりの部分が削られているが、南側の傾斜面の部分は原形をとどめている可能性がある。頂上付近には「南無阿弥陀佛」と刻銘された石碑がある。

また、城ヶ辻古墳群西側の向津留台地の東側突端には飯塚古墳がある。昭和 20 年代には既に周囲は削られており、当時では東西 30m、南北 20m、高さ 5m の墳丘が確認できたようであるが、現状では、東西 17m、南北 9m、高さ 5m の墳丘が確認できるにすぎない。

これら玉名地域の古墳群を造墓した集団について、特定の古墳群と明確な関連を示す集落等は未だ確認されていないが、これまでの調査における古墳時代の集落遺跡を幾例かあげることができる。

古墳時代前期の集落としては、玉名市河崎から両迫間にかけての柳町遺跡・布毛遺跡（旧名称；柳町遺跡）、（旧名称；玉名平野条里跡）が挙げられる。これらは弥生時代終末から古墳時代前期前半から中頃を中心とした集落である。また東南大門遺跡においては集落を画すると考えられる溝から土器群が出土しており、弥生時代終末から古墳時代にかけての時期があてられる。城ヶ辻古墳群を築造した集団の拠点集落との関連性は確認されていないが、これらの集落遺跡は城ヶ辻 2 号墳と併行する時期と推定される。菊池川を挟んで城ヶ辻古墳群の対岸に位置しており、丘陵谷部及び現在の木葉川や菊池川の氾濫源が作る微高地に営まれた集落の立地は、同時期における城ヶ辻造墓集団の集落像を示唆するものとも考えられる。

また、菊池川の左岸では城ヶ辻古墳群から北に 3km 程の場所に位置する小田宮の前遺跡で、古墳時代前期の竪穴住居や流路と考えられる遺構が検出され、流路等から古墳時代前期の遺物も出土している。また、7 世紀代の竪穴建物も検出され、流路内からは古墳時代後期の須恵器が出土していることから、周辺に古墳時代後期の集落が存在したと推定される。

ボーリング調査で、縄文時代後・晩期にあたる野蒜の炭化物

が付着した土器が出土している。また、その調査の結果から、菊池川の流路が東側に蛇行している可能性が判明した。そうすると、この遺跡は菊池川右岸に立地すると考えられ、菊池川右岸一連の遺跡と推定できる。

ところで、この遺跡から水辺の祭祀関連と考えられる遺物が出土している。それは、鏡を模造した土製品や滑石製の有孔円盤、剣形等である。これらの時期は、古墳時代中期にあたる。また、流路肩部から古墳時代と考えられる祭祀遺物も出土している。このことは興味深く、城ヶ辻 2～5 号墳と関連があるのではないかと考えており、今後の調査によりその関連性が明らかにされることを待ちたい。

古墳時代後期の集落としては、玉名平野を台地に上がった蓮華遺跡が挙げられ、5 世紀末から 6 世紀後半にかけての集落であり、城ヶ辻 6・7 号墳と併行する時期の遺跡である。しかし、立地をみると菊池川対岸に位置し、城ヶ辻古墳群を造墓した直接的集団と考えるには難しい。おそらく城ヶ辻 6・7 号墳を造墓した集団は、尾根がつくる谷の奥の比較的高い部分に拠点を置き、集落を営んでいたのではないかと推定することができる。

城ヶ辻古墳群・城ヶ辻城跡が位置する丘陵の対岸に両迫間日渡遺跡がある。菊池川下流の右岸に位置し、山鹿地区から熊本県玉名市両迫間字日渡・龍王田・御琴・阿弥陀田・上徳等に広がる遺跡群で、東西約 300m、南北約 600m の範囲に広がる。南側に柳町遺跡が存在する。また、両迫間日渡遺跡や柳町遺跡を囲むように、古代生産遺跡（水田跡）の性格を持つ旧称玉名平野条里跡と呼ばれた遺跡群が広がっていると推定されている。

九州新幹線建設工事に伴い、約 400m 南東の古閑前地区で、弥生時代後期の竪穴建物 15 軒、古墳時代の竪穴建物 13 軒やそれらに伴うであろう土坑が出土している。また、総柱の建物群も想定され、古墳時代から古代にかけての集落の存在が判明している。地形をみると、当遺跡は菊池川右岸の自然堤防と西側から伸びる丘陵に挟まれた中央部分、いわゆる低湿地にあたり、古くから菊池川水系の氾濫箇所であり、水抜きに苦勞したことが伺える。現在も玉名山鹿線沿いに、北東から南西に灌漑

水路が流れており、生産区域として重要な役割を果たしている。

生産区域を取り囲むように、微高地に井戸を持つ集落が点々と営まれたと考えられる。すなわち、この区域は弥生時代から古墳時代、中世にかけて、集落及び水田跡が推定されている。集落と生産遺跡をセットとして考えることができる遺跡である。

九州新幹線玉名駅周辺整備事業に伴う玉名市教育委員会による埋蔵文化財発掘調査で、標高約 3.7m の場所に弥生時代中期以前にさかのぼる杭列が 4 群検出されている。方向等から大別して 2 列の杭列を検出している。杭列の木杭の放射性炭素年代測定 (AMS 法) や本報告の成果を合わせると、弥生時代後期以前のものと考えられる。また、杭列内から刻目凸帯土器が出土していることから、水田遺構の時期の上限がどこまでさかのぼることができるのか注目される。

古代は玉名郡衙が 8 世紀初頭には成立していると考えられ、肥後国府や大宰府とのつながりを担っていたと考えられる。この遺跡周辺には、玉名郡和水町江田に存在した古代の駅と鹿本郡玉東町稲佐に通じる道、国道 208 号線に沿って東西に走る大道 (大堂・大道端の字名が残る) の 2 本の道路に近い。台地を北東に降りれば菊池川の水運に関わる津留に近い。

南側の隣接地には吉丸の地名が残り、近世には南東側に集落が広がっている。中世の段階にも、さらにその東側に広がっていた可能性がある。南側の現国道 208 号線に、隣接地として大堂の地名が残り、主要道としての地名と寺等が立地していたとする想定もある。

この地は津に隣接した台地状にあり、交通の地点として重要な位置を占めていたと考えられる。北東には菊池川の「津留」の地名も残る。また、中世の高瀬川の津として機能した丹倍津「伊倉」や菊池川・繁根木川・浦川に囲まれた津である「高瀬」も控える。

南側に隣接する吉丸前遺跡は、玉名市教育委員会の調査で、短辺東西 170m (1 町半)、長辺南北 220m (2 町) 以上にも及ぶ連郭式城館の可能性を指摘しているが、堀の内部は削平されていて詳細は不明である。また、港として栄えた伊倉が南西 2km にあることから、伊倉氏との関係を示唆しているが、現

在のところ不明である。

菊池川の対岸の立願寺廃寺や玉名郡衙に通じるルートの通過地点に近接する立地及び玉名平野を南から一望できる高台としての重要な立地を占めていたと考える事ができよう。

(註 1) 『玉名市史』資料篇 3「自然・民俗」玉名市史編集委員会 1993

(註 2) 桑原憲彰・大田幸博他『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1978

(註 3) 高谷和生『下山西遺跡』熊本県教育委員会 1987

(註 4) 玉名市教育委員会『玉名市遺跡地図』-玉名市遺跡詳細分布調査- 2011

### 第Ⅲ章 調査の成果

#### 第1節 調査区の位置

玉東町稲佐から八嘉台地の北裾を流れる木葉川が流れる方向に向かう。すると、菊池川に合流する区域にいくつかの丘陵が八つ手状に伸びている。1つめの丘陵は寺田古墳群が所在する丘陵。その西側200mの丘陵の突端に営まれた古墳群及び城跡推定地が「城ヶ辻古墳群」及び「城ヶ辻城跡」である。標高は約34.5～9.5mの標高を示す丘陵である。

北西側を見渡すと、玉名平野が一望できる場所であり、「津留」等の地名に見るように「津」があったと推定できる場所である。陸路も国道208号線から1kmしか離れておらず、交通の要衝であったことは間違いない。

周辺にも古墳群が存在するが、明瞭に墳丘が5基以上存在する丘陵は認められず、この地域をまとめる首長がいるのにふさわしい立地とも言える。

南側は城ヶ辻城跡になっているが、寺田山口遺跡で調査した区域、さらに吉丸前遺跡、国道208号線周辺の榎原（吉丸西）遺跡が位置する。

国道208号線周辺は榎原遺跡（吉丸西遺跡）の調査で安山岩を基盤とする丘陵であることが判明しているが、木葉川左岸に位置する田崎横穴群は凝灰岩に掘り込まれており、安山岩と凝灰岩の基盤層が入り組んでいる箇所でもある。

調査の結果、「城ヶ辻古墳群」、「城ヶ辻城跡」の部分は凝灰岩を基盤とする層に立地することが判明している。

ただし、城ヶ辻6・7号墳を構成する石室の石材は安山岩であり、金峰山から伸びる安山岩基盤層のいずれかの地点から採取した可能性がある（城ヶ辻城跡発掘調査に伴う石質同定および赤色顔料分析報告書（別添自然科学分析結果）参照）。

基盤層はともかく、八嘉台地を通る通路（道路）の近くであり、古墳時代以降・古代や中世後期を経て近世にいたるまで吉丸という集落が見られるように重要な地点に隣接する区域で見晴らしが良いところであるという地点である。

#### 第2節 調査概要

今回は、城ヶ辻城跡の対象区域にトレンチを55箇所を設定し、そのうち丘陵上部に設定したNo.22からトレンチNo.28周辺まで城ヶ辻古墳群として本調査を、No.45～47、No.52～55トレンチ周辺の谷部をⅡ区としてトレンチを拡張して一部調査を実施している。

城ヶ辻古墳群の古墳部分の調査の概要は熊本県文化財調査報告第240集で報告している。

その他のトレンチ調査で第2次世界大戦中やその後に改変された段地形の痕跡は検出されたが、中世後期まで確実にさかのぼる遺構は検出されていない。

しかしながら、中世の土師器皿や中国製輸入陶磁器が出土していることから、城館や烽火台、見張り台の存在を示唆することができる。

特に地形から見て張り出した部分、5号墳の南側に張り出した区画のトレンチ内から、少量であるが、中世後期の瓦質土器の破片が出土している。連郭式城館の可能性が指摘できる吉丸前遺跡やその周辺に区画される大溝が存在する城ヶ辻城跡、寺田山口地区の時期に重なるものであり、それらに関連する遺構が存在したかもしれない。

また、近世には中国製輸入陶磁器（試掘トレンチNo.32出土）等の他、18世紀代にかけての陶磁器も多く、近世前期から中期にかけて早くから開発された区域であることが出土遺物から伺える。

南北方向のトレンチがほとんどなく、十分地形が伺えなかった。また、試掘トレンチ調査であったため、遺跡の広がりを見るには不十分であった。

段々の地形に改変された地形を推測するにはあまりに資料が乏しいが、それでも出土遺物から遺構の存在を推測できた成果は大きい。

### 第3節 基本土層

試掘トレンチ調査では、ほとんど段々畑に改変された平坦面に試掘トレンチが設定されており、南に面した地形はまず、表土、その下に灰黄褐色粘質土である。

基本的には西側が高く、東側が低くなっている地形である。

表土は旧耕作土で腐葉土を含む。2層目以降は、丘陵上部からの斜面流失土で淡黄褐色粘質土系の土である。平坦面も上部の斜面を削った土を利用して整地した土である。丘陵上部付近には中世の遺物を包含する層もある。このことは、中世の段階で南側の6・7号墳及び2号墳の裾部の一部が、盗掘や整地された可能性を示すものである。墳丘の平坦面を削った部分には、軽石片等を含む淡黄褐色系の土が多い。

古墳群周辺の3段目までの土層は第18図のとおりである。

その下の斜面の堆積は、腐葉土（段々畑の表土）、暗褐色から褐色の土（マンガンや鉄分、炭、小礫等が混じる）、その下は淡黄灰色系の土が混じる粘質砂礫層（ローム層が自然や人為的に削られた土と推定）、黒褐色砂礫層を含んだ土（阿蘇の溶結凝灰岩があまり固まらずに堆積した土）が流失したり、2次的に堆積して粘性を帯びたり、その他の土と併せて堆積したと推定される。

その下には、淡黄褐色粘質土や阿蘇凝灰岩の堆積した黒褐色から灰色を帯びた土が堆積している。

残存状況の良い部分は黄褐色ローム系の土が堆積しており、これらは確実に地山である。さらに地山が削られた部分には凝灰岩系の土が堆積していると考えられ、6号墳から南南東に130m程の距離のある谷部では、1m程度の堆積が見られる。

試掘トレンチNo.53の断面で確認できるように近世後期から近代にかけて、暗渠（地下水排除の区画溝）が断面で確認できる。

15層までは確実に陶磁器を含み、出土遺物から16～17世紀にかけての輸入陶磁器が出土している。

試掘トレンチNo.54では、斜面の堆積部分は細かく、耕作面を形成している面は厚く堆積している。試掘トレンチNo.55でも斜面部分に近い位置であるため、深さ1.4m程の間に20～30cm程の厚さで細かい堆積をしており、斜面を削って水平に

している様子が伺える。

谷部は、出土遺物から古くから開発され水田を営んでいたと推測できる。

## 第4節 トレンチ調査の概要

第3節 基本土層で土層の概要を述べたが、時期的なことを考えると、中世後期から近世前期までの地形や遺構を復元するのは今回得られた資料では困難である。

それは、段々の地形に改変されており、土層の継続性を確認するのが難しいこと、19世紀以降の陶磁器を含むこと等が要因である。

しかしながら、中世後期の遺物が出土しており、なんらかの遺構が存在した可能性が高いことが判明した。

### 第1項 丘陵上部から斜面にかけての試掘トレンチ調査の成果

段々地形の平坦部分について、試掘トレンチの設定箇所の問題は大きいが、ほとんど水平に堆積している。

ただ試掘トレンチNo.27と試掘トレンチNo.44、試掘トレンチNo.30はトレンチの中央部が高くなっており旧地形を示唆するものである。現地形を概略的に見ると、城ヶ辻6号墳の南東側全面に小尾根がせりだしており、その尾根が丸く張り出していた可能性がある。城ヶ辻6号墳の周溝上部及び底部で柱穴らしきものを検出しており、その遺構全面に小規模な郭状の施設があったと考えられる。

遺物の時期は様々である。19世紀以降の陶磁器類に混じって18世紀後半を中心とする陶磁器類が多数出土している。また、青磁片も出土している。

丘陵裾部の試掘トレンチNo.22では1700年代のこんにやく判を用いた文様から波佐見焼と思われる1700年代後半のもの、よろけ文を持つ1800年代まで出土している。

その他須恵器は、4号墳の斜面中段部分の試掘トレンチNo.26とNo.32から2点、4号墳の斜面裾部の試掘トレンチNo.41から1点出土しているのみである。

瓦質土器は試掘トレンチNo.24-c・No.27・No.30・No.34と谷部のすぐ北側のトレンチ中段と裾に出土している。

このことは、5号墳の南側斜面に、南側に伸びる幅30mの突き出した部分に遺構があった可能性を示唆するものである。

また、試掘トレンチNo.27及び6・7号墳周辺出土の土器類は、

同様に中世の遺構が存在したとも考えられる。

南側に存在する寺田山口地区の吉丸前遺跡から、中世後期からの環濠集落に関連する遺構、すなわち城館の郭や物見櫓があった可能性がある。

土師器は、谷側のすぐ北側の試掘トレンチNo.44から出土している。その上部には、第22-7図、第23-17図、第22-9図等、古墳時代や古代から中世にかけての時期にあたるものが出土している。

他にも試掘トレンチNo.24-c・No.34からも古代と考えられる須恵器も出土しており、5号墳南斜面に張り出す突出部の上か、その上の丘陵上部に古代の遺構が存在する可能性がある。

7号墳の盗掘された埋土から、8世紀代の須恵器（第23-18図）・土師器（第23-13図）の破片が出土している（Ph.25-4・7）。

また、試掘トレンチNo.18-aからもヘラ切りの底部径約7cmの調整を若干施す破片（Ph.29-2）が出土しており、古墳群上部のいずれかにも古代の遺構が存在した可能性がある。

鉄製品の出土が多いトレンチがある。

4号墳の下にいた試掘トレンチNo.33からは、断面方形の鉄釘3本（Ph.37）と体部幅1.7cmの横広の鉄釘1本（Ph.37）、5号墳の下にいた試掘トレンチNo.30（第22-19図・Ph.37）・No.37からも、幅広の鉄釘と断面が方形の鉄釘などが出土している（Ph.37）。用途は不明である。時期も近世後期以後の陶磁器を含んでおり、近世以降の埋土からの出土であるが、丘陵上部には古墳が存在し、少数ながら古代や中世の土器も存在するため時期がさかのぼる可能性もある。

### 第2項 谷部の調査

6号墳の東側130m付近の谷部で石列を3条検出している。上段1列目（Ⅱ区S-1）は10～30cmくらいの河原石及び礫を幅60cm程の範囲に敷き詰められた状態で出土している。

断面を観察すると側石に蓋をするように、蓋部分に小さい礫や石を乗せ、崩れたような状況とも言える。

中段の石列1（Ⅱ区S-3）は、長さ30m、石列2（Ⅱ区S-2）は石列1と併行（1～1.5m離れ）し、長さ13m程検

出している。

石列の構造はS-1より簡素な構造で、幅はいずれも20cm程である。2石の側石に天井の石を載せた暗渠と考えられる。

下段の石列(II区S-3)もS-2から続くと思われる構造で1列は30m以上検出している。

また、上段に平面形が長軸90cm、短軸80cmの範囲で10～30cmの角礫を中心に1段敷き詰めた遺構を検出している。中央部が周りより15cm程窪んだ構造である。用途は不明であるが、暗渠の石材と変わらないことから耕作に伴い、付随する施設と考えたい。

II区谷部からは、13～14世紀代の特徴を持つ龍泉窯系の連弁を持つ青磁片の他、明時代末の輸入陶磁器、1600年代の唐津系陶器、銅緑釉陶器片等の中世から近世初期にかけての遺物が出土している。時期は16～17世紀が中心で、さらに古い時期に谷上部の開発が行われ、水田面がその頃までさかのぼる可能性がある。

さらに、第22-15図・第22-16図は格子に刻まれた掘り目、第22-14図は9条程ごとの縦方向の掘り目を持つ掘鉢であり、14～15世紀にかけての時期のものと考えられる。このことから、丘陵上部から谷部の開発が中世後期まで昇ると考えられる。

これは、玉名市教育委員会や県教育委員会が調査を実施した吉丸前遺跡、寺田山口遺跡等で検出した環溝(塚)の時期に重なると考えられる。つまり、集落を支えた生産地として、谷部を早くから開発したと推定できる。

今回、検出した石列は上部で検出されたもので、中世後期からやや下った時期のものと考えられる。18世紀後半以降の陶磁器も出土していることから、そうした時期以降に所属する遺構と考えられる。

中世後期の遺物も谷部とその周辺から出土しているが、耕作地としての開発は近世前期に進められていた可能性がある。

また、古代の須恵器片も数点出土しており、上部の谷や丘陵で集落や墓等が営まれていた可能性も指摘しておきたい。

金属器では、銅製品の煙管の吸口(Ph.36-4(6・7))や径5mmの断面円形を持つ径約6cmの環状の金具(Ph.36-4(9))、

不明銅製品(Ph.36-4(5))が出土している。

鉄製品では、長さ14cmでL字形を呈する工具や、長さ6cm以上、最大残存幅2.3cmの剣菱状の鉄板(第22-20図 Ph.37)、長さ3.8cmの刀装具のような金具(Ph.37-1(5))等不明な鉄製品が多く、馬具の一部とも考えられる不明鉄製品(第22-17・18図; Ph.36-3(2・3))等も出土している。

また、遺構は検出されていないが、古墳時代中期以前にあたる高杯片(第22-13図)も出土している。丘陵上に城ヶ辻5号墳が存在しているのでその流れ込みの可能性もある。

## 第5節 城ヶ辻古墳群周辺の古代以降の遺構と遺物

顕著な遺構を検出していないが、6号墳の北東側でピット群を検出している。建物等を明確に復元できるものはないが、6号墳周溝内の基底部まで検出できるものもあり、深い。樹痕の可能性も考えられるが、周辺にはこのように検出できる箇所はなく、検討を要する。

調査区外の2号墳周辺の確認調査を実施した際に、再度、そうした柱穴等の配置や検出層位を検討し、遺構かそうでないか、遺構であれば、時期や性格も検討する必要がある。

丘陵上部にある城ヶ辻古墳群の調査区域を設定する際のトレンチから8世紀前半と考えられる須恵器の高台付杯(第23-18図)が出土している。口縁部が外側に踏ん張り、体部は内湾しながら立ち上がるものである。古代の土器は数点しか出土しておらず、絵図等から7号墳等の古墳群の封土が残存していたと考えられることから、墓があった可能性がある。

また、中世の土師器が数点(第23-13図等)と青磁片、瓦質土器等が数点出土している。第22-12図は口径15cm程で12世紀後半頃にあたりと考えられ、底部はヘラ切りで削りの痕跡が明確に残存する。遺構の検出をすることができなかったが、丘陵上部は玉名平野を見渡せ、津が近く、周辺に生産域が存在することや丘陵突端に位置することを考慮すると、櫓等が建っていたと推測できる。

## 第6節 城ヶ辻古墳群補遺

### 第1項 7号墳南西側出土遺物

『城ヶ辻古墳群』2007では6号墳の周溝から出土した遺物である可能性を挙げ、何点か実測図を載せたが、その後の整理作業で、破片であるか、遺物の器種構成を考える上で図示する必要があると思い、遺物を提示する。

まず、第23-6図は須恵器提瓶等の広義の壺類の口縁と考えられる。第23-7図は須恵器高杯の脚部である。形態的に、裾部は内傾しながらハの字状に開き、端部でラッパ状に広がりが再び内湾気味になっている。第23-8図も須恵器の高杯の脚部と考えられる。端部が外側に広がっており、カキ目が施されている。方形の透かし孔の痕跡が残存する。そして、土師器の高杯(第23-12図)も存在する。内面に絞りを残し、脚部は広がり、杯部は丸みを帯びるものである。7号墳のような須恵器工人が作った高杯とは異なる通有のものである。

最後に、甕である。第23-9・10図は口縁部及び口縁部の一部で後者は波状文を施している。いずれも口縁部が大きく広がる形式でTK43型式以降のものと考えられる。

また、『城ヶ辻古墳群』2007で提示していない須恵器杯身の破片で、反転復元できる破片が5点出土している。

第23-1～3図は口径11.5cm程度で口縁部は上方に伸びるが端部に稜がない。やや古い様相はあり、TK10からMT85型式併行期と考えられる。第23-4・5図は口径12cm以上で口縁部の立ち上がりはやや内側に入る。形式的には第23-1～3より後出し、MT85からTK43型式併行期と考えられる。

図化できないが、土師器の高杯(Ph.25-1)、須恵器甕片(Ph.23-3・4・10～14・17～20・22～27)も出土している。

また、他時期の遺物も混入しており、近世の焙烙(第23-14図)や、古代の土師器高台付杯(第23-13図)、須恵器高台付杯(第23-18図)等が出土しており、近世以外に古代の遺構の存在を窺わせる遺物も出土している。

### 第2項 7号墳墓道(25-SF)出土遺物

7号墳墓道(25-SF)出土の第23-15図は土師器の高杯脚

部である。『城ヶ辻古墳群』2007では第60図2で倒立して掲載してしまっているため、本報告書で改めて紹介する。

第23-16図は土師器の甕胴部片である。

### 第3項 6号墳出土遺物

6号墳攪乱の埋土から土師器の甕片（第23-17図 Ph.25）が出土している。摩滅しており、調整は不明だが、内面は削りで口縁は外反し、端部は丸みを帯びる。

6号墳攪乱坑（S-11）からガラス玉が出土しているが、2点報告漏れがあった。第22-4図は径4mm、高さ3mm、孔径1.5mmである。青色を帯びる。第22-5図は、径2.5mm、高さ3mm、孔径1mm強である。青色を帯びる（Ph.36）。

また、6号墳出土銀環（第22-1図）と金環（第22-2・3図）について、非破壊で表面の蛍光X線分析を委託した。前者は銀の含有率が多く、アルミニウム、ケイ素等が多いことが判明した。後者は、金の含有率が79.88%、銀が18.93%、他はマンガン、鉄、銅がごく少量で、18金程度の銀が用いられていることが判明した。しかしながら、指摘されているように表面観察であり、内部の構造は不明である（『城ヶ辻古墳群』2007. 第47-1・2図）。

第22-6図の飾り金具は鉾の部分では多量の銅が検出されており、銅装であることが判明している。他の飾り金具も銅メッキしていた可能性を示唆するものである（『城ヶ辻古墳群』2007. 第43-4図）。

また、6号墳で出土している楕円形鏡板付轡について、熊本県では熊本市南区城南町所在の塚原古墳群内、丸山26号墳からの出土を報告しており、鉄の鉄鉗（かなはし）等と共伴しており、鉄器生産に携わる集団の墓と考えられる。縁金具や鉾を伴わない形式である。

実見した巨勢山75号墳出土の金銅製楕円形鏡板付轡は、遊環を持つ。城ヶ辻古墳群出土の壺状の引手を持つものに類似する。ただ、金銅装で剣菱形杏葉を伴い、馬装としては階層差がある。

寺口忍海H-16号墳では、振りで環状の引手を持つものである。巨勢山75号墳や城ヶ辻6号墳と同様に、遊環で銜部分を

連結している。鉄鎌は城ヶ辻6号墳出土と共通しているものがある。辻金具も1体形のものが多く、実用的で、鉄刀は鹿角製装具の把を持っている。その他に、鉄床、鉄鉗、鑿、鉄槌、砥石等鍛冶道具が出土しており、やりがんな、袋状鉄斧等、多彩な鉄器が出土している。丸山26号墳と近接した時期で、性格的に類似した集団の可能性もある。

塚原古墳群内の丸山26号墳出土例を含む縁金具や鉾を使用していない円形鏡板付轡の集成は、『石ノ形古墳』（袋井市教育委員会1999）の報告書に詳しい。石ノ形古墳は、東主体部から画像鏡とともに多くの玉類が出土しているが、鉄製品、鈴釧、鉄刀1振り、刀子1振りのみの出土だが、西主体部には乳文鏡の他に鉄刀2振り、蛇行剣、鉄鎌、横矧板鉾留短甲の他、馬具が出土している。その中の1つが、金銅装f字形鏡板付轡や連結式の辻金具のセットを持つ一群がある。もう一つは、楕円形鏡板付轡と一体形の辻金具のセットが同時に副葬されている。

類例としては唯一のものであり、評価は難しいが、装飾性の高い金銅装でf字形鏡板を所持する被葬者が、より実用化した最新式の鉄製楕円形鏡板付轡の馬装に加え、実用性の高い最新式の尖根式（長頸）鎌を所有している。こうした鉄製楕円形鏡板付轡が副葬されるということは、首長層がそれに準ずる、またはやや位が下る者が所有する特別な馬具であると示唆できよう。

また、先学の研究で坂本美夫氏等が指摘するように、f字形鏡板付轡が副葬されている古墳は、そうでない古墳と階層差がある事がすでに研究で明らかになっている。

同静岡県袋井市の高尾向山3号墳でも鉄製楕円形鏡板付轡が出土しているが、辻金具は連結式で金銅装の環状雲珠飾金具（脚金物）は金銅製のものが含まれ、装飾性の高いものがセットになっている。特徴として、長頸鎌の片側に逆刺を持つ最新式の鎌を多量に副葬され、鹿角装刀子を所有する点である。墳丘規模や立地から、他の古墳群との差異は見られないが、武器の大量副葬という特色を持つ。

九州では、上の原横穴群の中で上の原35号横穴に古式にあたる鉄製楕円形鏡板付轡が出土している。しかし、規模や立地

に優位性は見られないものの、鉄鍔の大量副葬が見受けられる。

京都府園部町「今林2号墳」で、直径15mの円墳の主体部である木棺痕跡から須恵器と共に鉄刀3振り、長頸鍔が出土している。片刃のものが多いのも特徴である。

愛媛県松山市茶臼山古墳でも、削平された横穴式石室内から鉄製楕円形鏡板付轡に共伴して、飾帯金具の他、長頸鍔が多量に副葬されていたと推定される。

楕円形鏡板付轡が出土した奈良県の新沢千塚112号墳、312号墳、巨瀬山境谷支群8号墳、寺口忍海古墳群H-16・D-27号墳は渡来系氏族に関連する地域の群集墳である。

また、木訶守氏は、鉄製金銅装楕円形鏡板付轡が畿内周辺では、群集墳の1古墳から出土するという共通点を見出し、一方信州等地方では畿内政権とのつながりを示唆するものだとしている。

大首长墓ではないにしても畿内政権とのつながりを得るような首长層か職能集団等の地方の首长に影響を与えるクラスの墓と考えられている。

城ヶ辻6号墳から、装飾性が高く緑金具と鋌を持つ鉄製楕円形鏡板付轡が出土しており、伝左山古墳や大坊古墳等、時期的に近い古墳が存在するが、そうした古墳の中でも、小規模クラスではあるが、石室構造や副葬品から有力層であるのは確実である。6号墳は城ヶ辻古墳群や周辺に存在するであろう古墳と、時期的に継続性はあるものの、時期を変遷しながら営まれている有力層の墓と考えられる。しかし、畿内政権とのつながり、周辺との関係性を見出すには、資料が不十分のため、詳細な位置づけは今後の課題としたい。

また、鉄製楕円形鏡板付轡は、熊本県内で城ヶ辻6号墳出土を含め、2例のみしか出土していない。もう1例は、熊本市南区城南町丸山26号墳からの出土である。形態的には多少異なり時期的な問題はあるが、この轡を副葬した古墳が存在する意義は大きい。

今回、あまり多くの類例にあたることができなかったが、6号墳は垂飾付耳飾が副葬され、肥後地域特有の石室の形態である。TK47からMT15型式併行期の様相を持った先進的な馬具・

鉄鍔を所有することができ、大和政権や韓半島とのつながりを窺うことができる集団墓と考えられる。

馬具から見ると、7号墳には後出する要素（遊環を持たない等）があるが、鉄鍔の型式差はほとんどなく、装飾性の低い馬具を副葬するという差がある。7号墳の石室構造、また、6号墳の馬具一式の分析は、7号墳の被葬者像の手がかりとなると考えているが、この報告書の刊行までに十分な分析等ができず、位置づけがあまりできなかった。今後の課題としたい。

## 第IV章 城ヶ辻古墳群の保存に至る経緯と現状

### 第1節 城ヶ辻古墳群の概要と重要性

2号墳は、出土遺物を積極的に評価すれば、菊池川流域の既知の古墳が出現する以前か、それに後続する時期に築造された可能性が指摘できる。また、6号墳は石室の形態が明らかになっていないが、初期の複室構造を有すると考えられる。石障系石室はその終焉期にあたるため、石屋形の石室構造と考えると、初現期の可能性が推測される。また、7号墳は北部九州特有の竪穴系横口式石室の強い影響を受けた石室構造である。菊池川流域から北部九州に装飾古墳や石屋形が伝わることは以前から解明されていた。しかし、7号墳の石室形態から古墳形態の派生が一方的ではなく、相互交流の所産として捉えられ得る貴重な事例となった。また、6・7号墳は築造時期に関してさほど間をおかず、6世紀前半の磐井の乱の前後にあたる可能性があり、それぞれの前後関係や石室構造を含めて、当地域の首長層の動向が明らかにされる極めて重要な古墳であるといえる。

以上のように、本古墳は県内の古墳文化を考える上で非常に重要な位置にある。城ヶ辻古墳群の存在は、菊池川に本格的に古墳が造営される当初より、連綿と古墳が形成され続けたことを物語っている。また、これまであまり知られていなかった菊池川左岸、さらに玉名地域の古墳文化や、6世紀初頭という国内の動乱期における他地域との勢力関係を考える上でも、非常に貴重な遺跡である。

以下、重要な点を列記して、まとめにかえる。

1. 2号墳は古墳時代前期にさかのぼる可能性があり、同一地点に古墳時代前期から後期まで連綿と古墳群が形成されることを示唆する重要な存在である。
2. 2号墳周溝から出土した遺物が複合口縁壺等であることから、2号墳そのものが古墳時代前期の古墳である可能性が指摘できる。同時期の可能性がある古墳として、玉名平野では院塚古墳・山下古墳等が見られるが、墳丘の残存率が悪い。城ヶ辻古墳群では周溝が検出されており、墳丘は削平されてはいるものの残存率は高い。これは、菊池川左岸において古墳時代中期の和木町江田船山古墳(国指定史跡)

等につながる勢力が存在した可能性を示唆するものである。

3. 6号墳石室内出土の土器類は少ないが、7号墳南東斜面の土器として取り上げられた遺物は、6号墳周溝の推定位置にあたり、6号墳の周溝内祭祀土器であった可能性がある。横穴式石室内の遺物は攪乱されているものが多いが、これほど攪乱を受けつつも一括遺物が存在するのは貴重である。
4. 7号墳は北部九州(筑後地域)の影響を受けた竪穴系横口式系統の石室であるが、6号墳は肥後型の石障系石室であると推定でき、系統の異なる石室が並存する。肥後型の石室は熊本を中心に筑後地域や肥前地域に分布しており、今まで肥後地域から筑後地域等に、一方的に石室形態の影響を与えたと考えられていたものが、今回墓制という保守的なものに、双方向から影響を及ぼした事が判明した意義は大きい。こうした現象を証明できる可能性のある石室として、他に山鹿市菊鹿町朱塚古墳が挙げられるが、入り口部を含めて、現在石室構造の詳細が判明しているものでは7号墳が唯一と言って良い。
5. 6・7号墳は同地域に存在する伝左山(繁根本)古墳、弁財天古墳等とともに同時期の古墳群として時代的変遷の空白を埋める重要な存在である。
6. 7号墳の墳丘上または内部にて出土した土器・石材群と呼んでいる遺構が、ただ土坑状に掘り込んでいるだけでなく上部に配列されていたとすれば、後期古墳では極めて珍しい例となる。この遺構からは、壺・高坏・台付坏等祭祀色の強いものが一括して出土しており、これらは古墳時代中期から後期古墳築造時の儀礼行為を表すと考えられる。
7. 7号墳は石室内から鉄鏃・刀・刀子・玉・馬具類と墳丘上及び内部の土器群等遺物のセットが見られる。武器としては、鉄刀2振りの他、推定で25本以上の鉄鏃が出土している。馬具は、環状雲珠や実用的な古式の素環鏡板付轡等を持つのが特徴である。工具である刀子も4点出土しており、装飾品としては管玉を中心に出土している。
8. 西側で検出された土師器や須恵器を伴った祭祀遺構は、墳丘形成途中の段階で行われた儀礼行為を示すものであり、

古墳の儀礼や墳丘・石室構造との関連について重要な意味を示し、極めて重要な遺構・遺物として特筆される。

9. 6号墳においても、攪乱坑から鉄刀・鉄鏃・馬具類等が豊富に出土している。特に轡は遊環を持ち、銜や引手にねじりが施され、周辺に鉾留めの飾り金具が付いた内湾楕円形鏡板を持つ珍しいものである。6号墳は特に飾金具（革帯金具）の出土量が多く、中には鉾に金銅のメッキが施されており、装飾性の高い馬具が想像される。

装飾品としては、ガラス小玉の他、垂飾付耳飾の可能性のある純度が高い金環が出土しており、韓半島との関係も注目される。

10. 6・7号墳南側に丘陵下部からの墓道が検出されており、また北側では、2号墳南側の墓道（35-SF）も検出された。古墳群の墓道を復元できるものとして、横穴墓等の事例が多いものの、墳丘墓の事例については熊本では貴重であり、全国的にも遺構として検出されるのは珍しい。

11. 7号墳の墳丘及び周溝は、6号墳の墳丘の一部を利用もしくは一方が一部削平する形で造成されていると推定され、6号墳が肥後型の石室の特徴をよく残しているのに対し、7号墳の石室は北部九州系の石室であることから、首長層の性格ないしは墓制の系譜の変化を考える上で、重要な古墳群であるといえる。こうした状況は磐井の乱との前後関係も含めて、国内での勢力推移に伴う何らかの影響を受けた可能性を指摘できる。6号墳と7号墳の築造時期やその前後関係によって、様々な勢力構造が想定されるため、今後の詳細な確認調査が不可欠である。

12. 古墳時代後期、6世紀では、国造磐井の乱等に影響を与えた勢力が肥後地域を中心に、有明海沿岸に独自文化を築いていただけでなく、肥後地域が朝鮮半島南部（全南地方）にも影響を与えた時期であると考えられる。5世紀後半以降、前方後円墳や埴輪、横穴式石室等の日本文化が朝鮮半島南部に伝わっている。また、栄山江流域でも見受けられ、日本文化の影響を受けたと考えられる石室が造られている。それらは、北部九州の初期横穴式石室の他、肥後型石

室の影響を受けた石室が朝鮮半島南部、栄山江流域に数例見られる等、肥後地域と朝鮮半島の文化の交流もしくは人の移動を示すものといえる。

有明海沿岸は江田船山古墳等、新羅・百済の影響が見られる副葬品を持つ古墳が少なくない。5世紀から6世紀中葉まで大坊古墳や伝左山古墳等、垂飾付耳飾の集中する地域でもある。6・7号墳はそうした時期に有明海沿岸に造営された古墳であり、また朝鮮半島との対外交渉が盛んな時期にあたり、当古墳の被葬者がそうした交流に関わった可能性も考えられる。

13. 城ヶ辻古墳群は4世紀から6世紀にいたる前代の墓までが同一地点に分布する点で、古墳文化の継続性を示す極めて重要な存在といえる。

#### (参考引用文献)

1. 蒲原宏行「竪穴系横穴式石室考」『古墳文化の新視角』雄山閣 1983
2. 第2回九州前方後円墳研究会資料『九州における横穴式石室の導入と展開』九州前方後円墳研究会 1999
3. 森下浩行「九州型横穴式石室—畿内型出現前・横穴式石室の様相—」『古代学研究』第115号 古代学研究会 1987
4. 高木恭二「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号 宮嶋利治学術財団 1994
5. 松本健郎「複室墳の諸問題—熊本県菊池川流域—」『熊本史学』第37号 熊本史学会 1970
6. 古城史雄「九州における横穴式石室の様相—石屋形を中心として」『横穴式石室にみる山陰と九州』古代の出雲を考える 8 出雲考古学研究会 1995
7. 蔵富士寛「石屋形考」『先史学・考古学論集』II 竜田考古学会 1997
8. 菊鹿町史編集委員会「朱塚古墳」『菊鹿町史』1996
9. 玉名高校考古学部「伝左山古墳測量調査」玉名高校考古部部報 30 1973

10. 玉名市教育委員会・保存科学研究会 『史跡大坊古墳保存工事報告書』 1969
11. 高木正文 『熊本県装飾古墳総合調査報告書』 熊本県教育委員会 1984
12. 田添夏喜 「熊本県玉名郡大坊古墳調査報告」『熊本史学』第32号 熊本史学会 1967
13. 城2号墳発掘調査団 『城2号墳』 宇土市教育委員会 1981
14. 中村幸史郎 『銭亀塚古墳』 山鹿市教育委員会 1989
15. 勢田廣行 『別当塚古墳群』 荒尾市教育委員会 1992
16. 山城敏昭・本山千絵 『塚坊主古墳』 熊本県教育委員会 1997
17. 小玉真一 『若宮工業団地関係埋蔵文化財調査報告第3集』 福岡県教育委員会 1980
18. 木許 守 「巨勢山75号墳出土の馬具」『大和を掘るXIV (1993年度発掘調査速報展)』 奈良県立考古学研究所附属博物館 1994
19. 木下 亘 『春季特別展 葛城氏の実像 -葛城の首長とその集落-』 奈良県立考古学研究所附属博物館 2006
20. 岡本敏行ほか 『平成15年度春季特別展 黄泉のアクセサリー 古墳時代の装身具』 大阪府立近つ飛鳥博物館 2003
21. 杉山秀宏 「古墳時代の鉄鍬について」『橿原考古学研究所論集第八』 吉川弘文館 1988
22. 千賀 久・村上恭通 『考古資料大観第7巻 弥生古墳時代 鉄・金銅製品』 小学館 2003
23. 北野耕平 『河内野中古墳の研究』 大阪大学文学部国史研究室研究報告第二冊 大阪大学文学部国史研究室 1976
24. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『綿貫観音山古墳II-石室・遺物編-』 群馬県教育委員会 1999
25. 柳沢一男ほか 『朝鮮学報』 第179号 朝鮮学会 2001
26. 高橋克壽ほか 『王者の武装-5世紀の金工技術-』 京都大学総合博物館 1997
27. 大谷晃二 『'96 特別展 黄金に魅せられた倭人たち』 島根県立八雲立風土記の丘 1996
28. 岡安光彦ほか 『日本古代文化研究』 創刊号 Phalanx 1984
29. 木許 守 『巨勢山古墳群IV-巨勢山74・75号墳の調査-』 御所市文化財調査報告第26集 御所市教育委員会 2002
30. 木許 守 「馬具流通についての一視点」『古代近畿と物流の考古学』 学生社 2003
31. 木許 守 「鉄地金銅装槽円形鏡板の性格」『橿原考古学研究所論集第十四』 吉川弘文館 2003
32. 白澤 崇ほか 『石ノ形古墳』 静岡県袋井市教育委員会 1999
33. 松井一明 『地藏ヶ谷古墳群・横穴群I・II』 袋井市教育委員会 2004
34. 松井一明 『高尾向山遺跡II』 静岡県袋井市教育委員会 1996
35. 西尾幸則ほか 『斉院茶白山古墳』 松山市文化財調査報告書16 松山市教育委員会 1983
36. 中野和浩 『小木原遺跡群、原田・上江遺跡群』 えびの市埋蔵文化財調査報告書第16集 えびの市教育委員会 1996
37. 芝田幸光ほか 『唐子台遺跡群-今治市桜井国分唐子古墳(墳墓)群調査報告』 今治市教育委員会 1974
38. 村上久和ほか 『上の原横穴墓群I』 大分県教育委員会 1989
39. 藤崎芳樹ほか 『佐倉市大作遺跡』 千葉県文化財センター調査報告第172集 (財)千葉県文化財センター 1990
40. 中井一夫 『大和巨勢山古墳群(境谷支群)-昭和48年度発掘調査概報-』 奈良県教育委員会 1974
41. 千賀 久ほか 『寺口忍海古墳群』 新庄町教育委員会 奈良県立考古学研究所 1988
42. 野々口陽子 「今林2号墳・今林遺跡」『京都府遺跡調査概報』 第68冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996

## 【参考】

熊本県文化財保護審議員 熊本大学教授 甲元眞之

### ○調査所見

・2号墳：この古墳の周溝から検出された土師器は、布留式でも古式に属する埴であり、4世紀中頃から後半の年代が考えられる。

・6号墳：大部分破壊されているが、形状から方形プランを持つ横穴式石室墳と確認できる。石室の奥壁と左壁にあたる部分に残された安山岩製の板状石から、石障もしくは石屋形の残存部であることが確認できる。石屋形にしては板状石の厚さが薄いことから、伝左山古墳タイプの石障である可能性が高いと思われるが、今後はそれらの掘り方を追求することで、明確にされるであろう。出土した須恵器は6世紀の前半から中頃にかけてのものである。

・7号墳：石室下部の保存状態は良好で、竪穴系横口式の石室墳であることが分かる。玄門部のつくりから、遠賀川流域や筑後地域に分布するものと構造的に類似すると言える。出土した須恵器から、6号墳よりはやや先行する時期のものと思定される。

・その他：発掘区の南端に1枚の安山岩板石が南北方向に立てられているが、これは箱式石棺墓の残骸であり、内部に鉄鏃がみられる。なお、7号墳北側には、7号墳築造により破壊された箱式石棺墓がみられ、また調査区内でも土壙墓や木蓋土壙墓が発見されていることから、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて、九州西部地域で一般的にみられる箱式石棺墓を中心とした共同墓地があったことを窺わせる。

### ○まとめ

今回の発掘区内では、6世紀の2基の古墳が中心であるが、隣接する東側の一段と高い場所には4基の円墳がある。そのうち2号墳は、昭和54年の調査で布留式土器が検出されていることにより、4世紀中頃から後半頃の築造時期を想定できる。墳丘中心部に円形の盗掘孔があるものの、石材が見られないこ

とから舟形石棺墓を内部主体とする古墳であった可能性が高い。3号墳からは凝灰岩製の石棺の破片が採集されていることから考えると、発掘区東側の4基の古墳は4世紀中頃5世紀にかけての古墳であり、今回の発掘区は6世紀の古墳と時期を違えながら順次古墳が構築されていたことを示す。さらに、2号墳東側の鉄塔建設に伴う調査では、箱式石棺墓が発掘されていることからすると、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてまず、共同墓地が営まれ、舟形石棺を内部主体とする古墳、ついで今回調査区の石室構造の古墳へと展開していったことが想定できる。

7号墳に見られる竪穴系横口式石室は、鹿本郡朱塚古墳に類例があり、その他では5世紀末から6世紀前半頃の、筑後南部の立山山古墳群や童男山古墳群に類例を求めることが可能である。一方、筑後南部の弘化谷古墳や童男山古墳には、菊池川流域に特徴的な石屋形構造を持つ古墳が同時期にみられることは、筑後南部と菊池川流域の密接な政治・社会があったことを示す重要な歴史資料であると言えよう。また6号墳の出土品の中に、金製の遊環があることは、この古墳の被葬者が極めて高い社会的地位を占めていたことを窺わせる。

城ヶ辻古墳群は弥生時代後期の共同墓地からはじまり、舟形石棺墓を主体とする円墳群、石室を主体とする円墳群と同一地点において連綿として古墳が形成されていたのであり、こうした類例は、熊本では見ることのできない貴重な遺跡であると思定することができる。しかも、今回の発掘による2基の古墳は5世紀末から6世紀前半にかけての政治・社会的動向を適切に表示するものであり、この地域のみならず、熊本県全体のこの時期の歴史を考察するときには、かけがえのない歴史資料とすることができる。以上述べたように、城ヶ辻遺跡は熊本県の史跡に相当する性格を具備しており、隣接する東側の古墳群とともに保存整備し、重要な歴史的遺産として後世に伝える必要があると思定される。

平成 15 年 2 月 27 日

宇土市教育委員会文化振興課長 高木恭二

## ○ 2 号墳

本古墳群の盟主的存在の古墳であり、その位置や周溝内から発見された土師器高杯・二重口縁壺の存在などからみれば、少なくとも 5 世紀初頭ないしは前半頃に属するものと思われる。墳丘の東北東に存在し、昭和 46 年に検出されたという箱式石棺（1 号石棺）は、今回、新たに西側の周溝から発見された土壇墓（周溝内埋葬）の存在を考えあわせれば、2 号墳の周辺埋葬のひとつと見ていいのかもしれない。その根拠のひとつは、1 号石棺の形態が、今回発見された土師器の年代観と合致するからであり、西側周溝内土壇墓の長さや幅の比からみた土壇墓の時期も近いものと思われる。なお、西側周溝の土壇墓は木蓋土壇墓である可能性が高いし、1 号石棺やこの土壇墓以外にも数基の周辺埋葬遺構が埋もれている可能性が高い。

## ○ 6 号墳

2 号墳の周溝と、6 号墳の周溝の一部が重複しており、6 号が 2 号より後に築造されたということが明らかである。ただし、6 号の周溝は、厳密には周溝というより丘陵の東と南側にだけ溝状に巡っているだけで全周しない。また、この 6 号墳にも 2 号墳と同じく、周溝内埋葬がありやや幅広の土壇墓が南側に検出されている。

主体部は、複室構造をなす方形プランの横穴式石室であるが、石室の石材が抜き取られているために、石室の細部構造がややわかりにくくなっているのは惜まれる。ただ、残存する石材からみて、奥壁には石屋形が置かれていたことがわかる。その根拠としては、北東側奥壁と南東側右壁に沿って立っている安山岩板石が、南西前室側までは及んでいないため、石障とは考えにくいということと、立っている板石の裏側にあたる掘り込み部分は土を充填しただけで、ある程度土を詰めてからその土の上部に玄室の側壁石を平積みするもので、この立石は腰石でもないということなどがあげられよう。

ただ、一般的には菊池川流域の石屋形は、阿蘇溶結凝灰岩製であることが多いので、この古墳のように安山岩を用いているのは古式のものである可能性があり、伝左山古墳と塚坊主古墳の中間的様相をもつ事例と考えられる。玄室と前室の大きさの比率からみた年代観とも一致し、玄室内出土遺物の時期とも合致しよう。なお、前庭部から発見された須恵器は、田辺昭三氏分類の TK43 型式に属するものであり、ずれが生じるが、この須恵器は前庭がある程度埋まった段階におかれたもので、最終埋葬ないしは、かなり後で行われた墓前祭祀の際におかれたものとみなされる。6 号墳の時期は 5 世紀末から 6 世紀初頭ころと考えられる。

また、耳環の一部とみられる金製のものは、質がかなりいいものであるが、直径が小さいので垂飾付耳飾りの一部（遊環）である可能性がある。

## ○ 7 号墳

東側で検出された 7 号墳の周溝は、6 号墳に続く丘陵側との区画をなす役割のもので、6 号墳の墳丘の一部を避けており、7 号墳が 6 号墳より後に築造されたものとみなされる。

本古墳群の中で極めて重要な古墳の一つであり、検出された石室の遺存状態もいい。玄室の幅が狭い割には、長いタイプのいわゆる北部九州地方にみられる竪穴系横口式石室そのものであり、熊本県下で発見されたこの種の石室としては唯一のものである。閉塞部分や玄室内の保存状態も良好で、天井石と玄室上部のごく一部の石を欠くだけであり、石室の旧状が推測できる。

閉塞の扉石上部から検出された長さ 130cm の柱状石は、本来玄門部の袖石上に渡しかけられていた楣（まぐさ）石であり、前壁はないタイプのものである。蒲原宏行分類のⅡ類 d、森下浩行分類の北九州型 B 類にあたり、この種のもは筑前地域宗像から鞍手・遠賀郡付近と、筑後地域にみられる。

また、西側で検出された土師器や須恵器を伴った祭祀遺構は、墳丘形成の途中の段階で行われた儀礼行為を示すものであり、古墳の儀礼や墳丘・石室構築との関連などについて重要な意味を示し、極めて重要な遺構・遺物として特筆される。なお、こ

の遺物は、墳丘や玄室内のものより明らかに先行する段階で置かれたもので、古墳の時期を考える上でも大事である。その意味では、他にも墳丘構築内ないしは構築以前の遺構が存在する可能性もあるなど、精査が望まれる。実際、西側墳丘下には箱式石棺が埋まっており、7号墳の竪穴系横口式石室構築以前の遺構であることは明らかである。ただ、この石棺は石材の一部が抜き取られるなど、7号墳築造時に破壊を受けた可能性があり、その関連性を探ることも重要になってくる。

祭祀に伴う遺物以外にも、周溝などから須恵器をはじめ、数多くの遺物が出土しており、古墳の時期を考える上で重要である。その多くは、田辺編年のTK10型式ないしはTK43型式段階のものであるが、墳丘内の祭祀遺物はそれよりやや古い段階のTK47ないしはMT15型式のものともみられ、この古墳の上限を5世紀末か6世紀初頭におくことは不可能ではないようである。ただ、6号墳との関連からみれば、6世紀初頭頃に位置付けて置きたい。

## ○まとめ

《古墳群》各古墳の詳細は、全ての古墳の内部主体や墳丘の調査が実施されないことにはわからないが、今回見学させていただいた印象では、まず丘陵先端のもっとも見晴らしのいい場所に2号墳が最初に築かれ、規模も大きい。引き続き3～5号墳へと続き、その後6号墳、7号墳へと継続的に築かれたものと推測される。2号墳の5世紀初頭ないし前半頃から、7号墳の6世紀初頭ないし前半頃の約100年間に、15～20年に1基ずつの割合で造られたものとみられる。その被葬者は、恐らく菊池川下流域左岸一帯を支配していた地域首長の一族であったとみられる。

《内部主体》各古墳は、時間の経過とともに内部主体も変化している可能性が高く、2号墳・3号墳など前半期のものは剝抜式舟形石棺である可能性が高い。6号墳の石室は菊池川流域の初期の複室構造横穴式石室であり、伝左山古墳・弁財天古墳・塚坊主古墳、それに大坊古墳などの石室との中間をうめる形式のものであり、複室の発生を考える上からも、また壁体の石積

みの特徴などの点からも大事な古墳の一つとなった。

《7号墳石室》この石室は、熊本県下にはまったく類例のない構造でありながら、精巧な造りで、完成されたものとなっている。石室構築には、この種の竪穴系横口式石室を造った経験のあるかなり熟練した造墓集団の直接的な関与が類推され、その集団が筑前地域ないしは筑後地域から、直接的にこの地に来て造ったものと思われる。このことは、菊池川下流域と筑前ないしは筑後地域との直接的な交流があったことを示しているとみてよからう。

《筑前・筑後地域と菊池川流域》7号墳の石室の特殊性から、筑前・筑後地域との関連性について述べたが、従来、6世紀初頭から前半頃に熊本菊池川流域から筑後や筑前地域に装飾古墳や石屋形が伝わったということは明らかになってきたが、今回、7号墳から北部九州的な石室がダイレクトに入っているということが明らかになり、装飾古墳や石屋形などが単に熊本から一方通行的に入ったのではなく、それと引き換えの形で今回のような石室が造られた可能性を示している。もっと一步進んで考えれば、7号墳の被葬者は、彼の地と菊池川下流域の両地域のつながり（例えば同族関係や婚姻関係）を示すような人物であったとみられる。このように本墳は被葬者像をイメージできる少ない古墳のひとつである。

## ○最後に（現地保存の必要性）

城ヶ辻の古墳は、それぞれが連綿と続く一族の奥津城であり、その立地にも深い意味があった。しかも、それぞれの古墳に特徴があり、重要である。特に、今回詳細が明らかになった6号墳・7号墳の埋葬施設の構造や出土品などは、従来の熊本県下における古墳時代の研究成果とはまた違ったあらたな1ページを切り開く画期的なものとなった。7号墳の墳丘と石室構築技術、さらには祭祀行為の実例、それに立地などは、現地においてはじめて活きるものであり、地域の歴史を解きほぐす上で極めて重要な古墳群であり、熊本県の古代社会を考える上でも貴重。現地での保存整備がなされ、未長く後世に残され活用されることが望まれる。

## 城ヶ辻古墳群視察所見

熊本大学文学部 教授 木下尚子

2004年3月18日午後1:30～4:45 遺跡視察。

### ○所見

1. 城ヶ辻7号墳は、板石を平積みにした小型の竪穴系横口式石室墳である。墳丘のほとんどと石室天井部を失っているが、その他の石室はほぼ残り、遺構としての特徴をよく保存している。盗掘のため、遺物は原位置を保っていない。残存する盛り土から、直径9m以上の円墳であったことがわかる。古墳築造時期を明確に押えられないが、墳丘での祭祀土器（高杯5、長頸壺1、碗1、甕1、有蓋高杯）と同時期であれば6世紀前半か（土器の所属年代は、調査担当者による）。
2. 城ヶ辻6号墳は、薄い板石を石障として石室内にめぐらせる横穴式石室墳である。盗掘により遺物と石材のほとんどを失っており、古墳の原形をかるうじてたもっているにすぎない。墳丘の盛り土もほとんど残存していない。墳丘規模は、地山の一部に残る周溝の痕跡から直径14mと推定されている。7号墳との切り合い関係は、現場を見る限り不明である。羨道部に古墳閉塞後の祭祀による土器が認められる（6世紀後半）。
3. 東側の丘陵頂部付近でかつて4世紀の遺物と箱式石棺が見つかっており、また円墳状の土盛りが尾根上に四つ連続することから、古墳群の存在が推定されている（城ヶ辻1号墳～5号墳）。
4. これらの他に土壙墓1基と、石棺墓が1基（7号墳下）が認められる。
5. 城ヶ辻古墳群は、以下の点で学術的価値が高いと判断される。
  - 1) 石室の保存状況が良い。
  - 2) 肥後地域に稀な竪穴系横口式石室墳であり、北部九州との関係を示唆する。
  - 3) 被盜掘墓であるが、副葬品に豊富な鉄器（馬具、武器等）、祭祀による一括土器、装身具を伴う。

6. 城ヶ辻7古墳群は、以下の点で学術的に価値が高いと判断される。

- 1) 6世紀代の北部九州的な古墳と在地的な古墳が隣接しており、それぞれに豊富な鉄器（馬具・武器等）、装身具を伴う。出土した鉄器の総数は366点（6号墳：208点、7号墳：133点、その他：25点）。
- 2) 当該古墳群は4世紀から継続している可能性があり、将来の調査成果と併せて、当地の古代史を語る有力な資料になると予想される。

### ○問題点

- 1) 東側丘陵頂部付近の遺構の性格が今ひとつはっきりしない。
- 2) 6号墳と7号墳との関係に不安が残る。
- 3) 6号墳と7号墳の先後関係が、現状からは判断しにくい。

## 第2節 古墳群の保存の要望

### 第1項 学会の現地保存の要望

平成15年5月1日付けで、肥後考古学会及び熊本古墳研究会から、その学術的価値の重要性から城ヶ辻6・7号墳の保存に関する要望書が熊本県教育長に提出された。(別添)

### 第2項 地元の現地保存の要望

平成16年1月15日付け玉名市八嘉校区区長及び八嘉校区文化財保存発起人会から城ヶ辻古墳文化財保存に伴う陳情書が提出された。(別添)

### 第3項 熊本県教育委員会から事業主体者への要望

平成15年6月3日付け教文704号で国土交通省九州整備局熊本河川国道事務所長宛に熊本県教育長名で城ヶ辻古墳群に関する現地保存措置についての要望書を提出した。

・内容としては

平成14年度から発掘調査を継続中の城ヶ辻城跡内の城ヶ辻古墳群につきましては、文化財保護法第3条の趣旨及び平成14年4月1日付埋蔵文化財発掘調査委託契約書第2条に基づき保存協議を行ってきたところ、ここに下記の事項により、当該古墳群の現地保存を要望する内容で、調査成果を説明した後、熊本県の要望として現地保存の措置をお願いとその後の活用を考える内容になっている。

[内容]

#### 1 調査の成果

- (1) これまで5基の古墳群として知られていた城ヶ辻古墳群に今回の2基の古墳、箱式石棺及び土坑墓等が新たに加わることになり、以前の調査成果と今回の調査により、古墳時代前期以前から後期にかけて連綿と築造された古墳時代の墓地群であることが判明した。
- (2) 城ヶ辻古墳群は古墳時代の全時期を通じて、長さ120mの狭長な尾根線上に集中して築造され、その過程を順にたどることができ、このような古墳群は熊本県内に例がない。
- (3) 6号墳が肥後地域の代表的な埋葬施設である「石障」もし

くは「石屋形」を持つ横穴式石室である。

- (4) 7号墳は北部九州地域に中心を置く竪穴系横口式石室系統のものと判明した。筑後南部の立山山古墳群等に類似し、北部九州における古墳築造の影響もしくは技術者の移入により築造されたものと考えられる。
  - (5) 今まで肥後地域の影響を受けている事例として筑後南部の弘化谷古墳等にも石屋形構造が見られるが、今回7号墳の石室が発見されたことにより、伝統的な墓制においても肥後地域と筑後南部地域間で相互交流を行っていた事を確認した。
  - (6) 6号墳から見つかった金製耳環(垂飾付耳飾)の一部は、県域では玉名市伝左山古墳・大坊古墳、菊水町船山古墳、竜北町物見櫓古墳のみしか見つかっていない貴重なものである。
  - (7) 6・7号墳の他に箱式石棺墓や土坑墓を検出した。これらの墳墓は盛り土を顕著に持たない古墳時代前期以前の埋葬施設であり、墓地群の時間的な広がり多様性をも確認できた。
- ◎ 以上のように、今回調査した6号・7号墳及びその他古墳のみならず、従来から確認されていた1～5号墳・その他墓域を含めた「城ヶ辻古墳群」全体が、菊池川下流地域はもちろん、熊本県の歴史を考える上で貴重なものであると考えられる。

#### 2 熊本県としての要望

6・7号墳及び箱式石棺及土坑墓の範囲は、その「古墳群」の一端を担うものであり、調査後に掘削されてしまうことは「古墳群」全体にとってその存在意義が大きく減少する。

熊本県文化財保護審議員である甲元真之熊本大学教授からは古墳群全体の保存措置と活用を目指すよう指導があつている。また肥後考古学会及び熊本古墳研究会から現地保存について要望書の提出がなされている。

県としては、「城ヶ辻古墳群」は郷土の歴史を知る上で欠かすことのできない重要な遺跡である。国土交通省に対し



肥後考古学会長 平岡勝山

熊本県教育長 田中力男 様

### 城ヶ辻6・7号墳の現地保存に関する要望書

熊本県玉名市寺田所在の城ヶ辻城跡には、古墳時代前期から後期にかけての古墳群が所在します。玉名バイパス建設工事にもないう事前の発掘調査によって城ヶ辻6号墳・7号墳の2基が新たに発見され、この古墳群の価値は一層高まりました。

特に7号墳から見つかった竪穴系横口式石室は、これまで熊本県下では知られていなかった北部九州地方独特の構造のものであり、熊本県の古墳時代研究にとって大きな発見といえます。また、6号墳は初期の複室構造横穴式石室であり、石屋形を備えていたということも新たに判明しました。複室や石屋形を持つ横穴式石室としてはわが国でも最古段階に位置付けられるということも新たにわかったことです。

いわば6・7号墳は極めて特長ある古墳であり、両古墳の発見は古墳時代における菊池川流域の社会を考える上で大変重要です。また、それだけにとどまらず、北部九州地域との特別な関係を具体的に示す古墳であるということも裏付けるものです。

1号墳から5号墳は、本工事計画から除外され保存の措置が講じられていることは、地域の歴史を知ることや学問的価値から言ってもきわめて重要なことでもあります。今回の発掘調査で検出された6号墳・7号墳の発見によって、1号墳から7号墳まで連続と続き、その系譜関係が辿れるということも重要な成果の一つで、古墳の変遷を考える上からいっても基型となる遺跡となりました。

6・7号墳の2基に加え、この古墳群の価値は一層高まり、4世紀から6世紀にかけての玉名地方や菊池川流域、ひいては熊本県の古代社会を考える上で極めて貴重な調査であり、今後の研究の進展に大きく貢献しているところですので、

つきましては、このように重要な6・7号墳の現地保存と、1号墳から7号墳までを含めた古墳群全体の保存活用が図られますよう強く要望いたします。



熊本県教育長 田中力男 様



熊本古墳研究会会長 高木恭一

### 城ヶ辻6・7号墳の保存に関する要望書

熊本県玉名市寺田所在の城ヶ辻古墳群から、今回新たに6号墳と7号墳の2基が発見され、菊池川下流域右岸における重要な古墳群であることが明らかになりました。

特に7号墳から発見された竪穴系横口式石室は、福岡県や佐賀県にしかない典型的な構造のものであり、熊本県では新発見の貴重なものです。この発見は、彼の地との交流を具体的に示すものとしてきわめて重要な意味を持ちます。

また、6号墳は石屋形を有する初期の複室構造横穴式石室であるということが判明し、この種の横穴式石室としてはわが国でも最古のもと考えられます。

今回は工事計画外として保存されることになった城ヶ辻1号墳から5号墳も連続と続く古墳群であり、今回発見された2基の古墳を加えることによって更に長期に及ぶということがわかりました。

出土遺物や立地、内部構造などによって、2号墳が4世紀に築造されたとみられ、これに続いて3・4・5号墳が4世紀末から5世紀後半頃、さらに6号墳が5世紀末から6世紀初頭、7号墳が6世紀初頭から前半頃と推測でき、100年以上もの長期間にわたって営まれ続けた古墳群であります。

6・7号墳の発見によって、この城ヶ辻古墳群が、古墳時代における菊池川流域の社会構造や当時の文化交流などを考える上で極めて重要な古墳であることが判明し、熊本県の古墳時代や北部九州地域との特別な関係を具体的に示す貴重な古墳群であるということが明らかにになった意義は計り知れません。

以上のことを鑑み、熊本古墳研究会としては、城ヶ辻6・7号墳を現地において保存し、その他の古墳を含む古墳群全体の保存活用について、格段のご高配をたまわりますようここに強く要望いたします。





「城ヶ辻古墳群」に関する範囲の現地保存の措置を強く要望する。

### 3 保存後の措置と活用

現地保存の決定後は、玉名市でも「城ヶ辻古墳群」全体の把握・保存・整備事業を行い、広く人々に遺跡を公開し活用に努める旨を聞いている。

県としては、上記の状況を踏まえ、県指定史跡としての価値付けを行い、「城ヶ辻古墳群」全体の保存・整備事業の支援を行う予定である。

## 第3節 保存協議

### ○経緯

#### 平成 14 年度

##### 平成 14 年

6月 熊本県教育委員会が発掘調査に着手。古墳が調査区内にもあることを確認。(6・7号墳)

9月13日 以降4回 玉南中学生徒38名と先生見学。

9月26日 平成14年度第2回国土交通省熊本工事事務所埋蔵文化財発掘調査等調整会議

国土交通省熊本工事事務所工事課・調査第二課

熊本県教育庁文化財調査第一係

#### 〔内容〕

保存措置を要望。位置図の提出。平成15年度工事は影響なし。保存については継続協議。

12月3日 熊本大学文学部杉井健助教授が現地調査指導。「7号墳は竪穴系の構築手順で造られており、横穴式石室としては特異。」

12月24日 平成14年度第3回国土交通省熊本工事事務所埋蔵文化財発掘調査等調整会議

国土交通省熊本工事事務所 副所長・工事課他

熊本県教育庁文化課 課長・教育審議員他

〔内容〕国土交通省としては路線の変更は無理で、現地保存は困難との回答。県自体の意向を打診される。

#### 平成 15 年

1月23日 平成14年度第4回国土交通省熊本工事事務所埋蔵文化財発掘調査等調整会議

国土交通省熊本河川国道事務所・玉名市社会教育課・熊本県教育庁文化課で協議。調査状況と平成15年度の予定。

国土交通省熊本工事事務所 副所長・工事課他

熊本県教育庁文化課 課長・教育審議員他

玉名市社会教育課

#### 〔内容〕

国土交通省としては現地保存をするには費用が嵩む。

コストを考えると現地保存は困難。現地保存については、県として遺跡の価値付けと方針を出して欲しい。

・県教育庁文化課が古墳を保存できないか口頭で要望。

2月27日 宇土市教育委員会高木恭二文化振興課長（熊本古墳研究会代表）が現地調査指導。「古墳群として極めて重要で、現地で保存整備活用すべき遺跡」

3月15・16日 現地説明会実施。玉名市教育委員会には玉名市の文化財保護審議員の方に見に来て頂くようお願いし、併せて保存問題について玉名市教育委員会の意見を頂くようお願いしておく。

平成 15 年度

平成 15 年

5月1日 肥後考古学会と熊本古墳研究会が「城ヶ辻6・7号墳の現地保存に関する要望書」を国土交通省・県教育長・玉名市教育長あて提出される。

5月2日 熊本日日新聞朝刊で『城ヶ辻古墳（玉名市）保存を』—肥後考古学会・熊本古墳研 国土交通省などに要望書—（国道バイパスで一部取り壊し？）の記事が掲載

5月8日 玉名市社会教育課と県教育庁文化課で保存協議。教育庁文化課にて

玉名市社会教育課 西田教育審議員兼課長補佐、岩永文化係長、竹田参事

県文化課 前川課長補佐（文化係担当）、高木主幹兼文化財調査第一係長、坂田参事、亀田主任学芸員

〔内容〕

城ヶ辻古墳群保存協議

県文化課と国土交通省熊本工事事務所との協議内容の説明。甲元熊本大学教授（文化財保護審議会委員）に現地確認のうえ、県文化課から国土交通省に現地保存の要望書を提出予定であることを伝える。

→玉名市からは①工期の遅れがない②費用負担なし③県指定へ等の条件が打診。

県指定が明確になれば、玉名市は保存について動くので、整備のためのスペースも考えての協議を、との課題をもらう。

5月15日 県文化財保護審議員で熊本大学文学部甲元真之教授が現地調査指導。

「4世紀から6世紀まで順次造られた古墳群で変遷をたどれることが重要である。」

6月3日 国土交通省熊本河川国道事務所・玉名市社会教育課・熊本県教育庁文化課で協議。県教育長の城ヶ辻古墳群に関する現地保存措置についての要望書を提出。（教文第704号 平成15年6月3日付け）

→国土交通省から協議途中で突然すぎて受理できないと保留。

6月19日

（熊本河川国道事務所小会議室にて午前10時から）

国土交通省熊本河川国道事務所の場眞二副所長、調査第二課 白田課長、山下計画係長、田嶋建設技官、工事課 楠本課長、清水工事係長、龍技官

熊本県教育庁文化課 前川課長補佐（文化係担当）、高木主幹兼文化財調査第一係長、坂田 参事、亀田主任学芸員

〔内容〕

古墳群の範囲（6号墳周溝、7号墳墳丘裾部まで）をそのまま残すのは困難であろうが検討する。保存要望箇所を確認のうえ、現地に残した場合の費用対効果を算定して判断する。

\* 移転保存の選択肢もあるのでとの問いかけもあり

○県文化課から国土交通省熊本河川国道事務所への説明

① 文化財の価値判断は熊本県教育庁文化課。保存措置の協議を実施するのも文化課。県指定文化財にするには、県の文化財保護審議員の判断が必要。

② 県教育庁文化課としては将来の県指定へ向けても、玉名市が古墳群全体を整備するうえでも現在地に保存することが必要条件である。

③ もし、移設するとすれば、古墳の完掘と移設のための石材取り上げ作業。さらに墳丘除去後の土壇墓・石棺墓等の調査等の作業が新たに発生し、調査期間の延長が必要である

ことも説明。

- ④ 現地保存になれば玉名市は県指定文化財にして、整備したい方針。

#### 〔玉名市の意見〕

保存にあたっての基本方針（市長・助役）

- 1) 県指定してもらい、現地保存をお願いしたい。
- 2) 一般国道 208 号玉名バイパスの路線は変更しない。
- 3) 工期を変えない。
- 4) 保存にあたっては費用面で当面国土交通省の協力をお願いする。
- 5) 指定文化財に指定後の整備は石貫ナギノ横穴・穴観音横穴の整備の後、実施したい。

\*保存については、活用を考えた覆屋及び進入路の範囲を含めて県と協議が必要。

#### ○県文化課の方針

県としては県文化財保護審議員の方の意見を聞き、県の方針をまとめて国土交通省に要望書を提出する予定。

7月9日 県文化財保護審議会が現地視察。

7月17・18日 東京文化財研究所の朽津 信明氏が現地調査指導（顔料分析）パイプ状ベンガラではないとの所見あり。

9月2日 国土交通省熊本河川国道事務所（的場副所長・調査二課白田課長ほか、工事課楠本課長・清水係長・玉名市社会教育課（西田審議員・荒木技師・熊本県教育庁文化課（高木主幹・坂田参事・亀田主任学芸員で協議。（国土交通省熊本河川講堂事務所会議室）

国土交通省工事課により城ヶ辻 6・7 号墳等にかかる部分の検討した工法 2 案を提示。第 2 案はできる限り古墳群を保存できるような工夫の案とのこと。法面 2 割、地盤強化のアンカー等。

問題として、アンカーを 90cm ごとの打ち込みにより、石室への影響と勾配を急にしても図面上では 7 号墳の墳丘及び羨門部及び墓道に影響が及ぶ可能性があること等が挙げら

れた。（玉名市・熊本県）

→現地での影響範囲の杭打ち（法面の上場線；調査員の確認のもと）とアンカーの打つ位置等の検討をお願いする。

12月17日 現地協議 1 回目。国土交通省熊本河川国道事務所（調査二課山下係長ほか・工事課・楠本工事課長・清水工事係長・渡辺監督官ほか・玉名市社会教育課（西田審議員）・熊本県教育庁文化課（高木主幹・坂田参事・岡本参事・亀田主任学芸員）で協議。

国土交通省工事課の提示した工事範囲では、7 号墳墳丘の一部が削られる形になる。墳丘裾まで残してもらえないか依頼。玉名市からは、保存整備をする立場からも 7 号墳前面に見学者が見られるような張り出しが設けられないかもしれない。

・提示→国土交通省熊本河川国道事務所工事課難色を示されるも設計上可能かどうか検討との回答。

#### 1月13日

現地協議 2 回目。甲元真之熊本大学教授（県文化財保護審議員）の出席で、国土交通省熊本河川国道事務所（工事課・楠本工事課長・清水工事係長・渡辺監督官ほか）・玉名市社会教育課（西田審議員・竹田参事）・熊本県教育庁文化課（高木主幹・坂田参事・亀田）で協議。

現地で甲元教授による学術的価値の説明。

→工事課が墳丘裾まで残るような設計を考えると意思表示。（土質によるという条件で）、ただし、排水施設が必要とのこと。遺構にさわらないように設置をお願いする。

#### 2月27日

国土交通省熊本河川国道事務所（工事課楠本課長・渡辺監督官・玉名市社会教育課西田審議員・岩永係長・竹田参事、玉名市新幹線対策課長、熊本県文化課 岡本参事により玉名市社会教育課で協議。

玉名市社会教育課に上申された地元八嘉地区住民からの城ヶ辻古墳群要望書を国土交通省に手渡し、受理（熊本河川国道事務所長に報告する）。

\*保存工事の主体者の問題は工事課から指摘。

- ①国土交通省から保存協議で一定の保存する線があり、県が承諾すればその線で具体的に設計を行う。
- ②古墳群のある場所は地盤が悪いので排水施設を梅雨時期までに設置したいので排水施設も協議したい。
- ③今後の古墳群の仮保存後の具体的計画や工程の検討（明文化できないか）。
- ④保存協議結果の保存された土地の扱い（例 熊本県か玉名市のどちらかで買い上げる等の措置で対応できないか）。

**〔県文化課〕**

現地の仮保存の方法の検討を行い、国土交通省に具体的に支援をお願いする。

- ①排水施設については、工事課と協議のうえ、今後決定する。
- ②県指定文化財にした後、玉名市で整備していく予定（国土交通省から文書化したものも必要であると打診）
- \* 今後玉名市社会教育課と協議し、国土交通省に提示する必要
- ③仮保存後の古墳群の整備・活用にいたる具体的な手順を玉名市社会教育課と協議

平成 17 年度

5 月 24 日

県文化課・国土交通省熊本河川国道事務所連絡調整会議

- ① 城ヶ辻古墳群仮保存のための準備。
- ② 平成 17 年梅雨時期までにシート養生や土嚢袋・ロープ押さえの補強・遺構内へのある程度の土嚢袋養生等。
- ③ 玉名市教育委員会との協議を進めて今後の保存計画も。

12 月 6 日

国土交通省熊本河川国道事務所（工事課）・県文化課による仮保存・法面保護協議

城ヶ辻古墳群他エリア中段法面保護工事についての協議

（別項）

**第 4 節 仮保存の方法と施工方法**

**第 1 項 国土交通省熊本河川国道事務所・県文化課による保護**

○城ヶ辻古墳群他エリア中段法面保護工事についての協議（平成 17 年 12 月 6 日）

**1 問題点**

- (1) 暫定共用までの暫定保存措置が完了していないため、保護エリアの暫定保存措置の途中段階（保護エリアの現状）のシート・土嚢袋・杭・トラロープ・ビニール紐劣化による斜面への土砂及び保護器材の流出の危険。古墳を構成する石材の転落も考えられる。
- (2) 暫定保存措置続行のための搬入路・作業場の確保が困難。→クレーン、バックホウ、キャリアダンプ等の作業場所がなくなる。
- (3) 法面保護工事完了後に暫定保存措置続行すれば、保護エリア中断に土砂が流出し、矩保護面を傷つけ、道路面まで土砂流出の可能性大。

**2 解決法と協議**

保護エリアが国土交通省所有・管理であること、保存協議中であることを考えると、保護エリアも国土交通省の管理が原則的であると考えられる。

発掘調査についても保存協議中であるため、調査を中断している現状である。

当面暫定保存が決定されているため、調査を中断のための作業は発掘調査の一環と考えられる。

従って、文化財の専門的なことは、県文化課が事業を委託される立場にあり、費用の負担や技術・工法的なこと等は工事の一部として国土交通省に最低限度の協力をお願いする。

そのため、問題点を解決するため、以下の点を国土交通省と協議をお願いした。

- ① 保護エリアの暫定保存措置と中段矩面保護工事の調整  
・保護エリアの暫定保存措置から着工してその後中段法保

護工事を実施する。

- ・重機（クレーン等）国土交通省等工事施工者への協力。
- ・遺構面埋め戻しのための人力作業は国土交通省の協力を得て県文化課実施。

② 保護エリアへの管理・搬入・搬出道路階段の設置

③ 保護エリア外への排水用 U 字溝設置と共に土砂流出擁護壁等の設置

◎ 国土交通省九州地方整備局河川国道事務所調査第二課長に協議内容を県文化課長名で「一般国道 208 号玉名バイパス改築工事に係る城ヶ辻古墳群の暫定保存措置についての要望書」として協力依頼の形で仮保存措置を矩面工事の準備工として両者で実施決定。

\*その間九州横断道の際の「小迫辻原遺跡」や九州縦貫自動車道の祇園山遺跡の例や「城ヶ辻古墳群」の価値付け（平成 17 年 1 月 12 日）等の協議を経て、実施決定。

## 第 2 項 城ヶ辻古墳群の暫定保存措置の実施

平成 17 年 12 月の協議を受け、国土交通省と施工業者の協力で熊本県文化課が平成 18（2006）年 1 月 16 日から平成 18（2006）年 1 月 21 日まで矩面保護工事を実施。

玉名バイパス国土交通省の橋梁南側 2 車線暫定共用決定により城ヶ辻古墳群の暫定保存も決定した。これに伴い、暫定共用までの保存措置が必要となり、国土交通省と県文化課による矩面保護工事の実施。

### ○それまでの保護エリアの現状

・方策

- (1) 保存協議が行われ、記録保存の調査を中断し、崩壊するかもしれない遺構箇所（6・7 号墳石室の一部等）内へ土嚢袋等の詰め込みを玉名バイパスの他地区の調査の間をぬって平成 17 年 12 月 1 日まで 30% 完了させていた。
- (2) 保存区域の境界への土嚢袋積みも 5% 完了。

\*（1）・（2）の作業後シート養生

（杭・ロープ・土嚢袋・ビニールひも等による補強・押さえ）

- (3) 古墳群へのアクセス道への土嚢袋による遺跡への進入路の土留め措置。

### ○保護エリアにその後実施された作業

(1) 遺構内へ土嚢袋等の詰め込み（残り 70% の作業必要）

(2) 保存区域の境界への土嚢袋積み（残り 95% の作業必要）  
破れにくい土嚢袋（積水樹脂製）土嚢袋二重にして入れ込み使用。

(3) 埋め戻し（斜面保護）；保存区域へは最低限度の山砂を土嚢袋に詰めて遺構内に詰め込み、ブルーシートを遺構面に敷き詰めた。玉名バイパス工事の掘削土のうち、黄褐色ローム層（赤土）を中心としたものを土嚢袋につめ、さらにそれを 20～30cm 盛土する方が経済的で、土砂流失が抑えられるとこのことで埋め戻し作業を実施した。

保存面積約 600㎡であるため、浅い所で深さ 30cm でも凹凸や斜面であるため、山砂は平均 60cm 必要と思われる、本来なら  $600\text{ m}^2$ （面積） $\times 0.6\text{ m}$ （深さ） $= 360\text{ m}^3$  で 1 割程度余裕を見て総量 400㎡は必要と考えられた。しかし、工事で用意できた土砂はそれよりも少ない量であったため、薄い箇所では 20cm は最低養生するという方針で国土交通省熊本河川国道事務所の協力を得て、土砂養生を実施した。実際は、赤土等で養生（深さ 30cm 被覆） $600\text{ m}^2$ （面積） $\times 0.3\text{ m}$ （深さ） $= 180\text{ m}^3$ 以上（200㎡～250㎡）の土は斜面に積み上げられたと考えられる。

- (4) 工法 1；当初山砂は古墳群発掘の進入路の途中まで運び、土砂運搬は道路工事の矩面工事の一環として、クレーン等での機械運搬については国土交通省熊本河川国道事務所及び施工業者の（株）青木工務店の協力を得た。
- (5) 工法 2；土砂流失防止については、排水溝（U 字溝（W = 300mm）や L 型擁護壁 H = 100cm（基礎 W = 700mm）の代わりに道路で使う予定の U 字溝の蓋を一部縦方向に転用して、高さ 600mm の擁護壁にして、土砂流失を防ぐ工事を国土交通省熊本河川国道事務所及び施工業者の（株）青木工務店に実施して頂いた。

- (6) 工法 3; 土嚢作りは人力で、山砂土嚢の運搬は一部人力で、一部はクレーンで、赤土等の土砂運搬は届く範囲はクレーンで敷きならし、一輪車・スコップ・杭と板材で土を固める道具を使い、固める作業等を人力で実施した。山砂土嚢作りや土嚢運搬や土砂敷きならし等の一部は周辺の遺跡の調査員・作業員の協力も得て実施した。

#### ○その後の保護措置

- ① 土留めのため、後日、杭と竹で竹柵工を 6 カ所以上施工した。  
\*地元の有限会社廣田組の竹林で、竹を提供していただいた。
- ② さらに土砂流失防止のため、斜面保護用の植物の種子を肥料とともに撒く。
- ③ 矩面からの進入路は斜面のため設置は困難であるが、保存エリア南側の斜面に階段と手すりの確保を国土交通省の協力で設置を本格的な矩面工事の際に実施 (Ph.16・17)。

## 第V章 今後の展望

### 第1節 城ヶ辻古墳群のさらなる解明

#### 第1項 城ヶ辻6・7号墳の築造時期及び前後関係の解明

7号墳の石室形態が当地域に入ってきた背景や、磐井の乱等との関係を明確にするために、6号墳と7号墳の前後関係や築造時期を解明する必要がある。

その方法として

(1) 7号墳盛土と6号墳周溝の切り合い関係、6・7号墳の周溝埋土、それぞれの石室の掘り方等のさらなる確認調査（トレンチの設定）を実施する必要がある。

(2) 6号墳の石室構造の解明のための研究

初期の複室構造を持つ可能性があり、また、石障系石室であるならその終焉、石屋形なら初現期の可能性がある。崩れた石材等の接合や観察等の必要がある。

他の類似石室のさらなる比較研究も必要と考えられる。

(3) 7号墳石室の類似石室の構造解明

筑後地域等の北部九州から肥後地域に影響を与えた現象を証明しうる石室で、7号墳に類似する可能性があるものとしては山鹿市菊鹿町朱塚古墳が挙げられるが、詳細は不明である。今後、その石室の測量調査や確認調査を実施し、石室形式及び時期が明確になれば、7号墳の石室の構築年代を推定する材料になるであろう。

(4) 7号墳の墳丘上の祭祀遺構の類例

7号墳の墳丘上で石蓋土坑のように土器を埋納する祭祀遺構と推定している。そのような遺構の類例が増えれば、その性格を特定できる可能性がある。

共伴する遺物はあるが、特殊な器種や型式であるため、細かい年代の推定が可能になる。祭祀遺構の年代が特定できれば、7号墳の築造年代や利用された年代を推定する材料になる。

(5) 楕円形鏡板付轡の性格と年代

楕円形鏡板付轡が出土している古墳は、その地域の有力首長墓に準じた職能集団や武器を多く保有する武装集団、またはそれを支える集団の墓であることが、今までの研究成果に

よって指摘されている。

楕円形鏡板には金銅装の痕跡は見られないが、緑金具を持ち、多くの鉾で留められた装飾性が高い。吊革金具と推定できるものには金銅装も見られるため、装飾性の高い馬具を所持した首長の墓であることは間違いない。

6号墳石室から垂飾付耳飾の一部と推定できる金環も出土している。これは、伝左山古墳や大坊古墳等からも出土しており、他の横穴式石室を主体部とする玉名地域の垂飾付耳飾を持った古墳との関係を解明する手がかりとなるであろう。

#### 第2項 城ヶ辻古墳群の範囲・確認

今回、2号墳の周溝と推定した遺構と、昭和54年度の2号墳周溝と推定した遺構の埋土との整合性も含めて、2号墳の周溝位置をさらに東、北、南を含めて確認する必要がある。現状で墳丘裾が削平されているため、墳丘の形態・規模を確認する必要がある。

関連して2号墳と重複する6号墳の北東から東側の周溝の確認も必要である。また、3～5号墳の古墳の形態や規模も、トレンチ調査により確認する必要がある。

そのことにより、2号墳と同時期に所属する可能性がある山下古墳・院塚古墳や、同じく菊池川左岸に位置する江田船山古墳（国指定史跡）が築造された時期に、古墳群がどのような環境に置かれ、地域との関連性を考えることにより、古墳時代の玉名平野の開発を考える上で重要な位置を占めると考えられる。

#### 第3項 今後の城ヶ辻古墳群の保存と活用について

城ヶ辻古墳群の範囲確認を実施することで、その重要性が明確なることは必至で、今後保存だけでなく、活用に向けて熊本県・玉名市教育委員会で協議・協力により、地元自治会や国土交通省の理解・協力のもと整備して行く必要がある。

## 第Ⅵ章 まとめ

### 1. 城ヶ辻城跡

近世以降の土地改変により、明確な遺構は検出できなかったが、4号墳裾部のトレンチに土師器・須恵器、5号墳裾部トレンチに瓦質土器の破片が出土していることがわかった。4号墳裾部に古墳が存在した可能性があり、5号墳裾部の張り出し部に、吉丸前遺跡等で検出した溝によって区画された居館跡（推定）の時期と近接し、何らかの施設があったと考えられるとも言えよう。また、谷部周辺では近世後期以降の水田開発に伴い、区画は改変されているが、中国製輸入陶磁器、瓦質の播鉢が出土しており、古くから谷部の開発を行っていたことが判明した。さらに、5号墳周辺の丘陵にも何らかのその時期にあたる施設が存在した可能性も考えられる。

### 2. 城ヶ辻古墳群

丘陵上部に城ヶ辻古墳群1～5号墳が存在するのは古くから知られていたが、今回6・7号墳を新たに発見した。

6号墳は攪乱を受け、詳細な構造は不明だが、肥後地域特有の複室構造で「石障系横穴式石室」の可能性が高い。楕円形鏡板付轡や垂飾付耳飾の一部と考えられる金環も出土しており、有力層の墓と考えられる。7号墳は北部九州に見られる「竪穴系横口式石室」と見られ、筑後地域等との双方向の文化の交流が実証されたことになった。7号墳にも素環の環状鏡板付轡等の馬具や鉄刀、刀子、短剣、長頸鏃等が出土している。今回、横穴式石室を持つ2基の古墳が発見されたことにより、古墳時代全般を通じて造営された古墳群として、その重要性が改めて注目されることとなった。

今後、城ヶ辻古墳群の範囲確認を実施することにより、城ヶ辻古墳群の重要性が明確になるのは明らかで、保存だけでなく、活用に向けて熊本県・玉名市教育委員会で協議・協力する必要がある。また、地元自治会や国土交通省の理解・協力をしてもらい、整備をして行く必要がある。

表1 出土耳環・ガラス玉観察表

図番号	枝番号	遺構番号	遺構種類	出土層位	材質	器種	形状	色調	径(mm)	厚み(mm)	孔径(mm)	残存度	重量(g)	備考	実測番号	写真図版番号
第22図	1	ST-01	7号墳	石室内V層	銀製	耳環	円	銀	13.2	1.7	-	完形	0.83	熊本県文化財調査報告 第240集(第58-2図)に掲載	28	Ph.38
第22図	2	S-11	6号墳攪乱坑	-	銀製	耳環	円	銀	24.5	2.0	-	完形	2.20	熊本県文化財調査報告 第240集(第47-1図)に掲載	24	Ph.38
第22図	3	S-11	6号墳攪乱坑	-	金製	耳環	楕円	金	12.0	1.4	-	完形	0.65	熊本県文化財調査報告 第240集(第47-2図)に掲載	23	Ph.38
第22図	4	S-11	6号墳攪乱坑	No.16	ガラス	小玉	楕円	濃紺	3.0×4.0	3.0	1.5	完形	0.05		4	Ph.36
第22図	5	S-11	6号墳攪乱坑	No.21	ガラス	小玉	円	水色	3.0	3.0	1.0	完形	0.05		5	Ph.36

表2 出土鉄製品観察表

図番号	枝番号	出土地点	出土層位	器種	全長(cm)	全幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	残存率	備考	実測番号	写真図版番号
第22図	6	S-11 (6号墳攪乱坑)	一括	飾金具	3.6	3.1	3.3 銀 13.0	10.1	-	革帯金具、U字形、銀2残存、鉄地金銅張り、金箔はほとんど剥落(第240集-第43-4図)より	43	Ph.38
第22図	17	Ⅱ区 谷部耕作土	一括	不明鉄器	7.3	2.8	3.0	11.9	2/3		3	Ph.36
第22図	18	試掘トレンチNo.34	3層下位	不明鉄器	6.9~	3.9~	2.0	24.6	1/3	表面に鉄鍍が一体化したかのような痕が残っている。内側から外側に向かって少し反っている。	1	Ph.36
第22図	19	試掘トレンチNo.30	取上げ No.113	鉄釘	7.1~	0.85	4.5	7.7	4/5	先端の一部欠損	2	Ph.37
第22図	20	Ⅱ区 谷部耕作土	一括	不明鉄器	6.6	4.2	3.0	20.0	1/2		4	Ph.37
第22図	21	Ⅱ区 谷部土坑	一括	刀子	12.8	1.7	3.0	12.6	ほぼ完形		5	Ph.36

表3 出土土器観察表

図番号	枝番号	出土地点	出土層位	器種	種類	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	焼成	調整/使用痕/文様	実測番号	写真図版番号
第22図	7	試掘Tr.42	T-033	坏	土師器	坏身	(11.0)	4.2	-	外・内) 橙 5YR 6/6	3mm位の石英、雲母、長石	良好	外) 回転ナデ、ヘラケズリ後ナデ 内) 回転ナデ	1	Ph.19
第22図	8	試掘Tr.42	一括	坏	古代土師器	口縁部	=F1	2.2	-	外) にぶい橙 5YR 6/4 内) 橙 5YR 6/6	長石、雲母	良好	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	9	Ph.28
第22図	9	試掘Tr.42	一括	坏	中世土師器	口縁部	(11.6)	2.6	-	外・内) にぶい橙 7.5YR 6/4	密(雲母、褐色粒)	良好	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	15	Ph.28
第22図	10	試掘Tr.30	一括	火鉢	瓦質土器	口縁部	-	3.1	-	外・内) 黒 2.5Y 2/1 断) 黄灰 2.5Y 6/1	長石、雲母	良好	外) ナデ、ヘラナデ 内) ハケ後ナデ 全体にスス付着	10	-
第22図	11	試掘Tr.12	一括	鉢	須恵器	口縁部	-	3.8	-	外・内) 褐灰 10YR 5/1	密(多量の長石、石英)	良好	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	21	Ph.25
第22図	12	II区一段耕作土	一括	皿	土師器	口~底部	(13.8)	3.3	10.8	外) 橙 5YR 7/6 内) 橙 5YR 6/6	長石、雲母、角閃石	良好	外) 回転ナデ、ナデ、ヘラケズリ後ナデ 内) 回転ナデ、多方向ナデ	3	Ph.25
第22図	13	II区S-3	一括	高坏	土師器	坏底部	-	3.3	-	外・内) 橙 7.5YR 7/6	長石、褐色粒	良好	外) ナデ 内) ナデ	23	Ph.25
第22図	14	II区一段耕作土	一括	搦鉢	須恵器	口縁部	-	4.9	-	外・内) 灰 N 5/	密(雲母、長石)	良好	外) 横ナデ、具横ナデ、ケズリ後横ナデ 内) 横ナデ、左上がり方向ハケ後ナデ、 9本単位のすり目	6	Ph.25
第22図	15	II区谷部	一括	搦鉢	瓦質土器	胴部	-	4.3	-	外) 灰黄褐 10YR 6/2 内) 褐灰 10YR 6/1	石英	良好	外) ケズリ後ナデ 内) ナデ後右上がり後左上がり方向搦目	16	Ph.28
第22図	16	II区谷部	一括	搦鉢	瓦質土器	胴部	-	5.3	-	外・内) 黄灰 2.5Y 5/1	長石、石英、雲母	良好	外) ケズリ後ナデ 内) ナデ後多方向搦目	17	Ph.28
第23図	1	ST-01 (7号墳)	南西側一括	坏身	須恵器	坏部	10.6	3.5	-	外・内) 青灰色	密) 長石、黒色粒	良好	外) 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内) 回転ナデ、ナデ	26	Ph.19
第23図	2	ST-01 (7号墳)	南西側一括	坏身	須恵器	坏部	11.4	3.5	-	外・内) 青灰色	密) 長石	良好	外) 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内) 回転ナデ、ナデ	27	Ph.19
第23図	3	ST-01 (7号墳)	南西側一括	坏身	須恵器	坏部	11.0	3.8	-	外・内) 淡青灰色	密) 長石、石英	良好	外) 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内) 回転ナデ、ナデ	29	Ph.19
第23図	4	ST-01 (7号墳)	南西側一括	坏身	須恵器	口~胴部	(11.4)	2.5	-	外・内) 暗灰 N 3/	多量の石英粒、長石粒	良好	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	12	Ph.20
第23図	5	ST-01 (7号墳)	南西側一括	坏身	須恵器	坏部	18.6	3.8	-	外・内) 淡青灰色	密) 長石	良好	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ、ナデ	28	Ph.19
第23図	6	ST-01 (7号墳)	南西側一括	提瓶	須恵器	口縁部	(8.8)	2.8	-	外) 灰褐 7.5YR 5/2 内) にぶい赤褐 5YR 5/3	密(わずかに長石細粒を含む)	良好	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	4	Ph.20
第23図	7	ST-01 (7号墳)	南西側一括	高坏(透かし窓付)	須恵器	脚部	-	2.1	(7.8)	外・内) 灰 N 5/	密(石英)	良好	外) 回転ナデ、沈線 内) 回転ナデ 透かし窓一部残存	8	Ph.20
第23図	8	ST-01 (7号墳)	南西側一括	高坏(透かし窓付)	須恵器	脚部	-	1.7	(7.8)	外・内) 灰 N 5/	密(石英、長石)	良好	外) 回転ナデ、回転搦目 内) 回転ナデ、ケズリ後ナデ 透かし窓一部残存	7	Ph.20
第23図	9	ST-01 (7号墳)	南西側一括	甗	須恵器	口縁部	(14.9)	2.3	-	外・内) 褐灰 N 4/	長石、雲母	良好	外) 回転ナデ、沈線、凹線 内) 回転ナデ	13	Ph.20
第23図	10	ST-01 (7号墳)	南西側一括	甗	須恵器	頸部	-	3.4	-	外・内) 褐灰 N 4/	長石、黒色粒	良好	外) 横ナデ、ナデ後節描波状文 内) 横ナデ	18	Ph.20
第23図	11	ST-01 (7号墳)	南西側一括	高坏	土師器	坏部	(11.4)	2.7	-	外・内) 橙 5YR 6/8	石英、長石、赤色酸化粒	良好	外) 回転ナデ、ナデ 内) 回転ナデ	25	Ph.19
第23図	12	ST-01 (7号墳)	南西側一括	高坏	土師器	坏底部~脚部	-	8.3	-	外・内) 橙 5YR 7/6	石英、長石	良好	外) ナデ、多方向ナデ 内) ナデ、粘土紐の痕跡が残る。	14	Ph.30
第23図	13	ST-01 (7号墳)	南西側一括	高台付坏	土師器	底部~高台	-	2.1	(7.0)	外・内) 灰初フ' 5Y 6/2	長石、褐色粒	良好	ナデ、横ナデ	2	Ph.19 Ph.25
第23図	14	ST-01 (7号墳)	南西側一括	焙烙	土師器	口~底部	(16.2)	2.5	(15.4)	外) 灰褐 7.5YR 5/2 内) にぶい褐 7.5YR 5/3	長石、雲母、角閃石赤色酸化粒	良好	外) 回転ナデ、ヘラケズリ、横ナデ 内) 回転ナデ 使用痕) 内外面にスス付着	5	Ph.25
第23図	15	25-SF 7号墳墓道	一括	高坏	土師器	脚部	-	4.15	-	外) にぶい橙 7.5YR 7/4 内) 橙 7.5YR 7/6	長石細粒、赤色酸化粒	良好	外) 縦方向板ナデ後ナデ、指ナデ 内) 板ナデ後指ナデ、ナデ	24	Ph.19
第23図	16	25-SF 7号墳墓道	一括	甗	土師器	頸~胴部	-	4.1	-	外) 橙 7.5YR 7/6 内) にぶい橙 7.5YR 7/4	少量の石英	良好	外) 横ナデ、ケズリ後横ナデ、ナデ 内) 横ナデ	22	Ph.25
第23図	17	ST-02 (6号墳)	一括	甗	土師器	口縁部	-	4.3	-	外・内) 明黄褐10YR 7/6	長石、石英、雲母	良好	外) 横ナデ、縦ナデ 内) 横ナデ、ナデ	19	Ph.25
第23図	18	遺跡一括	一括	高台付坏	須恵器	胴~底部	-	2.8	9.1	外) 灰 5Y 6/1 内) 灰黄褐 10YR 6/2	石英、長石	良好	外) 回転ナデ、ナデ、貼付高台 内) 回転ナデ	20	Ph.25
第23図	19	褐色粘質土層	一括	こね鉢	瓦質土器	底部	-	4.1	-	外) 褐灰 7.5YR 5/1 内) 灰黄褐 10YR 6/2	長石、黒色粒	良好	外) ケズリ、無調整 内) ナデ、回転ヘラケズリ	11	Ph.25

\*法量の( )数字は、復元値、~は、残存値である。

# 自然科学分析

## 目 次

### I. 城ヶ辻城跡発掘調査に伴う石質同定および赤色顔料分析 (応用地質株式会社)

1. はじめに	37 ~ 39		
1-1. 調査の概要	1-2. 城ヶ辻古墳群の概要	1-3. 分析試料	
2. 薄片作成および顕微鏡観察による石質同定	40 ~ 44		
2-1. 薄片作成	2-2. 顕微鏡観察	2-3. 石質同定	
3. 赤色顔料分析	45 ~ 49		
3-1. 測定方法	3-2. 測定装置	3-3. 測定結果	3-4. 赤色顔料の種類
4. まとめ・参考文献	50 ~ 62		
分析資料写真			
蛍光 X 線分析結果 (定性レポート)			
(図表・写真目次)			
図 1-1. 遺跡案内図	38		
図 3-1・3-2. 試料No. 1・No. 2 のスペクトル (上: 赤色面、下: 石材面)	46		
図 3-3. 試料No. 3 のスペクトル (上: 赤色面、下: 石材面)	47		
図 3-4. 試料No. 4 のスペクトル (赤色顔料)	47		
図 3-5. 試料No. 5 のスペクトル (赤色顔料)	48		
表 1-1. 分析試料一覧	39		
表 3-2. 赤色面と石材面の強度比の比較	49		
顕微鏡写真 -1 No. 1 (城ヶ辻遺跡 ST-01)	41		
顕微鏡写真 -2 No. 2 (城ヶ辻遺跡 ST-02)	43		

### II. 玉名バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財調査に係る自然科学分析事業報告 (パリノ・サーヴェイ株式会社)

II. 城ヶ辻古墳群出土金属遺物の蛍光 X 線分析	64 ~ 65			
1. 試料	2. 分析方法	3. 結果	4. 考察	引用文献
(図表・図版一覧)				
図 1. 金属遺物の蛍光 X 線スペクトル (1)	66			
図 2. 金属遺物の蛍光 X 線スペクトル (2)	67			
表 1. 測定条件	68			
表 2. 金属遺物の元素分析結果	68			



城ヶ辻城跡発掘調査に伴う  
石質同定および赤色顔料分析

報告書

応用地質株式会社



## 1. はじめに

本報告書は、熊本県教育庁からのご依頼により応用地質株式会社が実施した「城ヶ辻城跡発掘調査に伴う石質同定および赤色顔料分析」について取りまとめたものである。

今回の調査では、古墳の石室に利用されていた石材の同定および石材や土坑内部に付着していた赤色顔料分析を実施した。その結果、古墳石室の石材は2試料とも玄武岩質安山岩で、同一産地に由来する可能性が考えられる。また、その産地は遺跡近傍の金峰山溶岩の可能性が示唆された。また、赤色顔料は5試料すべてベンガラであった。

以下に調査の概要を示す。

### 1-1. 調査の概要

1)調査名 : 城ヶ辻城跡発掘調査に伴う石質同定および赤色顔料分析

2)分析試料採取地 : 城ヶ辻古墳群

(熊本県玉名市大字寺田字城ヶ辻 「図 1-1 遺跡案内図」参照)

3)調査期間 : 平成 15 年 3 月 3 日～平成 15 年 3 月 20 日

4)目的 : 城ヶ辻古墳群から出土した古墳に利用されていた石材の同定、および石材や土坑墓中に付着していた赤色顔料の組成分析。

5)調査内容 : 薄片作成および顕微鏡観察による石質同定 (石材 2 点)

蛍光 X 線分析による赤色顔料分析 (石材 2 点、土壌 3 点)

6)調査担当者 : 応用地質株式会社

【技術担当】小林 恵 (技術本部技術センター 歴史環境グループ)

石沢 一吉 (技術本部技術センター 地質・岩盤グループ)

〒330-8632 埼玉県さいたま市土呂町 2-61-5

TEL.048-665-1811

【営業担当】高本 昌範 (九州支社熊本支店)

〒862-0935 熊本県熊本市御領 6-1-6

TEL.096-386-4610

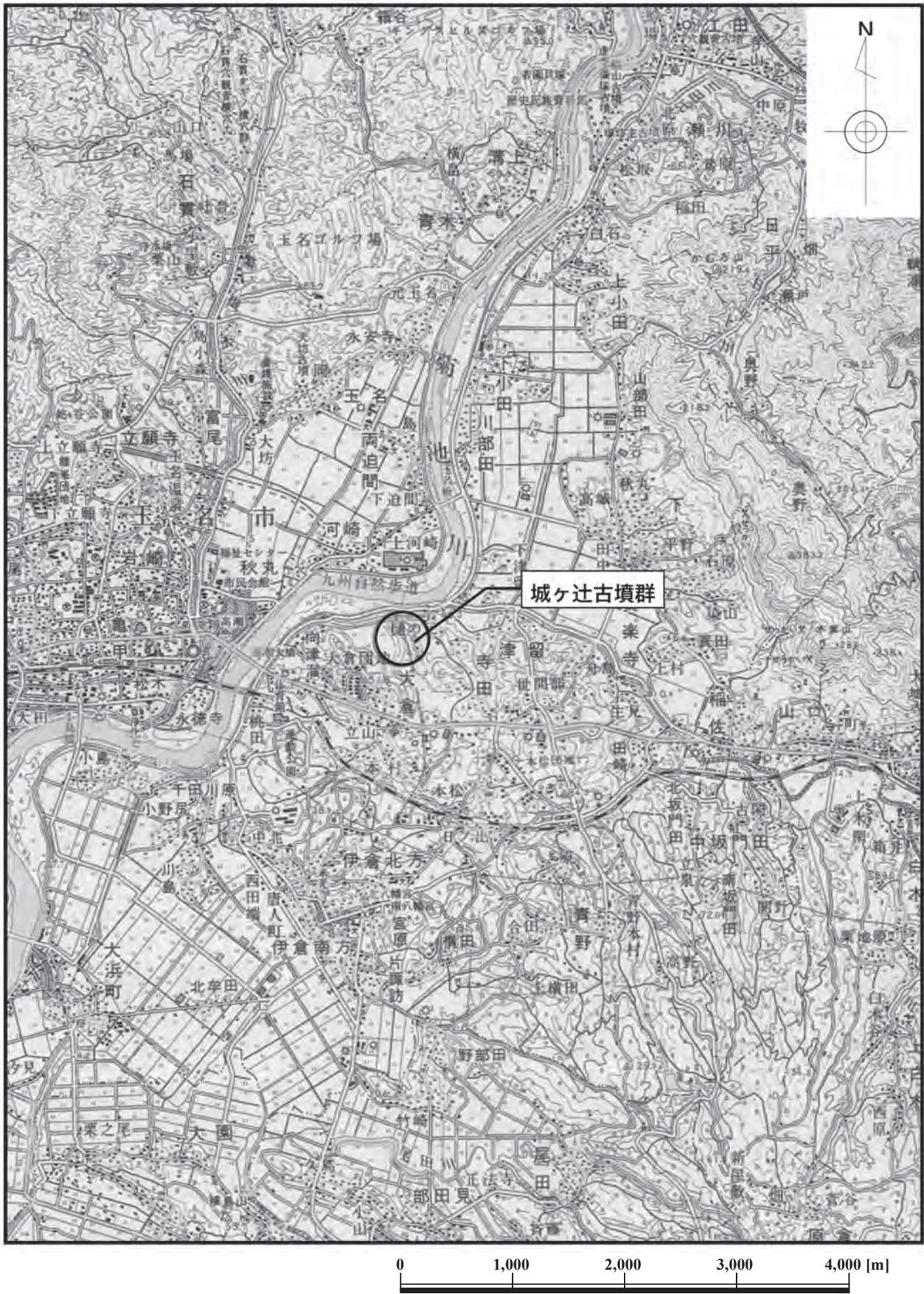


図 1-1 遺跡案内図  
 (国土地理院発行 1/50,000 地形図「玉名」より抜粋)

## 1-2. 城ヶ辻古墳群の概要

当遺跡は、菊池川にかかる玉名市高瀬大橋から上流へ 1.3km 地点の砂岩に位置し、阿蘇峰の火砕流と金峰山の凝灰角礫岩（一部熔岩）によって形成された帯状形の丘陵地末端部上にある。標高 34m の丘陵頂上部に城ヶ辻古墳群があり、これまでに 5 基の古墳（1 号墳～5 号墳）が確認されている。昭和 46 年の調査では、このうちの 1 号墳から安山岩の板石で造られた組合せ式箱式石棺が確認されている。

熊本県教育庁文化課による平成 14 年度の調査で、新たに 2 基の古墳（6 号墳、7 号墳）が確認された（熊本県教育庁文化課 2003）。6 号墳は横穴式石室をもつ古墳で、6 世紀初頭に築造されたと考えられている。盗掘や開墾による削平を受け、築造時の原形を留めていないものの、石材の中には赤く塗られたものが多数含まれ、奥壁の板材にも赤色顔料が塗られていた。7 号墳は天井部こそ破壊されていたが、他はほぼ完全な形で出土した。竪穴系横口式石室をもつ古墳で、6 世紀前半に築造されたと考えられている。竪穴系横口式石室は、福岡県や佐賀県で確認されているが、熊本県内には他に類例がない。石室は安山岩（肉眼による推定）の割石による小口積みで、割石のところどころには赤色顔料が塗られている。

また、6 号墳、7 号墳の周溝内からは土坑墓も確認されており、内面には赤色顔料が塗られていた。

## 1-3. 分析試料

分析試料は、6 号墳および 7 号墳の石室に利用されていた赤色顔料が付着している石材 2 点と、赤色顔料が付着している土坑内の土壌 3 点である。これらの試料について、石材の石質同定および赤色顔料の組成分析を実施した。なお、分析をおこなうにあたり、便宜上表 1-1 に示した No.1～No.5 の試料番号をつけ、各試料をこの番号で呼称することとした。分析試料および分析項目は表 1-1 に示すとおりである。また、分析試料の写真を巻末に掲載した（巻末 1 参照）。

表 1-1 分析試料一覧

試料番号	遺構名	試料	石質同定 (顕微鏡観察)	赤色顔料分析 (蛍光 X 線分析)
1	ST-1 6 号墳	石室石材	○	○
2	ST-2 7 号墳	石室石材	○	○
3	S-17 6 層 (a 層)	赤色顔料 (土壌)	—	○
4	S-32 No.1	赤色顔料 (土壌)	—	○
5	S-32 No.2	赤色顔料 (土壌)	—	○
合計			2 試料	5 試料

## 2. 薄片作成及び顕微鏡観察による石質同定

城ヶ辻古墳群 6 号墳、7 号墳の古墳石室石材 2 試料 (No.1、No.2) について、薄片作成および顕微鏡観察を実施した。

### 2-1. 薄片作成

顕微鏡観察に使用した薄片は、以下の手順で作成した。

- ① ダイヤモンドカッターで、横約 2cm×縦約 3cm×厚さ約 1cm の大きさに切断する。
  - 片面を # 2 0 0 番→# 6 0 0 番→# 8 0 0 番のカーボランダムで研磨し、さらに # 1 0 0 0 番→# 1 5 0 0 番のアランダムで平滑に仕上げる。
- ③ ペトロポキシ樹脂で研磨面をスライドグラスに貼り付ける。
- ④ 厚さ数 mm 程度になるように小型ダイヤモンドカッターで切断する。
  - □と同様の手順で、厚さ 7 5 ミクロン程度になるまで岩石を研磨する。
  - 表面をダイヤモンドペーストで鏡のように仕上げ、薄片を完成させる。

### 2-2. 顕微鏡観察

顕微鏡観察は、応用地質株式会社所有のニコン製偏光顕微鏡 P O H I 型を用いて行った。また顕微鏡観察の後、岩石の組織と鉱物構成を代表的に示している部分を選んで写真を撮影した。

以下、顕微鏡観察結果について述べる。

#### ①No.1 (城ヶ辻遺跡 ST-01) 顕微鏡写真-1 参照

岩石名：玄武岩質安山岩

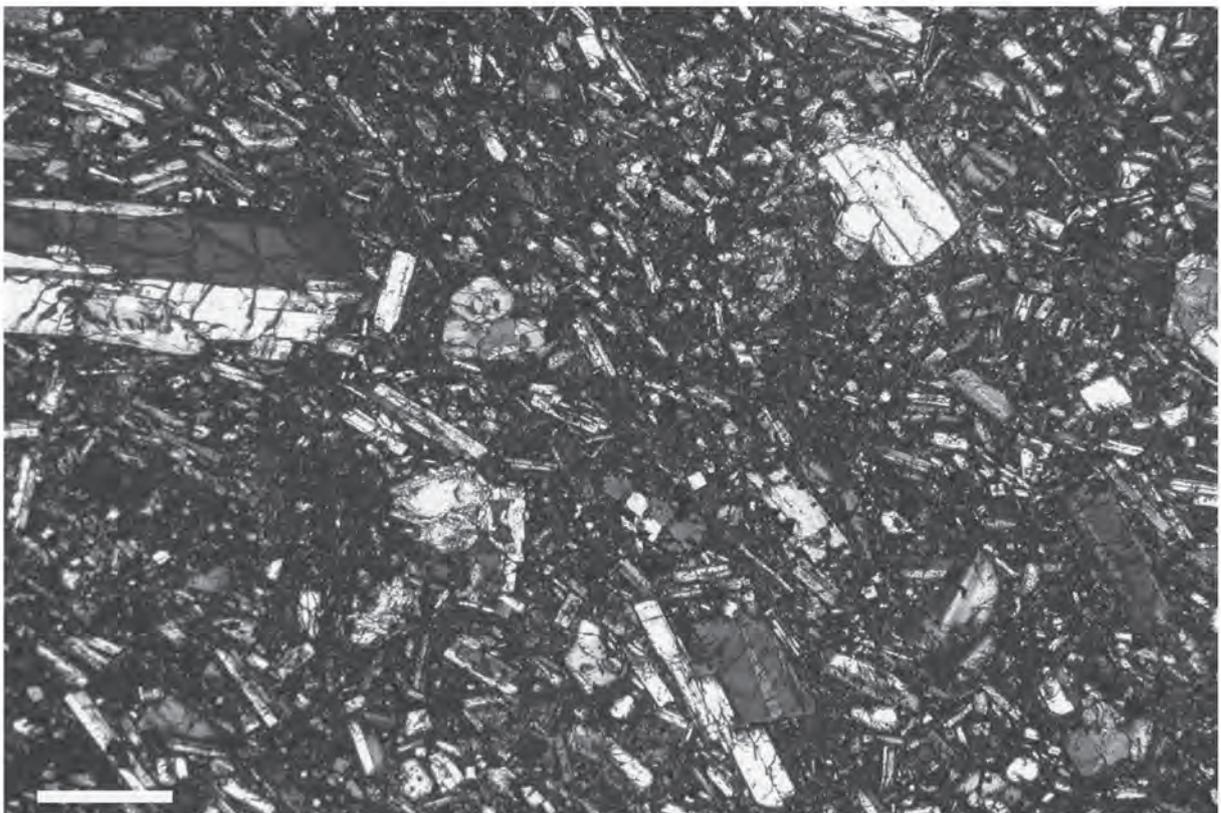
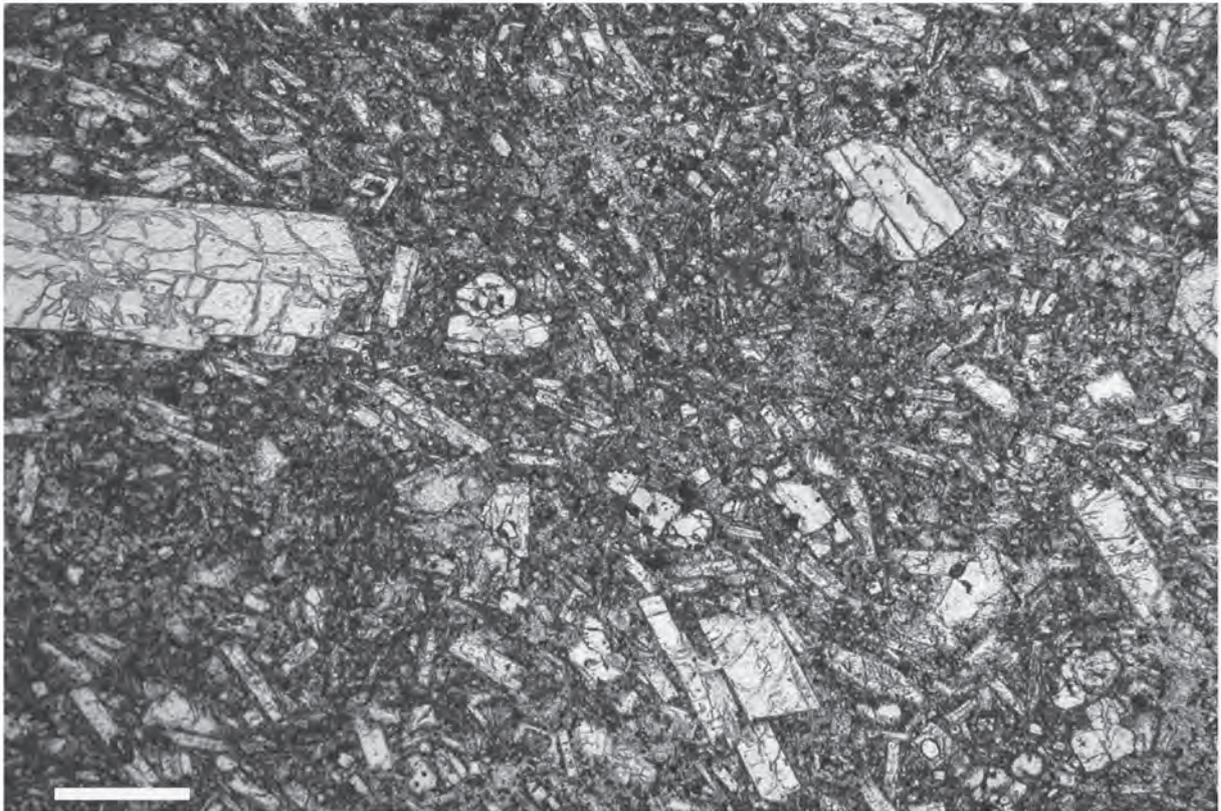
記 載：径 0.3～0.7mm の単斜輝石、斜方輝石、カンラン石と、径 0.5～1.5mm の斜長石などの斑晶を含む。石基は、短冊状の斜長石間を微細な単斜輝石、磁鉄鉱、ガラス、隠微晶質物質などが充填する填間状組織を示す。

単斜輝石は、淡青色～淡緑色で、透輝石～普通輝石の化学組成を示す。

斜方輝石は無色～淡赤色で、頑火輝石の化学組成を示す。

カンラン石は、単独の結晶で産する場合と、外縁部を斜方輝石で包晶されて産する場合とがある。化学組成はマグネシウムカンラン石成分が 7 5 モル%前後で、産状の差による化学組成の明瞭な差異は認められない。多くのものが、劈開にそってイデイングサイト化している。

斜長石は、卓状～柱状で、アルバイト・カールスバッド複合双晶を示し、灰長石成分が 7 0～9 0 モル%の組成を示す。



顕微鏡写真-1 城ヶ辻遺跡ST-01 (上：平行ニコル、下：クロスニコル)

写真左下の白抜き横棒は0.4mm

②No.2 (城ヶ辻遺跡 ST-02) 顕微鏡写真-2 参照

岩石名：玄武岩質安山岩

記 載：径 0.2～0.6mm の単斜輝石、斜方輝石、カンラン石と、径 0.5～1.5mm の斜長石などの斑晶を含む。石基は、短冊状の斜長石間を微細な単斜輝石、磁鉄鉱、ガラス、隠微晶質物質などが充填する填間状組織を示す。

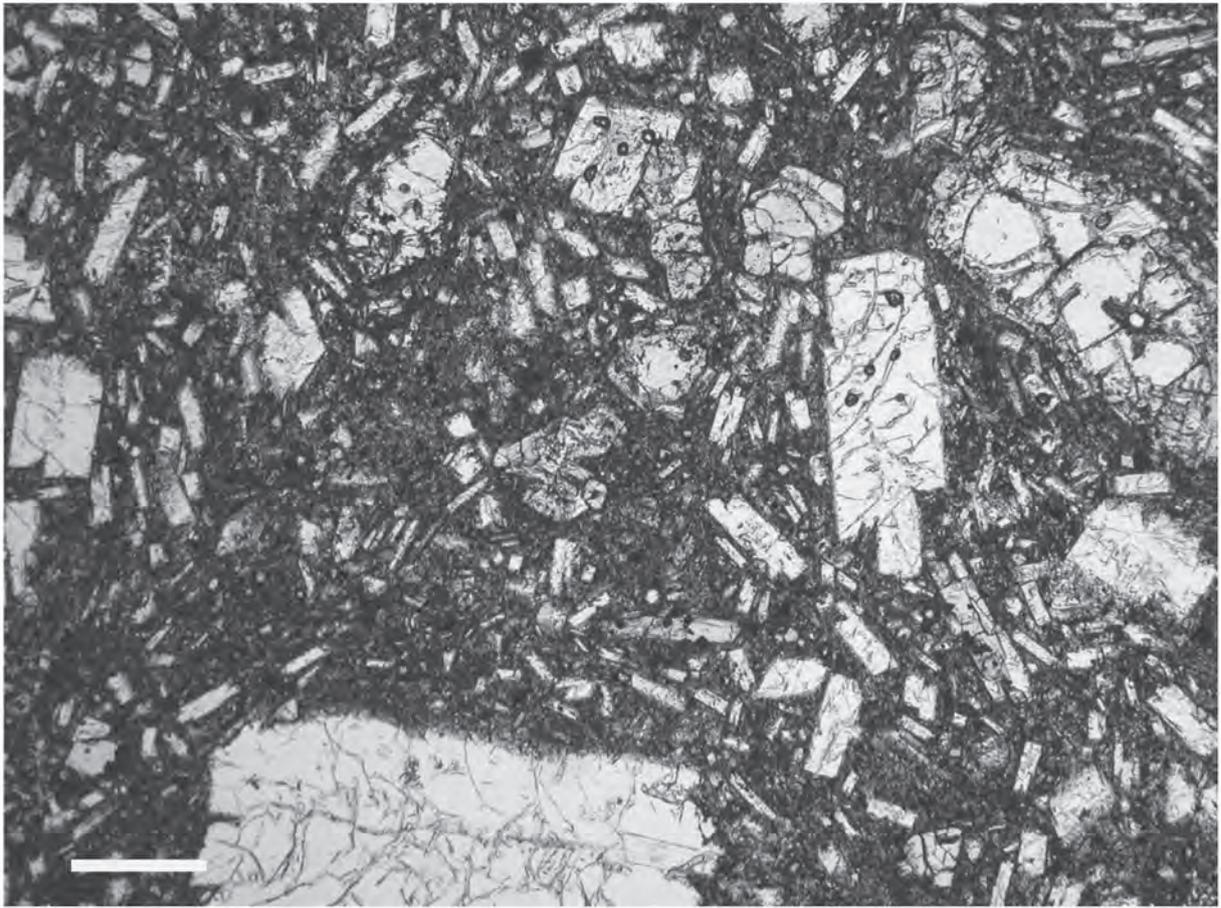
単斜輝石は、無色～淡緑色で、透輝石～普通輝石の化学組成を示す。

斜方輝石は無色～淡赤色で、頑火輝石の化学組成を示す。

カンラン石は、外縁部を斜方輝石で包晶されて産する。化学組成はマグネシウムカンラン石成分が75モル%前後である。劈開にそってイデイングサイト化しているものが多い。

斜長石は、卓状～柱状で、アルバイト・カールスバッド複合双晶を示し、灰長石成分が70～90モル%の組成を示す。

本試料中には、径 0.2～0.5mm の単斜輝石と斜方輝石からなる集斑状組織が観察される。



顕微鏡写真-2 城ヶ辻遺跡ST-02 (上：平行ニコル、下：クロスニコル)

写真左下の白抜き横棒は0.4mm

### 2-3. 石質同定

上に述べたように、今回顕微鏡観察を行ったNo.1とNo.2の二つの石材とも玄武岩質安山岩で、鉱物の化学組成も二つの試料で共通している。したがって、二つの石材が同一の産地に由来する可能性があると言える。また、二つの試料とも、マグマが直接固化した溶岩もしくは岩脈と思われる組織を示している。

城ヶ辻遺跡は、阿蘇の火砕流と金峰山の凝灰角礫岩・溶岩からなる丘陵地の末端に位置している。今回の顕微鏡観察結果から言えば、検討した二つの試料とも金峰山の玄武岩安山岩溶岩によく似た鉱物組成を示しており、遺跡周辺の金峰山溶岩が石室石材に使用された可能性が考えられる。また、城ヶ辻城跡発掘調査概要（熊本県教育庁文化課、平成15年1月10日）によれば、今回検討したNo.2の7号墳石室石材は、割石による小口積みに使用されていたと記されている。金峰山溶岩の一部には板状節理が発達するものもあることから、こうした薄く板状に割れる溶岩が、石室石材として用いられたとも考えられる。

今回の検討では顕微鏡観察による鉱物構成と組織に関する資料しかないため、詳細な石材産地の推定は不可能である。したがって、今後石材試料の鉱物の化学組成や岩石全体の化学組成を検討して、石材産地の比定をおこなう必要があると考える。

### 3. 赤色顔料分析（蛍光X線分析）

城ヶ辻古墳群から出土した古墳石室石材および土坑墓内土壌に付着していた赤色顔料 5 試料 (No.1～No.5) について、蛍光X線分析を実施した。

#### 3-1. 測定方法

蛍光X線分析では、X線が照射されている範囲内の表面付近の平均的な組成を把握することが可能である。ただし、赤色顔料のように石材や土器などの表面に付着しているものの組成を測る際に、赤色顔料が付着している部分を測定した場合、赤色顔料の下にある石材や土器部分の組成も反映している可能性が考えられる。そこで、赤色顔料が付着している部分（以下、『赤色面』と呼ぶ）と赤色顔料が付着していない部分（以下、『石材面』と呼ぶ）とを測定し、その結果を比較して赤色面の方により多く含まれていた元素が赤色顔料の主成分であると判断する。今回の試料のうち、No.1～No.2の石材については赤色面と石材面を測定した。また、No.3の赤色顔料（土壌）は土壌部分が固化し、その表面に赤色顔料が付着していたため、赤色面と石材面を測定することとした。石材面を露出する際には、ダイヤモンド製の精密ドリルを用いて分析に必要な範囲のみを出すようにした。一方、No.4～No.5の試料は、土壌中に赤色顔料が混在している状態であったため、赤色顔料の塊部分を測定することとした。

#### 3-2. 測定装置

測定には、エネルギー分散型微小部蛍光X線分析装置 SEA5230E（セイコーインスツルメンツ株式会社製）を用いた。この装置では、 $\phi 2\text{mm}$  までの領域を測定することができ、周囲の影響を受けずに微小部分の化学組成を求めることができる。今回の調査に使用した測定条件を表 3-1 に示す。

表 3-1 測定条件

項目	条件
測定可能元素	Na (11) ～U (92)
X線管球	モリブデン (Mo)
励起電圧	45kV
管電流	自動設定
測定領域	$\phi 2\text{mm}$
測定時間	200 秒
測定雰囲気	真空

#### 3-3. 測定結果

上記の測定装置、測定条件で測定した各試料のスペクトルを図 3-1～図 3-5 に示す。なお、分析結果の詳細は巻末に掲載した（巻末 2 参照）。

分析の結果、5 試料とも赤色面には、アルミニウム (Al)、珪素 (Si)、硫黄 (S)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、鉄 (Fe)、水銀 (Hg) などが含まれていた。

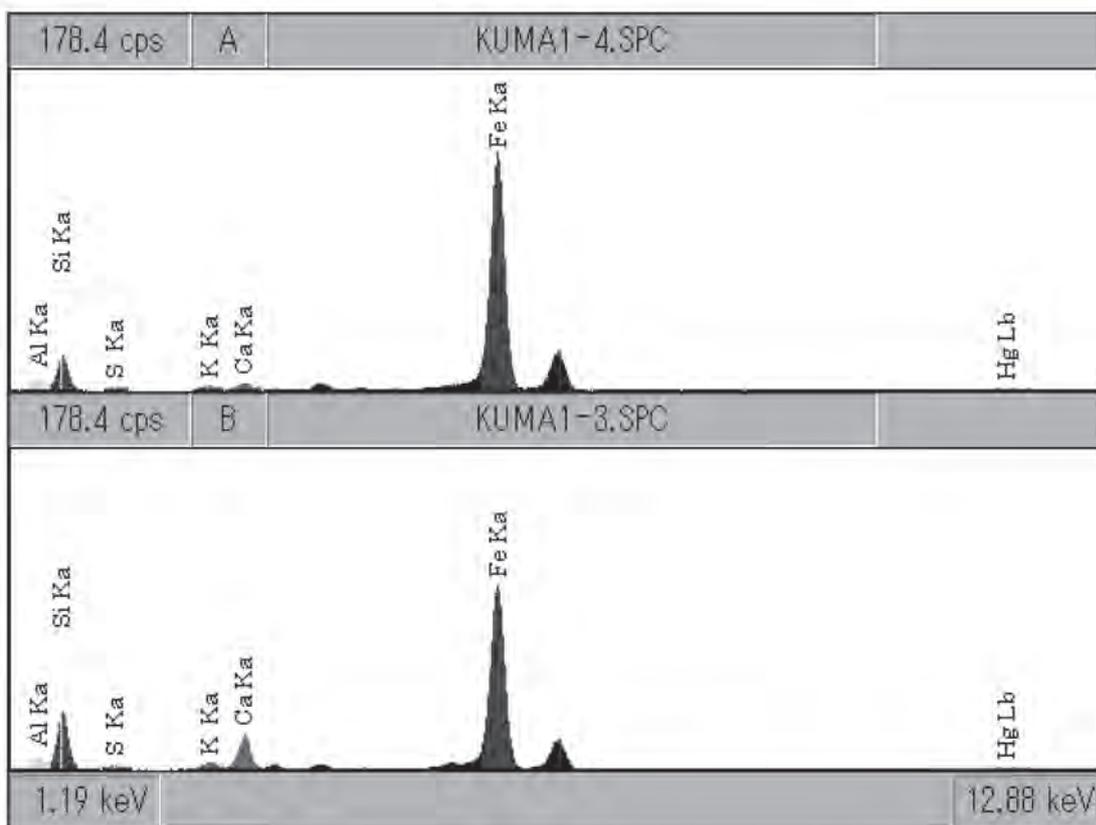


図 3-1 試料 No.1 のスペクトル (上：赤色面、下：石材面)

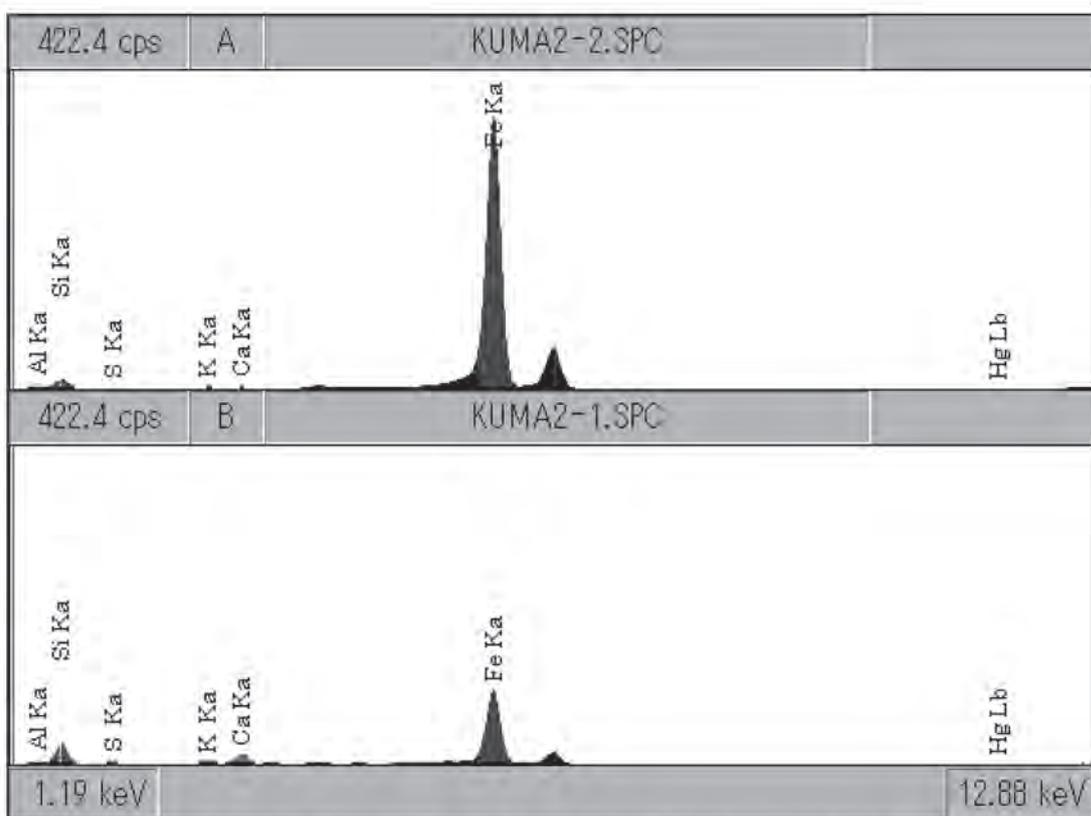


図 3-2 試料 No.2 のスペクトル (上：赤色面、下：石材面)

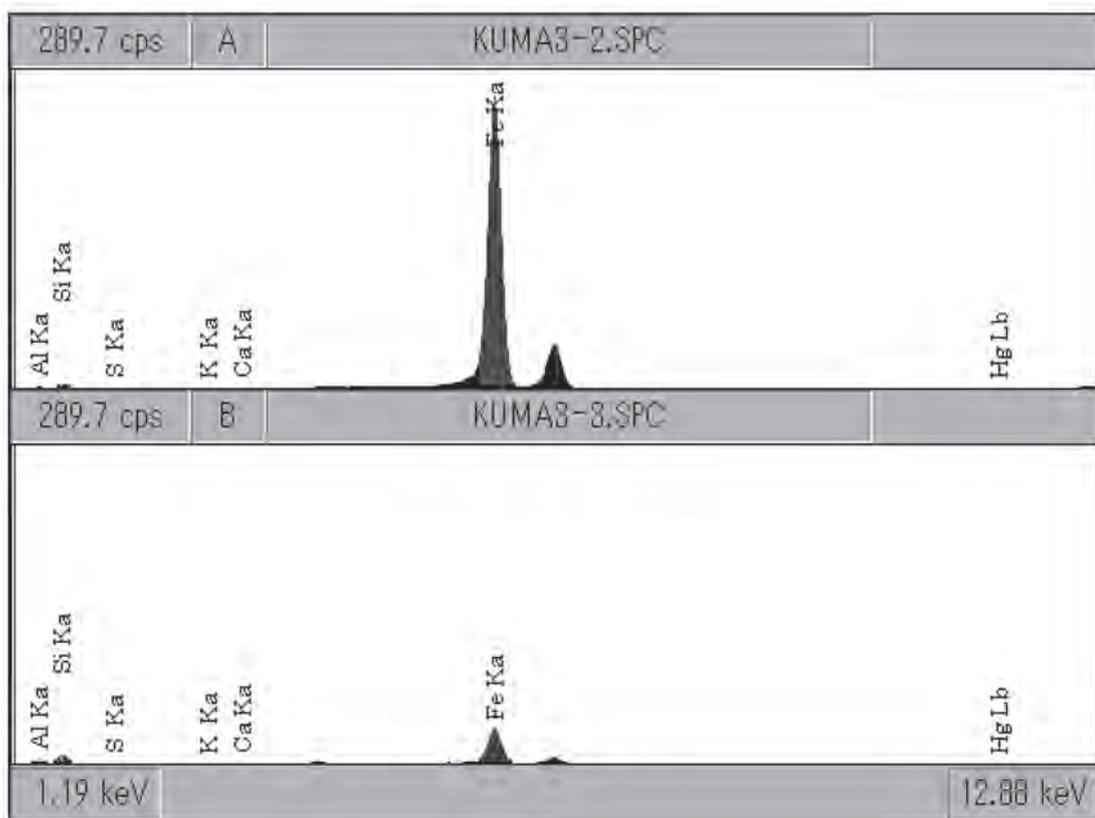


図 3-3 試料 No.3 のスペクトル (上：赤色面、下：石材面)

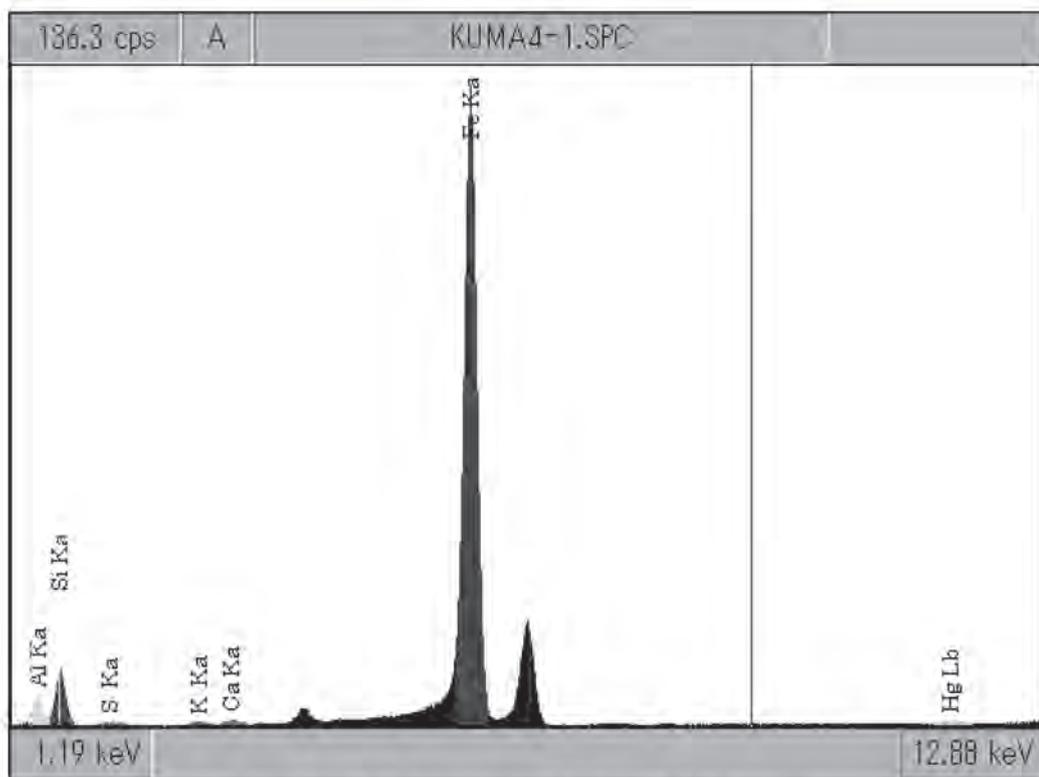


図 3-4 試料 No.4 のスペクトル (赤色顔料)

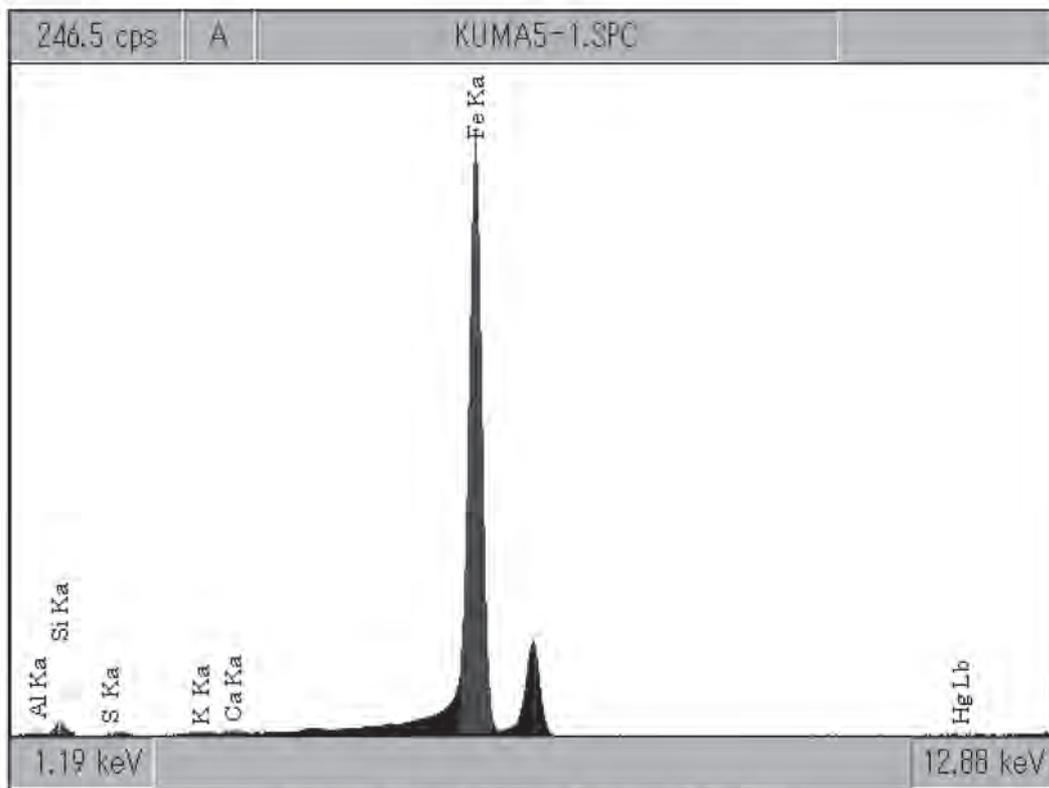


図 3-5 試料 No.5 のスペクトル (赤色顔料)

### 3-4. 赤色顔料の種類

古墳時代の赤色顔料としては、朱（主成分：硫化第二水銀）、ベンガラ（主成分：酸化第二鉄）、鉛丹（四三酸化鉛）の3種類が考えられる。本田(1995)によると、古墳時代には古墳の石室や石棺にはベンガラ、遺骸には朱が赤色顔料として用いられることが一般的であり、また埋葬施設の床面には朱とベンガラを用い、石室や石棺等埋葬施設内面にはベンガラのみを用いるというように、朱とベンガラが使い分けられていたことが指摘されている。

試料 No.1～No.3 について、各元素と珪素との強度比をとると表 3-2 のようになる。赤色面では他の元素よりも鉄の強度比が高い値を示している。一方、朱の主成分である水銀は他の元素と同程度の強度比を示している。また、鉛丹の主成分である鉛は、いずれの試料からも検出されていない。このことから、No.1～No.3 の試料に付着していた赤色顔料は、鉄に由来するベンガラであると考えられる。No.1、No.2 は古墳石室の石材であり、ベンガラを用いているという結果は本田による研究成果と整合している。土坑墓内の No.4、No.5 の赤色顔料も、鉄が高いスペクトルを示していることから、No.3 と同様にベンガラであると考えられる。

表 3-2 赤色面と石材面の強度比の比較

No.1				No.2				No.3			
強度比	赤色面	石材面	赤色面／ 石材面	強度比	赤色面	石材面	赤色面／ 石材面	強度比	赤色面	石材面	赤色面／ 石材面
Al/Si	0.408	0.253	1.6	Al/Si	0.573	0.217	2.6	Al/Si	0.616	0.592	1.0
S/Si	0.083	0.075	1.1	S/Si	0.141	0.099	1.4	S/*Si	0.360	0.078	4.6
K/Si	0.134	0.144	0.9	K/Si	0.171	0.162	1.1	K/Si	0.266	0.064	4.1
Ca/Si	0.229	0.684	0.3	Ca/Si	0.189	0.534	0.4	Ca/Si	0.327	0.088	3.7
<b>Fe/Si</b>	8.989	4.128	<b>2.2</b>	<b>Fe/Si</b>	41.111	4.852	<b>8.5</b>	<b>Fe/Si</b>	185.053	6.715	<b>27.6</b>
Hg/Si	0.139	0.105	1.3	Hg/Si	0.177	0.105	1.7	Hg/Si	0.304	0.257	1.2

#### 4. まとめ

熊本県玉名市に所在する城ヶ辻古墳群で出土した古墳の石室石材 2 試料について、その石質を同定する目的で薄片の顕微鏡観察を実施した。また、石質石材に付着している赤色顔料 2 試料および土坑墓内の土壤中に混在していた赤色顔料 3 試料の組成を調べるために蛍光 X 線分析を実施した。

分析の結果を以下に示す。

##### 古墳石室石材の同定

- ・ 石材は 2 点とも玄武岩質安山岩で、鉱物の化学組成も共通している。したがって、2 つの石材が同一の産地に由来する可能性がある。
- ・ 2 試料とも、マグマが直接固化した溶岩もしくは岩脈と思われる組織を示しており、遺跡の立地条件から考えると、金峰山の玄武岩安山岩溶岩によく似た鉱物組成を示しており、遺跡周辺の金峰山溶岩が石室石材に使用された可能性が考えられる。
- ・ 城ヶ辻城跡発掘調査概要（熊本県教育庁文化課 2003）によれば、7 号墳の石室石材には割石による小口積みが使用されていたと記されているが、金峰山溶岩の一部には板状節理が発達するものもあることから、こうした薄く板状に割れる溶岩が石室石材として用いられたとも考えられる。
- ・ 今回の検討では顕微鏡観察による鉱物構成と組織に関する資料しかないため、詳細な石材産地の推定は不可能である。したがって、今後石材試料の鉱物の化学組成や岩石全体の化学組成を検討して、石材産地の比定をおこなう必要があると考える。

##### 赤色顔料分析

- ・ 石材および土壤中の 5 試料とも、赤色顔料は鉄を主成分とする分析結果が得られた。
- ・ 赤色顔料の種類としては、ベンガラであると考えられる。
- ・ 今回の検討では蛍光 X 線分析による定性分析をおこなったが、主成分（酸化第二鉄）の化合物としての組成やパイプ状ベンガラの可能性を検討するためには、X 線回折や電子顕微鏡による観察などをおこなう必要があると考える。

##### 参考文献

---

- 1) 熊本県教育庁文化課（2003）『城ヶ辻城跡発掘調査概要』.
- 2) 本田光子（1995）『古墳時代の赤色顔料』考古学と自然科学，第 31,32 号(合併号)，日本文化財科学会誌，pp.63-79.



写真 1-1 試料 No.1 赤色顔料付着面



写真 1-2 試料 No.1 裏面

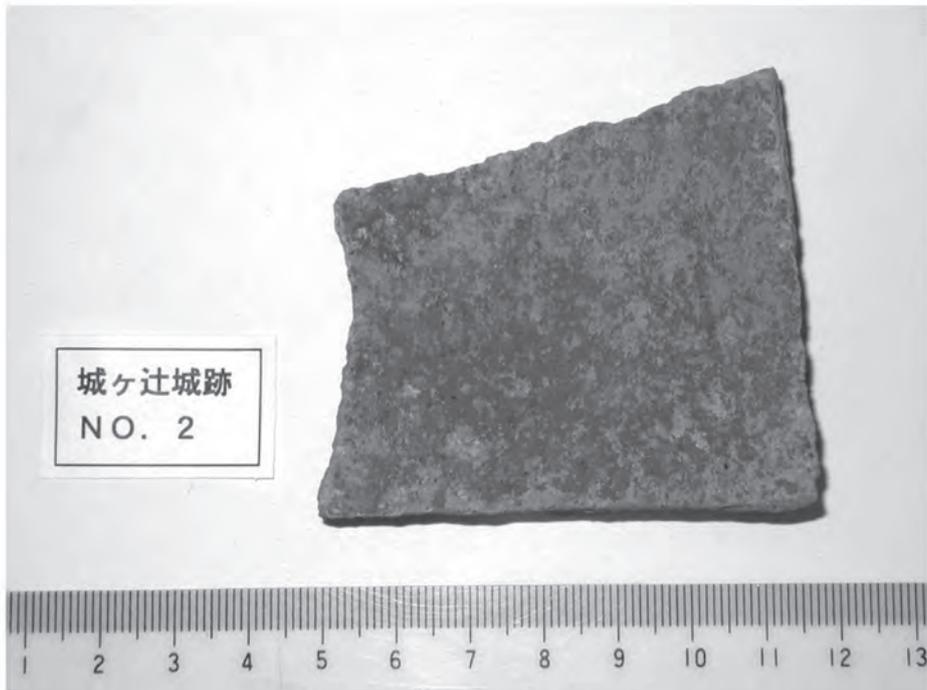


写真 2-1 試料 No.2 赤色顔料付着面



写真 2-2 試料 No.2 裏面

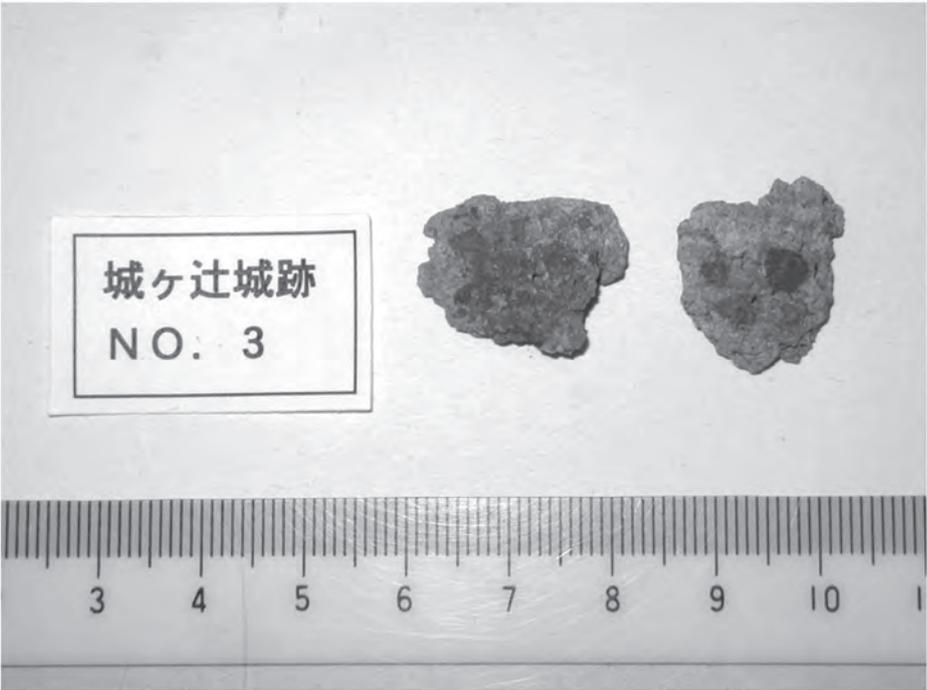


写真 3-1 試料 No.3 赤色顔料付着面



写真 3-2 試料 No.3 裏面

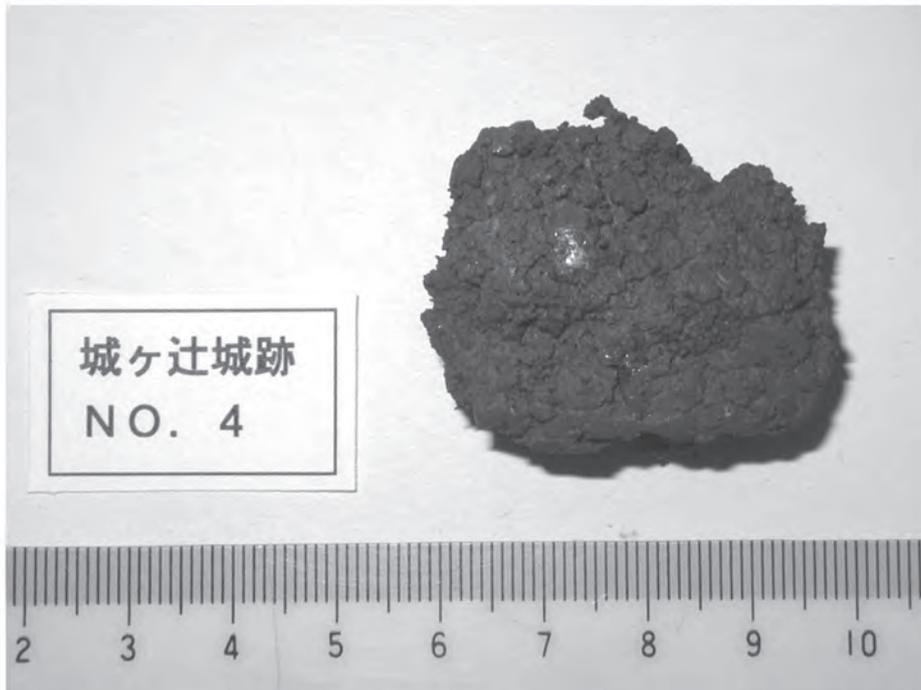


写真4 試料 No.4 土壌中の赤色顔料

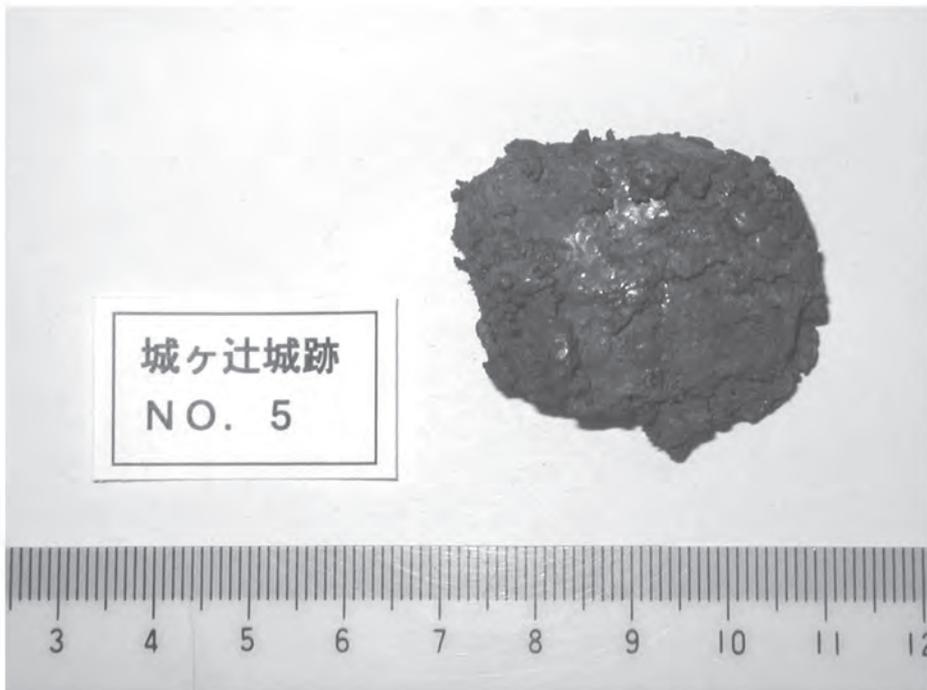
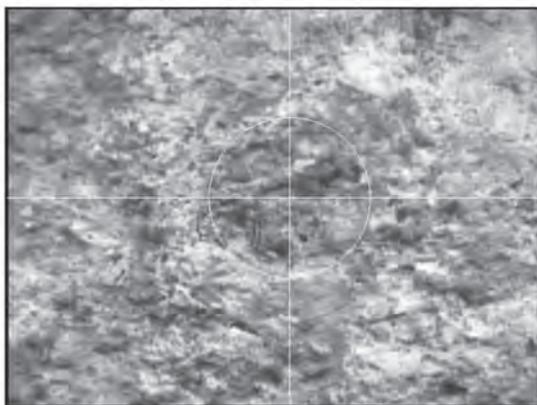


写真5 試料 No.5 土壌中の赤色顔料

[測定条件]

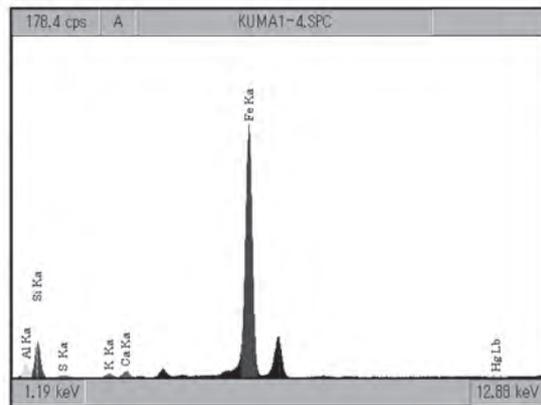
測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	200
有効時間 (秒)	138
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ 1.8 mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	112
コメント	熊本城ヶ辻城跡 試料1 (石室石材) 赤色面

[試料像]



視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm)

[スペクトル]



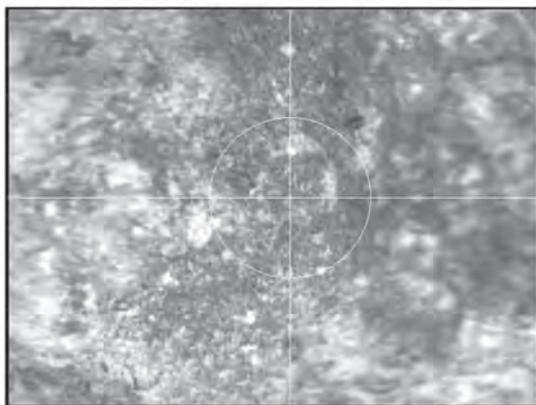
[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI (keV)
13	Al	アルミニウム	K α	54.022	1.36- 1.61
14	Si	ケイ素	K α	132.278	1.61- 1.87
16	S	硫黄	K α	10.979	2.17- 2.44
19	K	カリウム	K α	17.708	3.17- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	30.270	3.54- 3.84
26	Fe	鉄	K α	1189.072	6.23- 6.57
80	Hg	水銀	L β	18.452	11.65-12.06

[測定条件]

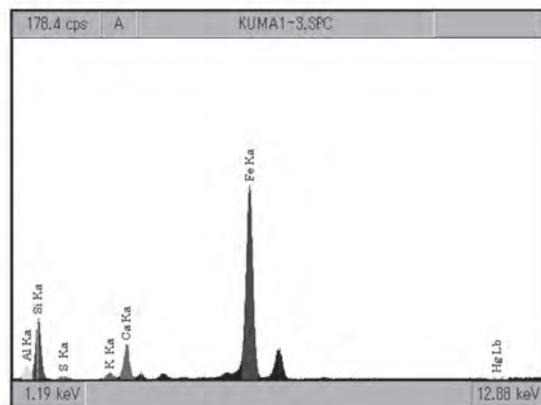
測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	200
有効時間 (秒)	134
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ 1.8 mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	112
コメント	熊本城ヶ辻城跡 試料 1 (石室石材) 削った面

[試料像]



視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm)

[スペクトル]



[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	R O I (keV)
13	Al	アルミニウム	K α	57.016	1.36- 1.61
14	Si	ケイ素	K α	225.415	1.61- 1.87
16	S	硫黄	K α	16.813	2.17- 2.44
19	K	カリウム	K α	32.537	3.17- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	154.084	3.54- 3.84
26	Fe	鉄	K α	930.412	6.23- 6.57
80	Hg	水銀	L β	23.660	11.65-12.06

[測定条件]

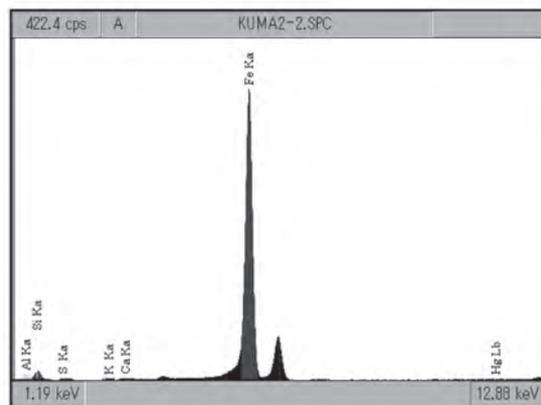
測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	200
有効時間 (秒)	108
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ 1.8 mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	92
コメント	熊本城ヶ辻城跡 試料2 (石室石材) 赤色面

[試料像]



視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm)

[スペクトル]



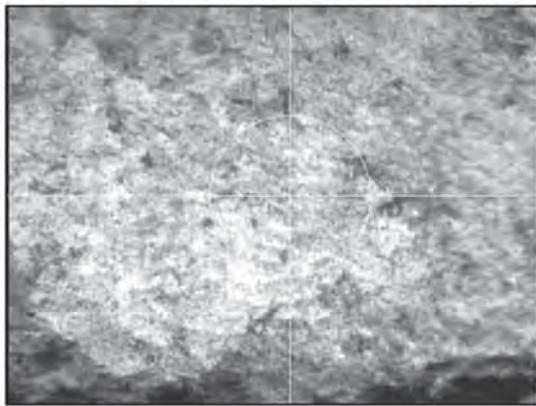
[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI (keV)
13	Al	アルミニウム	K α	46.336	1.36- 1.61
14	Si	ケイ素	K α	80.831	1.61- 1.87
16	S	硫黄	K α	11.425	2.17- 2.44
19	K	カリウム	K α	13.808	3.17- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	15.309	3.54- 3.84
26	Fe	鉄	K α	3323.046	6.23- 6.57
80	Hg	水銀	L β	14.277	11.65-12.06

[測定条件]

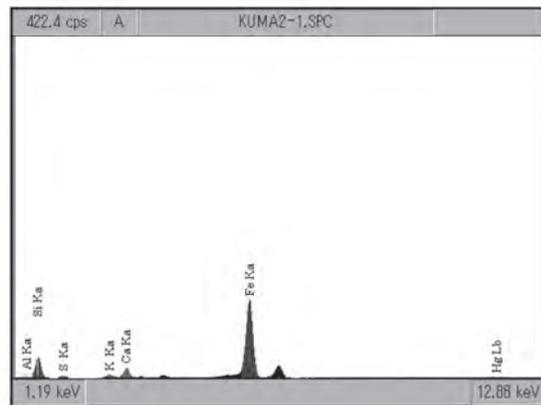
測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	200
有効時間 (秒)	143
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ 1.8 mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	92
コメント	熊本城ヶ辻城跡 試料2 (石室石材) 削った面

[試料像]



視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm)

[スペクトル]



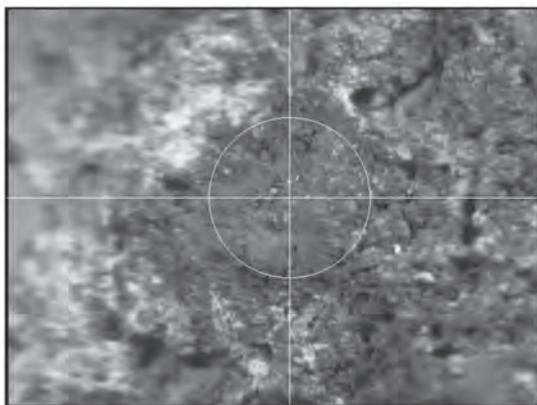
[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	R O I (keV)
13	Al	アルミニウム	K α	39.086	1.36- 1.61
14	Si	ケイ素	K α	180.193	1.61- 1.87
16	S	硫黄	K α	17.767	2.17- 2.44
19	K	カリウム	K α	29.225	3.17- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	96.310	3.54- 3.84
26	Fe	鉄	K α	874.371	6.23- 6.57
80	Hg	水銀	L β	18.883	11.65-12.06

[測定条件]

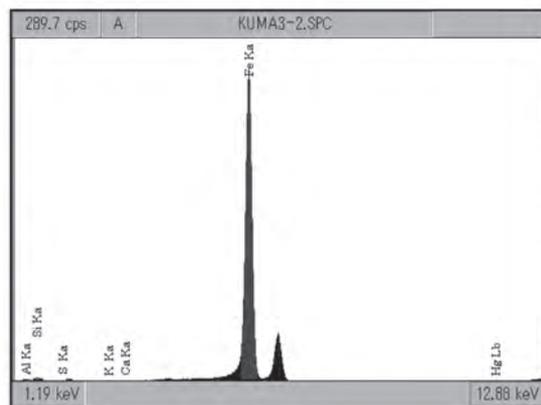
測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	200
有効時間 (秒)	142
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ 1.8 mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	28
コメント	熊本城ヶ辻城跡 試料3 (土混赤色顔料) 赤色部分

[試料像]



視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm)

[スペクトル]



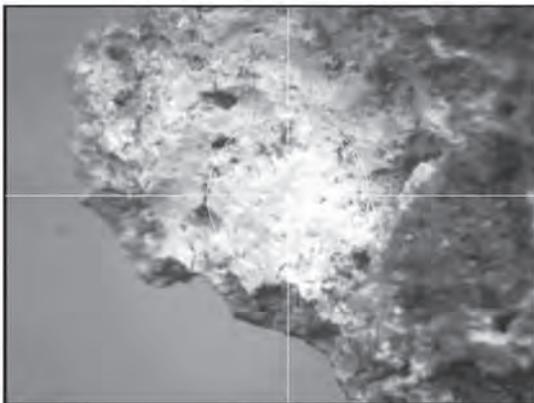
[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI (keV)
13	Al	アルミニウム	K α	7.723	1.36- 1.61
14	Si	ケイ素	K α	12.537	1.61- 1.87
16	S	硫黄	K α	4.517	2.17- 2.44
19	K	カリウム	K α	3.340	3.17- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	4.102	3.54- 3.84
26	Fe	鉄	K α	2320.008	6.23- 6.57
80	Hg	水銀	L β	3.816	11.65-12.06

[測定条件]

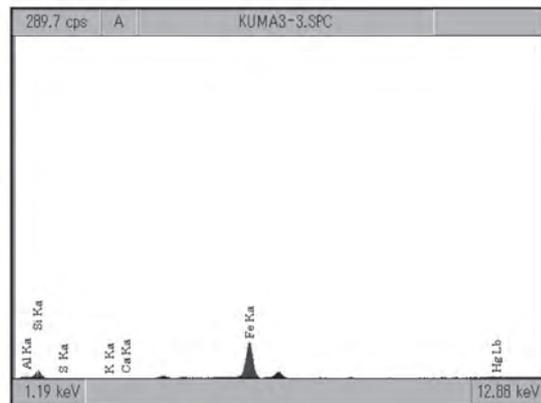
測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	200
有効時間 (秒)	170
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ 1.8 mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	28
コメント	熊本城ヶ辻城跡 試料3 (土混赤色顔料) 削った面

[試料像]



視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm)

[スペクトル]



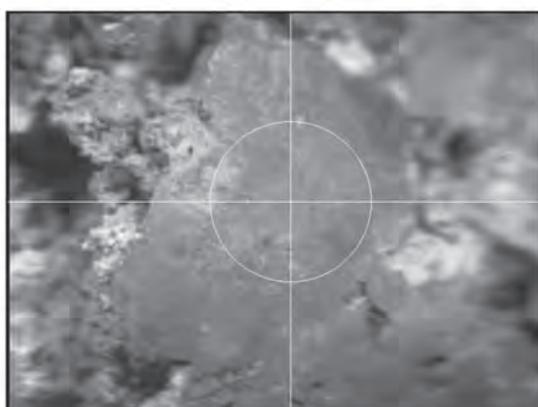
[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	R O I (keV)
13	Al	アルミニウム	K α	23.076	1.36- 1.61
14	Si	ケイ素	K α	38.960	1.61- 1.87
16	S	硫黄	K α	3.032	2.17- 2.44
19	K	カリウム	K α	2.512	3.17- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	3.426	3.54- 3.84
26	Fe	鉄	K α	261.619	6.23- 6.57
80	Hg	水銀	L β	10.030	11.65-12.06

[測定条件]

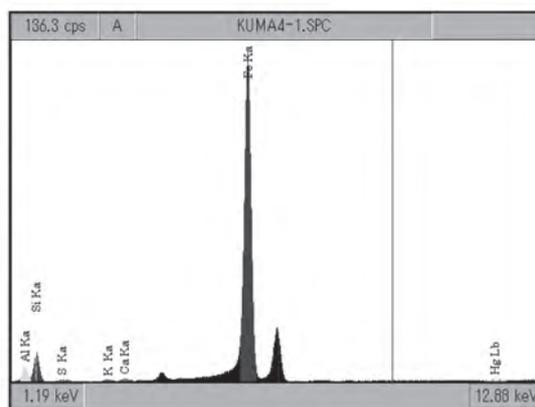
測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	200
有効時間 (秒)	145
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ 1.8 mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	68
コメント	熊本城ヶ辻城跡 試料4 (赤色顔料)

[試料像]



視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm)

[スペクトル]



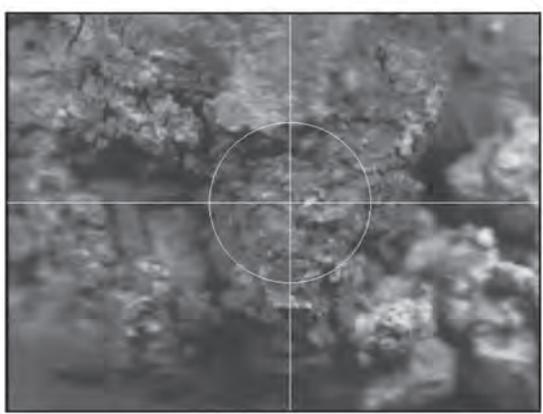
[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI (keV)
13	Al	アルミニウム	K α	44.072	1.36- 1.61
14	Si	ケイ素	K α	80.691	1.61- 1.87
16	S	硫黄	K α	7.492	2.17- 2.44
19	K	カリウム	K α	8.361	3.17- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	11.594	3.54- 3.84
26	Fe	鉄	K α	1174.291	6.23- 6.57
80	Hg	水銀	L β	16.991	11.65-12.06

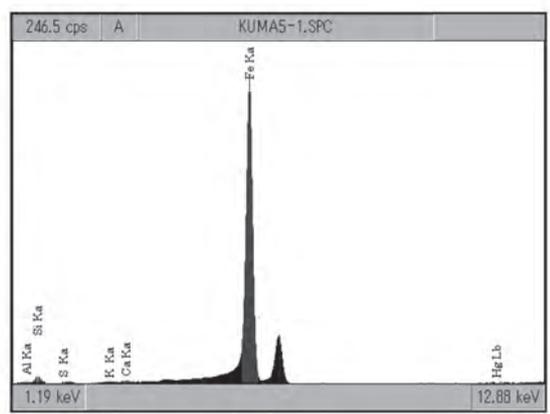
[測定条件]

測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	200
有効時間 (秒)	144
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ 1.8 mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	72
コメント	熊本城ヶ辻城跡 試料5 (赤色顔料)

[試料像]



[スペクトル]



視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm)

[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	R O I (keV)
13	Al	アルミニウム	K α	18.154	1.36- 1.61
14	Si	ケイ素	K α	33.549	1.61- 1.87
16	S	硫黄	K α	4.907	2.17- 2.44
19	K	カリウム	K α	9.599	3.17- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	15.944	3.54- 3.84
26	Fe	鉄	K α	1930.873	6.23- 6.57
80	Hg	水銀	L β	7.237	11.65-12.06

熊本県教育委員会

玉名バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財調査  
に係る自然科学分析業務報告

パリオ・サーヴェイ株式会社

# 玉名バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財調査 に係る自然科学分析業務報告

パリオ・サーヴェイ株式会社

## II. 城ヶ辻古墳群出土金属遺物の蛍光 X 線分析

### 1. 試料

試料は、6号墳から出土した黒銀色の耳環 2点、金色の耳環 1点(装飾品の部品?)、飾金具 1点の計 4点である。なお、飾金具については、地金の部分と緑青が生じている鋳の部分の 2箇所を調査対象とする。

なお、これらの試料の希少性や試料価値、および試料自体の脆弱性を考慮し、協議のうえ学芸員資格を有する当社技師が直接試料の受け渡しと運搬を行った。また受領後は、同技師の管理のもと当社研究所内の耐火金庫内に常時保管し、分析前後の変化に注意して経過観察を行った。なお、返却時も同技師が持参し、全く変質・変形がないことを調査担当者と確認した。

### 2. 分析方法

蛍光 X 線分析はサンプリングが困難な文化財の材質調査に広く用いられている手法であるが、ごく表面層を測定対象としているため、出土遺物表面が風化の影響を受けている場合、遺物本来の化学組成を得ることは難しい場合が多く、本来の化学組成を知るためには風化層を除去しなければならない。ただし、遺物保存の観点から考えれば、外観上の変化を伴わない本分析法は概略の化学組成を知るためには極めて有効な手法となる。

今回の試料では、非破壊を前提とした材質調査を目的とすることから、試料はクリーニング処理や風化層の除去を行わず、そのまま調査に用いる。材質調査に用いた装置は、セイコーインスツルメンツ(株)製エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置(SEA2120L)である。

得られた特性 X 線スペクトルは元素定性を実施した後、ノンスタンダードによる FP 法(ファンダメンタルパラメータ法)により、定量演算を行い、相対含有率(質量%)を算出する。なお、本装置による定量可能元素は $_{11}\text{Na}$  から $_{92}\text{U}$ の範囲にある元素であり、これら範囲外の元素については FP 法による定量演算に利用することが出来ないこと、また半定量的に相対含有率を算出しているが、実際にはどの程度の深さまで X 線が進入しているのか不確実な部分もあり(例えば表面の風化層のみから発生した特性 X 線を検出しているのか、あるいは風化層より内部の新鮮部分の材質も含めた特性 X 線を検出しているのか)、結果の評価には注意する必要がある。今回の調査における測定条件の詳細については、表 3 に示す。

### 3. 結果

蛍光 X 線スペクトルを図 1-2 に示し、結果を表 4 に示す。以下、試料別に分析結果を記載する。

#### (1) 黒銀色耳環((23)S-11 No.1、(24)S-11 No.25) (6号墳関連遺構)

黒銀色の耳環 2点の元素分析結果では、Al(アルミニウム)、Si(ケイ素)、S(硫黄)、Ti(チタン)、Mn(マンガン)、Fe(鉄)、Cu(銅)、Zn(亜鉛)、Br(臭素)、Ag(銀)、Pb(鉛)が検出された。これら検出元素の相対含有率によれば、銀が 800%程度を占めて最も多く、次にアルミニウム、ケイ素が多い傾向にあり、他の元素は少量～微量含まれる程度である。なお、アルミニウムやケイ素は、遺物表面に付着、あるいは錆に取り込まれた土壌鉱物に由来するところも大きいと考えられる。

#### (2) 金色耳環((28)7号墳(ST-01)No.101)

金色の耳環の元素分析結果では、Mn(マンガン)、Fe(鉄)、Cu(銅)、Ag(銀)、Au(金)が検出された。これら検出元素の相対含有率によれば、金が 79.88%と最も多く、次に銀が 18.93%と多い傾向にあり、他の元素は少量～微量含まれる程度である。

#### (3)飾金具(6-97 実 No.43)(6号墳)

飾金具地金の元素分析結果では、Al(アルミニウム)、Si(ケイ素)、Fe(鉄)が検出された。これら検出元素の相対含有率によれば、鉄が 92.39%と最も多く、次にアルミニウム、ケイ素が多い傾向にある。また、鋳の元素分析結果では、Al(アルミニウム)、Si(ケイ素)、Fe(鉄)、Cu(銅)が検出され、銅が 65.26%と際だって多い傾向にある。なお、地金、鋳ともに検出されたアルミニウムやケイ素は、遺物表面に付着、あるいは錆に取り込まれた土壌鉱物に由来するところが大きいと考えられる。

### 4.考察

#### (1)耳環

調査対象とした耳環 3 点は、黒銀色の 2 点が径約 2 mm、金色の 1 点が 1-1.5 mm程度で、いずれも古墳出土の耳環としては細形である。元素分析結果では、(23)S-11 No.1、(24)S-11 No.25 では銀、(28)ST-01 No.101 は金が多く検出されていることより、前者は銀製耳環、後者は金製耳環であることが指摘される。なお、金製耳環における金には銀も比較的多く含まれており、純度としては 18 金程度のものが使用されていると判断される。

ところで、一般的な耳環は銅などを芯材とし、薄板や箔張あるいは鍍金によって表面被覆されていることが多いが、細形耳環の場合には「金薄板積層成形技法」(村上,2003)などの事例もあり、一般的な耳環とは制作技法が異なることが推察される。ただし、耳環表面層の元素分析結果のみでは内部の情報を推し量ることはむずかしく、現状では製作技法などについて言及するには至らない。なお製作技法についてさらに検証を進める場合には、内部芯材に対する同様の調査や電子顕微鏡による端部の詳細な観察等が必要と考える。

#### (2)飾金具

元素分析結果によれば、馬具の破片と考えられる飾金具の材質は鉄製であることが指摘される。なお、緑青が生じていた鋳の部分では多量の銅が検出されており、鋳の材質が銅製である可能性を示唆する。しかし、耳環同様に今回得られた結果はあくまで表面層に関する情報であり、本来的には緑青を除去した上で、鋳の地金自体を直接分析する必要と考える。

#### 引用文献

村上隆,2003,古代日本の金,遺物の保存と調査.クバプロ,131-144.

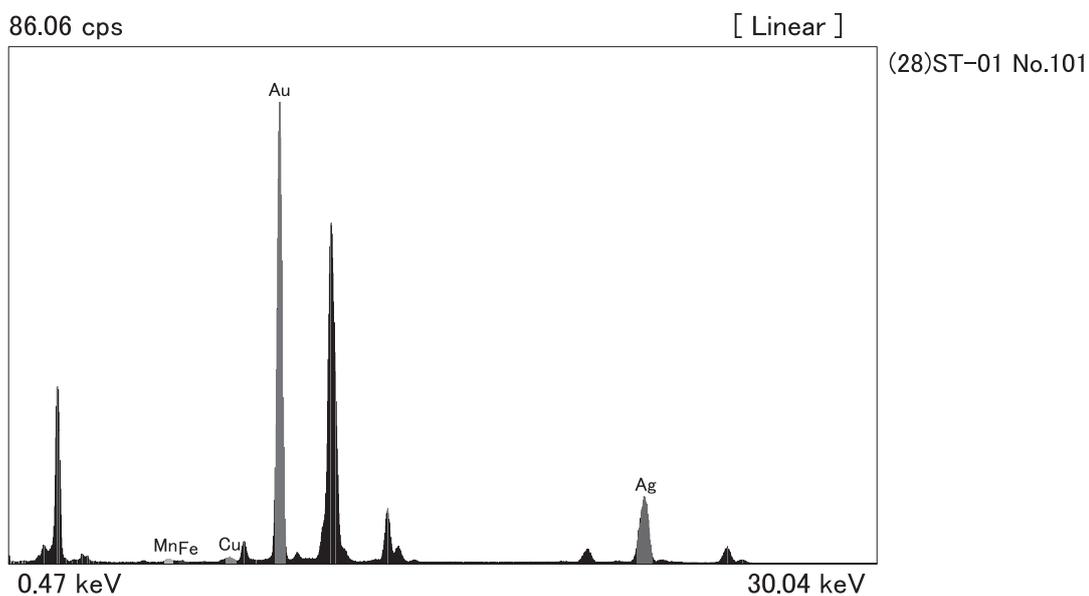
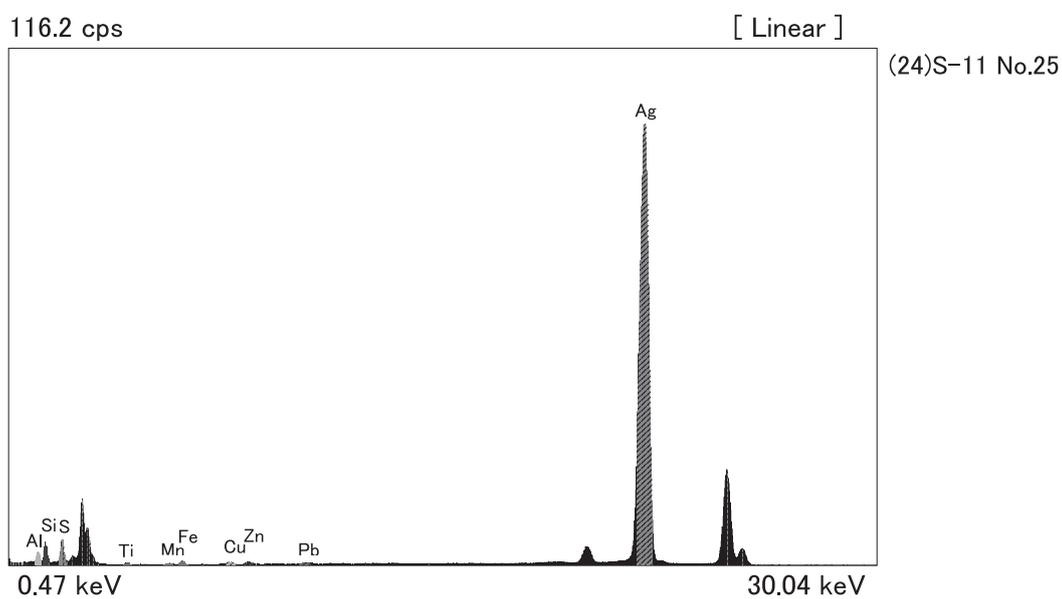
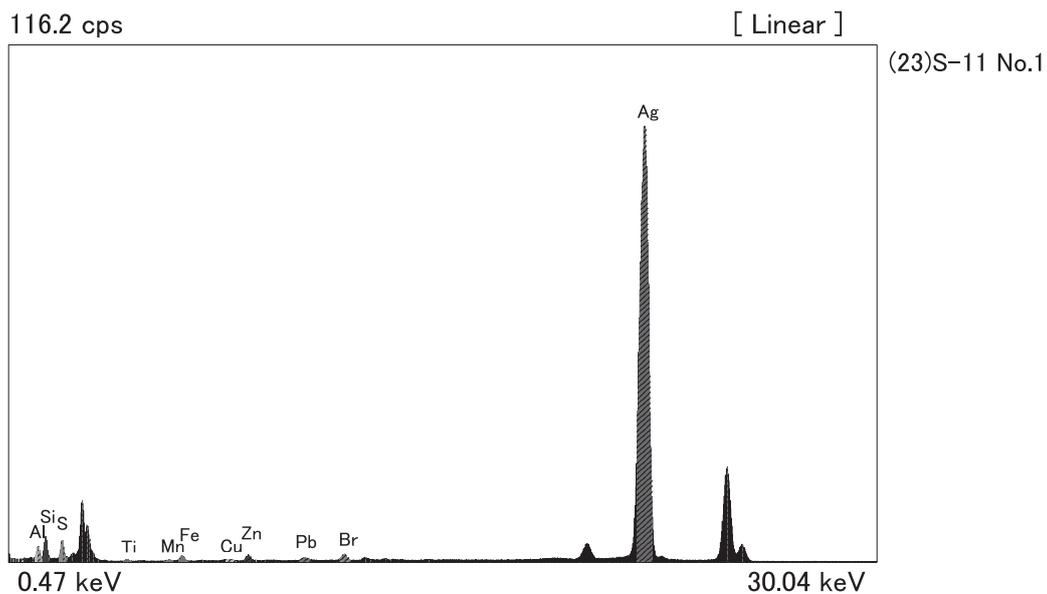


図1. 金属遺物の蛍光X線スペクトル(1)

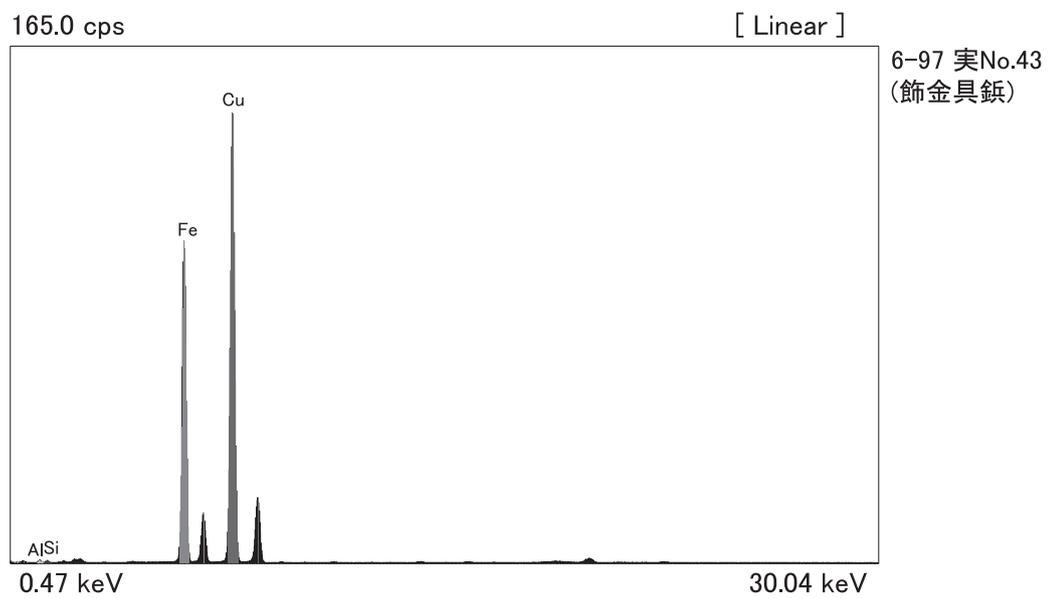
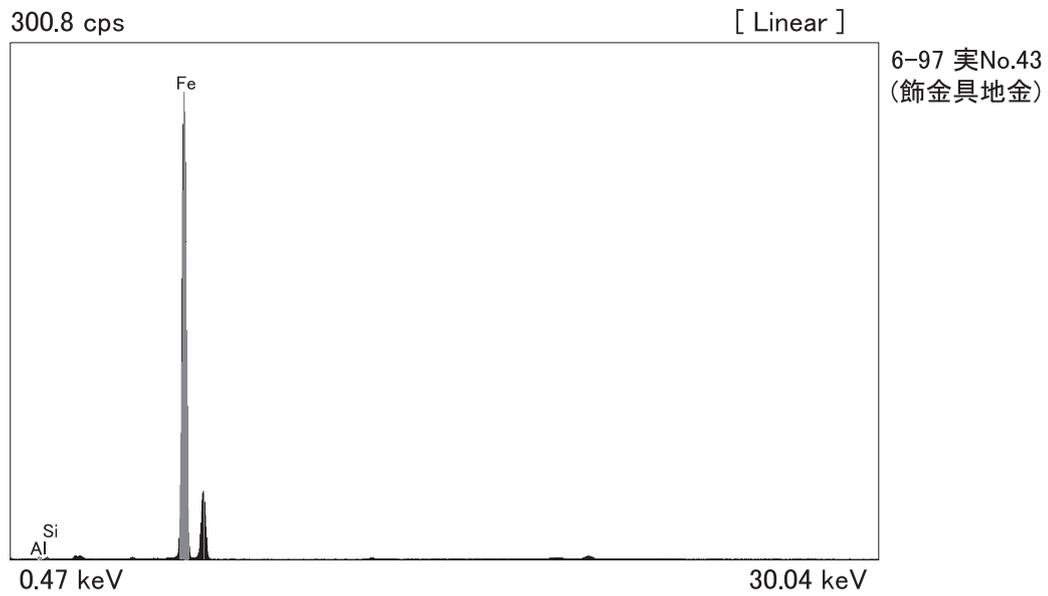


図2. 金属遺物の蛍光X線スペクトル(2)

表1. 測定条件

測定装置	SEA2120L
管球ターゲット元	Rh
コリメータ	φ10.0mm
フィルター	なし
マイラー	OFF
雰囲気	真空
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	自動設定
測定時間(秒)	300

表2. 金属遺物の元素分析結果

元素名\試料名	(23)S-11 No.1		(24)S-11 No.25		(28)ST-01 No.101		6-97 実No.43 (飾金具地金)		6-97 実No.43 (飾金具紙)	
	含有率 (wt%)	積分強度 (cps)	含有率 (wt%)	積分強度 (cps)	含有率 (wt%)	積分強度 (cps)	含有率 (wt%)	積分強度 (cps)	含有率 (wt%)	積分強度 (cps)
Al アルミニウム	9.89	23.661(±0.334)	8.78	20.863(±0.314)	-	-	5.45	7.633(±0.195)	5.52	5.453(±0.159)
Si 珪素	7.5	35.998(±0.412)	6.48	31.573(±0.386)	-	-	2.16	7.030(±0.194)	2.12	4.990(±0.155)
S 硫黄	2.8	32.016(±0.390)	3.27	37.309(±0.421)	-	-	-	-	-	-
Ti チタン	0.52	2.287(±0.138)	0.89	3.828(±0.159)	-	-	-	-	-	-
Mn マンガン	0.24	2.418(±0.145)	0.28	2.718(±0.147)	0.66	5.834(±0.196)	-	-	-	-
Fe 鉄	0.77	10.393(±0.241)	0.49	6.659(±0.200)	0.16	2.616(±0.155)	92.39	2132.709(±3.101)	27.1	809.608(±1.898)
Cu 銅	0.15	3.443(±0.180)	0.23	5.416(±0.198)	0.36	7.919(±0.246)	-	-	65.26	1235.762(±2.342)
Zn 亜鉛	0.36	10.518(±0.258)	0.2	5.892(±0.207)	-	-	-	-	-	-
Br 臭素	0.24	13.961(±0.308)	-	-	-	-	-	-	-	-
Ag 銀	77.19	1599.366(±2.733)	79.21	1627.719(±2.761)	18.93	176.631(±0.902)	-	-	-	-
Au 金	-	-	-	-	79.88	737.830(±1.827)	-	-	-	-
Pb 鉛	0.35	7.216(±0.237)	0.16	3.299(±0.193)	-	-	-	-	-	-



(1)金色耳環  
(28) ST-01 No.101  
(7号墳)



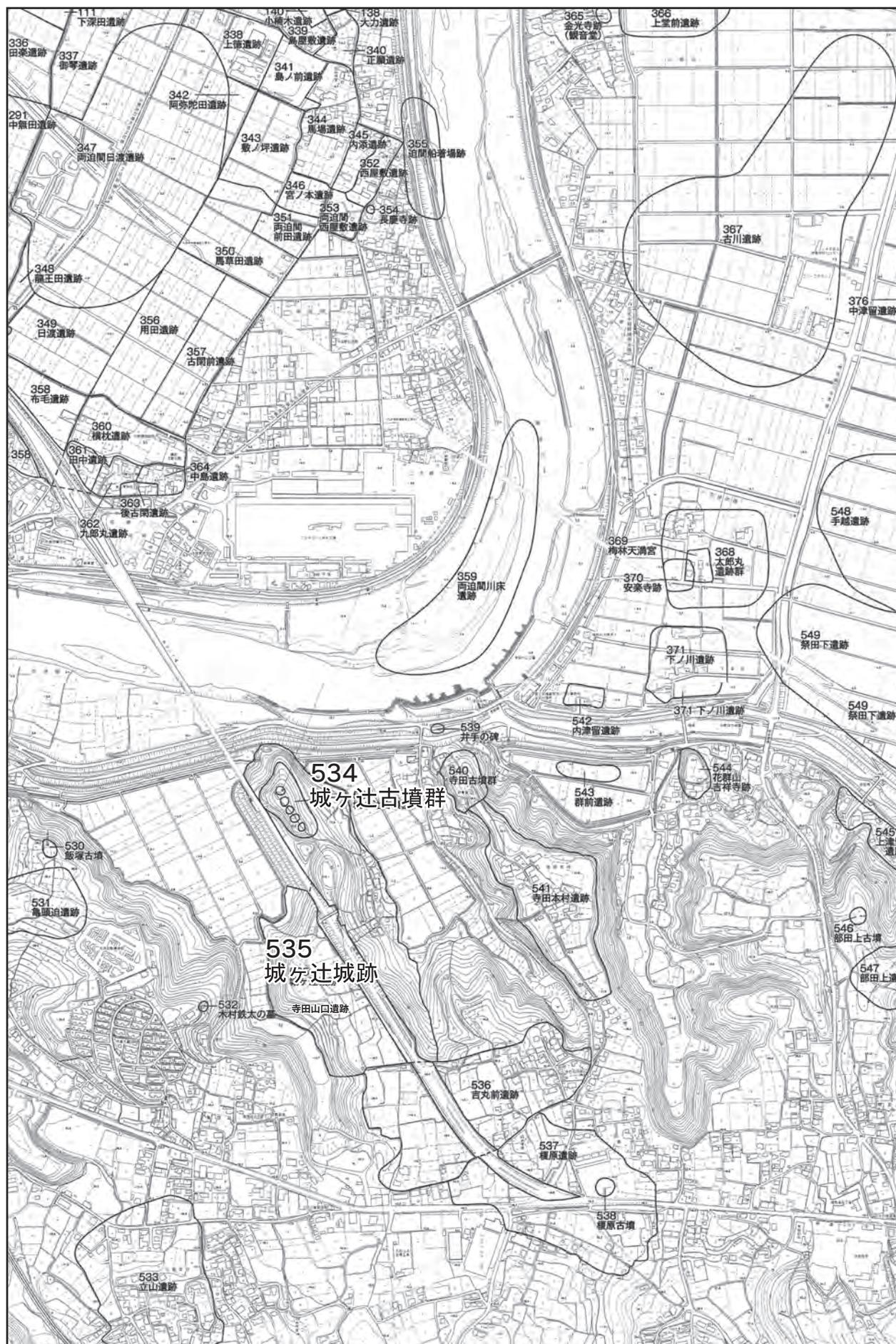
(2)黒銀色耳環  
(23) S-11 No.1 (24) S-11 No.25  
(6号墳)



(3)飾金具(6-97 実No.43)  
(6号墳)

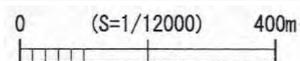
圖 面





第 1 図 周辺遺跡分布図(1/12,000)

※ 『『玉名市遺跡地図』玉名市文化財調査報告第26集 玉名市教育委員会 2011』引用、一部改変

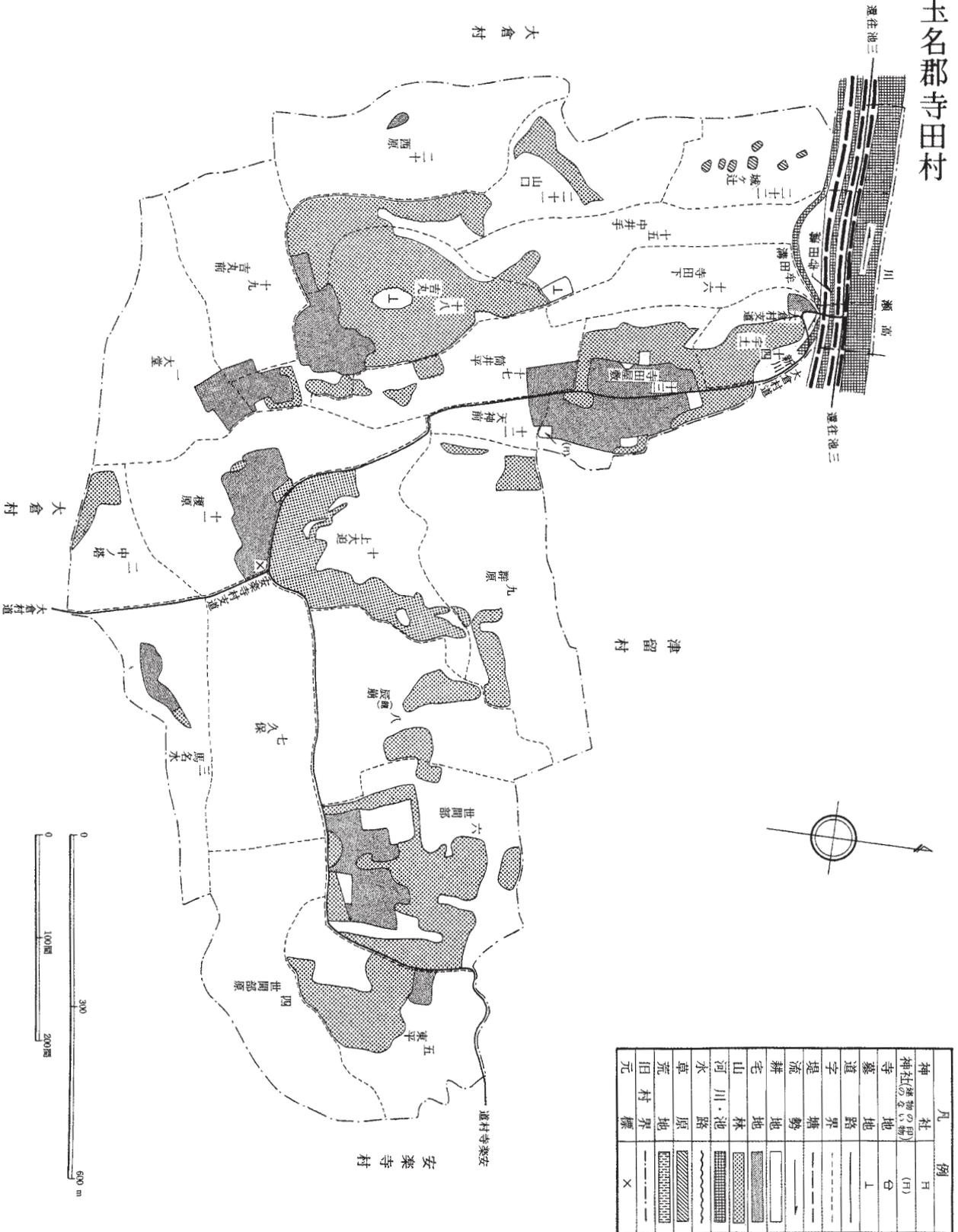


第1図付表 遺跡名一覧表

遺跡番号	名称	種類	所在地大字	小字	時代	備考	
100	中田遺跡	ナカダイセキ	生産	富尾	中田	古代	条里跡
111	下深田遺跡	シモフカダイセキ	生産	玉名	下深田	古代	旧玉名平野菜里跡
138	大力遺跡	ダイリキイセキ	生産	玉名	大力	古代	旧玉名平野菜里跡
140	小楠木遺跡	コクスキイセキ	生産	玉名	小楠木	古代	旧玉名平野菜里跡
263	玉名郡家跡	タマナグンケアト	官衙	立願寺	石丸	古代	上立願寺部落北部、布目瓦多量散布。
278	富尾いたび横穴群	トミノオイタビヨコアナグン	横穴	富尾	西浦	古墳	13基崖下に北面する。
279	大塚葱菰遺跡	オオツカソウハギイセキ	包蔵地	富尾	焼古閑	弥生・古墳・中世	弥生土器・土師器・須恵器片散布。須恵器多数出土。
280	冷水横穴群	ヒヤミスヨコアナグン	横穴	富尾	居終	古墳	冷水台地の北、17基か。
281	冷水塚古墳	ヒヤミスツカコフン	古墳	富尾	冷水	古墳	消滅。舟形石棺出土消失
282	富尾中尾崎遺跡	トミノノナカオザキイセキ	生産	富尾	中尾崎	古代	条里跡
283	富尾平町遺跡	トミノオヒラマチイセキ	生産	富尾	平町	古代	条里跡
284	富尾高津原遺跡	トミノオコオズハライセキ	生産	富尾	高津原	古代	条里跡
285	諏訪後遺跡	スワノウシロイセキ	生産	玉名	諏訪後	古代	旧玉名平野菜里跡
286	井手川遺跡	イデガワイセキ	生産	玉名	井手川	古代	旧玉名平野菜里跡
287	土井ノ内遺跡	ドノウチイセキ	生産	玉名	土井ノ内	古代	旧玉名平野菜里跡
288	栗崎遺跡	クリサキイセキ	生産	玉名	栗崎	古代	旧玉名平野菜里跡
289	東栗崎遺跡	ヒガシクリサキイセキ	生産	玉名	東栗崎	古代	旧玉名平野菜里跡
290	勘取遺跡	カンドリイセキ	生産	玉名	勘取	古代	旧玉名平野菜里跡
291	中無田遺跡	ナカムタイセキ	生産	玉名	中無田	古代	旧玉名平野菜里跡
292	筵打遺跡	ムシロウチイセキ	生産	玉名	筵打	古代	旧玉名平野菜里跡
293	晩次郎遺跡	バンジロウイセキ	生産	玉名	晩次郎	古代	旧玉名平野菜里跡
294	築楽遺跡	チクラクイセキ	生産	両迫間	築楽	古代	旧玉名平野菜里跡
295	油田遺跡	アブラダイセキ	生産	両迫間	油田	古代	旧玉名平野菜里跡
296	柳町遺跡	ヤナギマチイセキ	生産	両迫間	柳町	古代	旧玉名平野菜里跡
297	コウゴ町遺跡	コウゴマチイセキ	生産	河崎	コウゴ町	古代	旧玉名平野菜里跡
298	油出遺跡	ユデイセキ	生産	河崎	油出	古代	旧玉名平野菜里跡
299	河崎柳町遺跡	カワサキヤナギマチイセキ	生産	河崎	柳町	古代	旧玉名平野菜里跡
300	河崎高津原遺跡	カワサキコオツハライセキ	生産	河崎	高津原	古代	旧玉名平野菜里跡
301	河原遺跡	カワハライセキ	生産	河崎	河原	古代	旧玉名平野菜里跡
302	大坪遺跡	オオツボイセキ	生産	河崎	大坪	古代	旧玉名平野菜里跡
303	江畑遺跡	エハタイセキ	生産	河崎	江畑	古代	旧玉名平野菜里跡
304	堂田遺跡	ドウダイセキ	生産	河崎	堂田	古代	旧玉名平野菜里跡
305	曲町遺跡	マガリマチイセキ	生産	河崎	曲町	古代	旧玉名平野菜里跡
306	黒原遺跡	クロハライセキ	生産	河崎	黒原	古代	旧玉名平野菜里跡
307	川原遺跡	カワハライセキ	生産	岩崎	川原	古代	旧玉名平野菜里跡
308	高苗手遺跡	タカナエテイセキ	生産	岩崎	高苗手	古代	旧玉名平野菜里跡
309	上霧町遺跡	カミツルマチイセキ	生産	秋丸	上霧町	古代	旧玉名平野菜里跡
310	友添遺跡	トモゾエイセキ	生産	秋丸	友添	古代	旧玉名平野菜里跡
311	崎田遺跡	サキダイセキ	生産	秋丸	崎田	古代	旧玉名平野菜里跡
312	秋丸ハネ橋	アキマルハネバシ	石造物	秋丸	崎田	近世・近代	
313	金盆山玉飯寺跡	キンボンザンギョクハンジヤト	寺社	秋丸	長畑	近世・近代	河崎八幡神宮寺跡に墓地のみのこる。
314	島遺跡	シマイセキ	生産	秋丸	島	古代	旧玉名平野菜里跡
315	紺町遺跡	コンマチイセキ	生産	岩崎	紺町	古代	旧玉名平野菜里跡
316	六反田遺跡	ロクタンダイセキ	生産	岩崎	六反田	古代	旧玉名平野菜里跡
317	灰島遺跡	ハイジマイセキ	生産	岩崎	灰島	古代	旧玉名平野菜里跡
318	野路本原遺跡	ノジモトハライセキ	包蔵地	岩崎	野路・本原	古代	須恵器・土師器 多量に散布。
319	岩崎原遺跡	イワサキハライセキ	包蔵地	岩崎	塔ノ本	弥生	玉名女子高構内全域、弥生土器多量・住居跡。
320	東岩崎遺跡	ヒガシイワサキイセキ	包蔵地	岩崎	中西	古代	
321	高瀬藩邸跡	タカセハンテイアト	官衙	岩崎	中岩崎	近世・近代	玉名町小・玉名女子高敷地。自明堂跡含む。絵図有り
322	池田遺跡群	イケダイセキグン	包蔵地	岩崎	池田	弥生・古代	弥生土器・大型甕棺。須恵器・土師器。
323	池田支石墓参考地	イケダシセキボサンコウチ	墳墓	岩崎	池田	弥生	安山岩巨石1個
324	(伝)岩崎城主の墓	(デン)イワサキジョウシュノカ	包蔵地	岩崎	池田	中世	城館北部に大自然石
325	池田古墳参考地	イケダコフンサンコウチ	古墳	岩崎	池田・西	古墳	部落東端。円形。天満宮を祀る。
326	岩崎古墳	イワサキコフン	古墳	岩崎	池田・西	古墳	菅原神社神体とする。箱相か。
327	岩崎城跡	イワサキジョウアト	城館	岩崎	池田・西	中世	菅原神社々地。土塁、周濠あり。
328	松尾遺跡	マツオイセキ	包蔵地	立願寺	松尾・焼古閑	縄文・古墳・古代	縄文土器・土師器・須恵器片散布。
329	大塚古墳	オオツカコフン	古墳	立願寺	大塚	古墳	径30m・高さ6m程の大円墳。保存良好。
330	小塚古墳	コツカコフン	古墳	立願寺	大塚	古墳	高さ4m。須恵器・土師器の碗形高杯。前方後円墳。保存良好。
331	松尾原遺跡	マツオハライセキ	包蔵地	立願寺	塔尾・松尾	弥生	大小甕棺15個出土。須式2個確認。
332	立願寺廃寺	リュウガンジヤイジ	寺社	立願寺	塔尾・松尾	古代	布目瓦多量に出土。白鳳期半弁文軒丸瓦出土。
333	下立願寺遺跡群	シモリュウガンジヤイセキグン	包蔵地	立願寺	曲松・西段	弥生・古代・中世	単式甕棺・弥生土器片・布目瓦散布。中世道を含む
334	玉名郡倉跡	タマナグンソウアト	官衙	立願寺	西段	古代	礎石7個配列。布目瓦・焼米・礎石が出土。
335	中世道	チュウセイドウ	包蔵地	立願寺	西段	中世	蓮華院と疋野神社を結ぶ道
336	田楽遺跡	デンラクイセキ	生産	玉名	田楽	古代	旧玉名平野菜里跡
337	御琴遺跡	オコトイセキ	生産	玉名	御琴	古代	旧玉名平野菜里跡
338	上徳遺跡	ジョウトクイセキ	生産	玉名	上徳	古代	旧玉名平野菜里跡
339	島屋敷遺跡	シマヤシキイセキ	生産	玉名	島屋敷	古代	旧玉名平野菜里跡
340	正願遺跡	ショウガンイセキ	生産	玉名	正願	古代	旧玉名平野菜里跡
341	島ノ前遺跡	シマノマエイセキ	生産	玉名	島ノ前	古代	旧玉名平野菜里跡
342	阿弥陀田遺跡	アマダテンイセキ	生産	玉名	阿弥陀田	古代	旧玉名平野菜里跡
343	敷ノ坪遺跡	シキノツボイセキ	生産	玉名	敷ノ坪	古代	旧玉名平野菜里跡
344	馬場遺跡	ハバイセキ	生産	玉名	馬場	古代	旧玉名平野菜里跡
345	内添遺跡	ウチゾエイセキ	生産	玉名	内添	古代	旧玉名平野菜里跡
346	宮ノ本遺跡	ミヤノモトイセキ	生産	玉名	宮ノ本	古代	旧玉名平野菜里跡
347	両迫間日渡遺跡	リョウハザマヒワタシイセキ	包蔵地	玉名・両迫間	阿弥陀田・日渡ほか	弥生・古墳	弥生土器・土師器・須恵器・祭祀遺構あり
348	龍王田遺跡	リュウオウダイセキ	生産	両迫間	龍王田	古代	旧玉名平野菜里跡
349	日渡遺跡	ヒワタシイセキ	生産	両迫間	日渡	古代	旧玉名平野菜里跡
350	馬草田遺跡	マガサダイセキ	生産	両迫間	馬草田	古代	旧玉名平野菜里跡
351	両迫間前田遺跡	リョウハザマエマエダイセキ	生産	両迫間	前田	古代	旧玉名平野菜里跡
352	西屋敷遺跡	ニシヤシキイセキ	生産	両迫間	西屋敷	古代	旧玉名平野菜里跡
353	両迫間西屋敷遺跡	リョウハザマニシヤシキイセキ	包蔵地	両迫間	西屋敷	中世	
354	長慶寺跡	チヨウケイジヤト	寺社	両迫間	上川端	近世	
355	迫間船着場跡	ハザマフナツキバアト	水運	両迫間	上川端	古代	堤防内に埋没
356	用田遺跡	ヨウダイセキ	生産	両迫間	用田	古代	旧玉名平野菜里跡
357	古閑前遺跡	コガマエイセキ	生産	両迫間	古閑前	古代	旧玉名平野菜里跡
358	布毛遺跡	フケイセキ	生産	河崎	布毛	古代	旧玉名平野菜里跡
359	両迫間川床遺跡	リョウハザマカワトコイセキ	包蔵地	両迫間	堤外地	縄文~中世	採集品多数。
360	横枕遺跡	ヨコマクライセキ	生産	河崎	横枕	古代	旧玉名平野菜里跡
361	田中遺跡	タナカイセキ	生産	河崎	田中	古代	旧玉名平野菜里跡
362	九郎丸遺跡	クロウマルイセキ	生産	河崎	九郎丸	古代	旧玉名平野菜里跡
363	後古閑遺跡	アトコガイセキ	生産	河崎	後古閑	古代	旧玉名平野菜里跡

遺跡番号	名称	種類	所在地大字	小字	時代	備考	
364	中島遺跡	ナカシマイセキ	生産	河崎	中島	古代	旧玉名平野条里跡
365	金光寺跡(観音堂)	キンコウジヤト(カンノンドウ)	寺社	川部田	南屋敷	中世	江戸期。堂は明治8年造。明治十年の役の弾痕あり。
366	上堂前遺跡	カミドウノマイセキ	包蔵地	下小田	上堂前ほか	中世	青磁・土師質土器・土器・赤焼の陶器。
367	古川遺跡	フルカワイセキ	包蔵地	下	古川	弥生～中世	弥生土器・陶磁器・瓦質土器・土師質土器・鉄彩陶器・灰彩陶器。
368	太郎丸遺跡群	タロウマルイセキゲン	包蔵地	津留	太郎丸	中世	青磁・白磁・土師器・黒色土器・天目・瓦質土器。
369	梅林天満宮	ハイリンテンマングウ	寺社	津留	太郎丸	中世	承平6年勧請。祭神は菅原道真。
370	安楽寺跡	アンラクジヤト	寺社	津留	高畑	中世	
371	下ノ川遺跡	シモノカワイセキ	包蔵地	津留	下ノ川ほか	中世	
372	無田遺跡	ムタイセキ	包蔵地	川稲田	無田	弥生	弥生土器
376	中津留遺跡	ナカツルイセキ	包蔵地	下	中津留	縄文～中世	晩期土器・弥生中期・後期土器・須恵器・土師器・陶磁器
437	玉名高校校庭遺跡	タマナコウコウコウテイイセキ	包蔵地	中	徳丸	弥生	弥生土器・石斧が出土。
440	南出遺跡群	ミナミデイセキゲン	包蔵地	中	内田	弥生・古代	弥生麦稻出土。玉名高校蔵。
444	ワク	ワク	水制	松木	堤外地	近世・近代	1段(布積)長さ11.6m・幅19.5m・修復あり
472	秋丸眼鏡橋跡	アキマルメガネバシヤト	石造物	秋丸	居屋敷	近世・近代	天保3年築造。樋門の機能あり。現在下流に移築。市指定
473	常安寺	ジョウアンジ	寺社	秋丸	居屋敷	近世・近代	寛文2年7月僧了海が移住し、願継をもって世襲
474	保田木城跡	ホタキジョウアト	城館	高瀬	保田木	中世	保田木神社内。外濠一部残存。高瀬城ともいう。
475	保田木貝塚	ホタキイヅカ	貝塚	高瀬	保田木	縄文	神社境内全域。阿高式中心。
476	保田木神社	ホタキジンジャ	寺社	高瀬	保田木	近世・近代	道君首名を祀る
477	光蓮寺	コウレンジ	寺社	高瀬	保田木	近世・近代	慶長15年僧了圓開基
478	光尊寺	コウソンジ	寺社	高瀬	保田木	近世・近代	慶長15年3月僧了陳開基
479	清源寺跡	セイゲンジヤト	寺社	高瀬	魚屋町	中世	正平2年固山一輩を開山とし建立。
480	蒼園山願行寺	ソウエンザンガンギョウジ	寺社	高瀬	横町	中世	貞和5年開基
481	西光寺	サイコウジ	寺社	高瀬	横町	近世・近代	慶長9年増淨祐開基
482	大覚寺	ダイカクジ	寺社	高瀬	横町	近世・近代	天正年中開基。僧善誉創立
483	永徳寺	エイトクジ	寺社	高瀬	横町	近世・近代	慶長13年に再建。
484	延久寺	エンキウジ	寺社	高瀬	横町	近世・近代	天文7年開基
485	明教寺	ミョウキョウジ	寺社	高瀬	横町	近世・近代	寛文4年3月儒教開基
486	光浄寺	コウジョウジ	寺社	高瀬	本町	近世・近代	慶安3年3月僧祐專開基
487	高瀬本町通遺跡	タカセホンマチトオリイセキ	包蔵地	高瀬	本町	中世	道路3.5mの下層。鎌倉期の遺物大量出土。
488	妙法寺	ミョウホウジ	寺社	高瀬	下町	近世・近代	文明16年3月開基
489	宝成就寺跡	ホウジウジョジヤト	寺社	高瀬	下町	中世	多くの古塔碑・石仏を残す。跡地小学校建つ。
490	宝成就寺古塔碑群・石仏群	ホウジウジョウコトウヒガン・セキブツン	石造物	高瀬	下町	中世	市指定
491	高瀬裏川	タカセウラカワ	水運	高瀬	上沖洲	近世・近代	
492	小川宅裏の石橋	オガワタクウラノイシバシ	石造物	高瀬	上沖洲	近世・近代	石橋
493	小崎橋	オザキバシ	石造物	高瀬	上沖洲	近世・近代	石橋
494	車橋	クルマバシ	石造物	高瀬	上沖洲	近世・近代	石橋
495	土戸橋	ツツトバシ	石造物	高瀬	上沖洲	近世・近代	石橋
496	高瀬目鏡橋	タカセメガネバシ	石造物	高瀬	上沖洲	近世・近代	嘉永元年二重拱橋。町奉行高瀬寿平築造。県指定
497	高瀬川床遺跡	タカセカワトコイセキ	包蔵地	高瀬	堤外地	縄文～中世	縄文前期～弥生後期土器・甕棺・須恵器・土師器・陶磁器
498	長福寺跡	チョウフクジヤト	寺社	高瀬	八日町	中世	
499	高瀬御蔵跡	タカセオクラアト	包蔵地	永徳寺	上出・出口	近世・近代	御米山床跡。高瀬船着場。御米山床新築記念碑。藩営
500	高瀬御茶屋跡	タカセオチャヤアト	包蔵地	永徳寺	上出・出口	近世・近代	
501	大倉山永徳寺跡	オオクラサンエイトクジヤト	寺社	永徳寺	上出・出口	中世	石勝子介が開山。形跡なし。
502	永徳寺川床遺跡	エイトクジカワトコイセキ	包蔵地	永徳寺	堤外地	弥生・中世	甕棺・陶磁器多数。
503	繁根木遺跡群	ハネギイセキゲン	包蔵地	繁根木	堂ノ後	古墳	稲荷山古墳の最下層。弥生土器群あり。
504	潮濠式宝篋印塔	ゴウチャウシキホウキョウイントウ	石造物	繁根木	堂ノ後	近世・近代	旧法務局裏墓地内。文化5年建立。市内3つの1つ。市指定
505	伝左山古墳	デンサヤマコフン	古墳	繁根木	北	古墳	径37mの石室をもつ円墳。墳頂に舟形石棺。出土品多量。市指定
506	繁根木山寿福寺跡	ハネギサンジユフクジヤト	寺社	繁根木	北	中世	天長元年創立加善大徳という。跡地郡役所をおく。
507	稲荷山古墳	イナリヤマコフン	古墳	繁根木	堂ノ後	古墳	八幡宮裏。前方後円墳の封土。朝顔形埴輪。
508	繁根木貝塚	ハネギイヅカ	貝塚	繁根木	宮中	縄文	縄文土器多数。繁根木八幡宮境内
509	繁根木八幡宮	ハネギハチマンギウ	寺社	繁根木	宮中	中世	応和元年(961)に建立。
510	稲荷山薬師堂跡	イナリヤマヤクシドウアト	堂	繁根木	北・堂ノ後	古代	稲荷山古墳内部上。法隆寺系布目瓦大量。
511	補陀落渡海供養塔附石塔群	フタタカトカイヨウツクリセキトウク	石造物	繁根木	北	中世	稲荷山古墳後円部上。永祿11・方圓・善心・道圓。県指定
512	繁根木箱式石棺(繁根木古墳)	ハネギハコシキセツカン(ハネギコフン)	古墳	繁根木	馬場	古墳	八幡宮東。大正初期に方格規矩文鏡を出す。
513	亀甲遺跡群	カメノコウイセキゲン	包蔵地	亀甲	上二畑	中世	
514	肥後同田貫刀鍛冶跡	ヒゴトウダヌキカタナカジヤト	生産	亀甲	上二畑	近世・近代	広範囲に鋳造・羽目埋蔵。刀鍛冶跡。
515	北園丸塚	キタソノマルツカ	墳墓	亀甲	北園	中世	国道208号北入。墓地の一隅楕円状封土
516	ワク	ワク	水制	松木	堤外地	近世・近代	2段(上・下布積)長さ11.9m・幅8m。修復あり。一部欠
517	ワク	ワク	水制	松木	堤外地	近世・近代	2段(上・下布積)長さ13.3m・幅16.5m・修復なし
518	金地山松林寺跡	コンチサンシヨウリンジヤト	寺社	向津留	本村	近世・近代	享保・延享・明和・安永・天明・寛政・文化・天保・明治・昭和・平成
519	松林寺山古墳	ソウリンジヤコフン	古墳	向津留	本村	古墳	大型舟形石棺露出。棺蓋不明。
520	桃田遺跡群	モモダイセキゲン	包蔵地	大倉	大倉	弥生・古墳	弥生土器・土師器・須恵器出土
521	桃田貝塚	モモダイイヅカ	貝塚	大倉	北	縄文	阿高式土器出土。
522	桃田原古墳	モモダハラコフン	古墳	大倉	桃田原	古墳	伝箱式石棺出土。造成時消滅
523	桃田原遺跡	モモダハライセキ	包蔵地	大倉	桃田原	弥生	
524	高田遺跡群	タカダイセキゲン	包蔵地	大倉	高田	中世	
525	高田古墳	タカダコフン	古墳	大倉	高田	古墳	台地山頂。円墳内部不明。出土品一礼部
526	伊倉天神平遺跡	イクラテンジンヒラキイセキ	包蔵地	伊倉北方	天神平	弥生	弥生土器採。採
527	千田船着場跡	センタフナツキバアト	水運	千田川原	堤外地	近世・近代	手永の依転がしが残る。上流側に灰炭あり。
528	ワク	ワク	水制	小島	堤外地	近世・近代	堤防拡張時に埋没。
529	小島城跡	オシマジョウアト	城館	小島	後畑・居屋敷	中世	小島天神前。
530	飯塚古墳	イヅカコフン	古墳	向津留	飯塚	古墳	円墳・保存度良し。
531	亀頭迫遺跡	キムツサコイセキ	包蔵地	向津留	本村・二玉	古墳	弥生後期・土師器。
532	木村鉄太の墓	キムラテツタノハカ	墓	大倉	亀頭迫	近世・近代	日本初世界一周音。安政2年2月5日没。享年34歳
533	立山遺跡	タチヤマイセキ	包蔵地	大倉	本村	弥生	弥生後期・土師器等散布。
534	城ヶ辻古墳群	ジョウガツジコフンゲン	古墳	寺田	城ヶ崎	古墳	I～Vまで。1号箱式石棺・2号円墳・5号丘陵先端。
535	城ヶ辻城跡	ジョウガツジジョウアト	城館	寺田	山口・西原ほか	中世	
536	吉丸前遺跡	ヨシマルマイセキ	包蔵地	寺田	吉丸ほか	中世	菊花文人瓦器多量出土。
537	榎原遺跡	エノキハライセキ	包蔵地	寺田	榎原	縄文～中世	
538	榎原古墳	エノキハラコフン	古墳	寺田	榎原	古墳	
539	井手の碑	イデノヒ	石造物	寺田	宇土	近世・近代	近世末。
540	寺田古墳群	テラダコフンゲン	古墳	寺田	宇土ほか	古墳	I～IV号まで
541	寺田本村遺跡	テラダホンムライセキ	包蔵地	寺田	寺田ほか	弥生・古墳	
542	内津留遺跡	ウチツルイセキ	包蔵地	津留	内津留	縄文～中世	
543	群前遺跡	ムレノマイセキ	包蔵地	津留	群前	弥生～中世	土坑溝。掘立建物。畝状遺構
544	花群山吉祥寺跡	カムロサンキツシヨウジヤト	寺社	津留	堂園	中世	狭い高台上。跡地に毘沙門天を祀る。
545	上津留遺跡	カミツルイセキ	包蔵地	津留	稲田	縄文～中世	付近畑耕作で発見と伝えられる。
546	部田上古墳	ヘタカミコフン	古墳	津留	部田上	古墳	
547	部田上遺跡	ヘタカミイセキ	包蔵地	津留	部田上ほか	縄文	
549	祭田下遺跡	サイデンシタイセキ	包蔵地	津留	祭田下	弥生～古代	弥生前期縄。中世の土師器・須恵器・瓦質土器・瓦・青磁。
635	鶴地遺跡	ツルチイセキ	包蔵地	小島	鶴地	中世	
639	下高田遺跡	シモタカダイセキ	包蔵地	伊倉北方	下高田	古代・中世	

玉名郡寺田村



第 2 図 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群周辺古地図(1/10,000)

引用文献『玉名市史 資料篇1 絵図・地図』玉名市史編集委員会 玉名市 95頁抜粋

## 四 玉名郡村図

18 〱 66 玉名郡村図(玉名市関係旧村図)

玉名郡村図

明治十二(一八七九)年から明治十五年(一八八二)年

熊本県立図書館

二・五・〇二九五、以下(各旧村の目録番号は解説の文中に別表とする)

高瀬町図、以下(玉名市旧村図)

三二×四七cm、以下(各旧村図の法量は解説の文中に別表とする)

「郡村図」は、『熊本県古地図目録』(『熊本県史料集成』所収)の解題、森下功「明治前期地図について」によると、明治初年に編纂された郡村地誌の附図である。地誌の編纂は明治五(一八七二)年の太政官布告によって着手され、ついで明治七年十一月には「村図ハ例則中掲載セスト雖モ便宜ノタメ可成ハ製図致シ、一町六分ノ割ヲ以取調、字地・元標・社寺等記載スヘシ」として、村図と名勝真景図の提出を希望している。次いで編集の業は同八年九月には太政官から修史局の所管に移され、翌年には内務省地理局に移管されて村図の作成が行われた。地図は地誌編集とともに庶務課地誌調掛で測量作成されたが、調掛に熟練者がなく支障が多いため、同十四(一八八一)年には土木課に依頼して作成された。「玉名郡村図」についても、玉名郡図とともに各村図が右のような過程を経て作成されたであろうが、「玉名郡誌」の起稿が明治十二年四月であり、また「玉名郡村誌稿本」の起稿が明治十二(一八七九)年から始まり、明治十五年に定稿が作成された。さらに明治十六年七月の熊本県知事富岡敬明から地理局長宛の進達書案(熊本県立図書館蔵)に「一玉名郡誌一冊、一同郡全図考葉、一同郡村誌五冊、一同郡村図百七拾式葉、一同郡古城跡略図並真景図共拾五葉、右調整候二付、本日通達便より則差出候也」とあって、郡村誌と共に郡図(一枚)、郡村図(一七二葉)を調整して地理局に提出したのである。

これらのことから、掲載の「玉名郡村図」は明治十二年から作成に着手し、明治十五年に完成させた図であるといえよう。しかし今日では「玉名郡図」一葉は残存しておらず、「玉名郡村図」一七二葉のすべてが熊本県立図書館に所蔵されている。玉名市史の関係図の目録番号と法量は、次表の通りである。(表略)

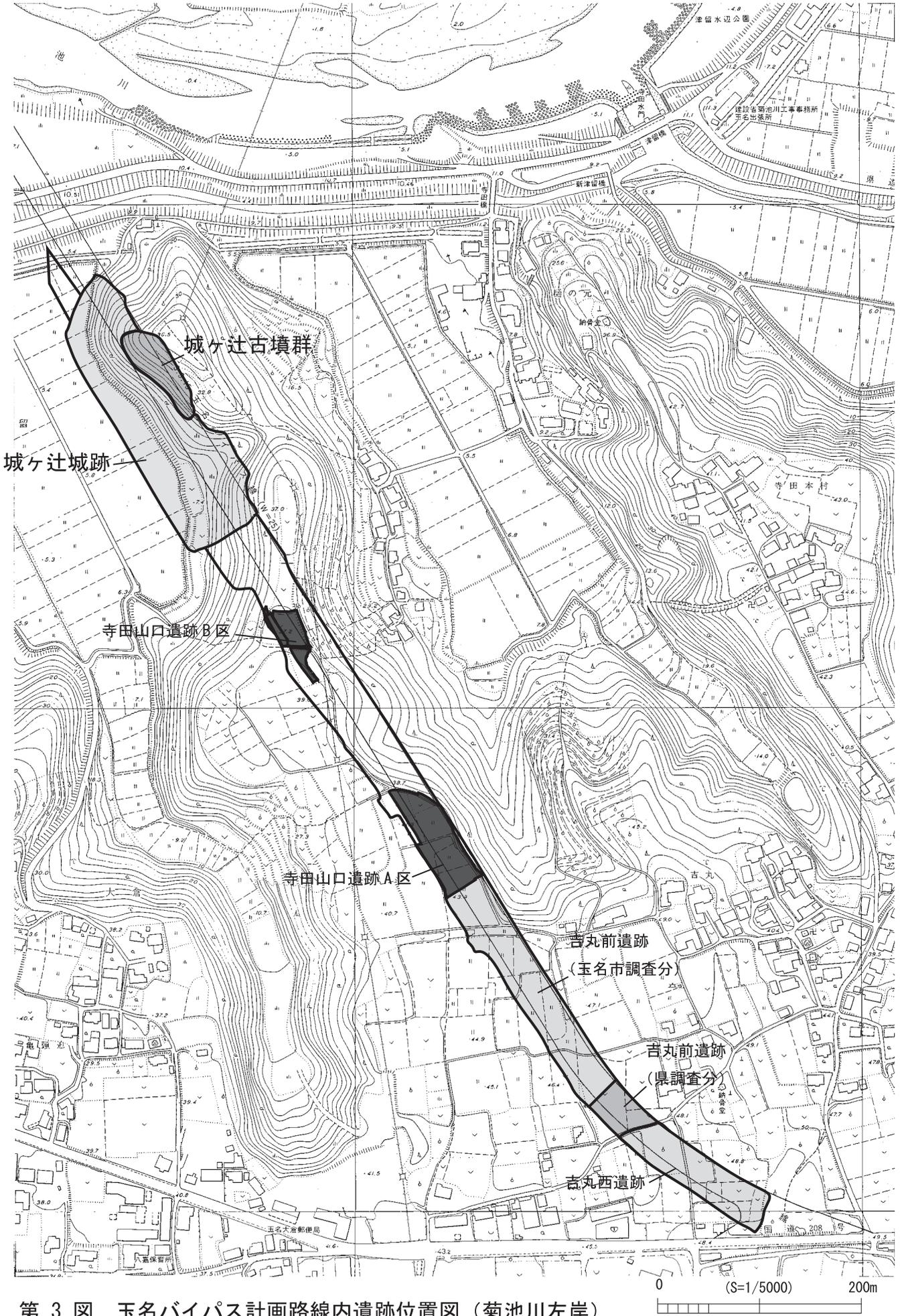
製図の方法については、「玉名郡村誌」の凡例に、「村図ハ例ニヨリ一町六分ノ割ヲ以テ調整スト雖モ、土地広濶ノ小天村外ニ一か村ハ一町三分ノ割ヲ以テ、尤分割ハ該村図ニ記載ス」とあるので、一町を六分の縮尺、即ち六千分に、広い村ニ一か村は一町を三分の縮尺、即ち一万二千分の一の縮小をもって、一間を六尺と表し(玉名市域では山田村・石貫村・三津川村)、タテ三二×四七cmの用紙を多く使用して描図した。そしてその村図内に、字名と字境、社地、寺地、墓地、耕地、山林・原野、堤塘、道路、河溝、水路、堀を彩色して区分(河溝、水路、堀は水として同一色)し、また×をもつて村の元標の位置を示すようにして作図されているので、明治初期の当時の村の姿の概観を知ることが出来る。それらの各村々の項目内容については、『郡村誌』(『玉名市史 資料篇2 地誌』所収)に記載されているので、両者を併用すると、なおさら明確に村の姿が判明する。なお本『玉名市史 資料篇1 絵図・地図』には、玉名市関係の旧村図を掲載するとともに、その村図のトレース版をも掲載した。トレース版の作成方法は各村図の凡例を参照していただきたい。また下村、三津川村、石貫村、築地村の四か村については、小字名を明確にする意味で部分的に拡大した図版とした。

(森山恒雄)

引用文献『玉名市史 資料篇1 絵図・地図』

玉名市史編集委員会 玉名市

203・204頁 抜粋



第 3 図 玉名バイパス計画路線内遺跡位置図 (菊池川左岸)

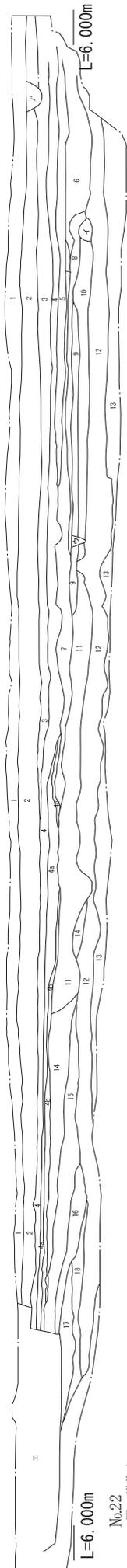
平成14年度 城ヶ辻城跡全体図  
S=1:1,000



第 4 図 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群(トレンチ位置)全体図

### トレンチNo.22

L=7.500m



No.22

- 1層；耕作土
- 2層；暗褐色土(10YR 3/3)しまり良い。小礫粒を全体に含む。
- 3層；黒褐色土(10YR 2/2)しまり良い。土器粒や小礫粒を全体に含む。
- 4層；暗褐色粘質土(10YR 2/3)粘質強い。軽石の粒を含む。
- 4a層；暗褐色土(10YR 4/4)4層の間の層
- 軽石の風化土層(軽石の塊を含む)

- 5層；暗褐色粘質土(10YR 3/3)粘質強い。軽石・小礫を含む。
- 6層；暗褐色粘土(10YR 3/4)ゆるい粘土。小礫を部分的に含む。
- 7層；にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)粘質弱い。小礫を部分的に含む。軽石の粒も含む。
- 8層；暗褐色粘質土(10YR 3/4)粘質はやや強い。軽石・スミの塊を含む。

- 9層；暗褐色粘質土(10YR 3/3)粘質強い。軽石・スミ粒を含む。
- 10層；黒褐色粘質土(10YR 3/2)粘質は非常に強い。軽石を含む。
- 11層；褐色粘質土(10YR 4/3)黒褐色粘土塊を部分的に含む。軽石粒・スミ粒・軽石土塊を含む。
- 12層；灰黄褐色粘質砂(10YR 4/2)粘質は強い。粗い砂が全体的に混じる。鉄分を柱状に含む。

- 13層；暗灰黄色粘質砂(2.5Y 5/2)粘質強い。粗い砂を含む。鉄分を柱状に含む。
- 14層；暗褐色土(10YR 3/4)良くしまる。鉄分の粒・軽石粒を含む。
- 15層；にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)粘質弱い。部分的に粘土を含む。鉄分塊・軽石塊を含む。
- 16層；褐色粘質砂(10YR 4/4)粘土を部分的に含む。スミ塊・鉄分粒・粗い砂を含む。

- 17層；にぶい黄褐色土(10YR 4/3)非常にしまり良い。軽石・マンガン・小礫を含む。
- 18層；暗褐色砂礫(10YR 3/3)粗質あり。小礫・鉄分・軽石を含む。
- ア；暗褐色土(7.5YR 3/3)良くしまっている。何らかの掘り込みか、遺物なし。
- イ；黒褐色土(10YR 2/3)粘土の塊。
- ウ；樹痕
- エ；耕作時の擾乱と思われる。

### トレンチNo.56

L=15.300m

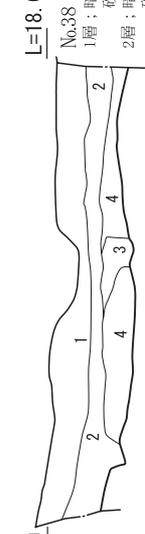


No.56

- 1層；腐養土(暗褐色土(10YR 3/3))
- 2層；黒褐色土(10YR 3/2)しまりなし。砂礫・軽石の粒・スミ粒をわずかに含む。
- 3層；灰黄褐色粘質土(10YR 4/2)粘質は弱い。軽石・砂礫・鉄分の粒を含む。

### トレンチNo.38

L=18.000m

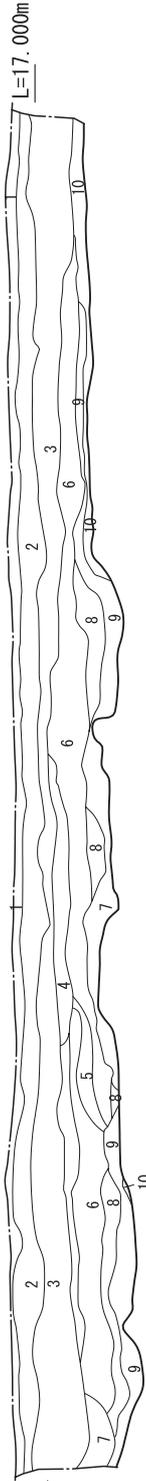


No.38

- 1層；暗褐色土(10YR 3/3)しまりなし。砂礫・スミ粒を含む。
- 2層；暗褐色土(10YR 3/2)しまりなし。砂礫・軽石・土器片を含む。
- 3層；黒褐色粘質土(10YR 3/1)粘質弱い。軽石・スミ粒・土器片を含む。
- 4層；灰黄褐色粘質土(10YR 4/2)しまりなし。軽石・砂礫を含む。

### トレンチNo.32

L=17.000m



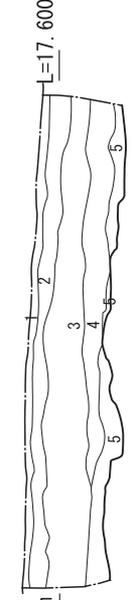
No.32

- 1層；耕作土(10YR 3/2)
- 2層；暗褐色土(10YR 3/3)しまりなし。砂礫・土器片を含む。
- 3層；灰黄褐色粘質土(10YR 4/2)粘質は弱い。軽石・砂礫・スミ粒を含む。
- 4層；黒褐色粘質土(10YR 3/2)しまりよりはよく、粘質は弱い。軽石・土器片・小礫を含む。
- 5層；にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)粘質は強い。白黄褐色粘土ブロック・砂礫を含む。

- 6層；白黄褐色粘質砂層(10YR 5/2)粘質は強い。鉄分を筋状に含む。軽石も含む。
- 7層；黒褐色粘質土(10YR 3/2)粘質は強く、しまりがよい。土器片・小礫を含む。
- 8層；褐色粘質粘質土(10YR 4/4)粘質は強い。鉄分・砂礫を含む。
- 9層；灰黄褐色粘質砂層(10YR 4/2)粘質は強い。軽石・砂礫を多く含む。
- 10層；暗灰黄色粘質土(2.5Y 4/2)黄褐色粘土ブロック混。軽石・砂礫を含む。

### トレンチNo.40

L=17.600m



No.40

- 1層；腐養土(黒褐色土(10YR 3/2))
- 2層；にぶい黄褐色土(10YR 4/3)しまりなし。砂礫を含む。
- 3層；灰黄褐色土(10YR 4/2)しまりなし。砂礫・軽石粒を含む。
- 4層；黄褐色粘質土(10YR 4/3)粘質は弱い。砂礫・軽石の粒・土器片を含む。
- 5層；暗灰黄色粘質砂層(2.5Y 4/2)粘質は弱い。軽石・小礫・鉄分の粒を含む。

### トレンチNo.39

L=14.000m



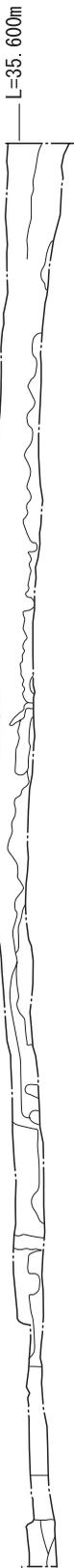
No.39

- 1層；腐養土(黒褐色土(10YR 3/2))
- 2層；にぶい黄褐色土(10YR 4/3)しまりなし。砂礫・軽石・土器片を含む。
- 3層；灰黄褐色粘質土(10YR 4/2)良くしまる。一部砂質土。黄褐色粘土・土器片・砂礫を含む。
- 4層；黒褐色粘質土(10YR 3/2)しまりあり。砂礫・鉄分の粒をわずかに含む。



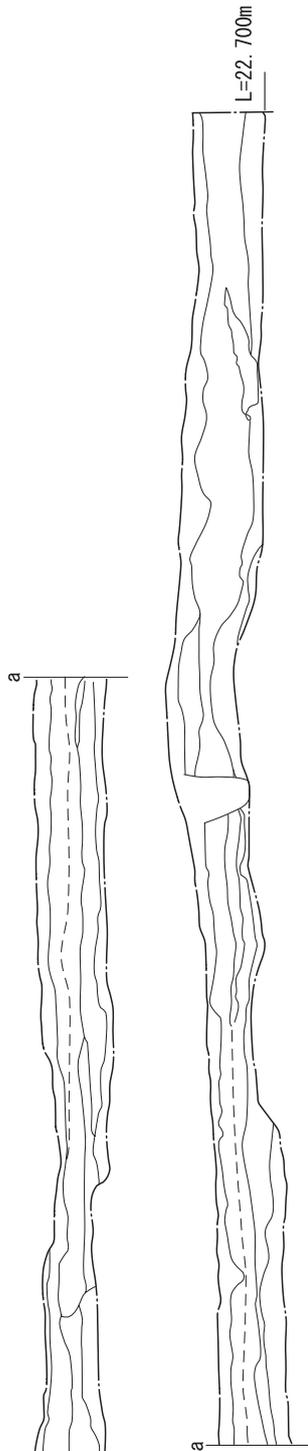
トレンチNo.28

L=35.600m



トレンチNo.27

L=22.700m



トレンチNo.36

L=10.000m



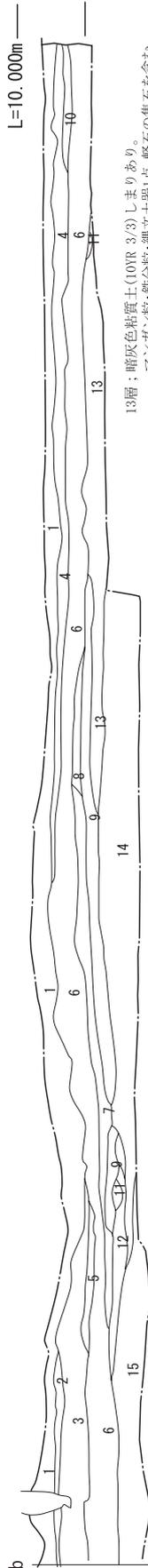
No.36-A・B

- 1層：腐葉土(暗褐色土10YR 3/3)
- 2層：褐色土(10YR 4/4)よくしまる。鉄分層である。
- 3層：暗褐色粘質土(10YR 3/4)粘質は弱い。
- 4層：黄灰色粘質土(2.5Y 4/1)粘質は弱い。

- 5層：黄褐色粘質土(10YR 4/3)非常によくしまり、粘質は弱い。
- 6層：灰色砂質粘質土(5Y 4/1)粘質は弱い。
- 7層：暗褐色粘質土(7.5YR 3/3)よくしまる。
- 8層：暗褐色粘質土(10YR 3/4)よくしまる。

- 9層：黒褐色粘質土(10YR 3/2)よくしまり、粘質は強い。
- 10層：暗灰色砂質粘質土(2.5Y 4/2)粘質は強くない。
- 11層：黒褐色粘質土(10YR 2/3)鉄分を部分的に含む。
- 12層：暗褐色粘質土(10YR 3/3)よくしまる。

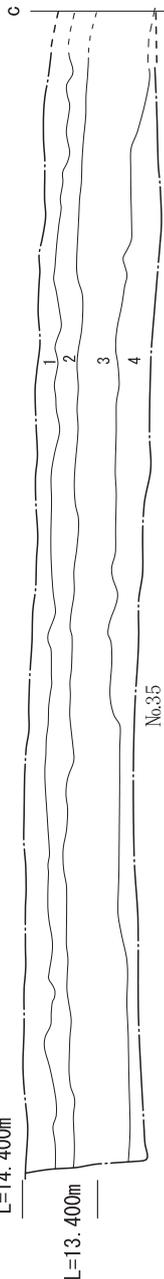
b



- 13層：暗灰色粘質土(10YR 3/3)しまりあり。
- 14層：黒褐色粘質土(10YR 3/1)しまりあり。
- 15層：黒褐色粘質土(7.5YR 3/2)非常によくしまる。

トレンチNo.35

L=14.400m



No.35

- 1層：腐葉土(黒褐色土10YR 3/2)
- 2層：暗褐色土(10YR 3/3)しまりなし。
- 3層：黒褐色粘質土(10YR 3/2)粘質は強い。
- 4層：黄褐色粘質土(10YR 4/3)よくしまる。



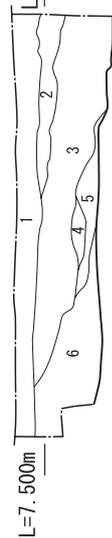
1/100

第6図 トレンチNo.28 - No.27 - No.36 - No.35 断面図



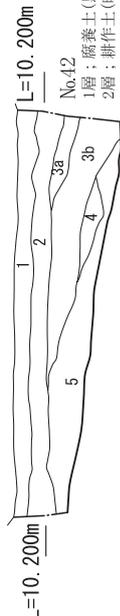
トレンチNo.41

No.41  
 1層；耕作土(暗褐色土10YR 3/3)  
 2層；暗褐色粘質土(10YR 3/3)粘質は弱いが含まりあり。  
 土器片を含む。  
 3層；暗褐色粘質土(7.5YR 3/3)粘質は弱いが非常に多く含まれている。砂礫を含む。  
 4層；暗褐色粘質土(10YR 4/4)粘質は弱いが含まりあり。  
 土器片を含む。  
 5層；暗褐色粘質土(7.5YR 3/4)含まりあり。  
 土器片を全体に含み、脛石の粒をわずかに含む。  
 6層；褐色粘質土(7.5YR 4/6)含まりあり。  
 部分的に砂礫層が帯状に入る。



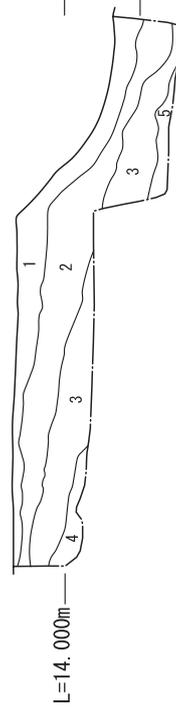
トレンチNo.42

No.42  
 1層；腐葉土(黒褐色土10YR 3/2)  
 2層；耕作土(暗褐色土10YR 3/3)  
 3a層；にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)よくしまる。  
 砂礫・スミ粒・スミの塊を含む。  
 3b層；褐色粘土層(7.5YR 4/3)  
 4層；灰褐色粘土層(7.5YR 4/2)黄褐色粘土を部分的に含む。スミ粒を含む。  
 5層；黒褐色粘土層(10YR 3/2)白黄色粘土ブロックを全体に含む。  
 スミ粒・鉄分を含む。



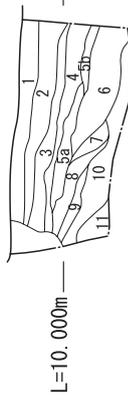
トレンチNo.37-A

No.37-A  
 1層；黒褐色土(2.5Y 3/2)しまりなし。  
 2層；黒褐色土(2.5Y 2/3)しまりあり。  
 脛石粒・スミ粒・小礫・土器片を含む。  
 3層；黒褐色土(10YR 3/2)しまりあり。  
 脛石粒・スミ粒・小礫・土器片を含む。  
 4層；黒褐色粘質土(10YR 3/2)脛石・砂礫を含む。  
 5層；灰黄褐色粘質砂層(10YR 4/2)しまりなし。  
 脛石・鉄分の粒を含む。



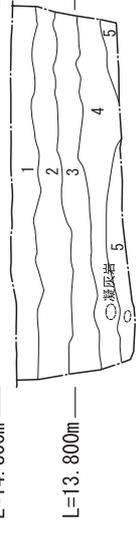
トレンチNo.37-B

No.37-B  
 1層；腐葉土(黒褐色土10YR 3/2)  
 2層；耕作土(暗褐色土10YR 3/3)  
 3層；黒褐色粘質土(10YR 3/2)粘質は弱い。  
 砂礫・鉄分の粒・土器片を含む。  
 4層；褐色粘土層(7.5YR 4/3)  
 5a層；黒褐色粘質土(10YR 3/2)しまりあり。  
 わずかに砂質部分あり。  
 土器片・脛石粒を全体に含み、小礫も含む。



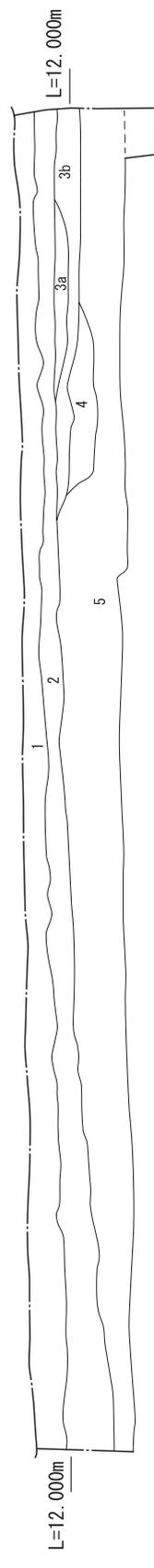
トレンチNo.51

No.51  
 1層；黒褐色土(2.5Y 3/2)しまりなし。小礫を含む。  
 2層；黒褐色土(10YR 2/3)しまりあり。  
 脛石・スミ粒・土器片・小礫を含む。  
 3層；褐色土(10YR 2/3)しまりあり。  
 脛石・スミ粒・土器片・小礫を含む。  
 4層；黒褐色粘質土(10YR 3/2)しまりあり。  
 脛石・スミ粒・土器片を含む。  
 5層；黒褐色粘質土(10YR 3/2)脛石・砂礫を含む。



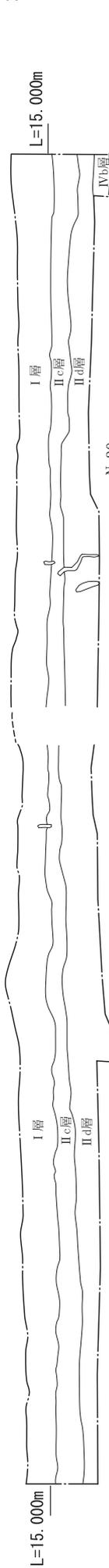
トレンチNo.31

No.31  
 1層；耕作土(灰黄褐色土10YR 4/2)土器片・スミ粒を含む。  
 2層；暗褐色粘質土(7.5YR 3/3)粘質は非常に弱い。  
 しまりは非常に良い。  
 3a層；暗褐色粘土層(7.5YR 3/4)よくしまる。土器片を含む。  
 3b層；褐色粘土層(7.5YR 4/4)しまりなし。土器片を含む。  
 4層；灰褐色粘土層(7.5YR 4/2)小礫・土器片を含む。  
 5層；褐色粘土層(7.5YR4/3)しまりあり。  
 小礫・スミ粒・土器片を含む。



第 8 図 トレンチNo.41 - No.42 - No.37-A - No.37-B - No.51 - No.31 断面図

トレンチNo.30



- No.30  
I層：耕作土  
IIc層：暗褐色粘質土(10YR 3/3)  
II d層：褐色粘質土(10YR 4/6)  
IVb層：褐灰色土(10YR 4/1)

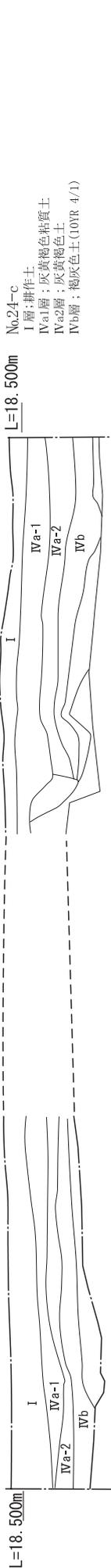
トレンチNo.24-b

等高線 15m~20m



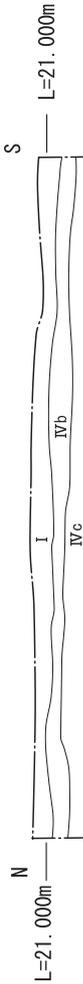
- No.24-b  
I層：耕作土  
IIb層：暗褐色粘質土  
V層：灰黄褐色砂質土

トレンチNo.24-c



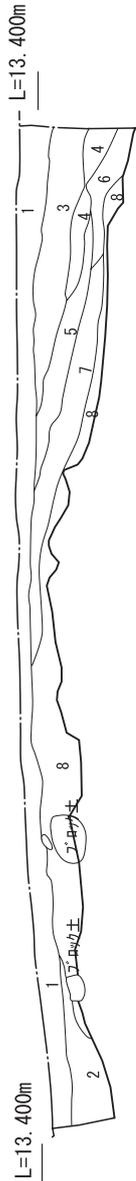
- No.24-c  
I層：耕作土  
IVa1層：灰黄褐色粘質土  
IVa2層：灰黄褐色土  
IVb層：褐灰色土(10YR 4/1)

トレンチNo.25

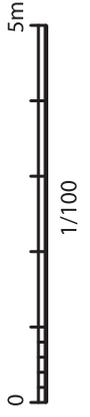


- No.25  
I層：耕作土  
IVb層：褐灰色土(10YR 4/1)凝灰岩粒が主体であり、灰黄褐色土・軽石がわずかに混入。  
IVc層：灰黄褐色土(10YR 5/2)IVb層よりやや固く、軽石が多く見られる。凝灰岩粒が主体である。

トレンチNo.44



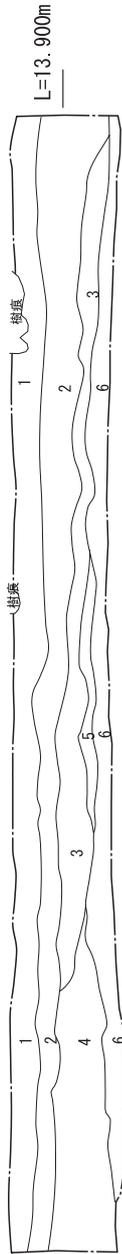
- No.44  
1層：腐葉土(暗褐色土10YR 3/3)  
2層：にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)しまりなし。小礫を含む。  
3層：灰黄褐色粘質砂質土(10YR 4/2)粘質は弱い。スミ粒・土器片・軽石粒を含む。  
4層：黒褐色粘質土(10YR 3/2)部分的に砂質で、粘質は強くはない。全体に鉄分をプロックで含む。  
5層：にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/2)よくしまる。砂礫を含む。  
6層：灰黄褐色粘質砂層(10YR 5/2)粘質は弱く、フカフカである。鉄分の粒・小礫を含む。軽石の風化土と思われる。  
7層：黒褐色砂礫層(7.5Y 3/2)部分的に黄褐色粘土をプロック状に含む。小礫も含む。  
8層：灰黄褐色砂礫層(10YR 4/2)軽石を含む。完全な地山。  
\*6~8層は地山と思われる。



第9図 トレンチNo.30 - No.24-b - No.24-c - No.25 - No.44 断面図

### トレンチNo.48

L=13.900m



### No.48

- 1層：腐葉土(黒褐色土10VR 3/2)
- 2層：黒褐色土(10VR 2/2)しまりなし。
- 3層：灰黄褐色砂質粘質土(10VR 4/2)粘質はやや弱。
- 4層：にぶい黄褐色砂質粘質土(10VR 4/3)粘質は弱い。
- 5層：褐色粘質土(10VR 4/4)粘質は非常に弱。
- 6層：褐色粘質土(7.5VR 4/3)非常に弱。

### トレンチNo.49

L=15.000m

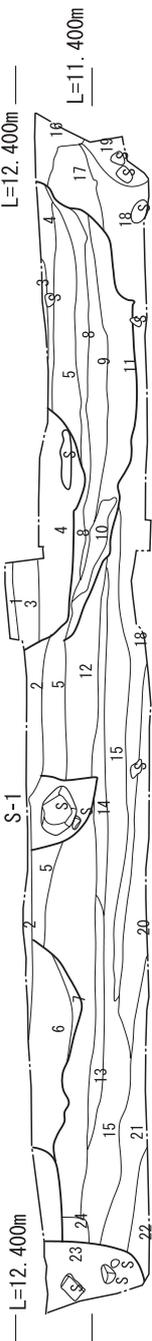


### No.49

- 1層：腐葉土(黒褐色土10VR 3/2)
- 2層：黒褐色土(10VR 2/2)しまりなし。
- 2b層：暗灰黄色土(2.5Y 4/2)しまりなし。
- 4層：にぶい黄褐色砂質粘質土(10VR 4/3)粘質は弱い。
- 6層：褐色粘質土(7.5VR 4/3)非常に弱。

### トレンチNo.53

L=12.400m

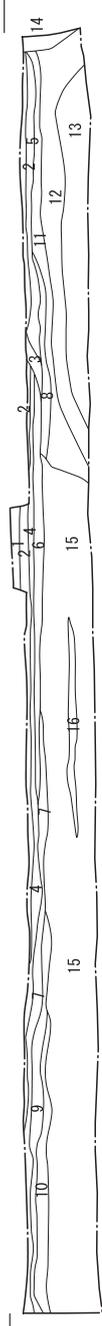


### No.53

- 1層：近代の耕作土(暗褐色土10VR 3/4)しまりなし。
- 2層：土器片・軽石・小礫を含む。
- 3層：暗褐色土(10VR 5/6)しまりなし。
- 4層：黒褐色土(10VR 3/3)しまりなし。
- 5層：にぶい黄褐色土(10VR 4/3)しまりなし。
- 6層：暗褐色土(10VR 3/3)しまりなし。

### トレンチNo.54

L=10.600m



### No.54

- 1層：暗褐色土(10VR 3/4)しまりなし。
- 2層：にぶい黄褐色土(10VR 4/3)しまりなし。
- 3層：灰黄褐色土(10VR 4/2)しまりなし。
- 4層：暗褐色砂質土(10VR 3/3)しまりなし。
- 5層：黒褐色粘質土(10VR 3/2)粘質は非常に弱。
- 6層：暗褐色粘質土(10VR 4/2)粘質は非常に弱。

### トレンチNo.52

L=13.000m

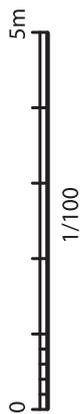


### No.52

- 1層：近代の耕作土(暗褐色土10VR 3/4)しまりなし。
- 2層：黄褐色土(10VR 5/6)しまりなし。
- 3層：暗褐色土(10VR 3/3)しまりなし。
- 4層：黒褐色土(10VR 3/2)砂地の土。

### No.52

- 18層：灰黄褐色粘質砂質土(2.5Y 4/1)砂質は強く粘質は弱い。
- 19層：暗褐色土(10VR 5/6)しまりなし。
- 20層：黒褐色粘質土(10VR 3/3)粘質は弱い。
- 21層：暗褐色土(10VR 3/3)しまりなし。
- 22層：黄褐色粘質土(10VR 4/2)粘質は強い。
- 23層：褐色粘質土(10VR 4/4)粘質は非常に弱。
- 24層：暗褐色土(10VR 3/4)粘質はやや弱。

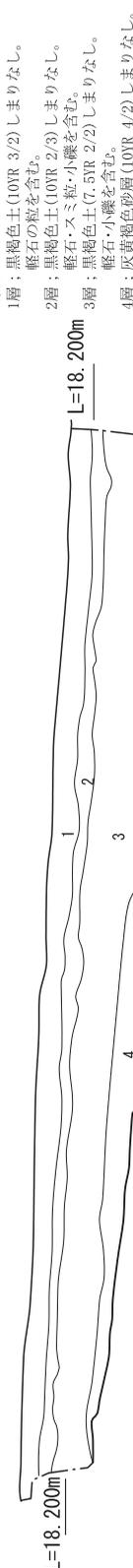


トレンチNo.26-a 等高線20~25m間

No.26-a  
I層：耕作土  
II層：褐色土(10YR 4/4)しまりがなく粘質土。凝灰岩混入。

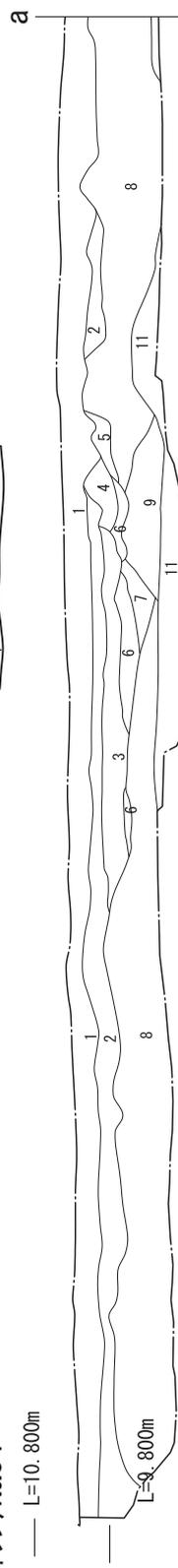


トレンチNo.29



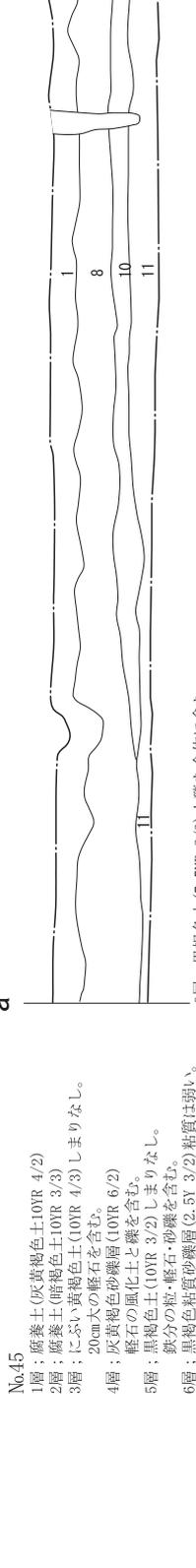
No.29  
1層：黒褐色土(10YR 3/2)しまりなし。脛石の粒を含む。  
2層：黒褐色土(10YR 2/3)しまりなし。脛石・スミ粒・小礫を含む。  
3層：黒褐色土(7.5YR 2/2)しまりなし。脛石・スミ粒・小礫を含む。  
4層：灰黄褐色砂層(10YR 4/2)しまりなし。脛石・スミ粒・小礫を含む。

トレンチNo.34



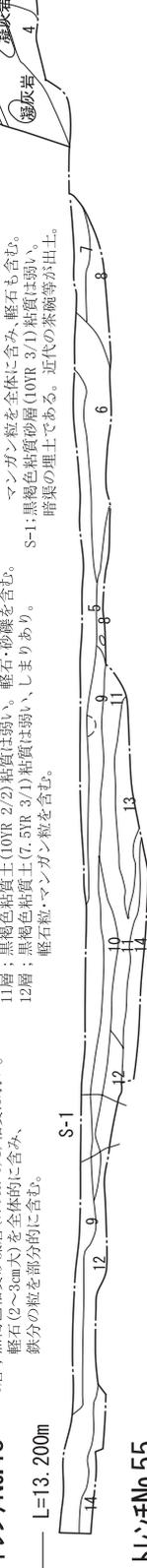
No.34  
1層：耕作土(暗褐色土10YR 3/3)  
2層：褐色土(10YR 4/4)非常にしまっている。  
3層：褐色粘質土(7.5YR 4/3)非常にしまっている。  
4層：暗褐色粘質土(7.5YR 3/4)粘質は弱く、しまりあり。  
5層：暗褐色粘質土(7.5YR 3/3)粘質は非常に弱く、しまりあり。スミ粒・土器片を含む。  
6層：灰褐色粘質土(5YR 4/2)粘質は弱く、しまりはよい。スミ粒・土器片・小礫を全体を含む。  
7層：褐色粘土層(7.5YR 4/4)よくしまる。小礫を含む。  
8層：褐色粘土層(7.5YR 3/4)8層よりしまりなし。土器片・小礫を含む。  
9層：暗褐色粘土層(7.5YR 4/3)よくしまる。スミ粒・小礫を含む。  
10層：暗褐色粘土層(7.5YR 3/3)部分的にしまる。鉄分の粒・スミ粒を含む。  
11層：暗褐色粘土層(7.5YR 4/3)よくしまる。黄褐色粘土・スミ粒を含む。  
12層：暗褐色粘土層(7.5YR 4/3)よくしまる。黄褐色粘土・スミ粒を含む。

a



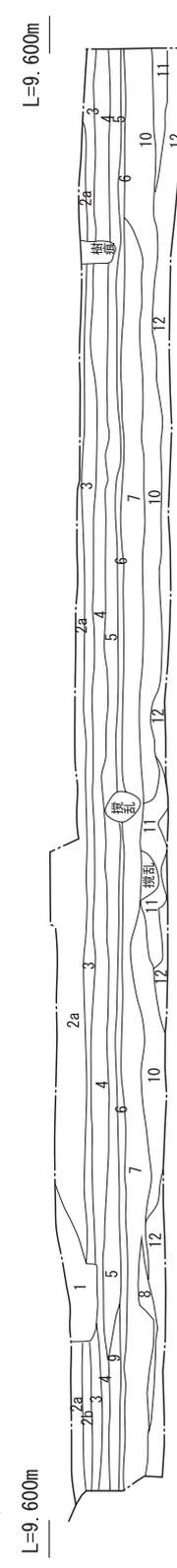
No.45  
1層：腐葉土(灰黄褐色土10YR 4/2)  
2層：腐葉土(暗褐色土10YR 3/3)  
3層：にぶい黄褐色土(10YR 4/3)しまりなし。  
4層：20cm大の脛石を含む。  
5層：灰黄褐色砂層(10YR 6/2)脛石の風化土と礫を含む。  
6層：黒褐色粘質砂層(2.5Y 3/2)粘質は強い。脛石の粒・脛石・砂礫を含む。  
7層：暗褐色粘質砂層(10YR 4/1)粘質は弱い。この層の上面で暗葉の一部と脛石の集石を検出。  
8層：黒褐色粘質土(10YR 3/2)粘質は弱い。小礫を全体に含み、脛石の粒も含む。  
9層：黒褐色粘質土(10YR 2/2)粘質は弱い。脛石・砂礫を含む。  
10層：黒褐色粘質土(10YR 2/2)粘質は弱い。脛石・砂礫を含む。  
11層：黒褐色粘質土(10YR 2/2)粘質は弱い。脛石・砂礫を含む。  
12層：黒褐色粘質土(10YR 3/1)粘質は弱い。脛石・砂礫を含む。  
13層：灰黄褐色砂層(10YR 4/2)脛石の風化土層である。鉄分を粒状に含む。  
14層：にぶい黄褐色粘質砂層(10YR 5/3)粘質は弱く、しまりがなくない。マンガン粒を全体に含み、脛石も含む。  
S-1：黒褐色粘質砂層(10YR 3/1)粘質は弱い。暗葉の埋土である。近代の茶碗等が出土。

トレンチNo.45



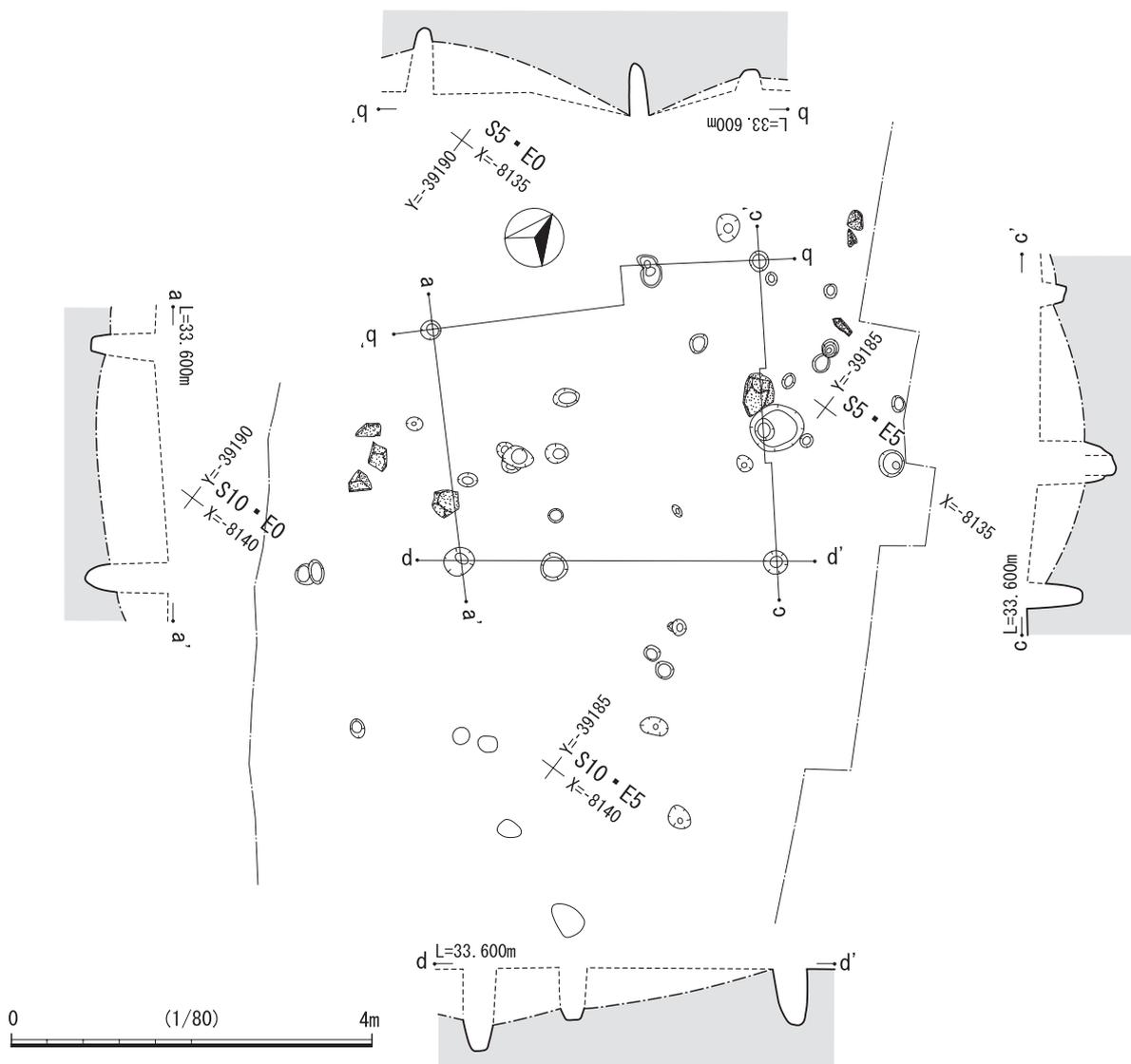
No.55  
1層：黄褐色砂質土(10YR 4/2)よくしまる。鉄分・スミ粒・小礫・脛石を含む。  
2a層：暗褐色土(10YR 3/4)しまりあり。脛石・土器片をわずかに含む。  
2b層：褐色土(10YR 4/4)よくしまる。鉄分を全体に含み、マンガン粒・脛石をわずかに含む。  
3層：灰黄褐色土(10YR 4/2)鉄分層でよくしまる。マンガン粒・脛石を含む。  
4層：ぬぶい黄褐色土(10YR 4/3)よくしまる。鉄分・マンガン粒を全体に含み、脛石・鉄分の塊を部分的に含む。  
5層：灰黄褐色土(10YR 5/2)よくしまる。鉄分を全体に含み、マンガン粒・スミ粒を含む。  
6層：オリーブ褐色砂質土(2.5Y 4/3)しまりなし。小礫・鉄分・土器片を含む。  
7層：灰黄褐色砂質土(10YR 4/2)鉄分を篩状に含む鉄分層である。脛石を含む。

トレンチNo.55

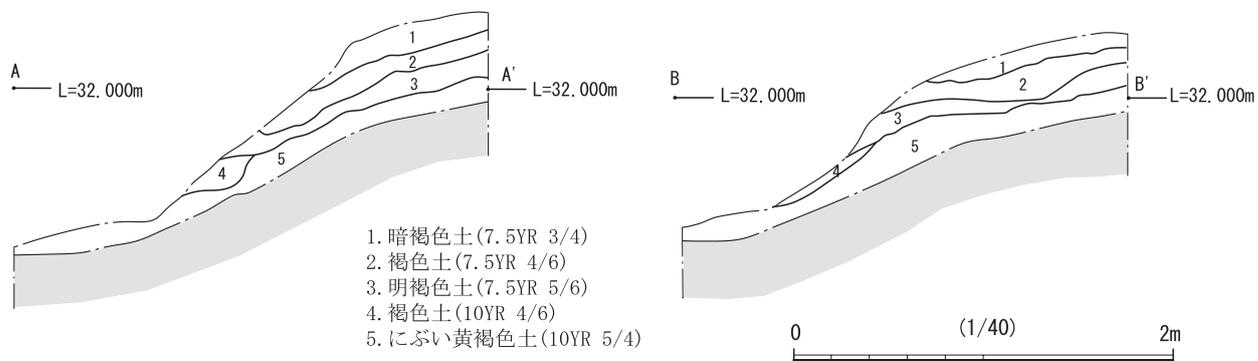


No.55  
10層：黄褐色砂層(10YR 4/3)しまりよし。鉄分の塊(1cm)を全体に含み。脛石・砂礫を含む。  
11層：黒褐色粘質砂層(10YR 3/2)粘質は弱い。脛石・鉄分・マンガン粒を含む。  
12層：黒褐色粘質土(2.5Y 3/1)粘質は弱く、しまりなし。小礫・鉄分・脛石・マンガン粒を含む。

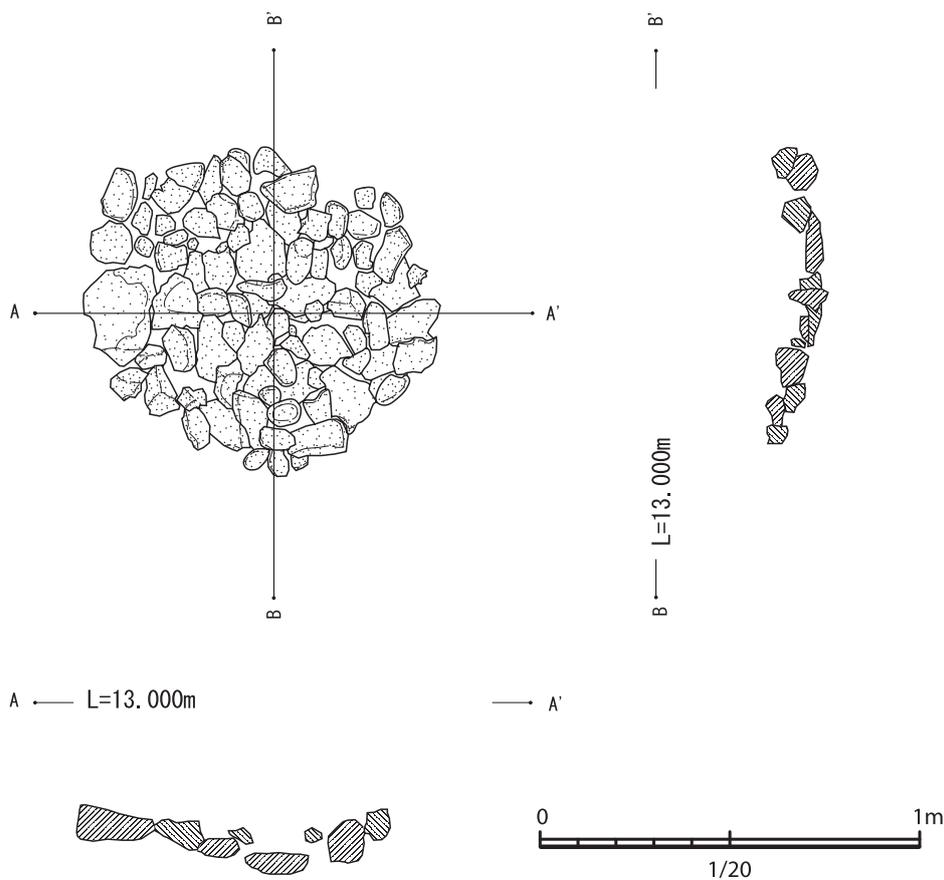
第11図 トレンチNo.26-a - No.29 - No.34 - No.45 - No.55 断面図



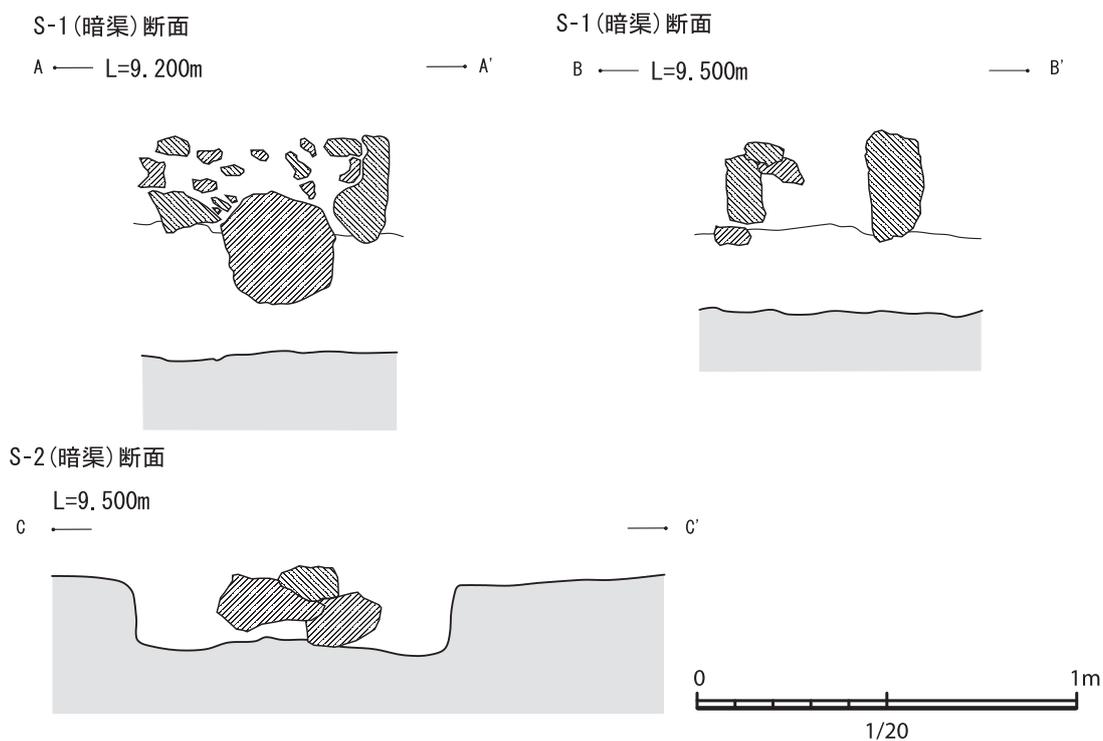
第12図 6号墳 (ST-02) 北側周辺検出Pit群 平面・断面図



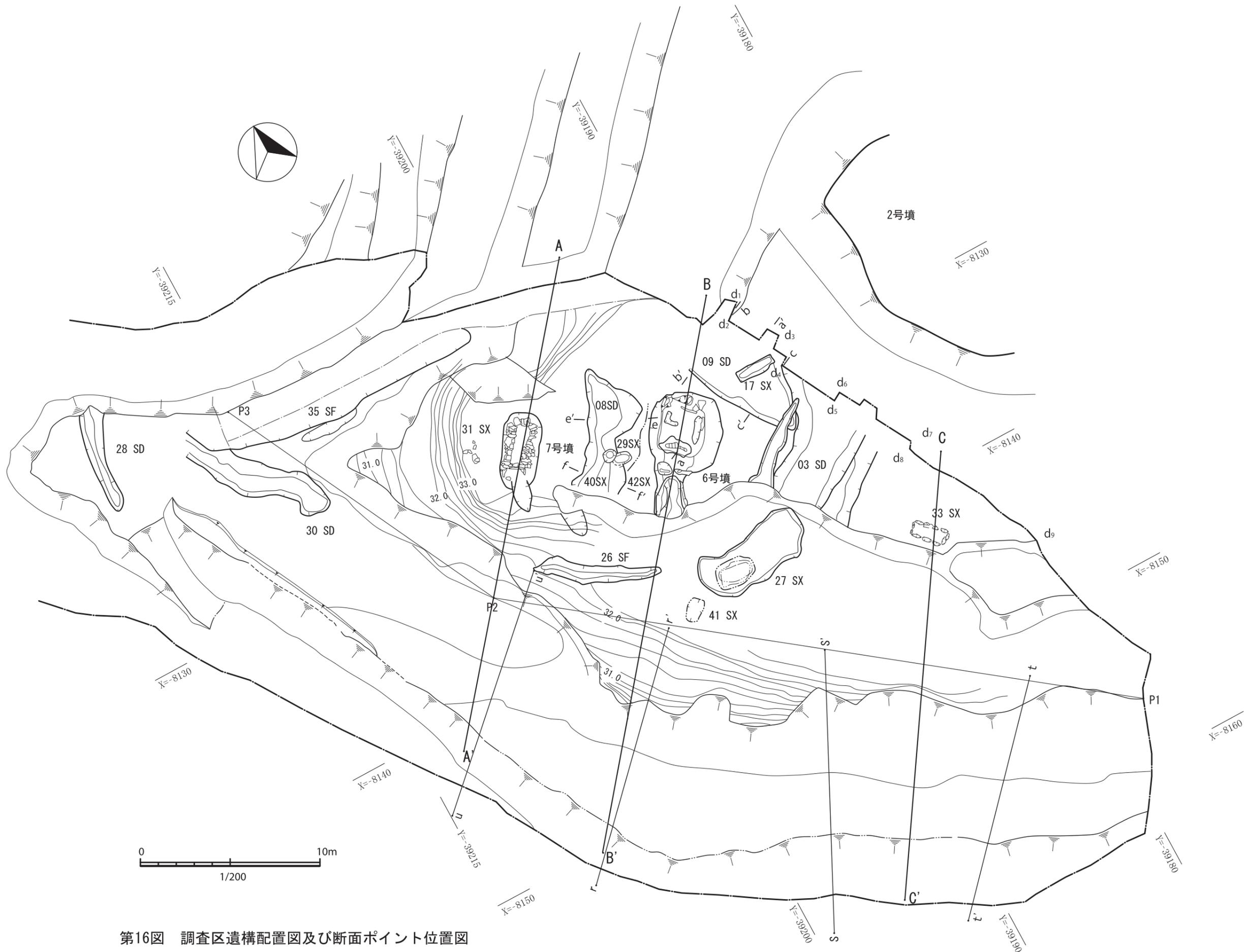
第13図 6号墳 (ST-02) 南側トレンチ断面図



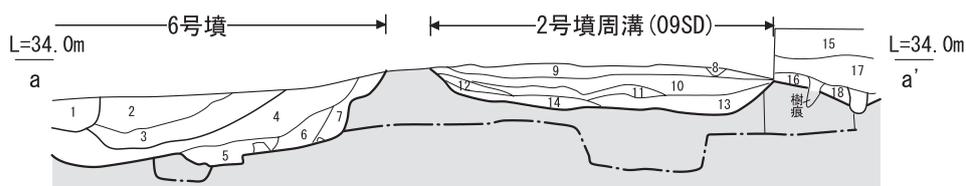
第14図 II区谷部より出土した集石 平面・断面図



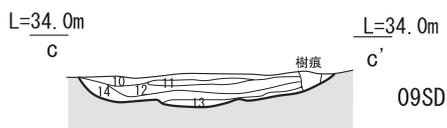
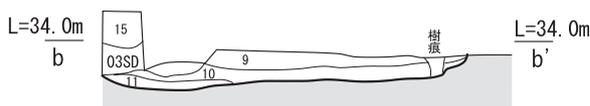
第15図 II区検出暗渠(S-1)(S-2)断面図



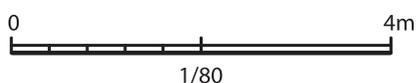
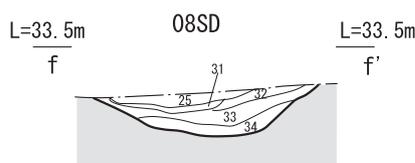
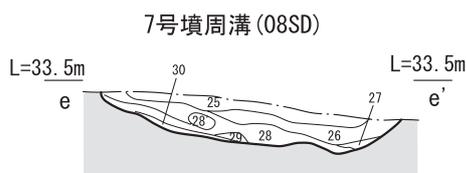
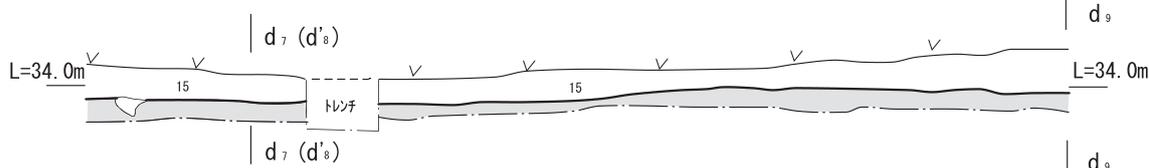
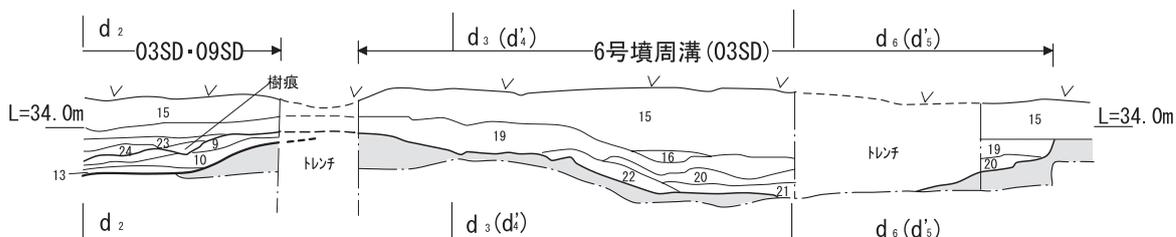
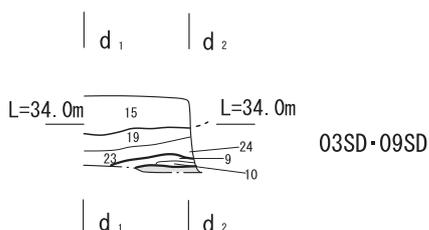
第16図 調査区遺構配置図及び断面ポイント位置図



6号墳周溝 (03SD)・2号墳周溝 (09SD)

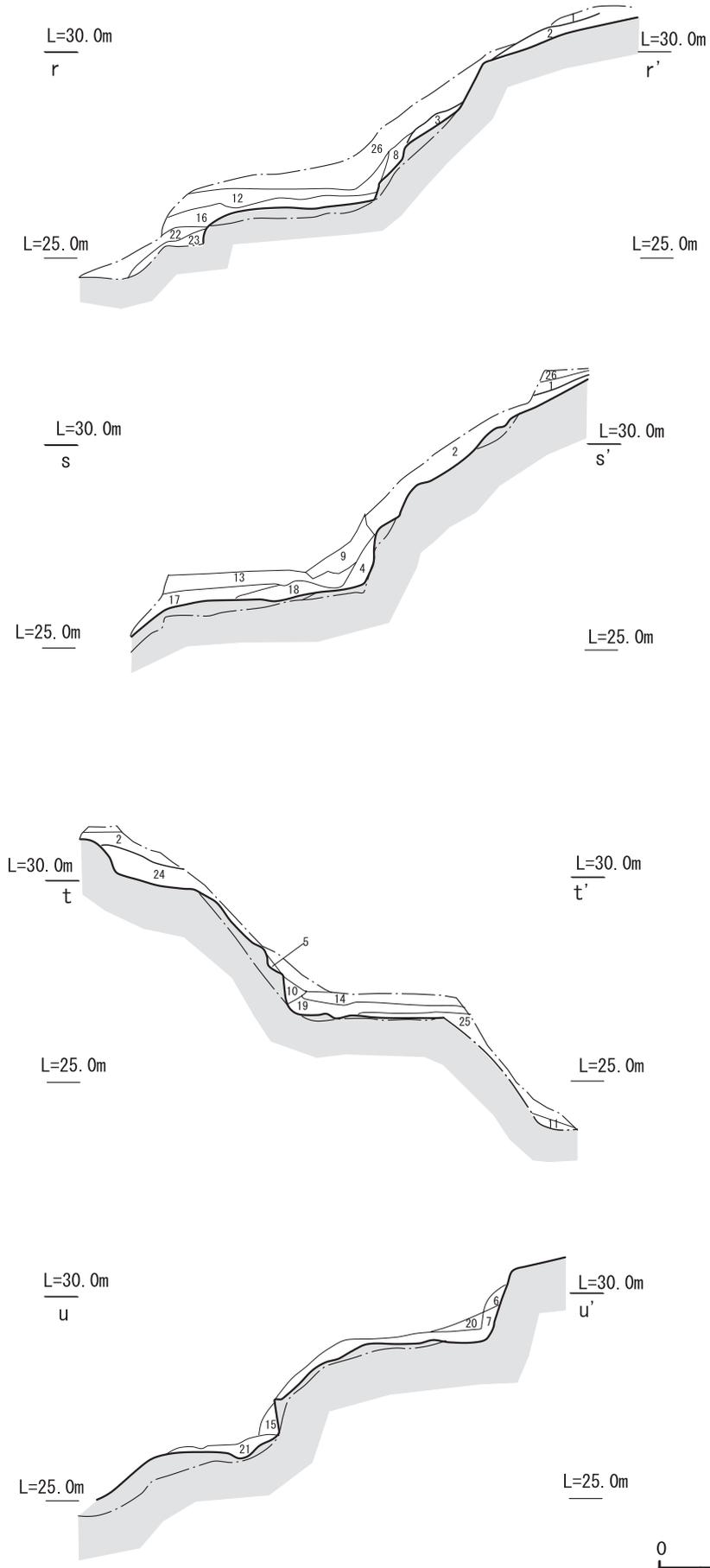


- (土層)
- 01SX : 1層 カクラン土層
  - 10SX : 2層 (Hue7. 5YR4/3) 褐色粘質土。赤褐色粘土ブロック・石材片包含。
  - 3層 (Hue7. 5YR4/4) 褐色土。小礫・土器粒・石材片包含。
  - 11SX : 4層 (Hue10YR4/3) 淡黄褐色粘質土。赤褐色土・灰色土ブロック・小礫・土器粒子包含。
  - 5層 (Hue10YR4/4) 褐色土。石材片・炭化物粒子・白灰色・赤褐色土小ブロック包含。
  - 6層 (Hue7. 5YR5/4) 淡褐色粘質土。白灰色粘土ブロック・マンガン粒子包含。
  - 7層 (Hue7. 5YR4/4) 褐色粘質土。白灰色土ブロック包含。
  - 09SD : 8層 (Hue10YR3/2) 黒褐色粘質土。
  - 9層 (Hue7. 5YR4/3) 褐色粘質土。小礫・炭化物・焼土粒子包含。
  - 10層 (Hue7. 5YR4/4) 褐色粘質土。小礫・炭化物・土器粒子包含。
  - 11層 (Hue10YR5/4) 淡黄褐色土。鉄分・白灰色土ブロック・マンガン・炭化物粒子包含。
  - 12層 (Hue7. 5YR4/6) 褐色粘質土。土器・炭化物粒子包含。
  - 13層 (Hue7. 5YR5/4) 淡褐色土。土器・炭化物粒子・赤褐色土・黒色土小ブロック包含。
  - 14層 (Hue7. 5YR4/3) 褐色土。炭化物・マンガン・鉄分粒子包含。
  - \*15層 表土(耕作土)
  - 16層 (Hue10YR4/4) 褐色粘質土。
  - 03SD: 17層: 19~24層に対応か。
  - 18層: 19~24層に対応か。
  - 19層: 03SD上層埋土。
  - 20層: 23層と同一層。
  - 21層: 24層と同一層。
  - 22層: 03SD埋土か。
  - 23層 (Hue7. 5YR4/6) 暗褐色粘質土。
  - 24層 (Hue7. 5YR4/4) 褐色粘質土。
  - 08SD: 25層 (Hue10YR5/4) 淡黄褐色粘質土。石灰岩風化土ブロック包含。
  - 26層 (Hue10YR4/3) 淡黄褐色粘質土。石灰岩風化土ブロック包含。
  - 27層 (Hue10YR4/4) 褐色粘質土。
  - 28層 (Hue10YR4/4) 褐色粘質土。石灰岩風化土包含。28' は暗褐色粘質土ブロック。
  - 29層 (Hue10YR4/4) 褐色粘質土。
  - 30層 (Hue10YR6/3) 淡黄褐色粘質土。
  - 31層 (Hue10YR5/3) 淡黄褐色粘質土。
  - 32層 (Hue10YR4/4) 褐色粘質土。石灰岩風化土包含。
  - 33層 (Hue10YR4/3) 淡黄褐色粘質土。
  - 34層 (Hue10YR4/4) 褐色粘質土。29層と同一か。

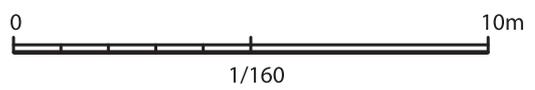


(断面ポイントは第16図中に記載)

第17図 2号墳周溝 (09SD)・6号墳周溝 (03SD)・7号墳周溝 (08SD) 断面図



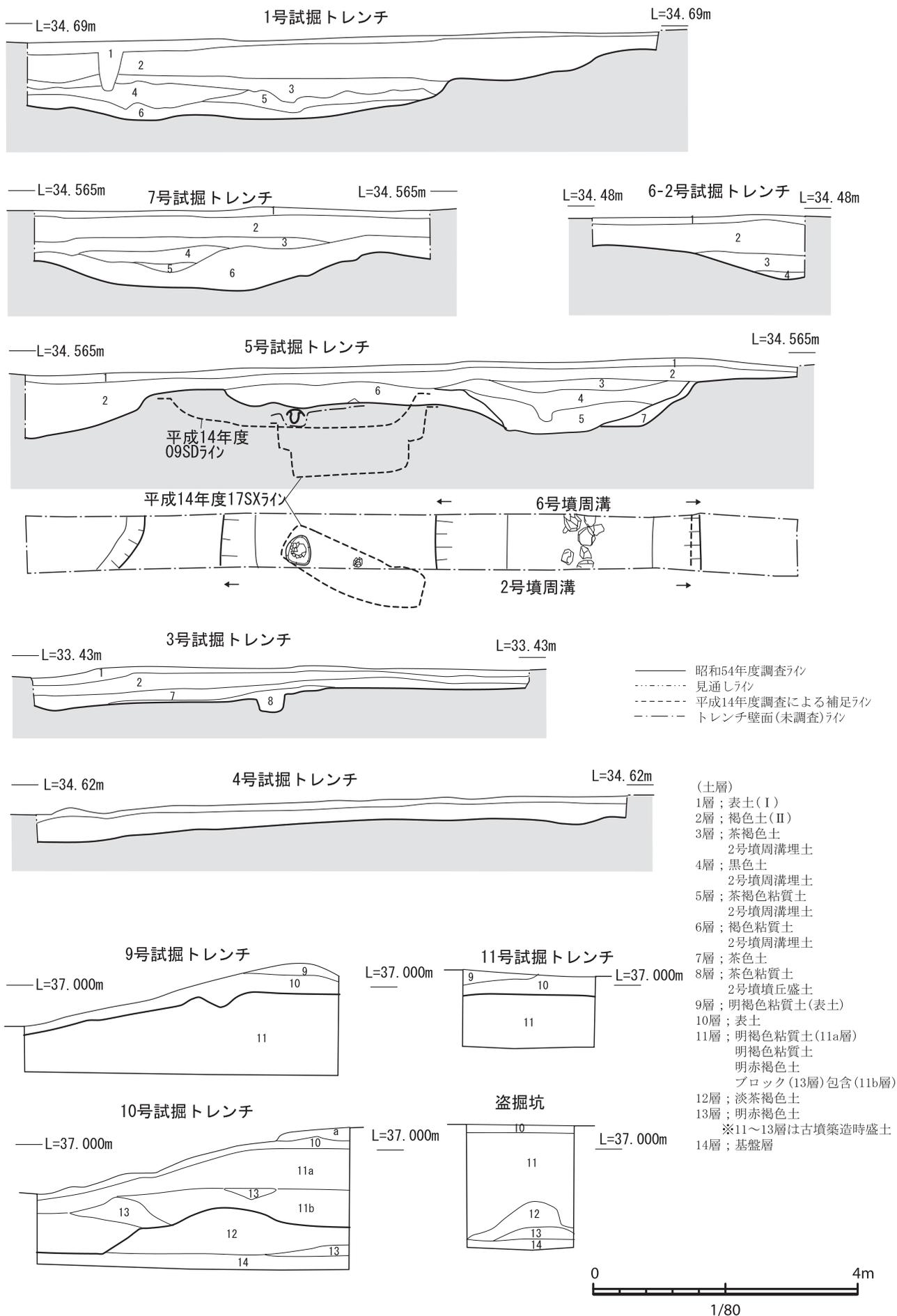
- (土層)
- 1層; (Hue10YR4/2) 灰黄褐色粘質土  
7号填流入土 (S-25)の2次堆積層か。
  - 2層; (Hue10YR4/3) 淡黄褐色粘質土  
中世遺物包含
  - 3層; (Hue7.5YR6/4) 淡橙色粘質土
  - 4層; (Hue10YR5/2) 灰黄褐色粘質土  
軽石堆積層
  - 5層; (Hue10YR5/3) 淡黄褐色土
  - 6層; (Hue10YR5/6) 黄褐色土
  - 7層; (Hue10YR4/3) 灰黄褐色粘質土  
※3~7層は同一系統の土層
  - 8層; (Hue10YR5/6) 黄褐色土
  - 9層; (Hue10YR5/6) 黄褐色土。軽石包含。
  - 10層; (Hue10YR5/2) 灰黄褐色。灰土包含。
  - 11層; (Hue10YR6/1) 褐灰色土。軽石包含。  
※8~11層は同一系統の土層
  - 12層; (Hue10YR5/4) 淡黄褐色土
  - 13層; (Hue10YR5/3) 淡黄褐色土。軽石包含。
  - 14層; (Hue10YR5/4) 淡黄褐色土。小礫包含。
  - 15層; (Hue10YR5/2) 灰黄褐色土。  
※12~15層は同一系統の土層
  - 16層; (Hue10YR5/3) 淡黄褐色土。  
客土による耕作土
  - 17層; (Hue10YR4/3) 淡黄褐色土。軽石包含。  
耕作土。
  - 18層; (Hue10YR4/2) 灰黄褐色土。軽石包含。  
耕作土。
  - 19層; (Hue10YR4/4) 褐色土。小礫包含。  
耕作土。
  - 20層; (Hue10YR4/3) 淡黄褐色粘質土。
  - 21層; (Hue10YR4/2) 灰黄褐色粘質土。  
凝灰岩包含。耕作土。  
※16~21層は同一系統の土色
  - 22層; (Hue10YR4/4) 褐色土
  - 23層; (Hue10YR4/1) 褐灰色土
  - 24層; (Hue10YR5/3) 淡黄褐色粘質土
  - 25層; (Hue10YR6/2) 灰黄褐色土。  
軽石片包含。



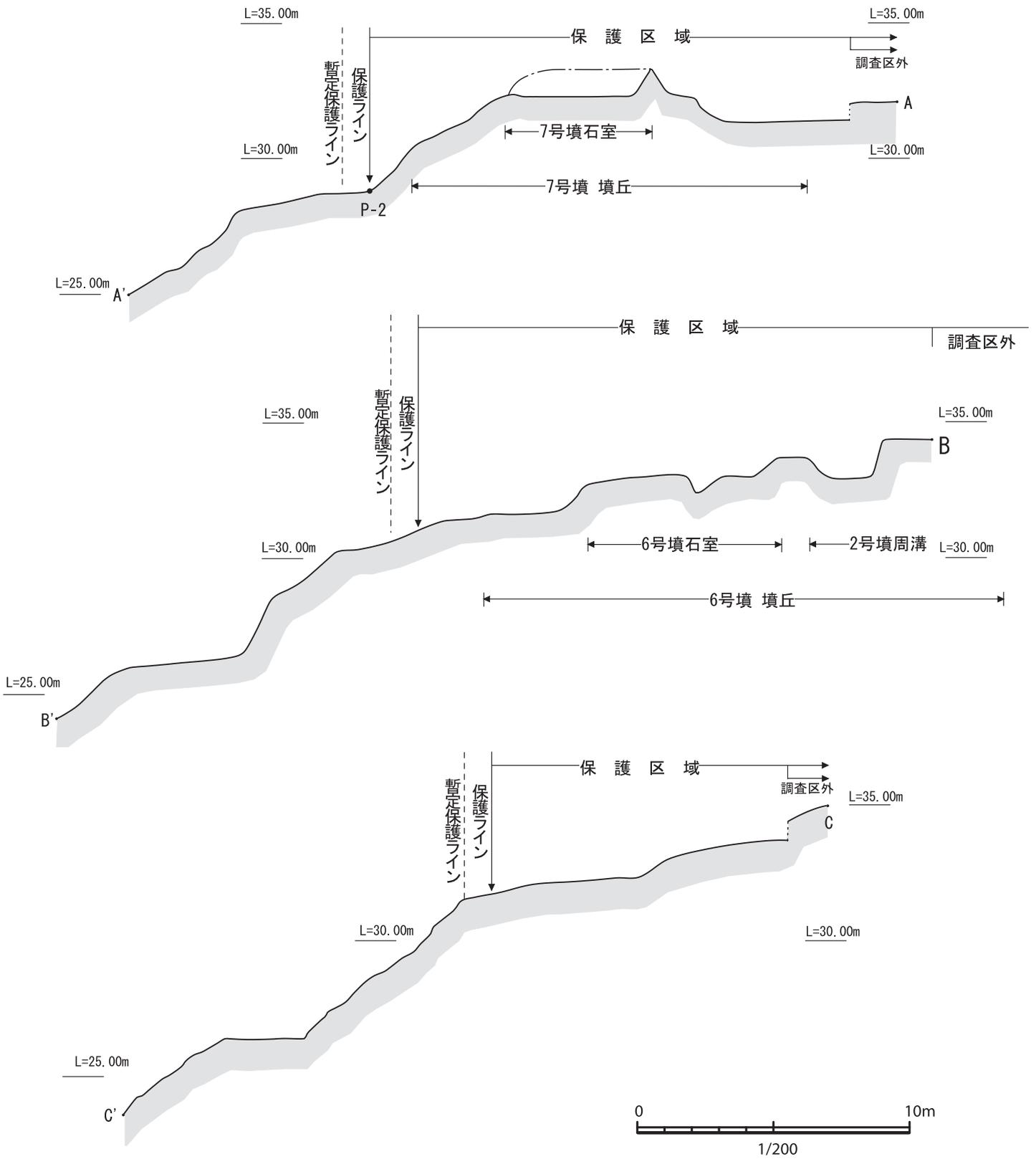
第18図 調査区南斜面土層断面図



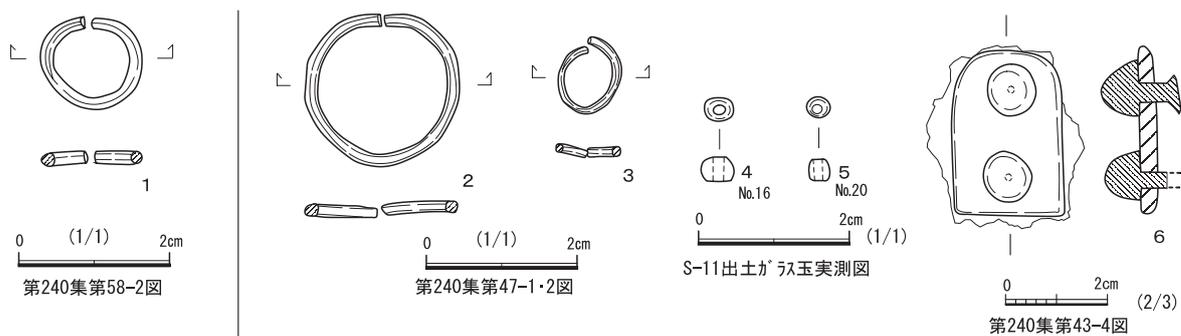
第19図 2号墳・3号墳現況及び周溝検出平面図



第20図 昭和54年度確認調査トレンチ平面・断面図

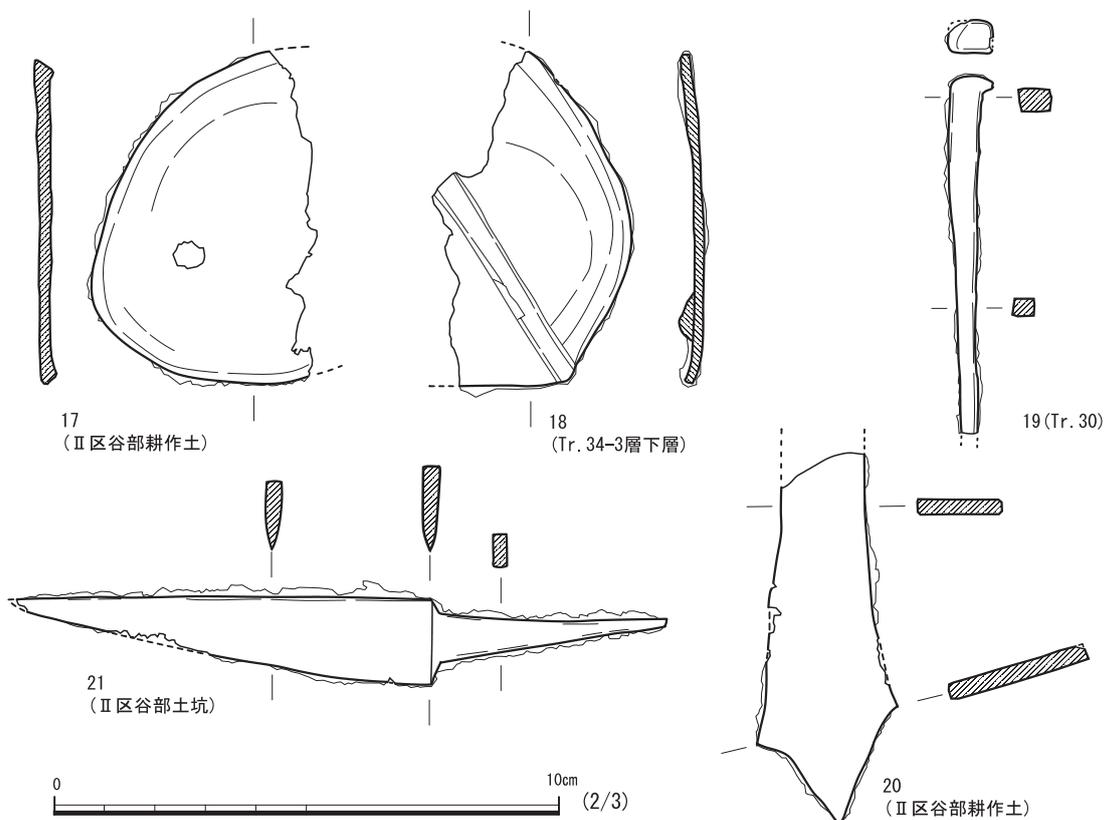
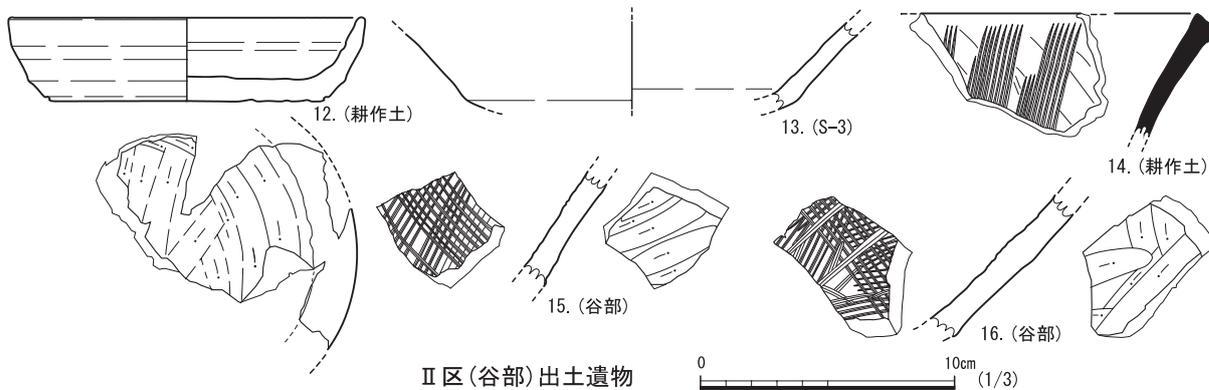
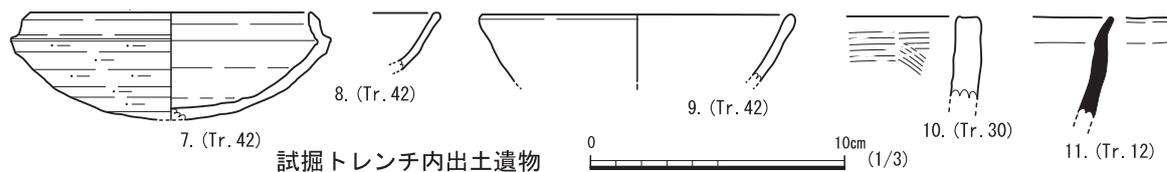


第21図 城ヶ辻古墳群所在丘陵断面図

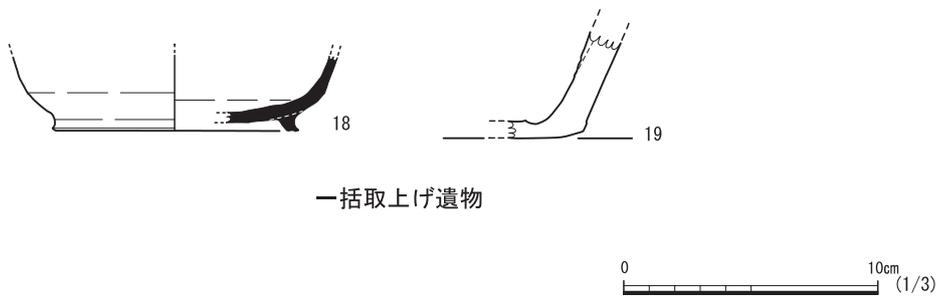
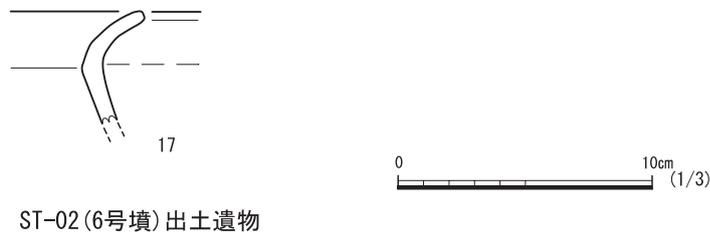
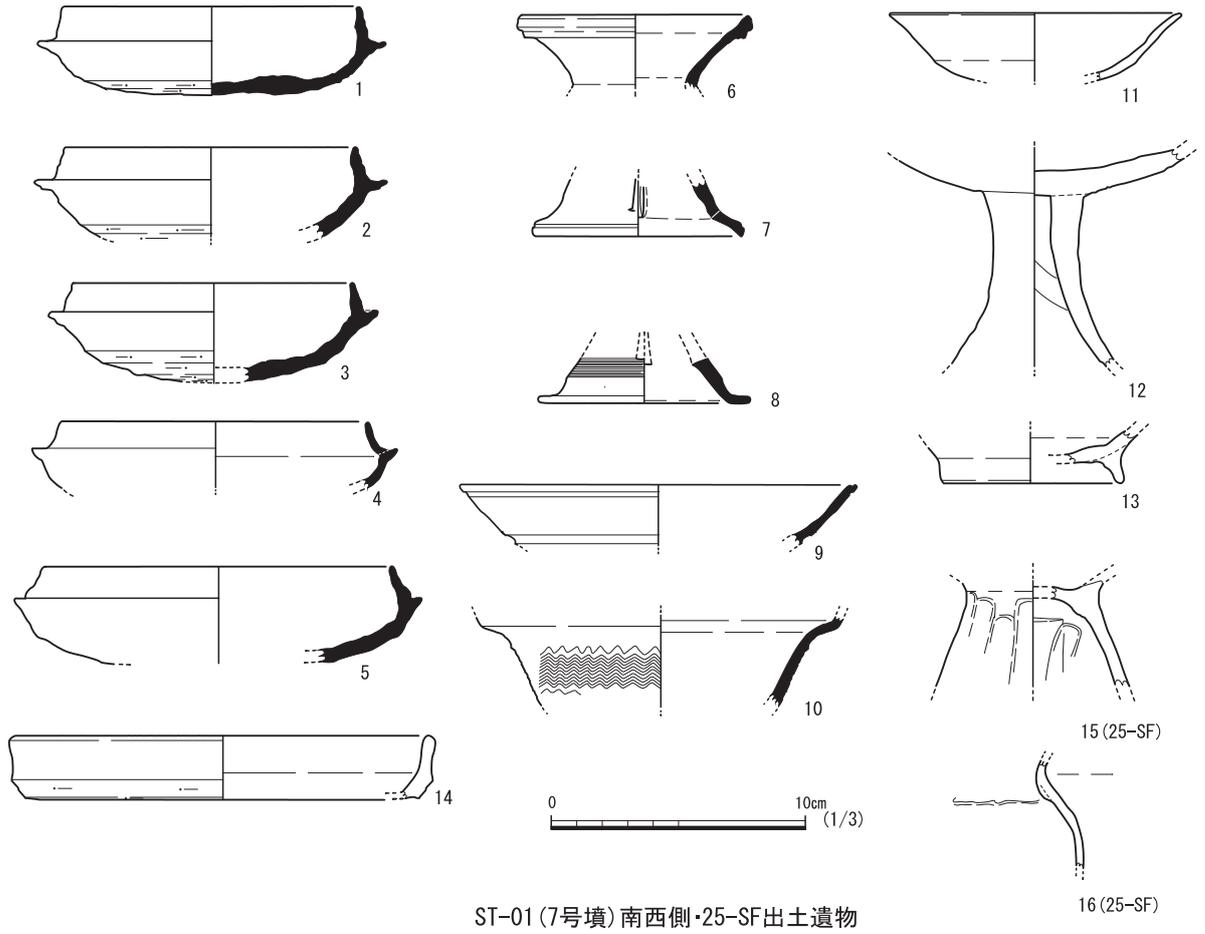


ST-01 (7号墳) 出土

ST-02 (6号墳) 関連遺構S-11 出土



第22図 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群 出土遺物実測図1



第23図 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群 出土遺物実測図2

# 写真







1. 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群遠景（北西より）



2. 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群全景（南東より）



1. 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群調査区遠景（南東より）



2. 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群調査区遠景（南より）



3. 城ヶ辻城跡谷部（Ⅱ区）遠景（南西より）



1. 城ヶ辻古墳群調査区全景（南より）



2. 城ヶ辻古墳群調査区全景（南西より）



1. 6号墳・7号墳全景（北より）



2. 6号墳・7号墳全景（北西より）



1. ST-01 (7号墳) 石室全景 (南西より)



2. ST-01 (7号墳) 石室閉塞状況 (北東より)



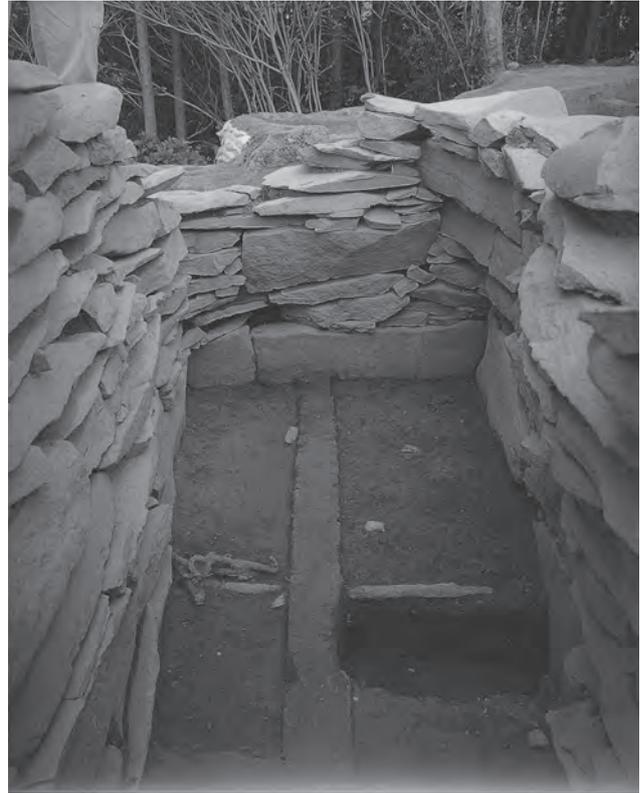
3. ST-01 (7号墳) 石室閉塞状況 (南西より)



4. ST-01 (7号墳) 石室閉塞状況 (南西より)



1. ST-01(7号墳) 石室内遺物出土状況(南西より)



2. ST-01(7号墳) 石室内遺物出土状況(南西より)



3. ST-01(7号墳) 石室閉塞状況(玄室北東より)



4. ST-01(7号墳) 石室遺物出土状況(玄室南西より)



1. ST-02(6号墳) 石室全景 (南から)



2. ST-02(6号墳) 石室全景 (南から)



3. 04-SK(6号墳) 石材出土状況 (南西より)



4. ST-02(6号墳) 人骨出土状況 (西より)



1. S-11 (前方) (南西より)



2. S-11 ガラス玉出土状況 (北から)



3. S-11 ガラス玉出土状況 (北西から)



4. S-29 (前方) (北西より)



1.31-SX 遺物出土状況（西より）



2.31-SX 遺物出土状況（西より）



3.31-SX 遺物出土状況（西より）



1.31-SX 遺物出土状況（西より）



2.31-SX 検出状況（西より）



3.31-SX 検出状況（南東より）



1. II区 S-3 検出状況（東から）



2. II区 S-2・S-3 検出状況（東から）



3. II区 S-2 暗渠検出状況（東から）



4. II区 S-3 暗渠検出状況（東から）



1. II区 崖石積状況（南から）



2. II区 谷部集石出土状況（北から）



1. 試掘トレンチNo.22 (西から)



2. 試掘トレンチNo.23① (西から)



4. 試掘トレンチNo.23③ (西から)



3. 試掘トレンチNo.23② (西から)



5. 試掘トレンチNo.23④ (西から)



6. 試掘トレンチNo.23-b① (東から)



7. 試掘トレンチNo.23-b② (東から)



1. 試掘トレンチNo.24-a(西から)



3. 試掘トレンチNo.24-c(西から)



2. 試掘トレンチNo.24-b(北から)



4. 試掘トレンチNo.25(北から)



5. 試掘トレンチNo.26①(西から)



6. 試掘トレンチNo.26②(北西から)



1. 試掘トレンチNo.27(西から)



2. 試掘トレンチNo.28(東から)



3. 試掘トレンチNo.29(北から)



4. 試掘トレンチNo.31(北から)



5. 試掘トレンチNo.33-b(北から)



6. 試掘トレンチNo.33-c(北から)

城ヶ辻古墳群 土盛養生作業風景



城ヶ辻古墳群 土盛養生作業風景





1. 城ヶ辻古墳群現状写真（西から）



2. 城ヶ辻7号墳から玉名平野を望む  
（南東から）



3. 城ヶ辻古墳群現状写真（南から）



1. 中2段 7号墳南西盛土～表土 (第 23-1 図)



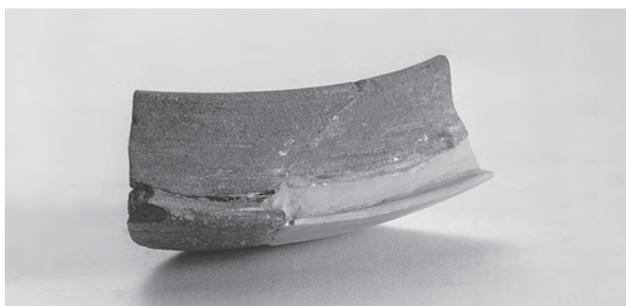
2. ST-01 (7号墳) 南西側一括 (第 23-5 図)



3. ST-01 (7号墳) 南西側一括 (第 23-3 図)



4. ST-01 (7号墳) 南西側一括



5. ST-01 (7号墳) 南西側一括



7. ST-01 (7号墳) 南西側一括 (第 23-11 図)

8. 25-SF (7号墳関連遺構) 一括 (第 23-15 図)



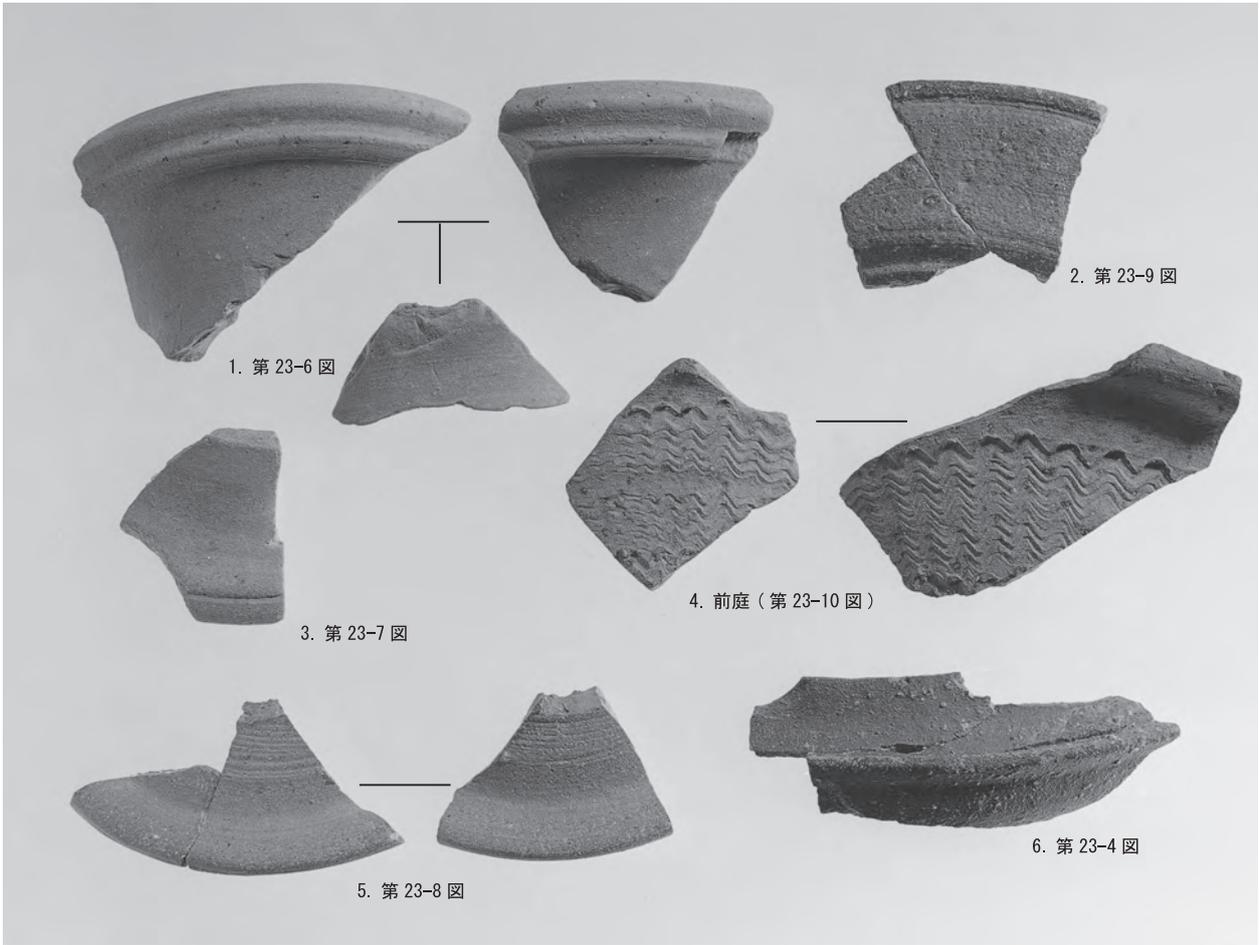
6. ST-01 (7号墳) 南西側一括 (第 23-2 図)



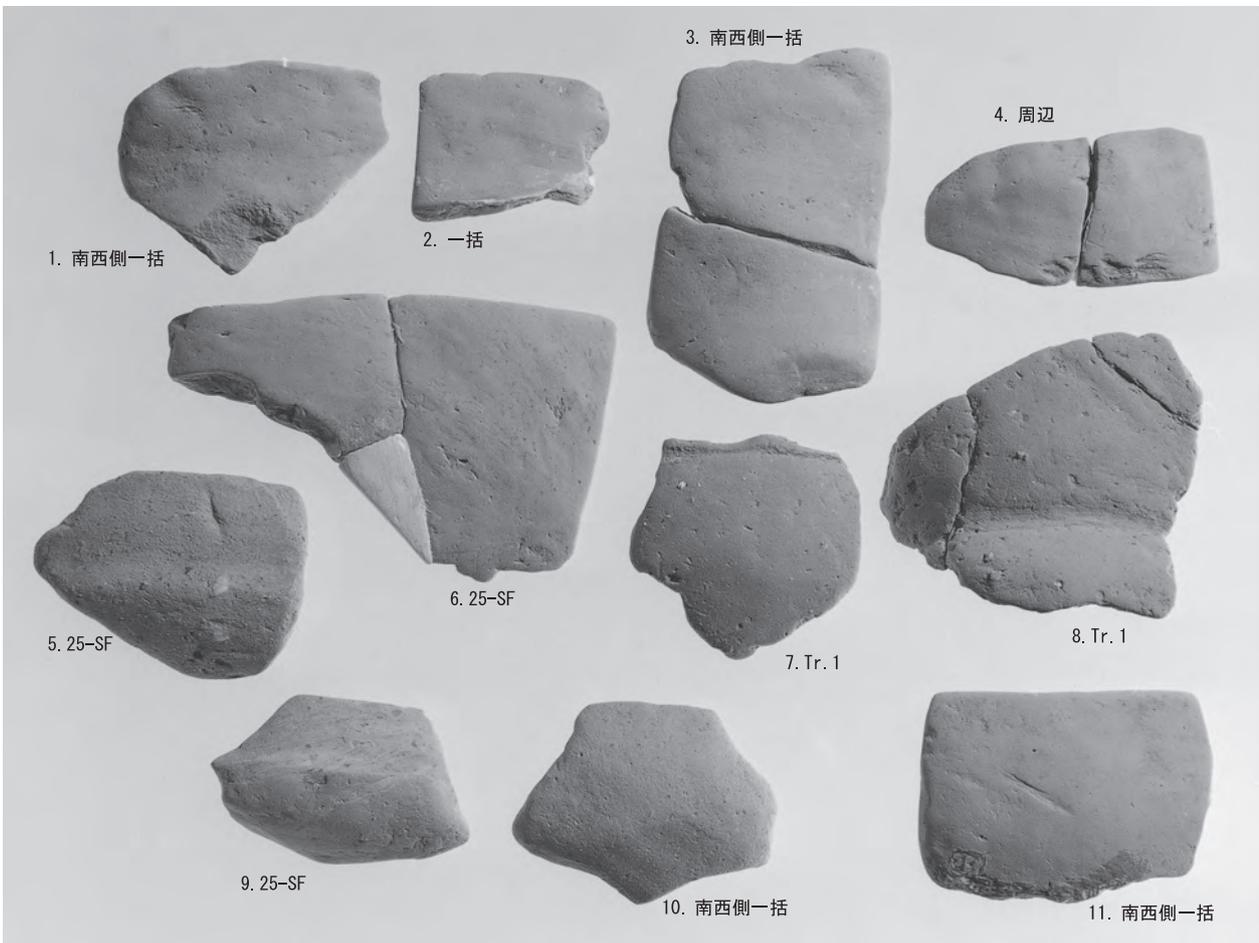
9. 試掘トレンチNo.42 内 (第 22-7 図)



10. ST-01 (7号墳) 南西側一括 (第 23-13 図)



1. ST-01 (7号墳) 南西側出土須恵器



2. ST-01 (7号墳) 出土土師器



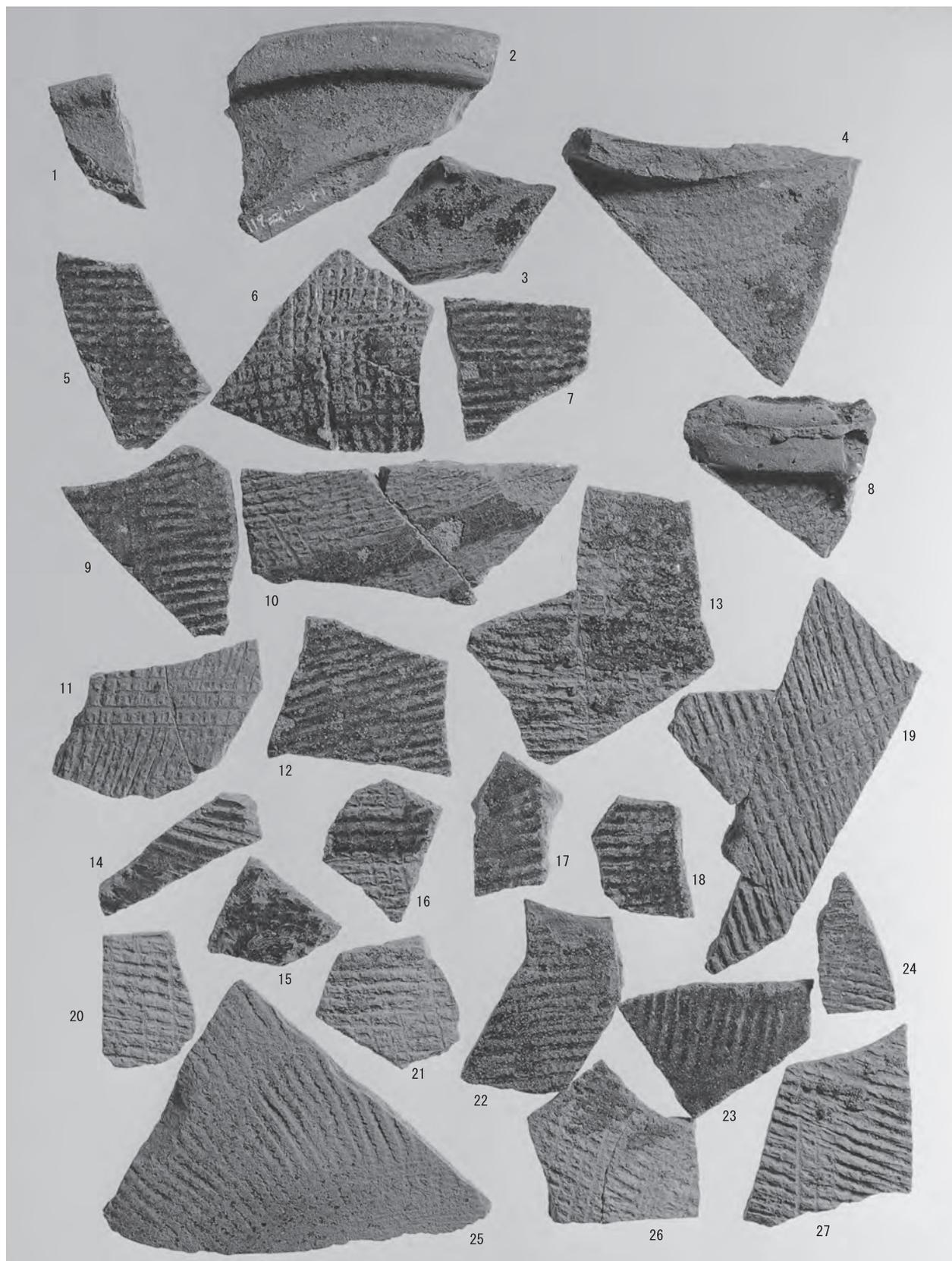
1. ST-01 (7号墳) 南西側一括、S-3 一括、S-9、トレンチNo.6、No.1 出土土器



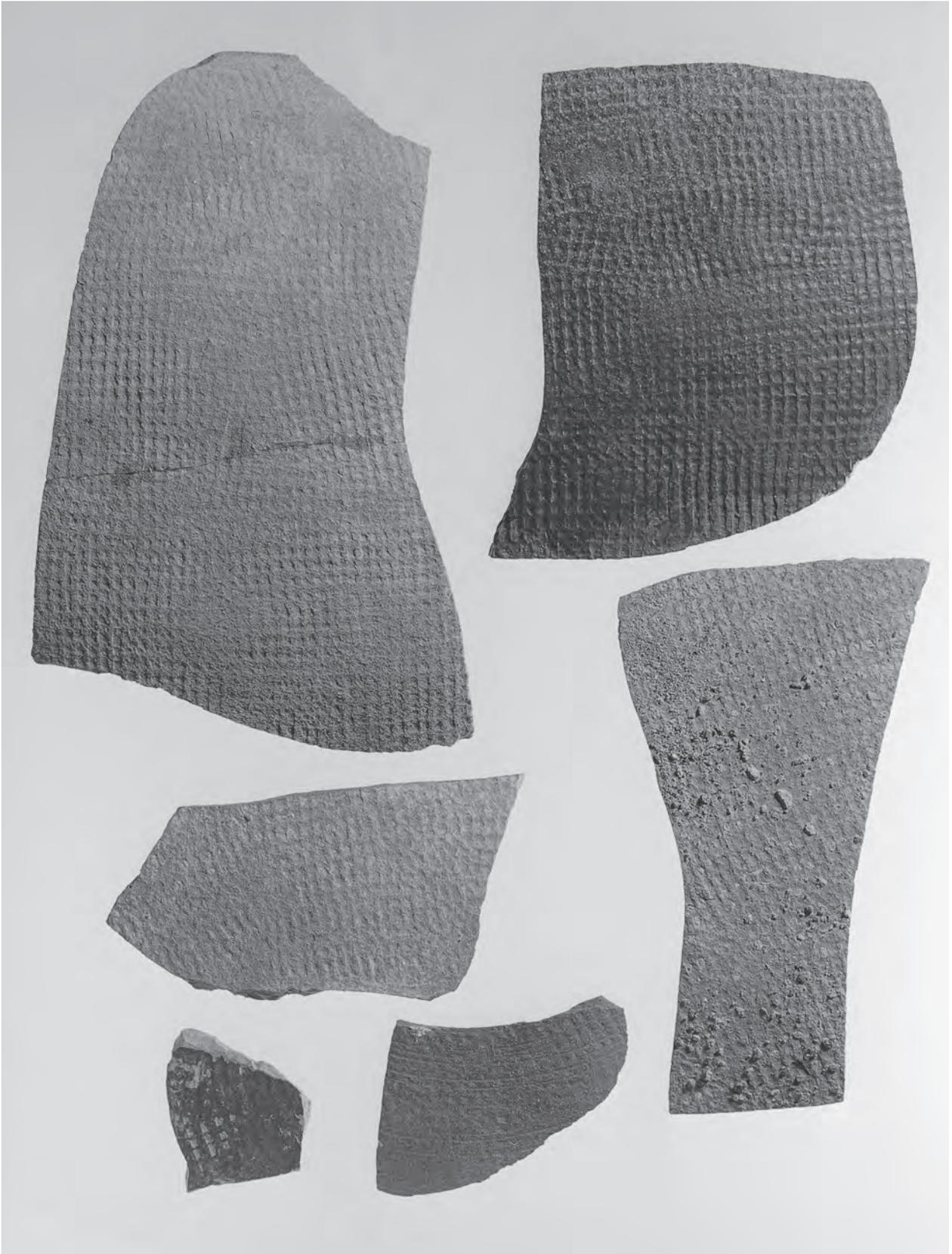
1. ST-01(7号墳)南西側一括、周辺、関連遺構 25-SF 出土土器



2. ST-01(7号墳)南西側一括出土土器



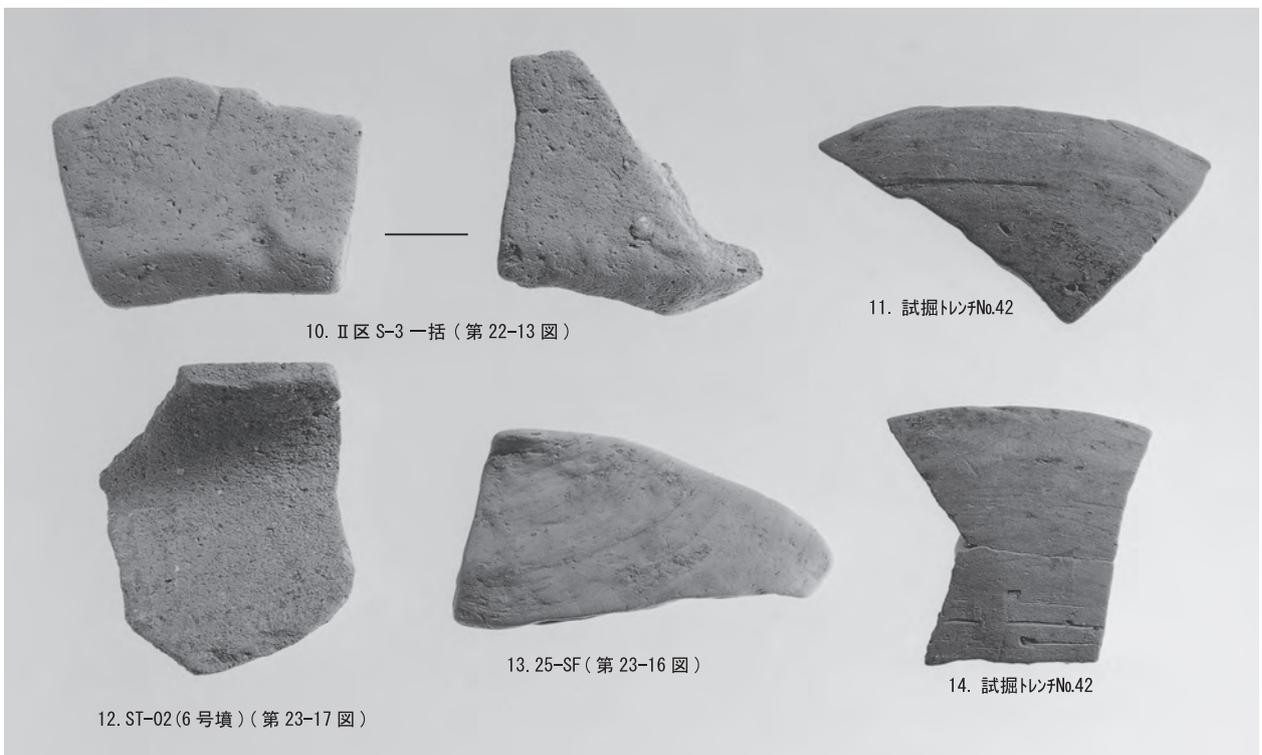
1. 一括 2. P-1 5. S-4 一括 6. S-4 一括 7. S-4 一括 8. 16. 南斜面黑褐色土層 9. ST-02 南西斜面一括  
 10. ST-01 南斜面包含 2 層 15. I-b 区 S 一括 21. 耕作土  
 3. 4. 11. 12. 13. 14. 17. 18. 19. 20. 22. 23. 24. 25. 26. 27. ST-01 南西側一括



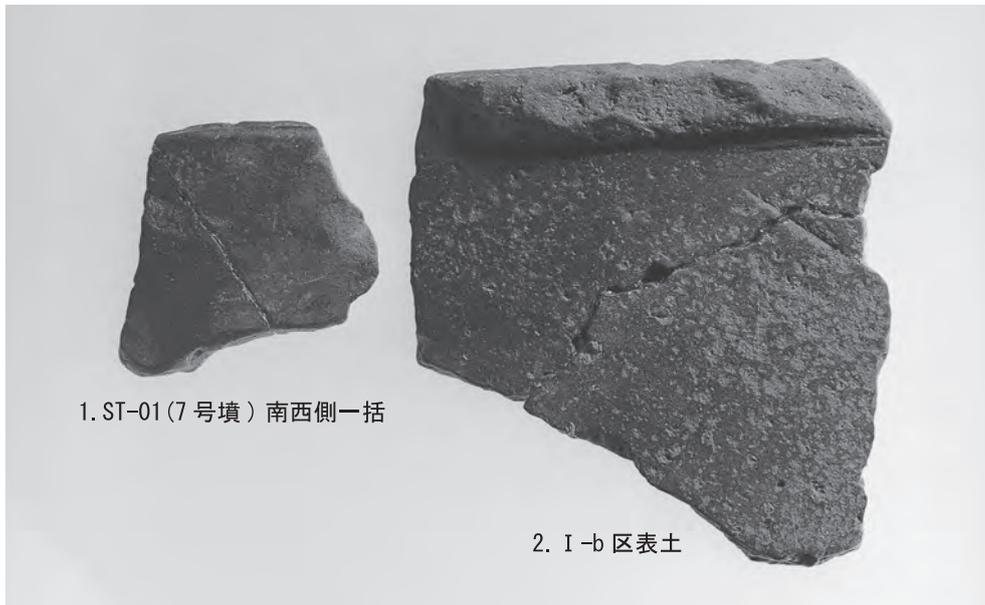
1. I -b 区 北西崖下一括出土須恵器



1. 調査区内出土遺物 1



2. 調査区内出土遺物 2



1. ST-01 (7号墳) 南西側一括

2. I-b区表土

1. ST-01 (7号墳) ・ I-b区出土遺物



2. ST-01 (7号墳) 南西斜面及び周辺出土土師器



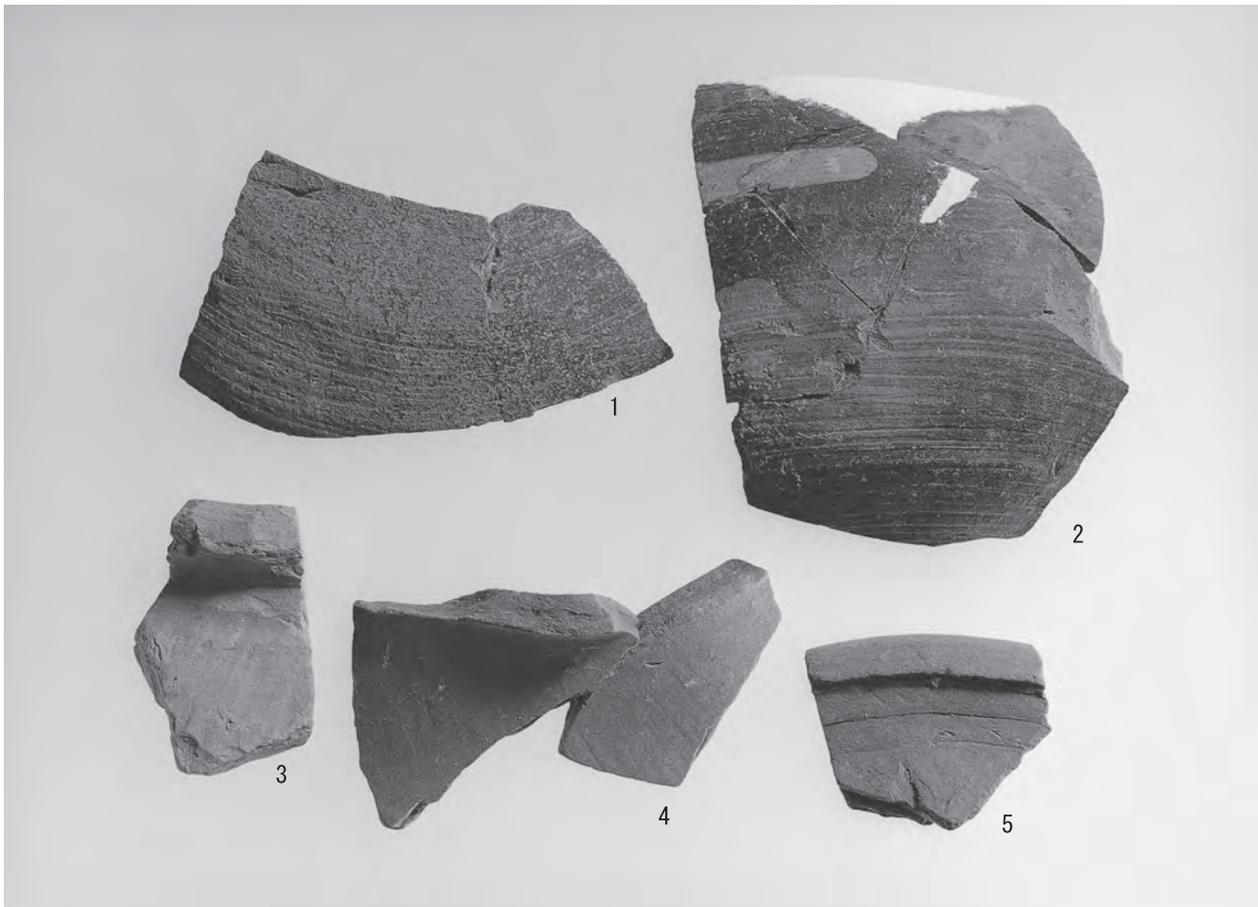
1. 2号墳周溝（09SD）出土土師器



2. ST-01（7号墳）南西側一括出土須恵器



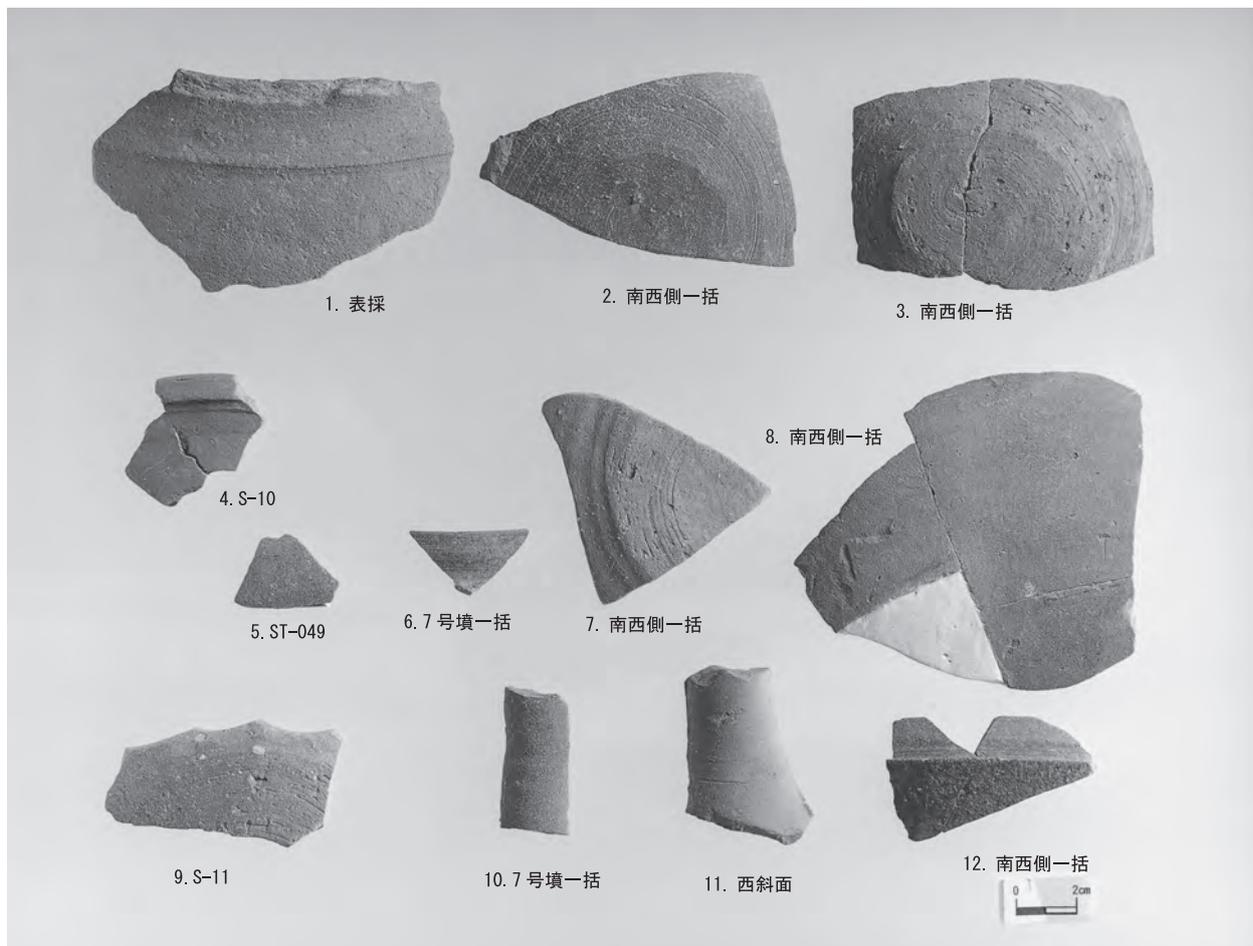
3. ST-01（7号墳）南西側一括出土土師器



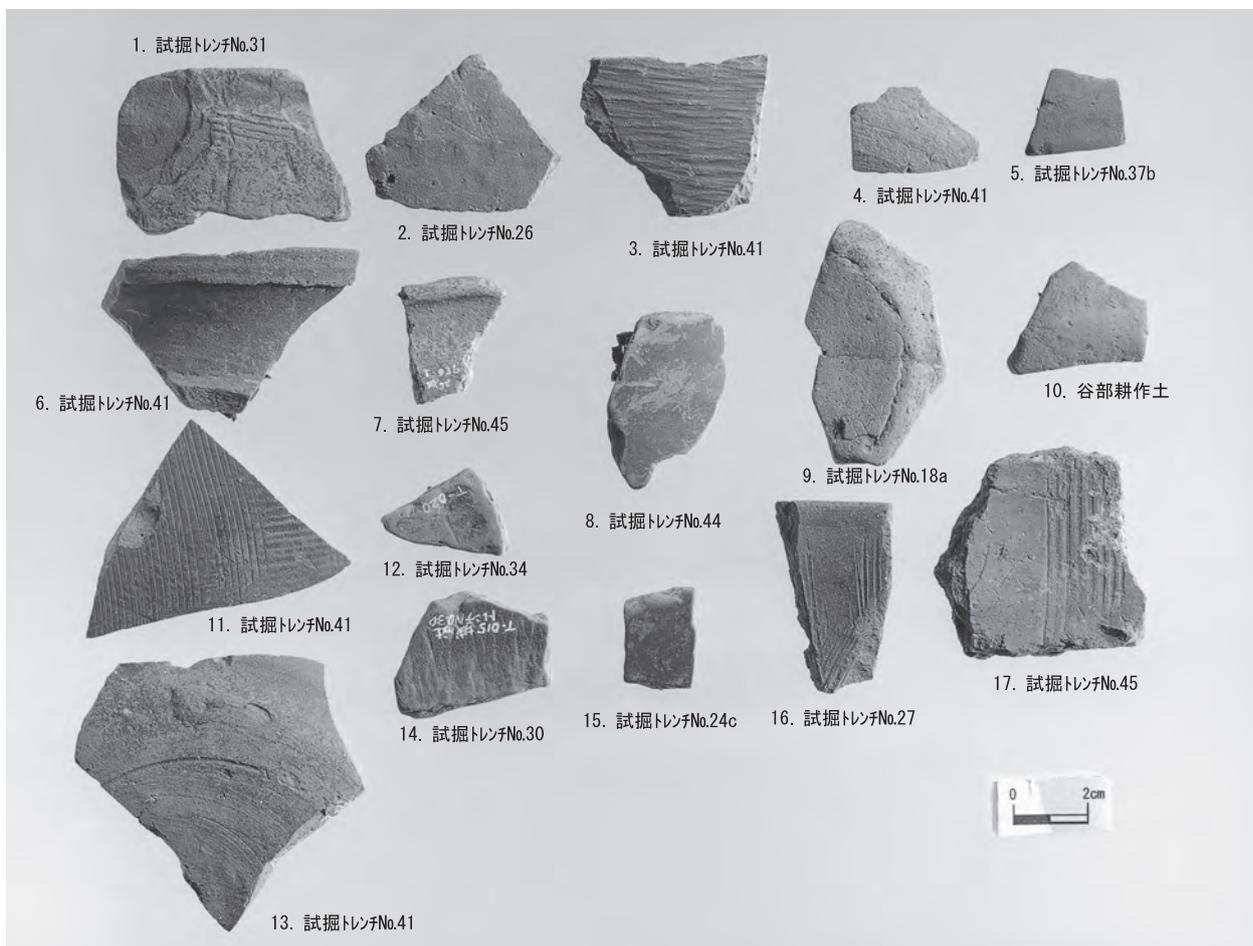
1. ST-01 (7号墳) 南西側一括、南西中段盛土～表土出土土器



1. トレンチNo.31 2. トレンチNo.42 (第 22-9 図) 3. トレンチNo.33 (第 22-8 図) 4. トレンチNo.30 5. 表採  
6. NOW30 南斜面黒褐色土層 7. 谷部耕作土一括 (第 22-16 図) 8. 谷部耕作土一括 (第 22-15 図)  
9. トレンチNo.30 10. トレンチNo.42



1. ST-01 (7号墳) 関連遺構出土土器



2. 試掘トレンチ・谷部耕作土出土土器



1. 耕作土、表土一括



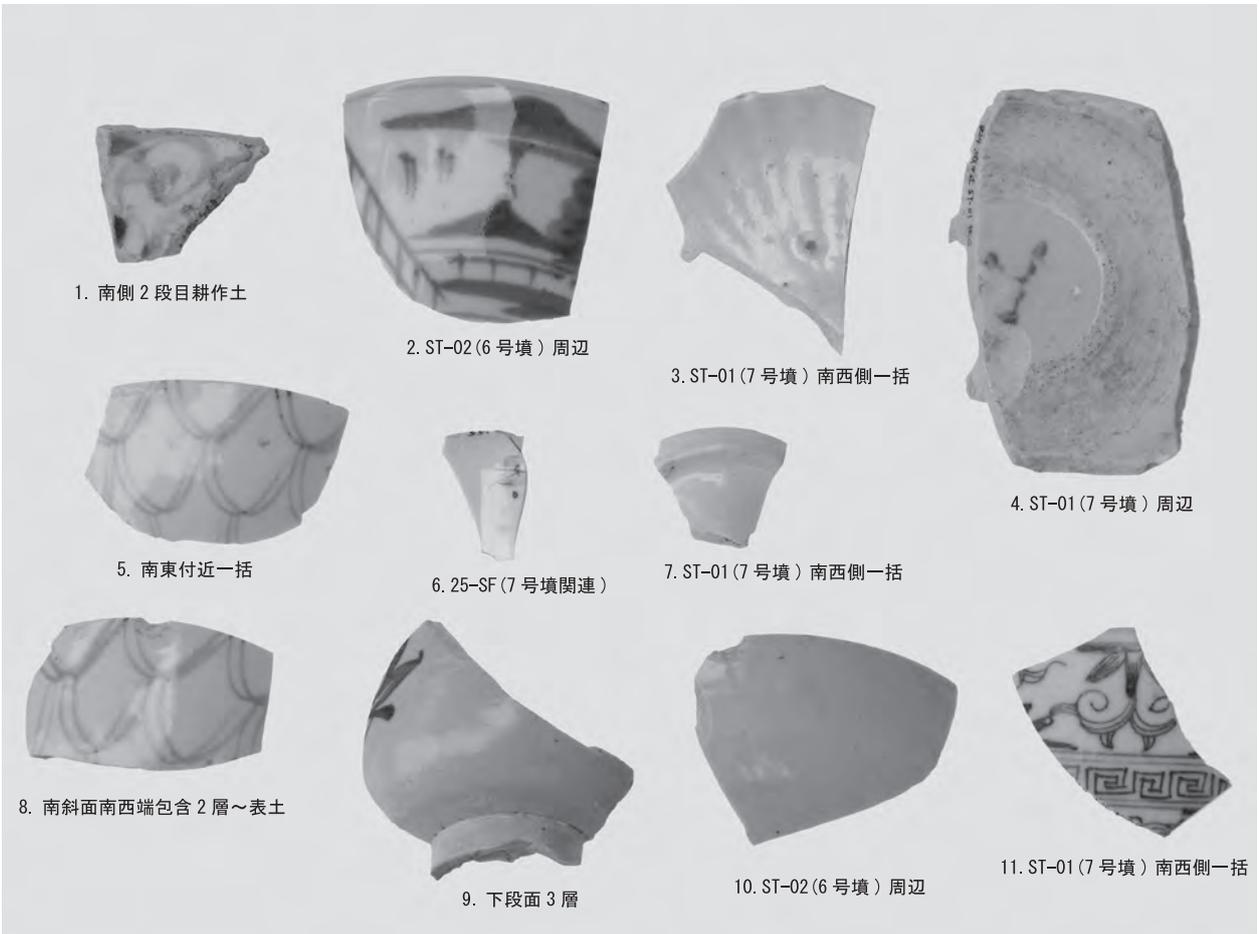
2. ST-01 (7号墳) 南西側斜面・25-SF (第23-12図)



3. 谷部耕作土一括



4. 耕作土一括



1. 南側2段目耕作土

2. ST-02 (6号墳) 周辺

3. ST-01 (7号墳) 南西側一括

4. ST-01 (7号墳) 周辺

5. 南東付近一括

6. 25-SF (7号墳関連)

7. ST-01 (7号墳) 南西側一括

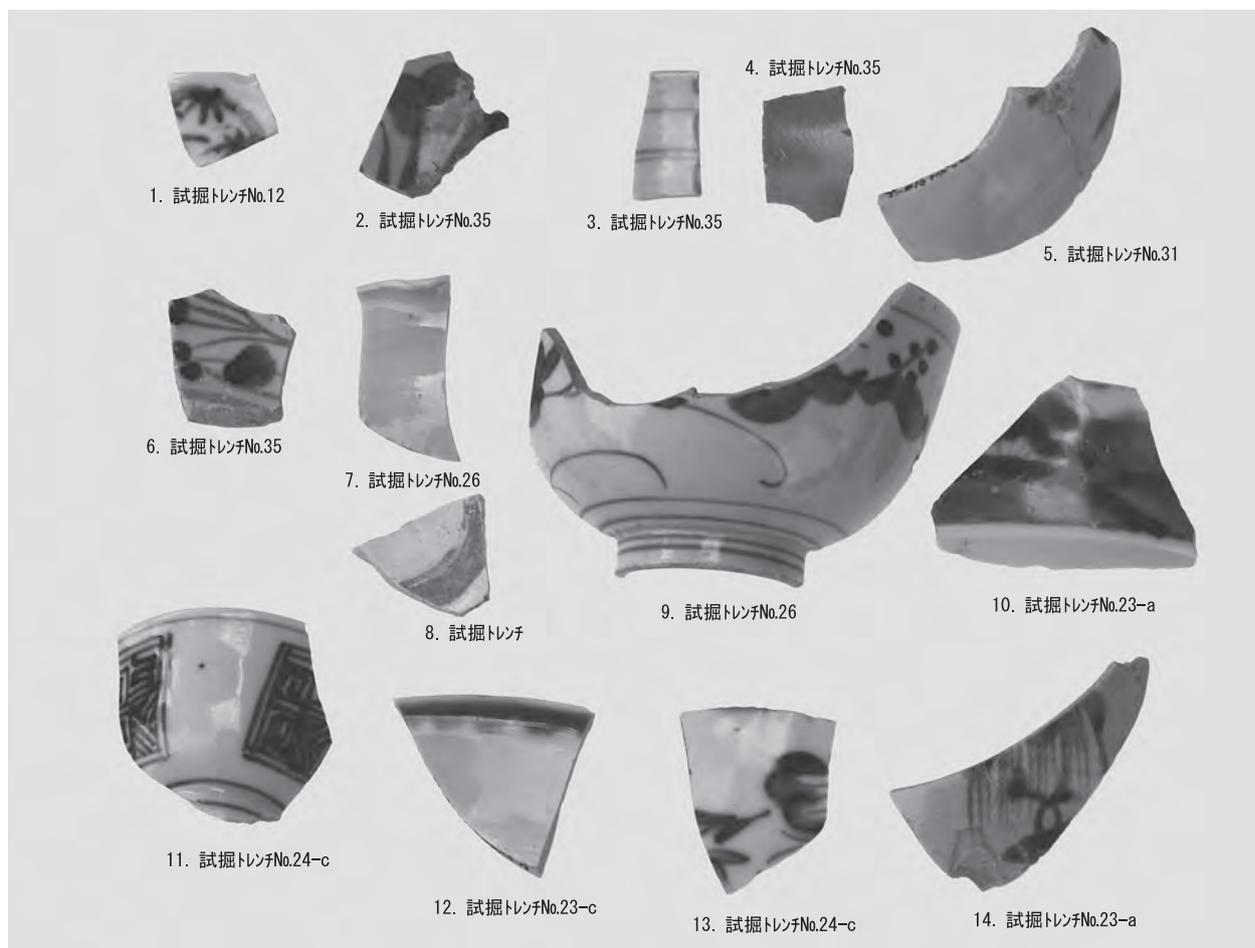
8. 南斜面南西端包含2層~表土

9. 下段面3層

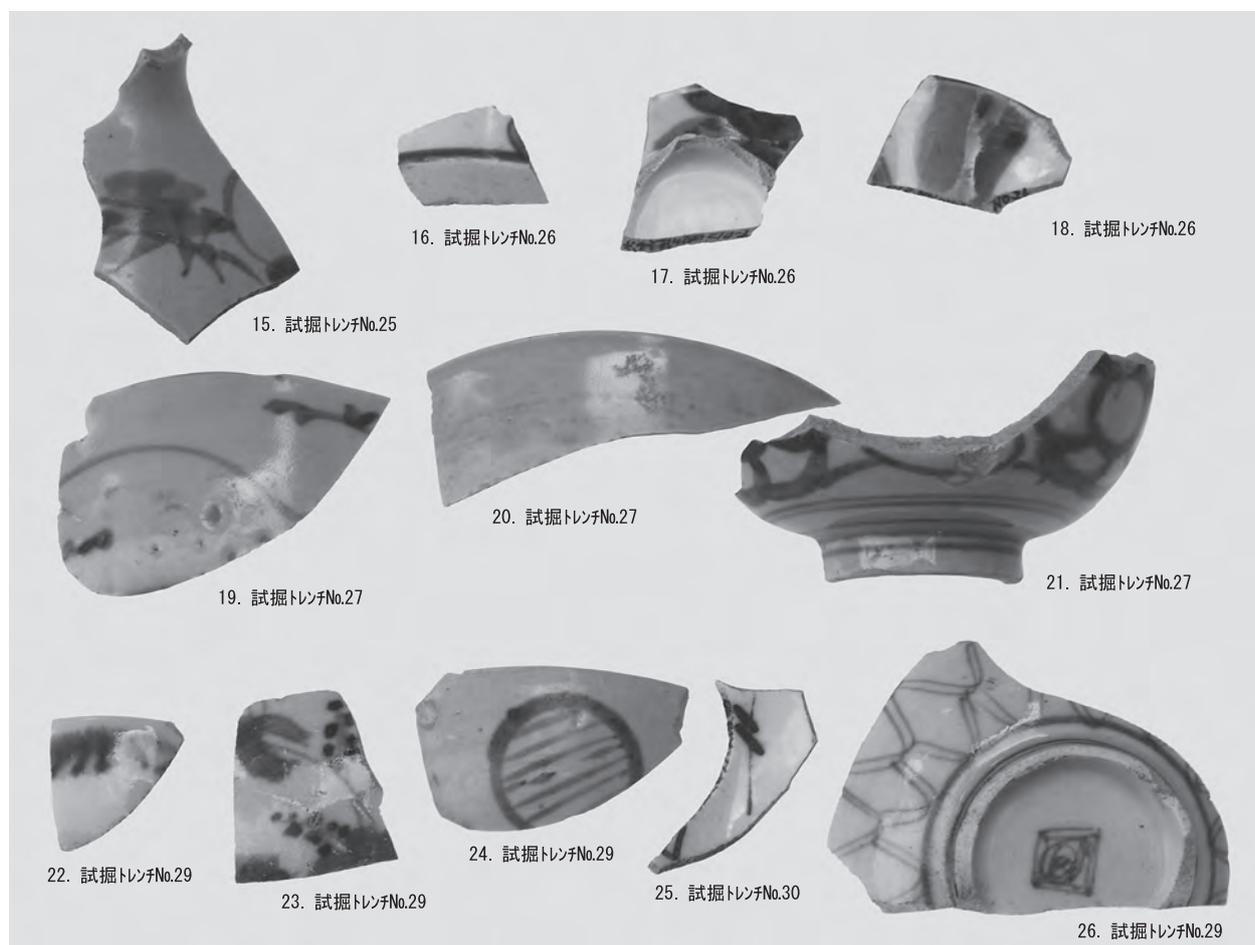
10. ST-02 (6号墳) 周辺

11. ST-01 (7号墳) 南西側一括

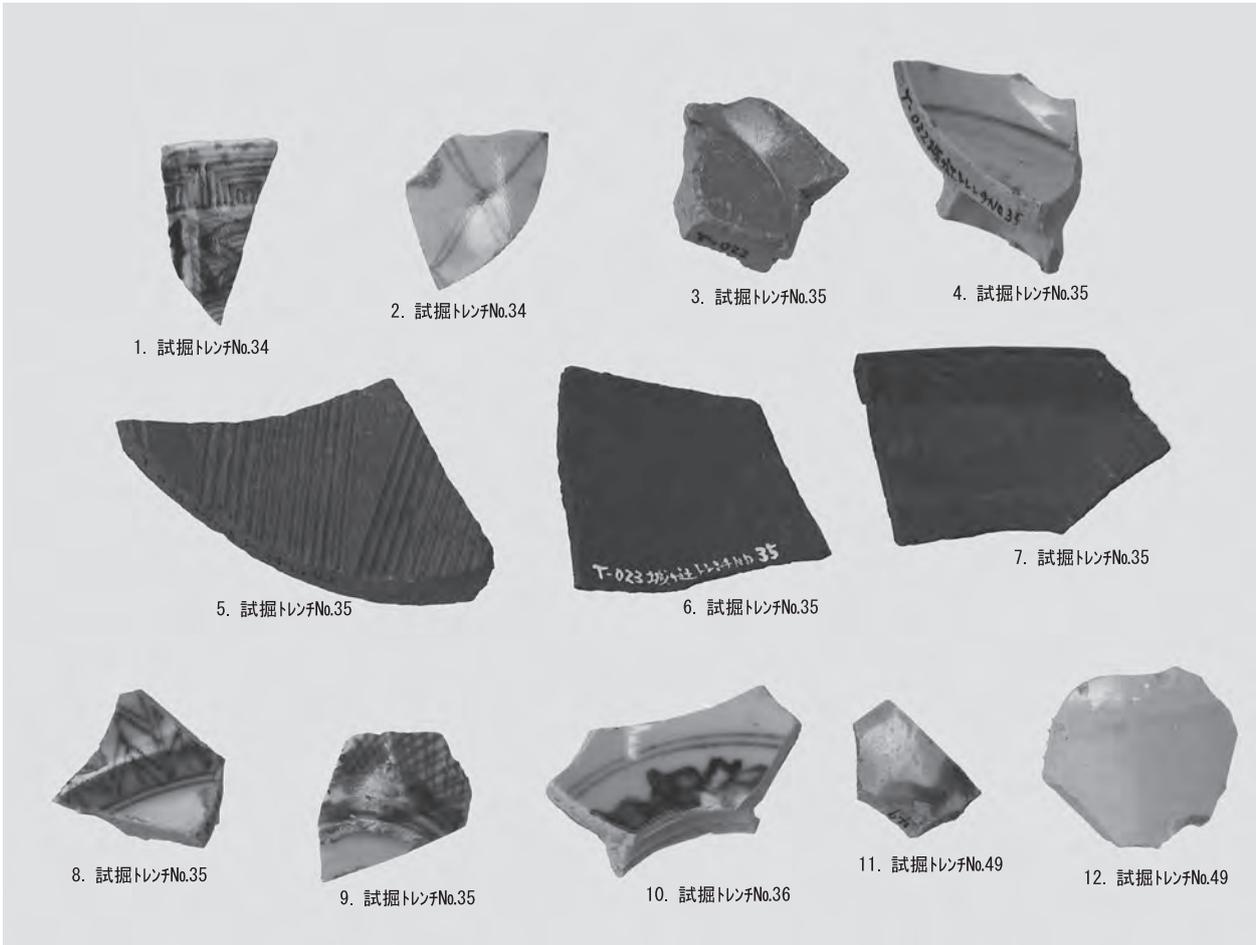
5. 調査区内出土遺物



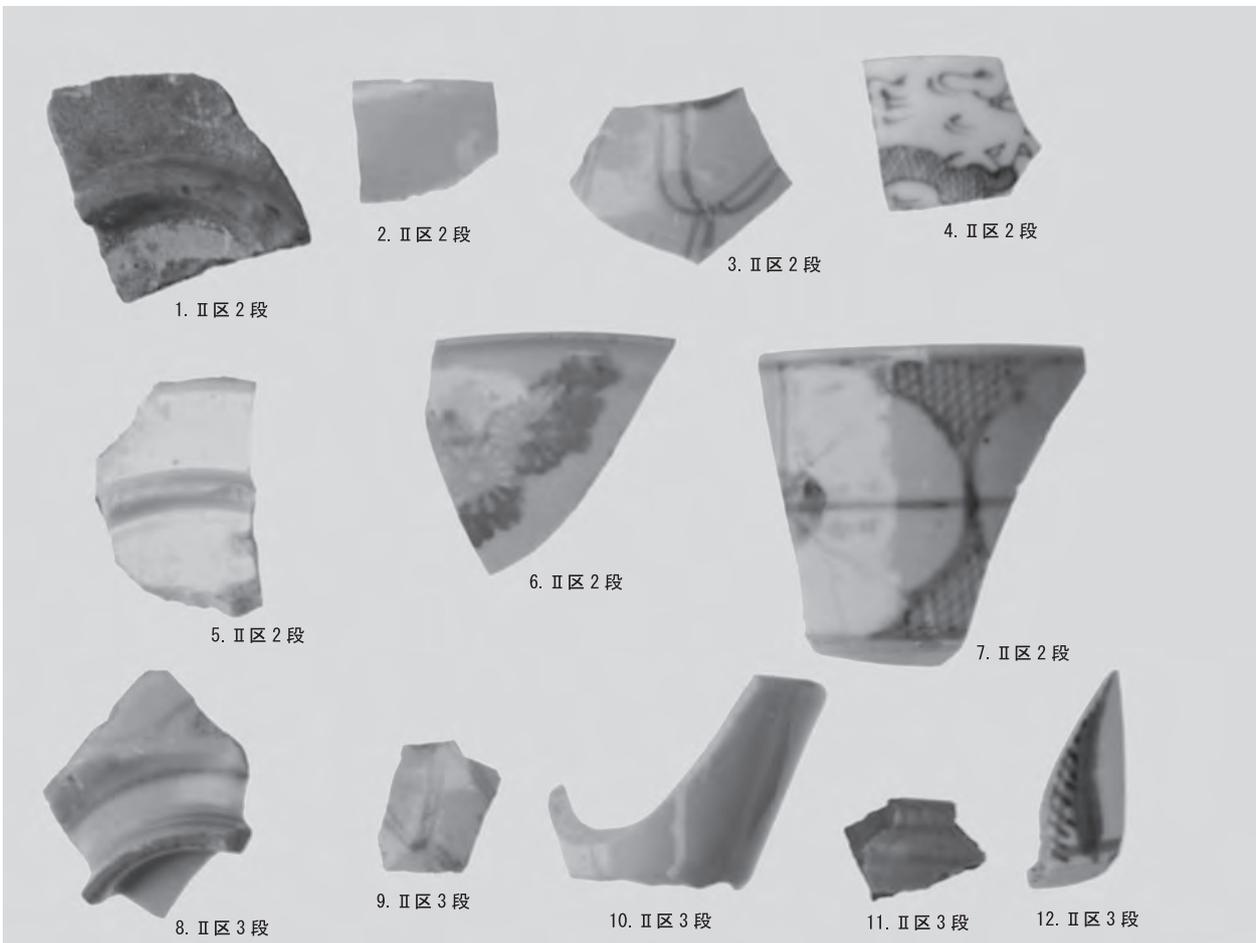
1. 試掘トレンチ出土遺物 1



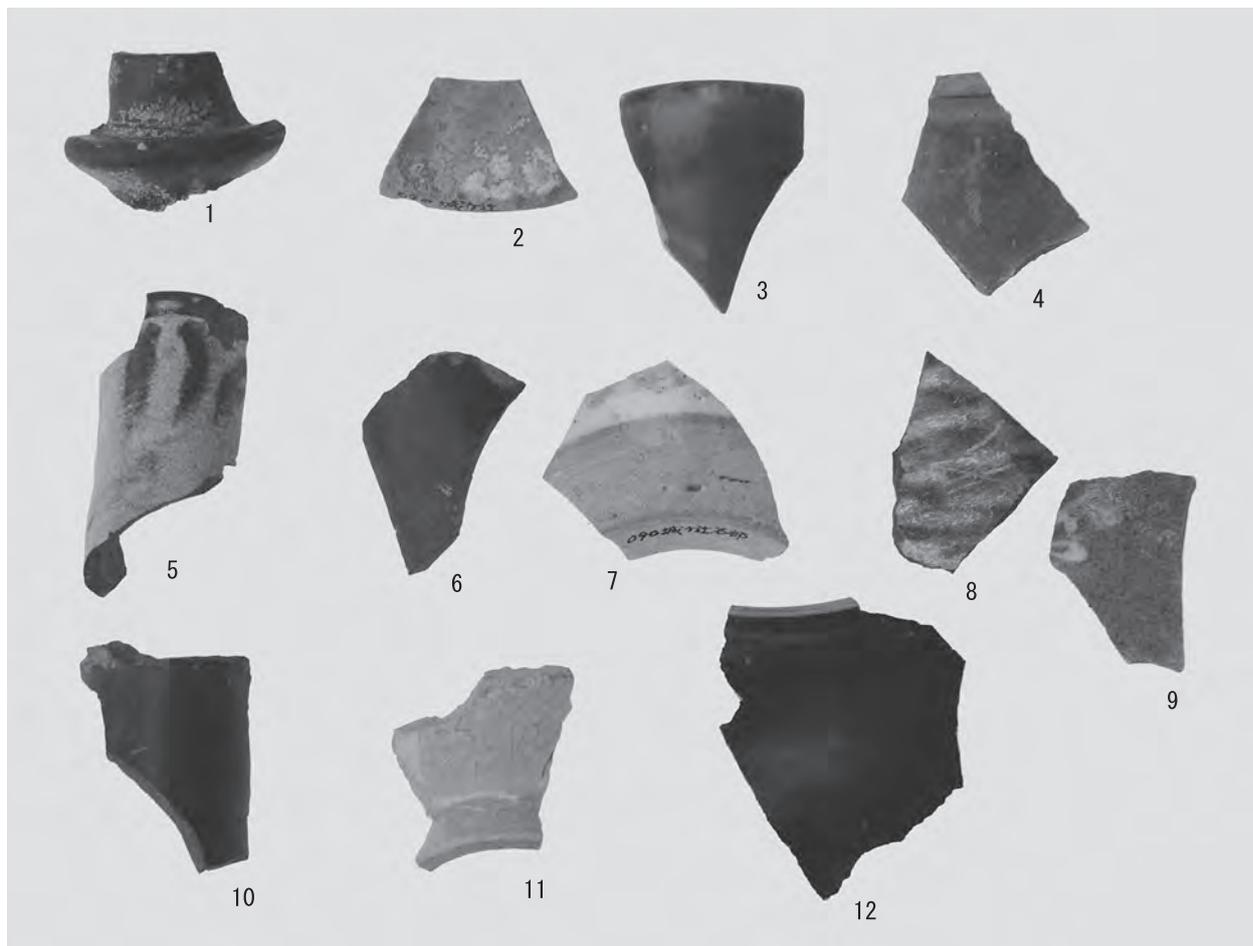
2. 試掘トレンチ出土遺物 2



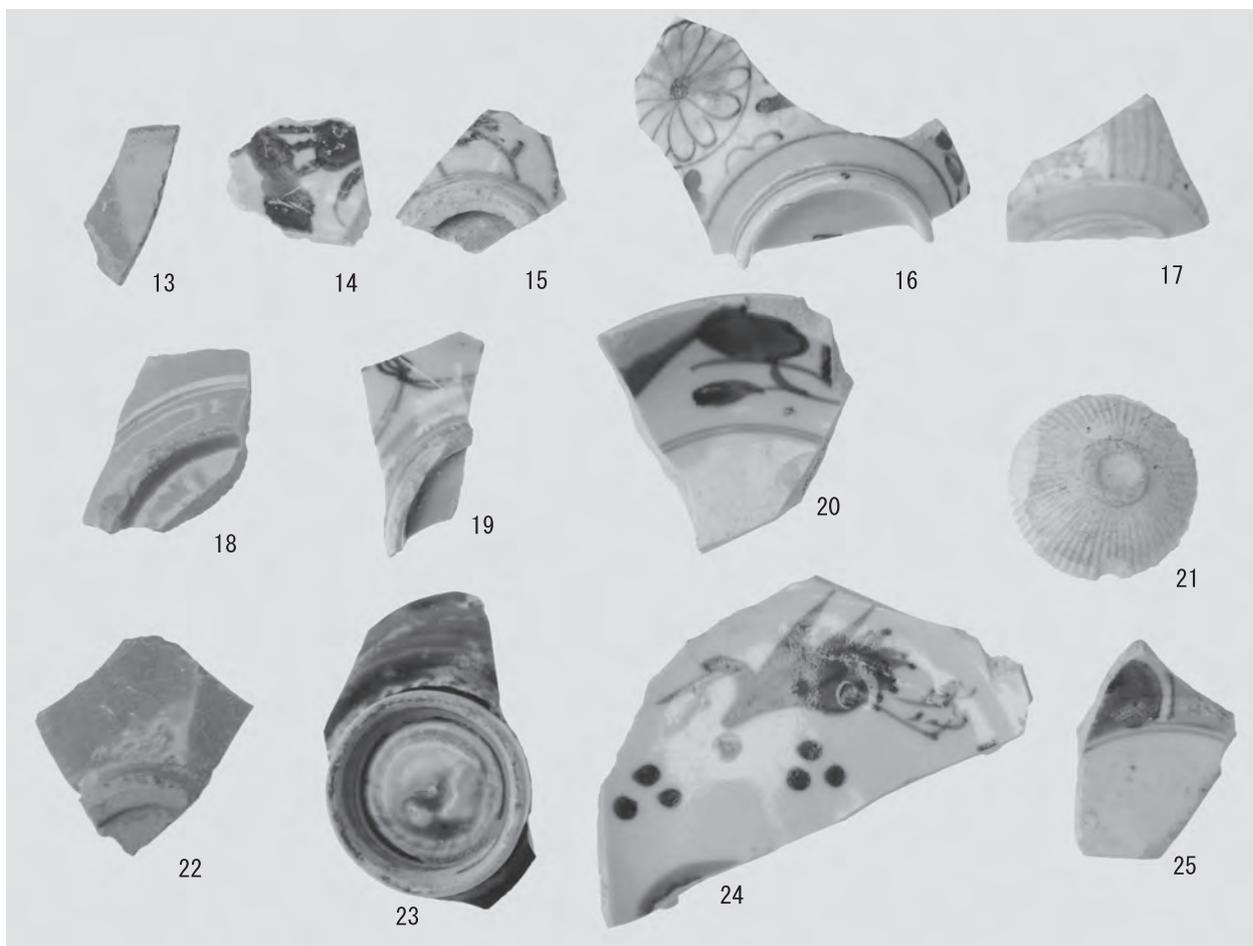
1. 試掘トレンチ出土遺物 3



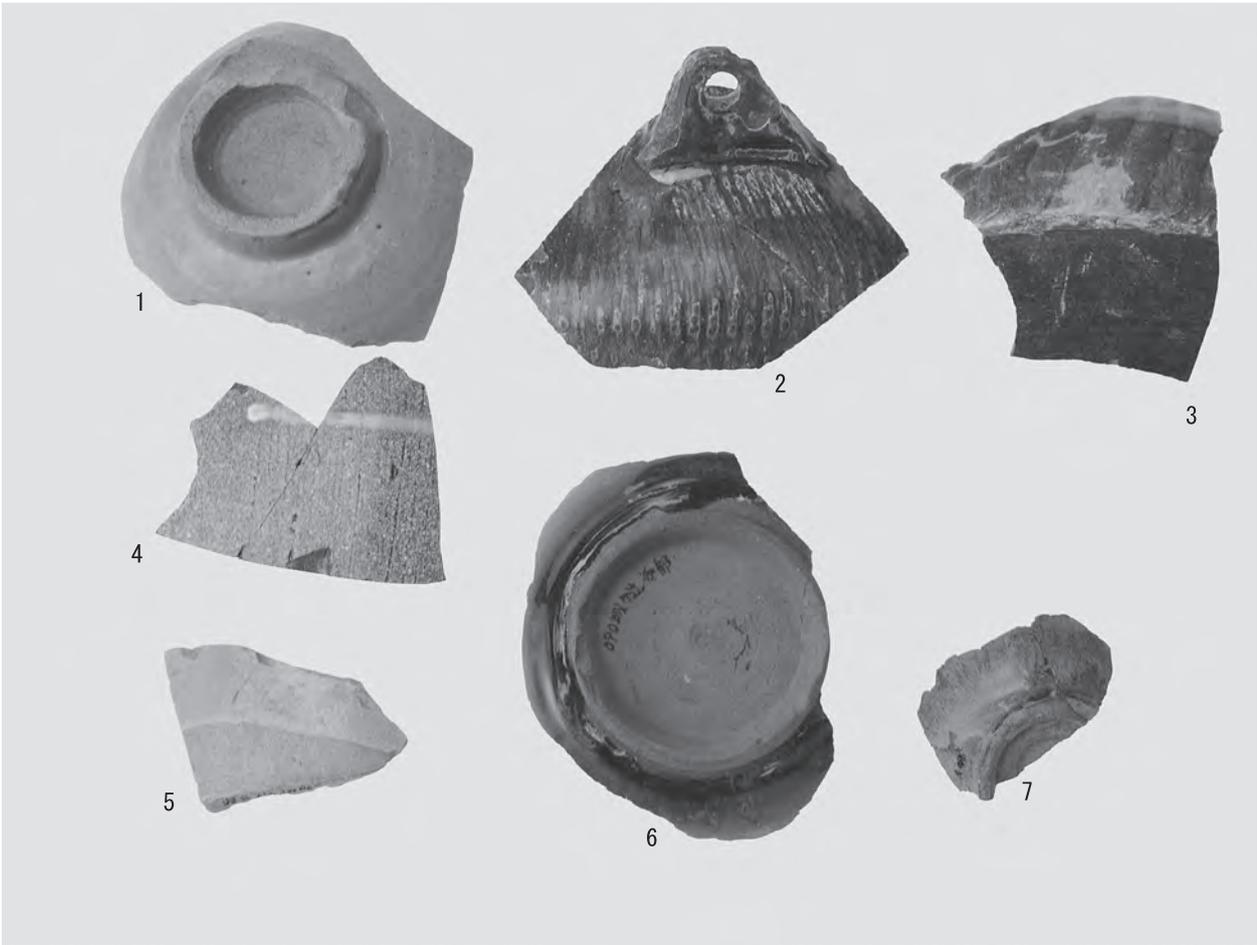
2. II区出土遺物



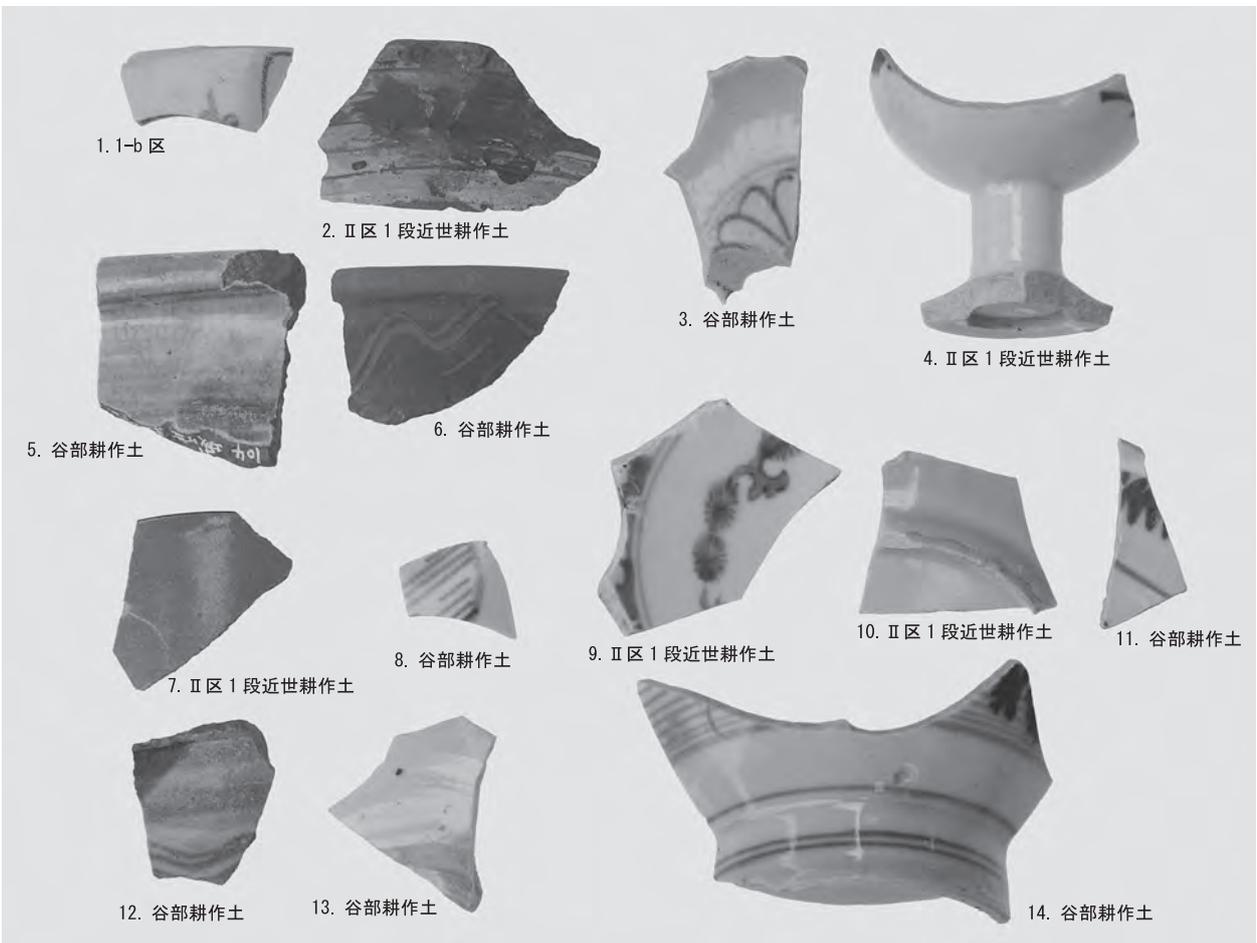
1. 谷部耕作土出土遺物 1



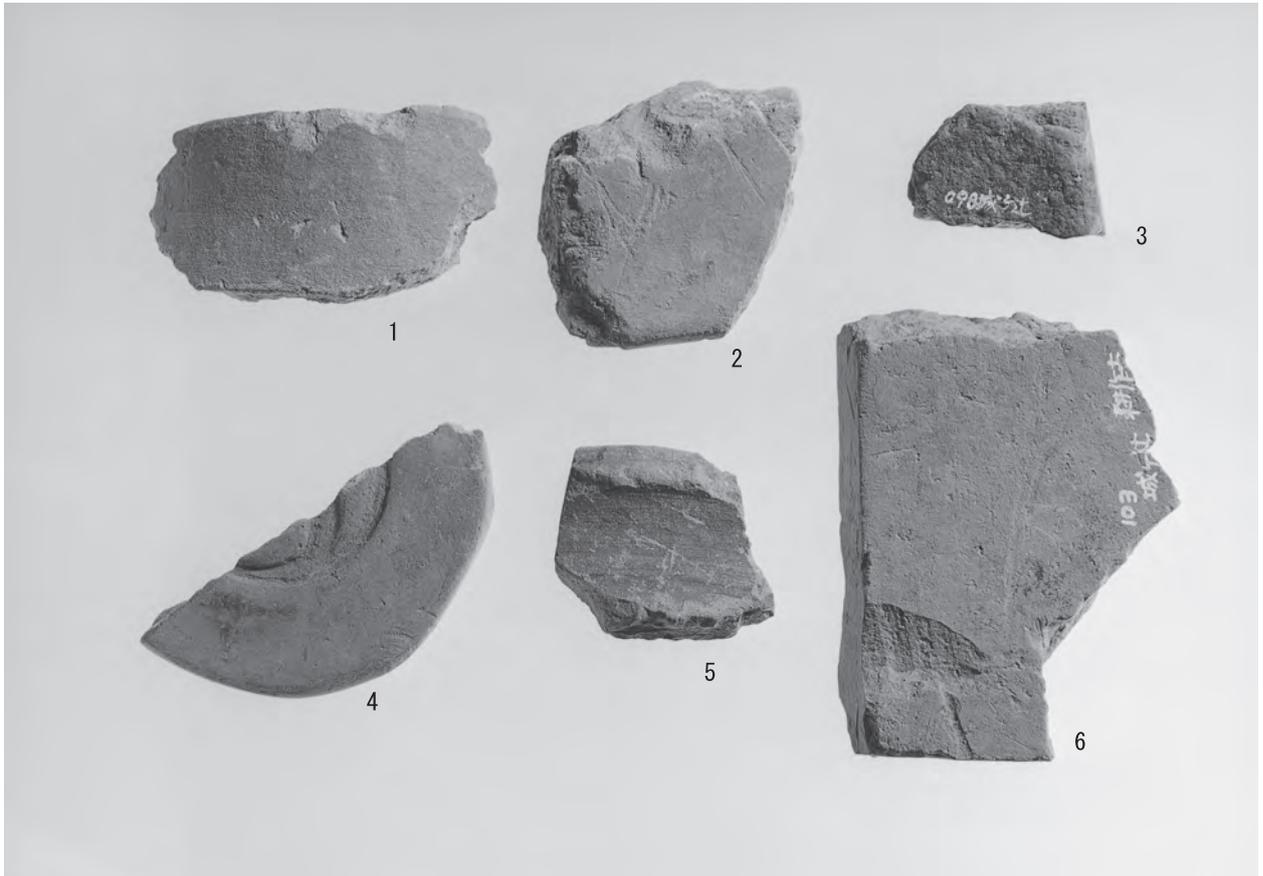
2. 谷部耕作土出土遺物 2



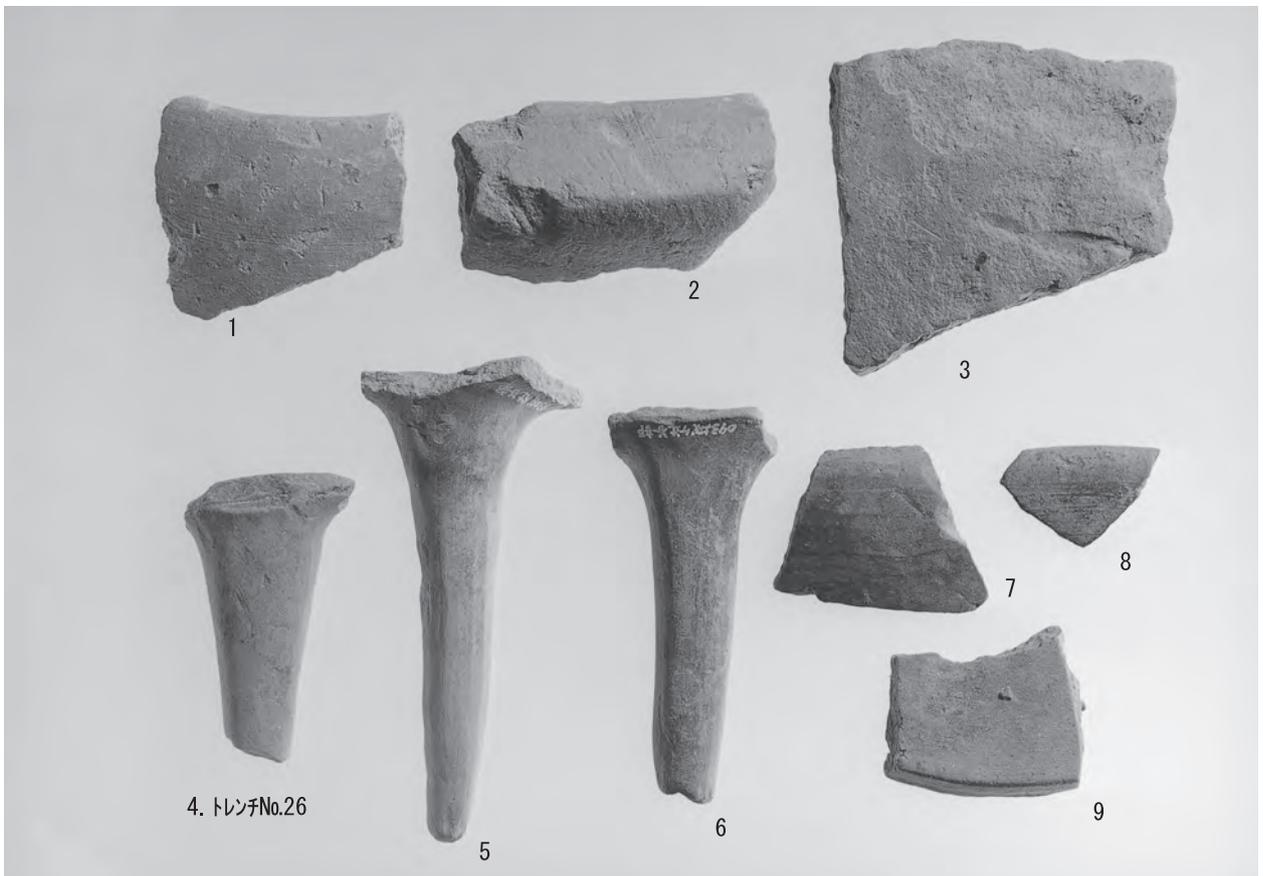
1. 谷部耕作土出土遺物 3



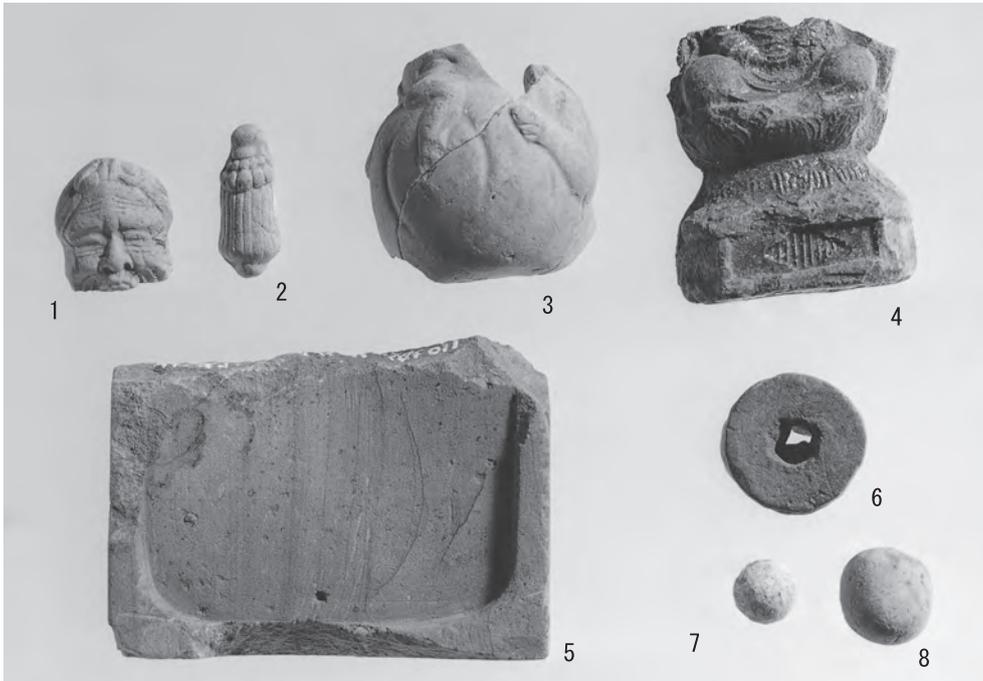
2. 谷部耕作土出土遺物 4



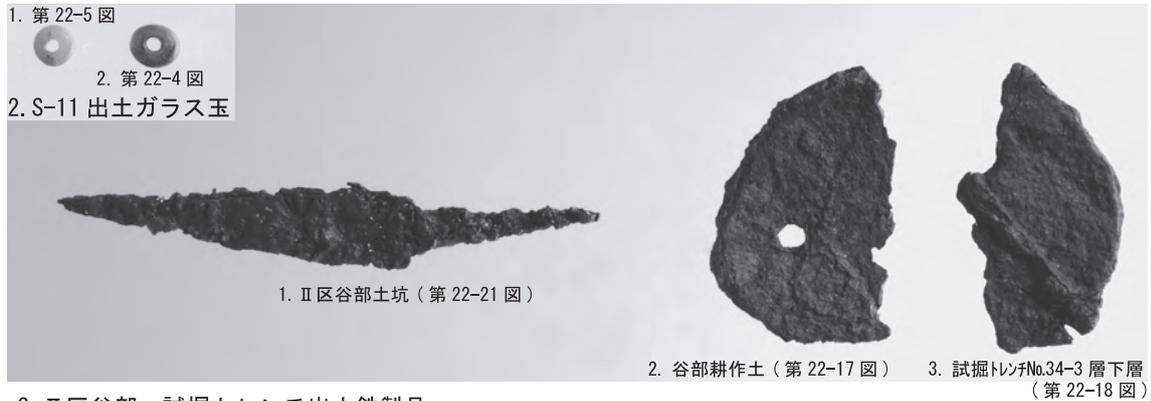
1. 谷部耕作土出土遺物 5



2. 谷部耕作土出土遺物 6



1. 谷部耕作土出土遺物 7



1. 第 22-5 図

2. 第 22-4 図

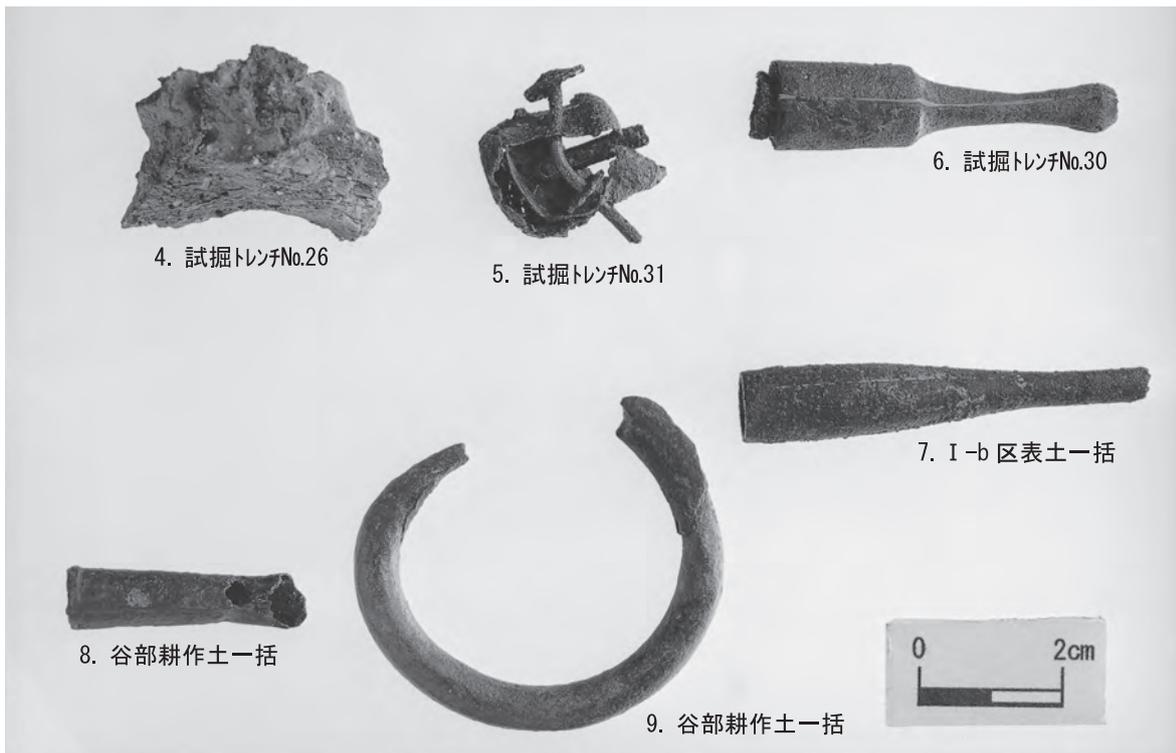
2. S-11 出土ガラス玉

1. II 区谷部土坑 (第 22-21 図)

2. 谷部耕作土 (第 22-17 図)

3. 試掘トレンチNo.34-3 層下層 (第 22-18 図)

3. II 区谷部・試掘トレンチ出土鉄製品



4. 試掘トレンチNo.26

5. 試掘トレンチNo.31

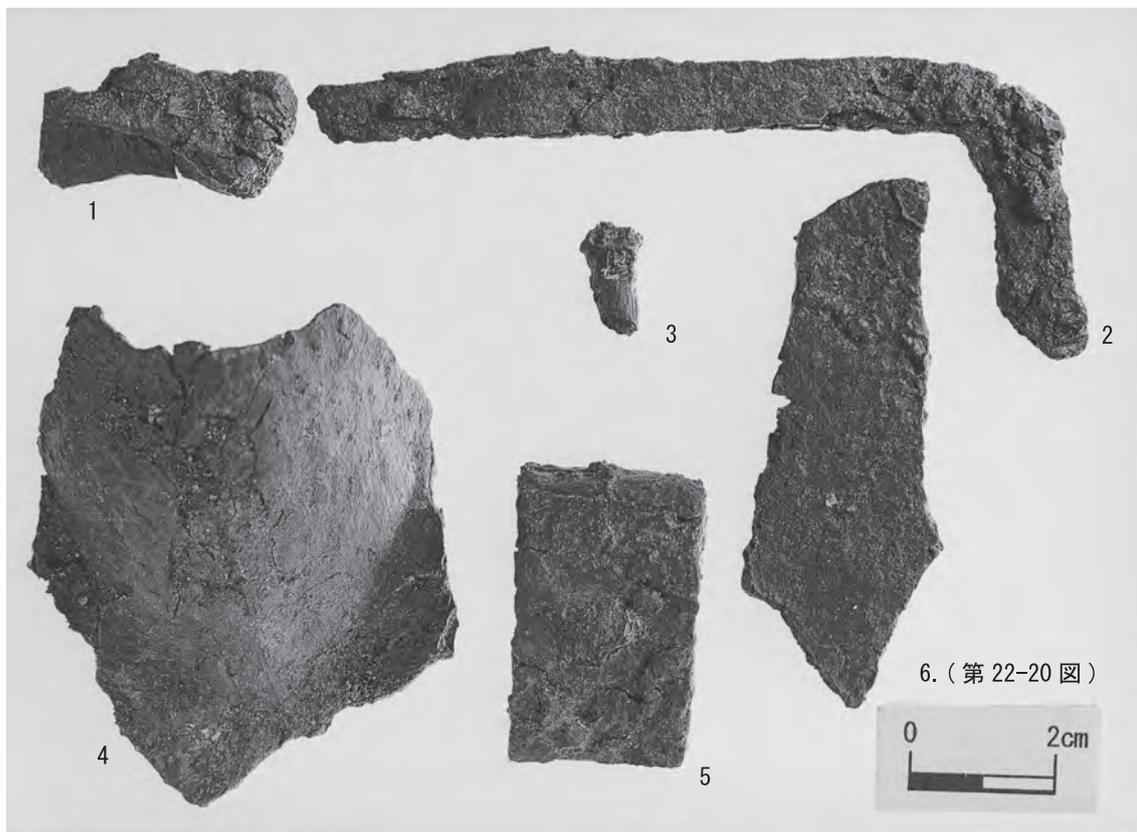
6. 試掘トレンチNo.30

7. I-b 区表土一括

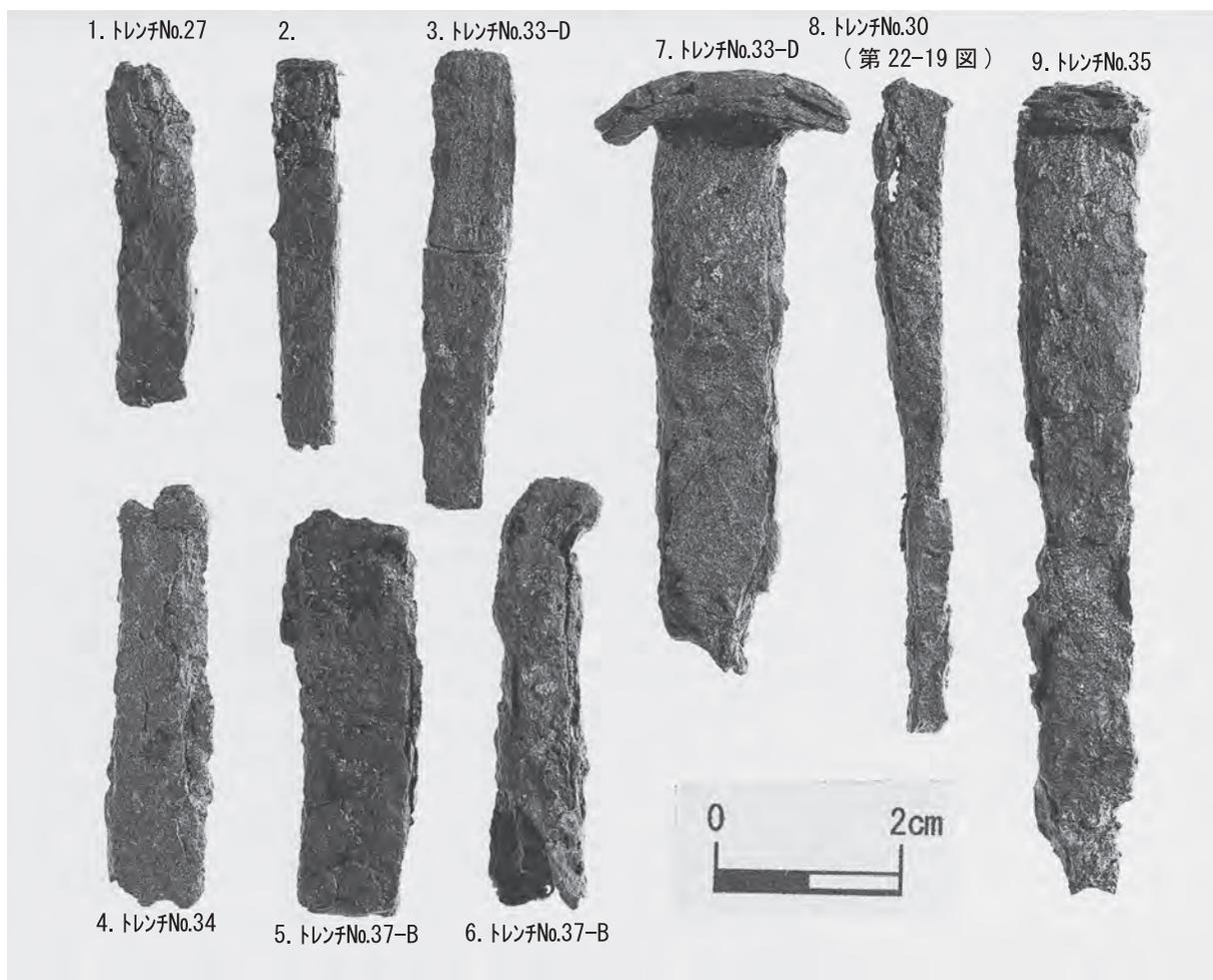
8. 谷部耕作土一括

9. 谷部耕作土一括

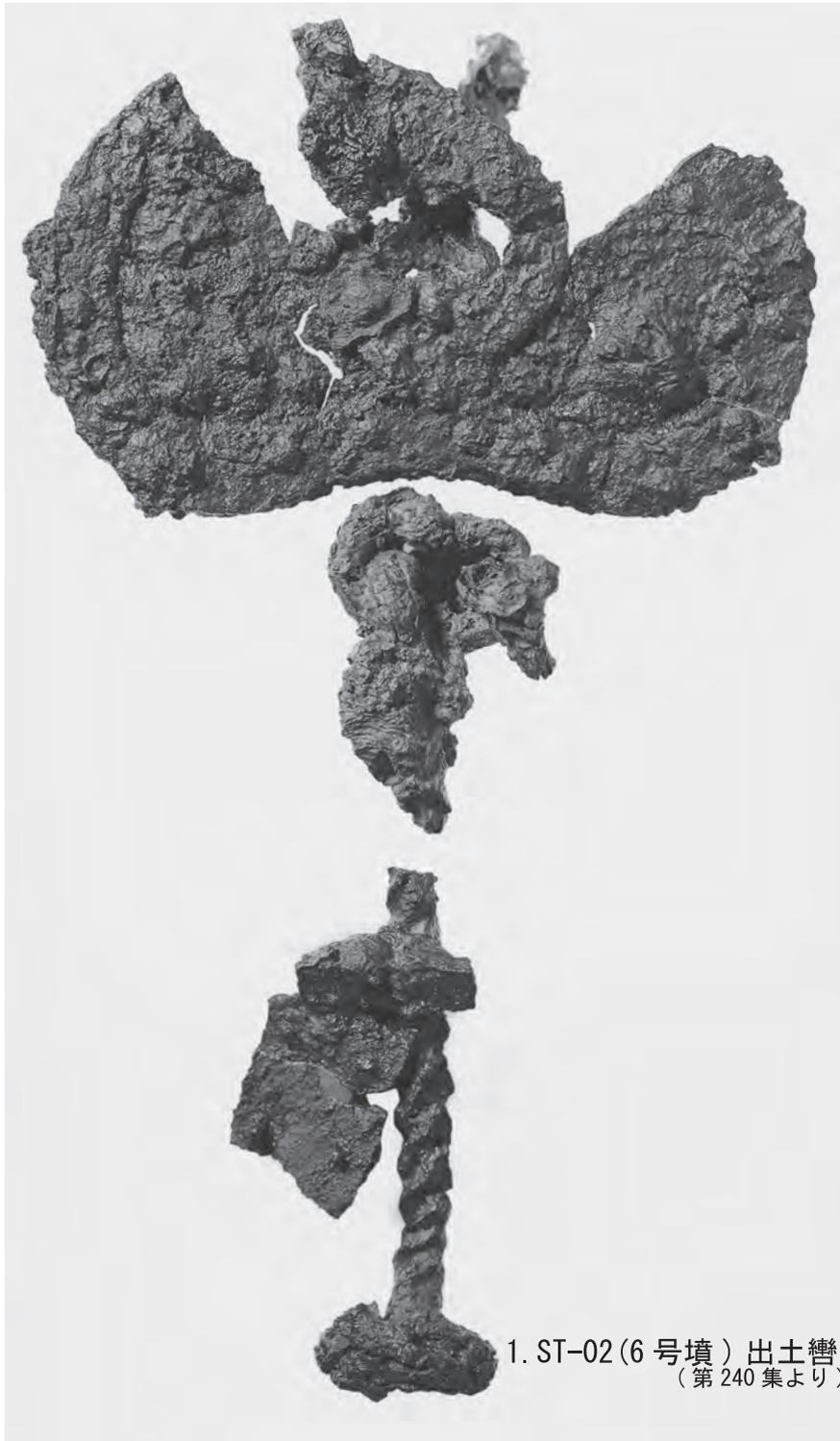
4. 試掘トレンチ及び谷部耕作土他出土遺物



1. 谷部耕作土出土鉄製品

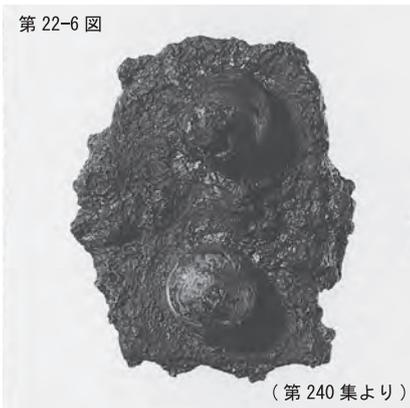


2. 試掘トレンチ出土鉄製品



1. ST-02 (6号墳) 出土轡  
(第240集より)

第22-6図



(第240集より)

2. S-11 (6号墳関連遺構) 出土鉄製品

第22-1図



(第240集より)

3. ST-01 (7号墳)  
石室内出土耳環

1. 第22-3図



(第240集より)

2. 第22-2図

(第240集より)

4. S-11 (6号墳関連遺構) 出土耳環

報告書抄録

|                       |  |                   |                               |  |             |                         |                               |      |
|-----------------------|--|-------------------|-------------------------------|--|-------------|-------------------------|-------------------------------|------|
| ふりがな                  | じょうがつじじょうあと・じょうがつじこふんぐん2   |                   |                               |  |             |                         |                               |      |
| 書名                    | 城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群2  |                   |                               |  |             |                         |                               |      |
| 副書名                   | 一般国道208号(玉名バイパス)改築事業に伴う埋蔵文化財調査   |                   |                               |  |             |                         |                               |      |
| 巻次                    | 熊本県文化財発掘調査報告書  |                   |                               |  |             |                         |                               |      |
| シリーズ名                 | 熊本県文化財調査報告   |                   |                               |  |             |                         |                               |      |
| シリーズ番号                | 第300集  |                   |                               |  |             |                         |                               |      |
| 編著者名                  | 亀田 学   |                   |                               |  |             |                         |                               |      |
| 編集機関                  | 熊本県教育委員会   |                   |                               |  |             |                         |                               |      |
| 所在地                   | 〒862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号   |                   |                               |  |             |                         |                               |      |
| 発行年月日                 | 2014年3月31日   |                   |                               |  |             |                         |                               |      |
| ふりがな                  | ふりがな   | コード               |                               | 北緯                                     | 東経          | 調査期間                    | 調査面積                          | 調査原因 |
| 所収遺跡名                 | 所在地  | 市町村               | 遺跡番号                          |  |             |                         |                               |      |
| 城ヶ辻城跡                 | くまもとけんたまなしてらだ<br>熊本県玉名市寺田  | 43<br>206         | 535                           | 32°<br>61'                             | 130°<br>34' | 2002年8月<br>～<br>2006年3月 | 対象面積約<br>12,000㎡<br>(約4,000㎡) | 道路改築 |
| 所収遺跡                  | 種別   | 主な時代              | 主な遺構                          | 主な遺物                                   |             | 特記事項                    |                               |      |
| 城ヶ辻城跡                 | 城跡   | 古墳時代後期・古代・中世後期・近世 | 水田に伴う畦畔                       | 土師器、須恵器、輸入陶磁器、近世陶磁器、瓦質土器、瓦             |             |                         |                               |      |
| 要約                    | 近世以降の土地の改変により明確な遺構検出ができなかったが、4号墳裾のトレンチに土師器・須恵器等、5号墳裾トレンチに瓦質土器の破片が出土している状況が伺える。4号墳裾に古墳が存在した可能性がある。そして、5号墳裾の張り出し部には、何らかの施設があったと推測され、吉丸前遺跡等で検出された区画溝に伴う居館跡(推定)の時期に関連があると考えられる。また、谷部周辺では近世後期以降の水田開発に伴い区画は改変されているが、中国製輸入陶磁器、瓦質の挿鉢が出土しており、古くから谷の開発が行われていたことが判明した。さらに、5号墳周辺の丘陵にもその時期にあたる何らかの施設があったと考えられる。                               |                   |                               |  |             |                         |                               |      |
| ふりがな                  | ふりがな   | コード               |                               | 北緯                                     | 東経          | 調査期間                    | 調査面積                          | 調査原因 |
| 所収遺跡名                 | 所在地  | 市町村               | 遺跡番号                          |  |             |                         |                               |      |
| じょうがつじこふんぐん<br>城ヶ辻古墳群 | くまもとけんたまなしてらだ<br>熊本県玉名市寺田  | 43<br>206         | 534                           | 32°<br>61'                             | 130°<br>34' | 2002年8月<br>～<br>2006年3月 | 対象面積約<br>12,000㎡<br>(約4,000㎡) | 道路改築 |
| 所収遺跡                  | 種別   | 主な時代              | 主な遺構                          | 主な遺物                                   |             | 特記事項                    |                               |      |
| 城ヶ辻古墳群                | 古墳   | 古墳時代              | 竪穴系横口式石室 横穴式石室 古墳周溝、土坑墓、箱式石棺墓 | 馬具、鉄剣、鉄刀、鉄鏃、ガラス小玉、管玉、金製耳環、銀製耳環、土師器、須恵器 |             | 県指定候補                   |                               |      |
| 要約                    | 丘陵上部に城ヶ辻古墳群1～5号墳が存在するのは古くから知られていたが、今回6・7号墳を新たに発見した。6号墳は攪乱を受け、詳細な構造は不明だが、肥後地域特有の複室構造の石障系横穴式石室の可能性が高い。楕円形鏡板付轡や垂飾付耳飾の一部と考えられる金環も出土しており、有力な首長の墓と考えられる。7号墳は北部九州に見られる「竪穴系横口式石室」と見られ、筑後地域等との双方向の文化の交流が実証されたこととなった。7号墳にも素環の鏡板付轡・多環状雲珠等の馬具や鉄刀、刀子、短剣、長頸鏃等が出土している。今回横穴式石室を持つ2基の古墳が発見されたことで、古墳時代全般を通じて造営された古墳群となり、城ヶ辻古墳群の重要性が改めて注目されることになった。 |                   |                               |  |             |                         |                               |      |

## あとがき

城ヶ辻古墳群は、古墳時代の墓域等の現地調査及び現地仮保存措置で4カ年かけて実施して参りました。その間、城ヶ辻城跡のトレンチ調査も実施し、多大な調査成果を得ることができました。

調査終了から数年を経てようやくその成果の一部を公表できることに感謝します。

この一冊の本ができるまでに、たくさんの方々の協力があって作成されています。事業者や地元各位はもちろん、現地調査で遺物包含層や遺構を掘削して頂いた作業員の皆様、現地から持ち帰った遺物の洗浄・注記・接合・復元をして頂いた作業員の皆様、実測（図面）や写真として記録をして頂いた作業員の皆様、本当に感謝しております。

本報告の例言にお名前を挙げた方々に作業をお願いする前に、さらにたくさんの方々に協力をお願いしています。

以下にお世話になった一部の方の御芳名を記して感謝の意を表します。

高木克巳、前田北征、山口義春、上田サワ子、松村健治、吉田ムツ子、岡本博子、小本三慧恵子、三森敏子、水村つよし、高木智恵子、平川ミツヨ、東信子、木下洋一、鹿本勝子、松村鈴子、岡田秀子、飯塚千恵美、山本美樹、品川タカ子、吉本スエ子、坂本弘子、眞田量之、松本肇、高西正也、武田昭男、谷口洋介、中村友、藤嶽康孝、田尻明、原田英佳、竹志田美奈子、田畑良勝、岡本昭洋、立野和彦、竹志田太、古川るみ子、杉本美智子、植尾寅吉、宮本てつ子、中川正美、坂田康夫、中西和人、森川耕司、堀田祐子、中嶋公輝、坂口沙耶花、福島寛啓、荒木康利、中村勇、廣田親雄、村上和子、大西ミツ子、田口一美、山内恵美子、大森ツヤ子、前田征由、谷口敬一、岡本昭洋、矢加部千佳子、瀬上久史、田上俊子、高津千尋、北嶋百合子、坂門みつよ、入江賢二、永松サヤカ、西村清美、古川佐和子、尾浦公治、久木田仁美、高尾恵美、武田伸枝、西嶋ヨシエ、福田ツヨ子ほか（順不同）

本報告の編集者も報告書作業に携わる時間が少なく、かなりの部分を囑託・作業員さんに頼らざるを得ませんでした。編集者も2年目からしか調査に携わっておらず、報告書作成して自分の力量の不足を感じている次第です。

現地調査及び報告書作成に携わって頂いた人々に感謝すると共に、本報告及び遺物等が地域で活用されることを希望します。

また、当古墳群の発掘の進展にあたり、地元諸氏や事業者の協力および理解があり本報告書の刊行に至りました。記して感謝します。

熊本県文化財調査報告 第300集

城ヶ辻城跡・城ヶ辻古墳群2

—一般国道208号改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

平成26年3月31日

編集  
発行

熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

印刷

株式会社林田印刷

〒860-0029 熊本県熊本市中央区米屋町1-9

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 300 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 城ヶ辻城跡 城ヶ辻古墳群

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日